

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

# 裏窓

11月号

★鬼乳房伝奇

★お尻の下の男ども

★女スパイと鬼憲兵

★悪魔が覗くバスルーム

★火あぶりについての考察

★異性愛者のコレクション

★絵物語・身悶える白い人質



定価 150円  
IBM 1807



◎どれを見てもしびれるような傑作です。  
 ◎まだこの他に多数の出版物があります。  
 ◎内容見本を送れとハガキで申し込んで下さい。

異色官能 サスペンス **地獄の乳房** 飯田豊吉・著  
 喜多玲子・装幀

謎の黄色いトランクをめぐる東京暗黒街にくりひろげられる凄惨な死闘と執拗な復讐地獄！息もつかせぬ迫力興味篇！  
 ￥. 250  
 円. 40

続・陽密 驚書 **忍び夜秘帖** 島本春雄・著  
 喜多玲子・装幀

大江戸の夜に咲く逢魔の花！大名屋敷、旗本屋敷、そしてまた分限者の夜の闇を探ぐる影のような公儀陽密鳴子善四郎！  
 ￥. 260  
 円. 40

異色時代巷談 **女犯経秘図** 高月大三・著  
 喜多玲子・装幀

酒池肉林の好色寺の地下部屋に捕われた女陽密！素っ裸の木馬責めに果して耐え得るか？お小夜嵐、穴蔵菩薩も収録！  
 ￥. 250  
 円. 40

エロチック サイエンス **甘美な謎** 矢野 徹・著  
 笠井 一・装幀

ふくよかな肌の香りは超次元の世界にただよい、はてしなく広がる非情の科学に機械化された細胞は如何に悶えるのか？  
 ￥. 250  
 円. 40

耽 奇 サスペンス **妖しい花粉** 狩 久・著  
 古正英生・装幀

白く重さを秘めてゆれる乳房、慄える太腿……性の真実を求めて蠢めく人々の姿を捉えた異色ミステリー！！  
 ￥. 230  
 円. 40

エロチック ミステリー **あやかしの夜** 岡田鯨彦・著  
 笠井 一・装幀

ねっとりとした夜にほの白くとけこんでゆくような羞恥の構図、人間喜劇の断面を特異な筆で描き出した異色作  
 ￥. 260  
 円. 40

東京都中野区江古田 1 の 2302 (振替口座・東京 10756 久保書店宛) 株式会社 あまとりあ社

◎現金書留か小為替、又は振替で御送金下さい。  
 ◎スグにお申込みの本をお送り致します。  
 ◎御希望の書籍名はハッキリお書き下さい。

# 夜のひととき………？



フト、あなたは 不安で眠れなくなる!!

そうです、あなたは全部を知って

いる訳ではない。だから不安なの

です。そんなときには………

精神分析による女性の相談解決実例集  
 高橋 鑑・著 せつくす・かうんせりんぐ  
 B 6 美装判 332頁・価 320円・送40円  
 東京都中野区江古田 1 あまとりあ社刊

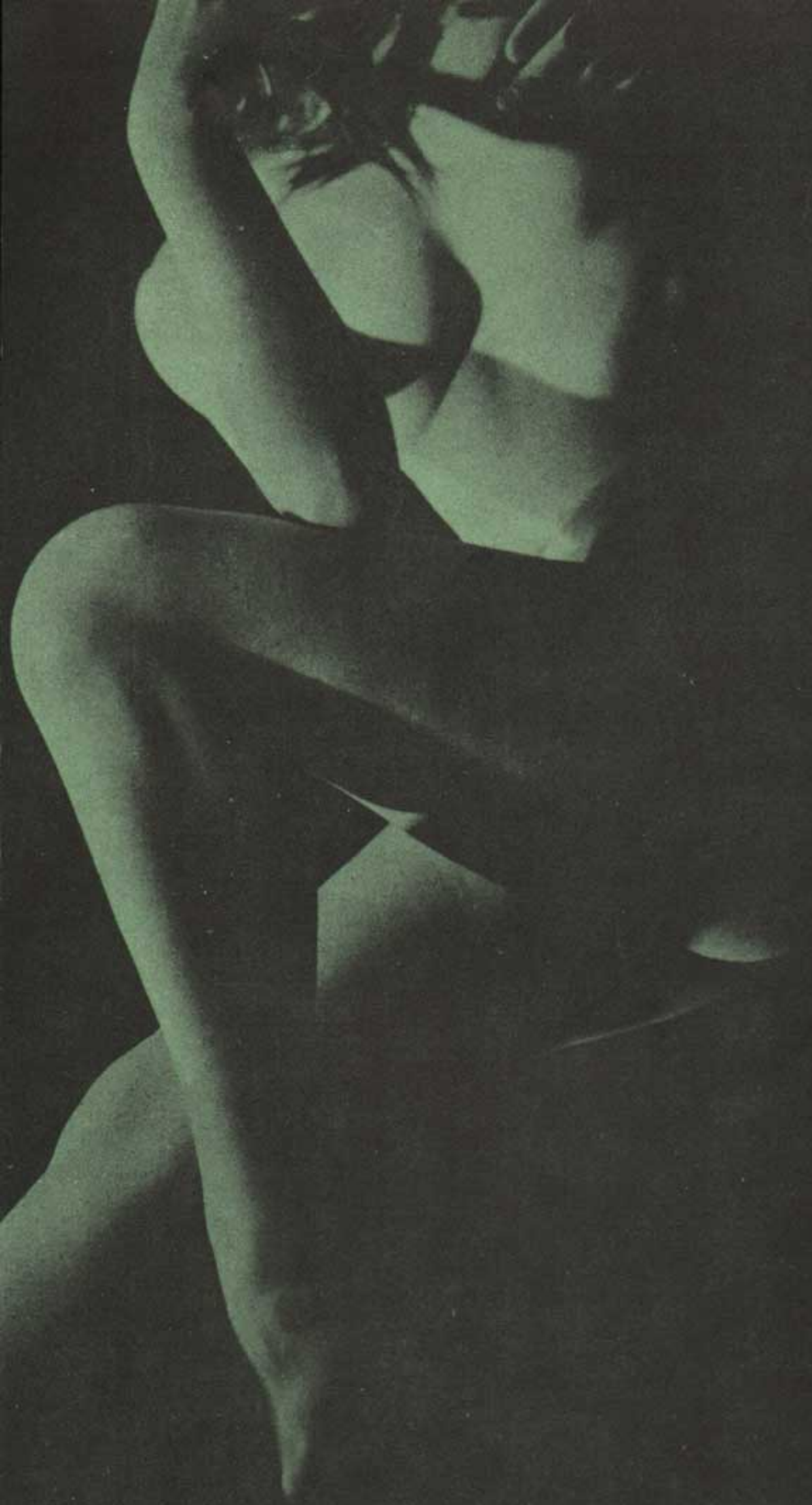
## 結婚生活★べっどるうむえちけっと の美学

幻灯器で始まる吊し亀の子  
 腰際地帯のお戯いは羽簾で  
 叩けば開く、額の接吻から  
 愛の不意打ちに女舐めはくねる  
 掘炬燵の素晴らしい利用法  
 僕のハーブ演奏法で一度に燃える  
 アレグロのリズムで私は指揮者  
 月に濡れて高まる情感  
 深夜放送を伴奏の愛撫  
 唇は柔肌の官能に点火する  
 腕と掌と肘で奥様をKO  
 椅子一つで奴隷にも暴君にも  
 即席寝具を勤める座蒲団  
 たまには奥さまにリードさせ  
 奥さまよ酔覚めの水と愛撫の手を  
 疲弱な方は量より質  
 奥さまよ寝化粧は全身に  
 奥さまの独り寝は膝枕を据えて  
 妻とお昼寝をどうぞ  
 食卓に強精食をお忘れなく  
 妻唱夫随も心得おくこと  
 大事な局部清拭のエチケット  
 夫の寝化粧マニキュア  
 妻のコンデিশョンをお忘れなく  
 昼間は賢母でも夜はボクの美しい奥さま  
 慎みもしいが野性的になって欲しい  
 明日の仕事に差支えなく細く長く楽しい



原 比露志・著  
 新書美装判 212頁・価 130円・送12円  
 東京都中野区江古田 1 あまとりあ社刊





秘められた情熱と、しびれるような耽美陶醉の密  
夜にあえぐ、特異な男女の姿を描いて満天下のマ  
ニアを狂喜させた閨秀作家が放つ傑作集！

¥ 200  
〒 40

密

夜

松井 頼子  
喜多玲子・装幀

妖しい魅惑に憑かれて——めくらめく華麗な旋律  
とやるせない恍惚に包まれてトロトロと燃える鬼  
火のような執着の世界を描いて凄美きわまる作品

¥ 200  
〒 40

倒錯の夜

鳥羽 瑛子  
秋吉 鬱・装幀

昼間の聖女・夜の妖婦——白濁のミルクの泡から  
生誕した近代のヴィナス・淫蕩きわまりなく、し  
かも清純な愛欲情緒に織りなされた艶夢世界！！

¥ 220  
〒 40

官能の夜

龍胆寺 雄  
喜多玲子・装幀

爛熟した徳川の泰平に痴れ果てた大名や富豪たち  
の言語を絶した乱行、悪法を次々とあばく、甲賀  
隠密鳴子善四郎の快刀、乱麻をたつ腕のさえ！

¥ 250  
〒 40

乱れ夜探り

島本 春雄  
喜多玲子・装幀

東京都・中野区・江古田1の2302

(振替口座・東京10756・久保書店宛)

株式会社 あまとりあ社



裏窓・十一月新装号・目次

★表紙……イラスト・ウエスト特約★ 紙……吊られた女……吉田久 (15)

★目次カット……秋吉轡★ グラビア 文・九十九十郎 画・山田彬弘 (9)

幻想 能面の女はもだえる 文・栗橋 讓 (20)

スーデン 身悶える白い人質……文・依田精二 画・豊田みのる (28)

死の道程 火焙りについての考察 吉田義雄 (38)

と条件 現代MASO風俗・お尻の下の男ども……泉谷 洋 (44)

出版印刷物に現われた☆ マゾビズムへの招待……森下高茂 (54)

マンハッタン倶楽部 (3)……ジョン・ケリー 鴨 嘔吐夫・訳 (66)

上海の妖夢 女スパイと鬼憲兵 笹木恵一 (76)

黒髪 黒髪散歩……黒崎良之 (84)

悪女の栄え……西田 仁 (88)

グラビア ★あるポーズ……(ヌード傑作選)……吉田 久 (99)

★囚われの構図……深森映士 (115)

☆☆☆☆読者短評☆☆☆☆ 文・藤見 昌一 郁 (74) (183)

色頁 執念の白髪鬼……画・堂 昌一 郁 (107)

随想 女中になりたい男の話・阿麻哲郎 (124)

絵物語・悪魔が覗くバスルーム……東城京大郎 (134)

時代 巷談 くすぐり部屋……円城寺 達 (144)

裏窓雑報・新映画紹介……砂路 寛 (150)

『私は耳の穴そうじ師』……須能秀雄 (154)

獄囚・嘘つきさの遺言 (2)……村岡藤里 (176)

グラビア スード傑作選……編集部・編 (203)

絵物語・悪の報い……画と文中 嶋喜美 (207)

連載時代 鬼乳房伝奇……飯田豊吉 (184)

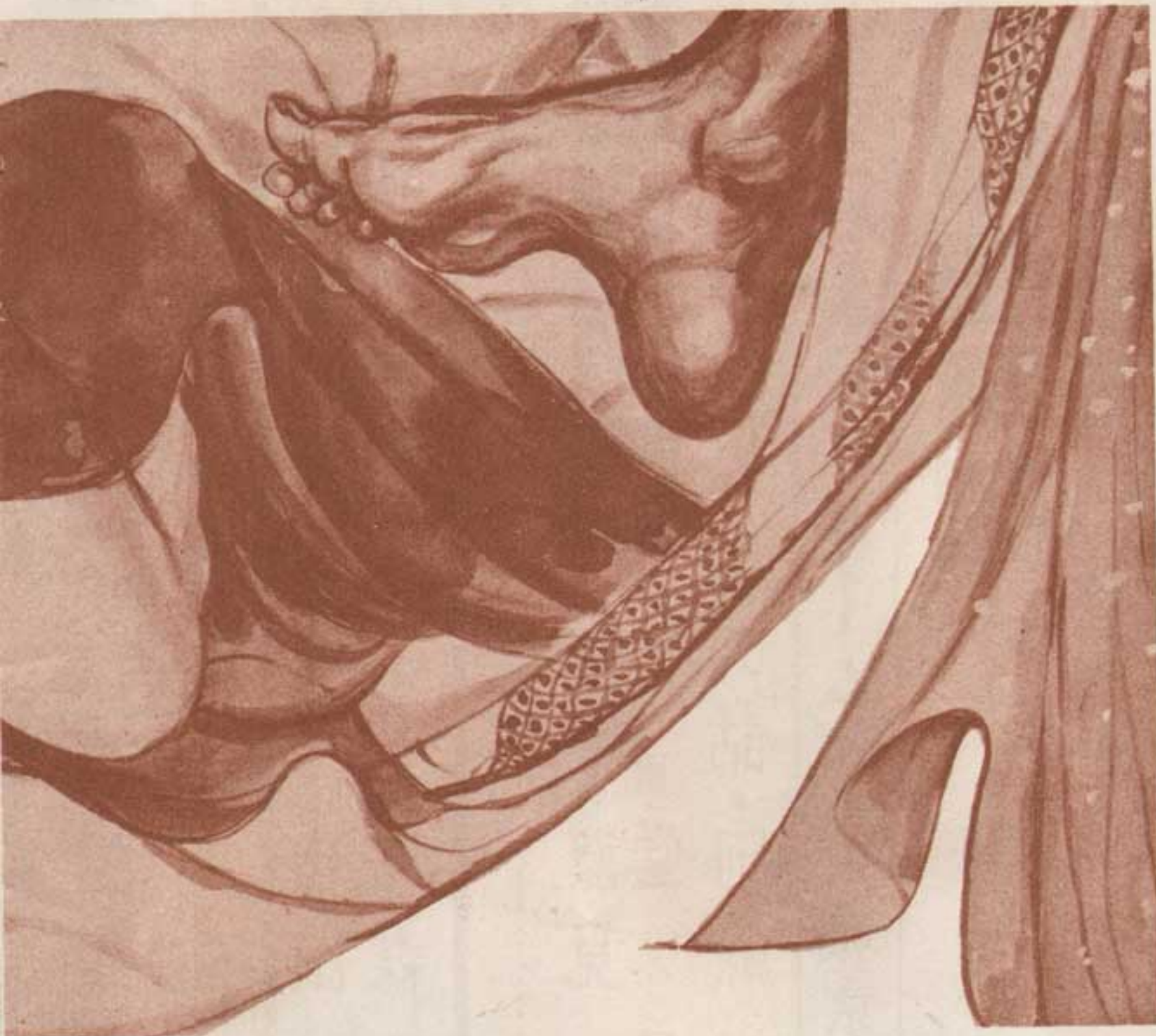
窓 裏タウン 窓……(168)





# だえる

作・<sup>つ</sup>九十<sup>く</sup>郎<sup>も</sup> 山田 弘  
画・山田 彬



## ① 迷路の都

北陸のK市は古い城下町で、幸い戦災をまぬがれたため、今日でも封建時代のすすけた家並みをそのままに残している。

私は役所の用事でたびたびK市を訪れるうちに、いつとはなしにこの街のたたずまいに魅せられるようになった。

古びたとはいえ人口三十万を擁する都会だから、繁華街にネオンは色どりを競い、そぞろ歩く人も多いのだが、その赤い光に照し出される家々の中には、黒ずんだ格子窓や、土蔵造りの家がまだ残っていて、その間を明治調の市街電車がイモ虫のようにノロノロはいずって行くありさまは、K市でなければ見られない風景で、甘ずっぱい感傷をさそうのに十分だった。

しかし、K市の特色をさらに一層きわだてているのは、入り組んだ細い小路の迷路である。

これは封建城主が長い経験からあみ出した一種の防禦手段であった。城下に殺到する敵





想語  
幻物  
絵

# もは女の面能



兵は、この迷路に迷い込んで、その氣勢をそがれ、さらに小路小路のかけから、いなごのように襲いかかる城兵によって、狼狽し混乱の極に達することだろう。

私はその修羅場を頭に描き出しながら、小路から小路へと酔いにまかせて迷い込むのだった。

とある袋小路の奥で、普請の新しい家に行き当たったかと思うと、中から粹な三味線のつま弾きがもれて来て、中に住む人の生活がしのばれた。このような古びよんだ空気の中で、人々はどんな暮し方をしているのだろうか。道行く女性に、どこか蒼白い頰廃の色をかぎつけるのは、ひとり私の感傷癖のせいだろうか。

かつて、同僚の一人が「K市の女は火のつかないライターさ」と吐きすてるように云ったことがある。

だが、その底にどのような情熱がくすぶっているか、誰が知り得よう。

深い愛着を持つとはいえ、私とて、この街にとっては、単なるエトランジェにすぎないのだから。

いや、一度、ただ一度だけ、私はこの殻の中に閉じこもったK市の内部を、ちらとのぞいた事がある。けばけばしく粧った都会の臓腑の中にわだかまっている強烈な封建の色彩を、蒼白い女の胸の底にくすぶっている奇怪な情熱のほむらをかいま見た事がある。



## ② 城下町

それは昨年のも二月も近い、ある雪の夜の事であった。

寒さを忘れるためにいつもより飲み過ぎた私が、暗い口を開いた小路のひとつに足を踏み入れた時は、かなり足元があぶなかった。もっとも十センチばかり積った湿気を帯びた雪のせいも、多少はあったに違いないが。

ソヨとも動かない大気の中を、雪は小止みなく降り続いていた。ところどころにポツンと灯っている街灯の陰気に赤い光の輪の中を、無数の雪片が一瞬きらめいては闇に消えて行くのが、まるでサイレント映画を見るようだった。傘を持たない私の顔に止まる雪片が、ジワリととけるのがこころよかった。

もう十一時頃になるのだろう。道行く人もとだえて、ほのかに闇の中に浮び上っている雪路に印された靴あとにも円く雪がかぶさっている。家々の灯もたいへいは消えていた。

私は雪の夜特有のあの寂寞たる屋並みの間を、サクサク雪をふむ自分の足音に耳をすましながら、当てどもなく歩いた。闇の中にホンノリと浮びあがる屋根の重なりと、未知の世界にいざなう一本の小路。雪の夜はエトランジェの心をさらにロマンチックに駆りたてた。

どれだけ歩きまわった頃だったろう。

とある三差路にさしかかって、私は歩を止めた。左側は道路ぞいに土塀が続いて、雪をかぶった竹が、弓のようにその上にしなだれかかっていた。

## ③ 能面の女

右側にはしもたやの軒が、音もなく眠り、別れ道がその間に黒い口を開いている。角に立つ街灯が、白い世界をいぶし銀に照し出していた。竹が積った雪をはね返すバサッとい





う音がしじまの中に驚くほど高く響いた。  
(もう帰ってもいい頃だな)

私は仰向けになって、フウと大きく息をついた。深酔いの雪道で、いささか疲れていた口のはたにとまった雪片をペロペロなめる。

「もし——」

だしぬけに後から声をかけられて、私は正直のところ心臓が凍りつく思いで、声さえのどに引っかかった。恐怖にこわばった体を立て直してその声の主と向いあった私は、さらに新たな驚愕に立ちすくんだ。

薄暗い街灯の光を斜め上から受けて、蒼白に凍りついた女の顔がそこにあった。

最初私の頭にひらめいたのは「雪女」という考えだった。しかし、すぐそんな事はどうでもよくなってしまう。雪のシンシンと降る中に、私はその女の顔と相對して、他の世界を忘れ果てた。

若い女をかたどった能面は、ゾツとするほど神秘的な印象を与えるものである。その印象は、何の変哲もなくうつろに開いた眼と、半ば開けられて、ほほえむかのような肉感的な厚ぼったい唇との妙にチグハグなコントラストがかもし出すものである。それに、能面の表情は、シテの動作につれて、微妙に変化する。私は能樂の持つ幽玄など、全くわからないが、能面の持つ神秘さには、かねてから魅かれていた。

今、私の前に立っている女の顔を見た瞬間、私はこの能面を思い出したのである。







#### ④ うつろな眼

なにも、能面そつくりの顔をしていたというのではない。ただ、そのはりつけたように動かない表情の陰から立ちのぼる妖気が、ふと能面を連想させたのである。

蒼白の頬、一文字に結ばれた唇。切れ長の眼は開いているとはいふものの、うつろなのである。

「旅のかたでいらっしやいますわね」

ここで両眼が始めてキラと光った。

とっさの事にのどがつかえて返事もできないのを気にも止めずに、女は絶え入るような言葉を続ける。

「まことにぶしつけなお願いを致すようで、恐縮なのでございますが、わたくし共の屋敷にお立ち寄りくださいませでしょうか。突然妙なお願いをしまして、何事かと怪しまれることでしょうか、決して御迷惑をおかけするようなことはございません。ただ、旅のお

方に粗茶なりと……」

低いながらもキツパリした声が、そこではたと消えた。女が顔を伏せたので、呪縛を解かれた思ひの私は、ようやく覚った。

（そうか、これは新しい売春のテなんだな。それにしてもおもしろいじゃないか。このK市でこんな女を抱くなんて、お前にとっちゃ願ったりかなったりじゃないか。）

まだ酔いの残った熱っぽい頭のすみで、小悪魔がささやいた。



吊られる女

吉田 久

















---

# 裏窓

---



芝居の辻ビラより（番町皿屋敷）

---

十一月新装号  
第五卷・第十二号

---



# 嘉七老人のコレクション

じめじめしてカビ臭い土蔵の中で老人は何を蒐集したのか？

栗橋 譲

## 発 端

群馬県のY市で木材業をいとなんでいるM家といえ、県内でも指おりの資産家だが、そのM家が原因不明の出火で焼け、隠居の嘉七老人と息子夫婦が焼死した。それはM家の家族のすべてでもあった。

出火したのが若夫婦の寝室あたりだったのだ、心中説もあった。保険金がどうなったかというようなことは、ここでは、問題ではない。とにかく、M家は死滅したのだった。

同時に、嘉七老人の生前の風変りなコレクションも、灰になった。

生前、嘉七老人とコレクションのことで接触のあった私はY市を訪れ、M家が焼けるま

画 美濃村 晃

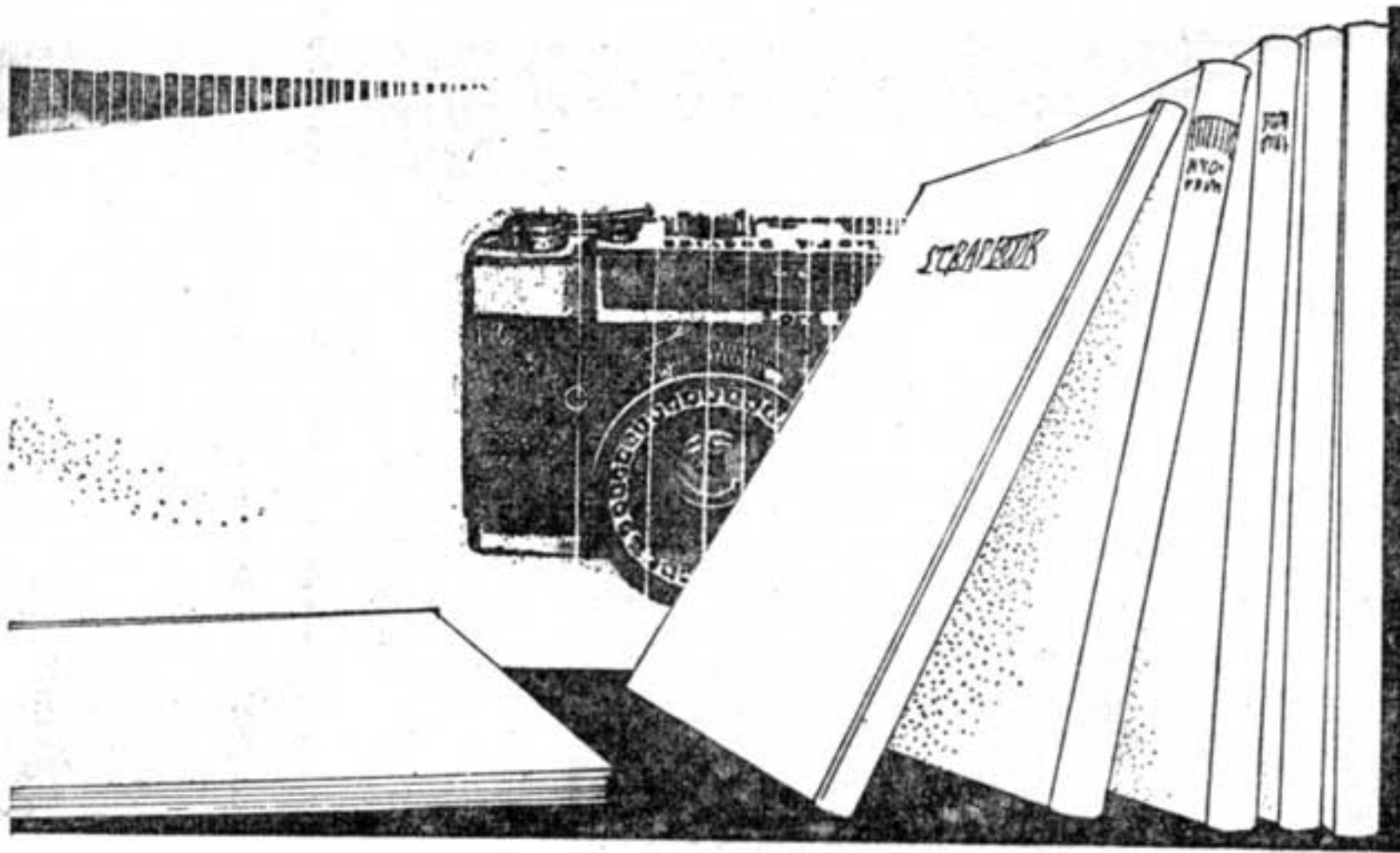
で同家の大番頭をしていて経営とか家事の機微にたずさわり、事故発生後は片づけで苦勞したEさんをつかまえて、いろいろとM家に関する謎めいた部分、それにこんどの出火にまつわる秘密などについて、問いただしてみた。

事故以来すでに一ヵ月、後かたづけもようやく、おわりをつけようとしているところだった。

Eさんははじめ、

「かんべんしてくださいよ。私は何も知らないんですから」

と白を切っていたが、私が生前の嘉七老人と、かなり特殊な、いわゆる内輪といってもいい交際をしていたことを知っているので、







「あなただけはとくべつです」

といって、くわしく、話してくれたのである。なおEさんは、ソロバンや人事に精通し、こんな大家の一番頭を長年にわたってやってきた初老の人だが、東京の大学も出ており、ちよつと文学老年的なところもある変り種だった。

Y市のように古い街になると、いろんな人がいるのだった。

## Eさんの話

大旦那（嘉七老人）はアクのつよい人で、あんな蒐集で人に知られていたのもその一端でしょうが、奥さん運とか、お子さん運は悪かったですね。三人目の奥さんは戦災で亡くなられたが、その前のお二人はいずれも病死、そのほか三人のお子さんを、一人は水死、二人は戦災死でなくしているから、つこう六人に死に別れたわけです。こんど亡くなられた若旦那は長男で、いちばん先のおくさんとのあいだに生れたお子さんですが、とにかく三十になり妻帯するまで生きていた、たった一人のお子です。

大旦那はよくそんなじぶんのことを、  
「オレは女房や子供が身につかないようにできてゐるんだ。人間が身につかないんだ。こ

れからせいせい、何か身につくようにするかなあ」

冗談とも本気ともつかずおっしゃっていたものです。

終戦後はじめられたコレクションなども、その、何かを身につける、という願いのあらわれだったかも知れませんね。そして、やりはじめるとあんな性分ですし、金は不自由ないしするからそれはもうネチネチと、はた目にもすさまじいような執念でした。老人になって、あんな脂ぎった執念みたいなものを持つている人も珍らしいというんですね。いつだったか、旅の占い師が大旦那のことを占ったことがあって、将来のことについてはあんまりハッキリした占いの結果は出なかったようですけど、過去のことについては、  
「あまり生命力が強すぎるので、周囲の者の影がうすれるのだ」

というふうに、言っておりました。

まわりの人の生命が吸い取られる、なるほど、そんな感じがしないでもありませんでした。科学的にはそんなバカな話はないかも知れませんが、はやい話が性生活なんかに限っていえば、男のほうであまりそのほうが旺盛なために、相手が寿命をちぢめる、ということもあり得ないことではないと思いますね。



大旦那は人なみに書画コットウの蒐集もやりましたが、どちらかといえば、イカモノが好きなようでした。あぶな絵、秘技写真のたぐいは質より量で、ずいぶんチャチなものまで集め、悦に入っていたようです。

つまり、筋の通った書画コットウの類は、これは対世間的にかっこうをつけるための、床の間のようなもので、次のいかがわしいやつが、じぶん一人のたのしみというところですがね。それでも、それを悪びれて隠すということは、あまりないようで、ひるま、土蔵に入ってそんなものを整理しているときも、平気で若おくさまに、その中までお茶を持っでこさせる、といったふうでした。まだはじめのころ、若おくさまが真ッ赤な顔をして蔵から出てきたのを見かけたことがあります。

ずいぶん悪趣味な話ですが、若おくさまもしまいにはそれになれたのか、それとも平気をよそおっていたのか、顔いろも変えずに蔵に出入りされるようになっていました。それでも、若おくさまが蔵の中に呼ばれて入っていったまま、あまりながいあいだ出て来ないようなことがあると、私は、

「どうしたのかしらん」

なんとなく心配になることがありました。

このころは若旦那はもうカリエスがよほどひ

どくなつて、ほとんど寝たきりの状態でし  
たから、私がへんに若おくさまと大旦那のこ  
とで気をまわすのも、無理ではないところが  
あったのです。しかし、それは私の思いすご  
しだったかもしれません。一見、なにことも  
なく日は過ぎていったのです。

## 陰と陽

大旦那のコレクションで、もう一つ世間にも知られていたのは、知名人との記念撮影でした。

地方選挙などがあつて有名な政治家が応援演説なんかをやってくると、すかさずわたりをつけていっしょにカメラにおさまる、といったぐあいです。芸能人が来ても、そうでした。

私ははじめ、これは大旦那の無邪気なファン心理のあらわれだ、くらいに思っていたのですが、それが本格化するにおよんで、「こりゃあ、たいへんなことだぞ」

と思うようになりました。

地元をやってくる有名人を、アミを張って待っているだけではおさまらず、有名人の集まっている東京へ出かけていって、その記念撮影写真を蒐集するようになったのです。

私が、

「たいへんだぞ」

と思ったのは、出費の面に対する心配もあったのです。若いファンが、楽屋口になぼつてサインをもらってくるのなんかとちがい、ちゃんとマネージャーを通じて面会を申しこみ、食事なぞ御馳走した上でいっしょに写真を撮るので、いろいろなと経費もかさむのです。しかし大旦那は平気の平左で、次から次へと新しい相手を探し出しては、アルバムをこやしていました。そして、いっしょに映した写真が、紋切り型の記念撮影のようではなく、いかにも仲よし同志がくつろいで映したといったスナッフ風のもものが撮れたときほど、機嫌がいいのでした。

写真はみるみる枚数を増してゆきました。

高峰三枝子、原節子、木暮実千代、といった一時代を画した先輩どころから、さいきんのおねえちゃんトリオのクラスにいたるまで対象の範囲はじつにひろく、舞台では水谷八重子、それにたぶんそのつながりから水谷良重あたりともチャッカリとカメラにおさまっているのです。プロ野球の長島や、横綱の若の花、といったところものがしません。

しかも、そうした人気者とあるいは肩を組んだりあるいは、

「いま、食事を終ったばかりのところだ」



というように談笑したりしているのですから、病はコーモーでした。私などには、いったいどうした手順でそこまで持ってゆくのかその交渉の方法は見当もつかなかったけれどもかなり金を費っていることは、金庫から金が出るその出方でよくわかりました。そうでもなければ、いくら地元では資産家とはいえ、名もない田舎のじいさんに、忙しいスター稼業の人が、そうかんたんに時間をさくわけはなかったでしょう。

よに映した相手のスターといっしょに、大旦那まで中央名士扱いになったような感じでした。そしてインタービューに来たローカル紙の記者にこたえ、大旦那は、各スタジオがフリーパスであることや、名もないニューフェイスなど、先輩スターにあやかっけて、じぶんもいっしょに大旦那と写真におさまりたいがっていることなどを、得々としてしゃべり、「わしといっしょに映ると、将来スターになれるというシンクスがあるようだね」そんな言葉まで、つけくわえてあったのです。

これは大旦那のコレクション趣味のうちでも陽に属するものであり、金持じいさんのお道楽としては、いささか異常めいたものがあるとはいえ、まあ罪のない部類、といえました。しかし、ふとしたことから、それに、なんともいえないへんな影がさしはじめたのです。

### つ の る 執 念

じつはこのころ、商売のほうで手ひどい打撃を被ったのです。県下でも大きいT組という土建業者があつて、うちでもいい得意だっ





たのですが、これが社運を賭けたといってもいい大工事で進行の不利から大出血をし、材木代金としてうちで収納していた約二千万円の手形が不渡りになりました。いまだから申し上げますがM家は資産家などといわれてはいますけど、内情はなかなかたいへんで、私なども繰り回しには骨を折ったものです。それが二千万円の不渡りを喰ったのですから、資金繰は大恐慌です。慌てて不動産を見返りに銀行から融資をうけて、期日のきた支払い手形を落し、体面だけは保ったのですが、これでガックリというのが、ほんとうのところでした。

なにしろ大旦那はコレクションぐるい、若旦那はカリエスで寝たつきりじゃ、いくら私一人で頑張っても、手ぬかりが生ずるのは仕方ありませんでした。

それはそれとして、大旦那の例の写真ぐるいは依然として続いていましたが、しまいの頃には、前のように金もふんだんには使えないので、大旦那も、イライラしていたようです。それだけに執念はかえって増したようです。スタジオや楽屋通いは、いっそうはげしくなっていました。ときには、むずかしい顔をして帰ってくることもありましたが、そんなときは、うまくいかなかったときなんですね。

それでも執念というのはオソロしいものでスターと二人で写真に入るのがムズかしくなると、なにかと機会をとらえ、記念撮影のよなものを見つけ出し、それにヒョイと首を突っこんだりするようにしました。たとえば、珍らしいスター同志の顔合せがあり、都合よく二人がスタジオで揃ったところを、監督なんかをまじえてパチリとやる、そんなところに、大旦那がヒョイと入ってしまうのです。また、映画雑誌なんかに出ているスナプツ写真、例えば監督が俳優に演技をつけているところ、そんな写真にも大旦那が入っていることがある。とにかくスターのいるところとシャッターチャンスというものに大旦那は異常に敏感になり、あらゆる機会をとらえて自分の影を、そこに封じこめていたというわけでした。

そんなスナプツ写真には、いろいろと撮影所の下働きの人間が映っていますから、大旦那もそんな一人と見えないことはありませんが、あんまりいろんなところに顔を出しているの、

「なんだい、あの爺さん」  
そういつて、へんな顔をする撮影所の人間もあつたようでした。つまり大旦那の相場が下落したわけですね。ことここに至って私も

黙って見ているわけにもいきませんので、思いついて大旦那に意見したところ、  
「もう、やめるよ」

意外にアッサリした返事。それから土蔵にこもることが多かったのですが、そのやさきあんな事故で、どうも――。

とにかく好きなコレクションもブレイキがかかったようで、晩年の大旦那はあまり幸せとはいえないようでした。では、このへんでかんべんして下さい。

Eさんの話は、なにかだいたいなところをボカしたようなところがあつた。嘉七老人についてこそそうだし、ましてM家の出火の原因なんかについては、不幸な失火、とだけで片づけているところがある。ところが、しばらくたって私は、Y市でローカル紙をやっているOという男から、意外な話をきかされたのである。

## O の 話

あの爺さん、スタジオなんかじゃ、鼻ツツマミだったらしいですね。そりゃさいしょのうちは金の使いつぶりもいいし、相手も人気商売だから、いい顔をしてお相手するスター連中も多かったようです。しかし内心では、





「へんなじじいだなあ」

くらいに思っていたかも知れません。とくに若い女優の中には、

「あのおじいさんといっしょにしていると、こう熱っぽい体臭のようなものがネバネバとからみついてくるようで、なんだか、気味がわるい」

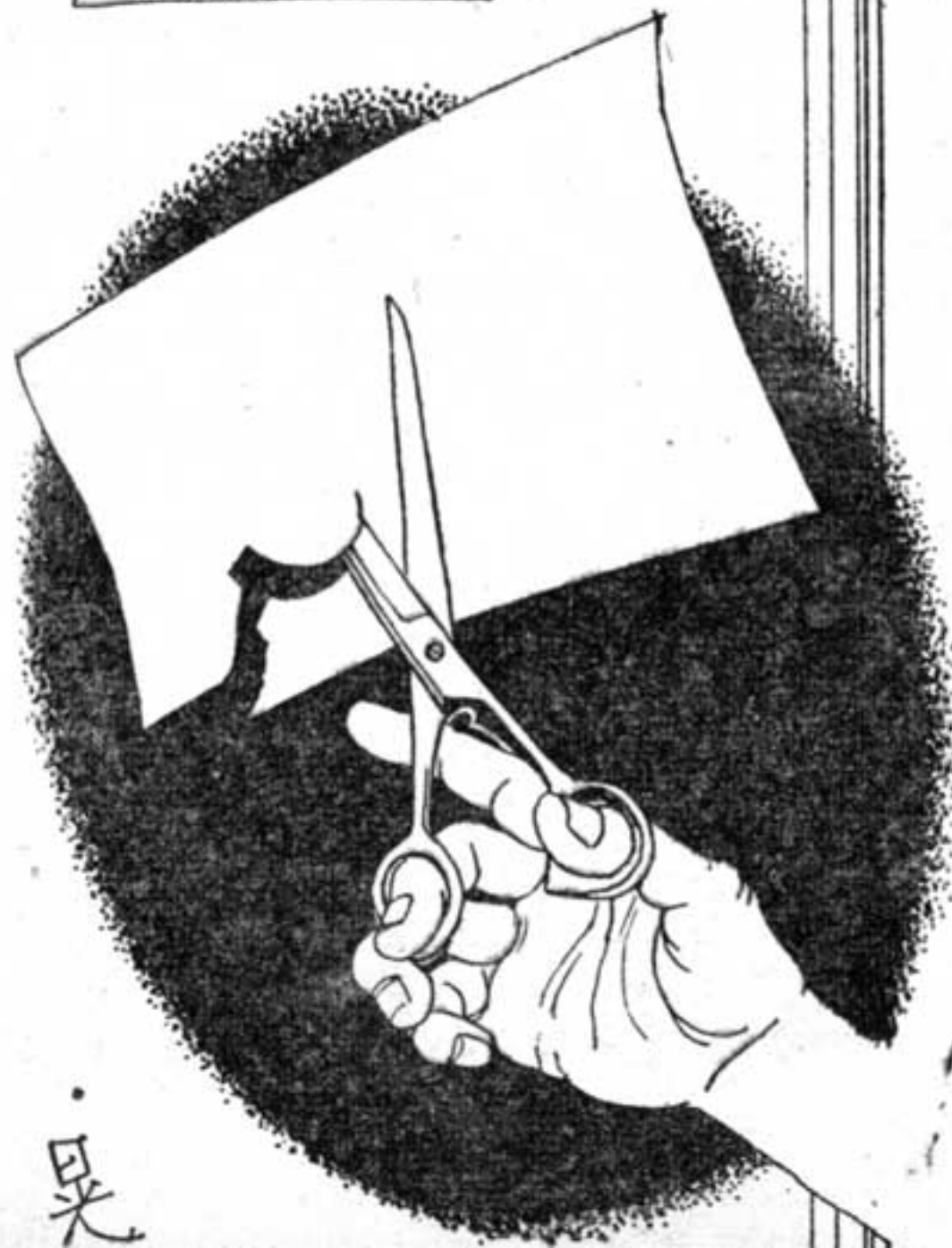
といったりしていたようです。またある女

「誰だろう」

と違ってふりかえると、そこに眼を細くしてニンマリ笑った嘉七老人の脂ぎった顔があったので、あやうく、

「キャッ」

とさけぶところだったそうです。じっさいあの爺さんときたら写真魔で、まさかこんなところに、と思うような写真にいつのまにか



優が、やはり仲間の女優数人と撮影所の入口のところでスナップ写真に映ろうとしていると、耳のうしろあたりでスウスウという鼻息のもれる音がきこえ、あったかい息が耳にかかってくるのだそうです。

チョコンと首を突っこんでおさまっているんですからね。大勢のうしろで、背のひくい爺さんが、伸び上がるようにして顔だけやっとな出している、といった写真がたくさんありますよ。いわば招かれざる被写体、というわけな



んでしょね。

爺さんが左前になってからは、スタジオなんかではいいよ嫌われはじめたようです。ちょうどそんなころ、爺さんといっしょに映った若いかけ出しの女優が、夜のセット撮

影で上から物が落ちてきて大怪我をしたりする事件があったから、爺さんに関して不吉なシンクスが、ささやかにはじめていたようです。こうなるともう厄病神的な存在ですね。女優によっては、爺さんの顔を見ると慌てにげ出すものもあるし、以前仲よく写真におさまった相手でも、スタジオの中でスレちが



っても顔をそむけて通るといったあんばいです。さすがの爺さんも、カクコンと来たらしく、仕事で失敗したヒガミもあって、それからそうした場所には、いっさい足踏みしないようになりました。しかし、そのまま引きさがるような爺さんじゃありません。じつはこれからが問題なんです。

### ある密室

爺さんはそれから蔵の中にこもるようになったのですが、そこで何をしていたと思います。息子の嫁さんをつかって、なんと蔵の中で縛りの写真を撮っていたのですよ。

嫁さんも、はじめは驚いて拒んだようでした。しかし、爺さんは、あの家では隠居とはいえ、実質的には絶対のワンマンです。嫁さんにしてみれば、夫はカリエスで寝たきりのたよりない存在で、この家で自分の地位を保とうとする限り、爺さんに逆らうわけにはいかない。そこで、とうとう着物を脱いだ、という寸法です。もっとも、嫁さんはそれまで蔵の中にお茶をはこんだりしたとき、あやしげな絵のようなものもさんざ見せつけられているのですから、なんとはなしに異常に対して免疫になっているようなところもあったんじゃないですかね。そして、しまいには爺さ



んに蔵の中で縛られ、写真をとられることに不思議な愉悅を感じるようになった、というのが私の想像なんです。

とにかくそうやって、縛りや責めの写真がたくさんできた。ここから、先が問題なんです。爺さんはその写真をどうしたかということです。東京のあるインチキな写真技術者のところにいった頼みこみ、その縛り写真のからだの部分と、いろんな女優の顔の部分をつなぎあわせ、別な写真をつくることに熱中しはじめたのです。そうしたつなぎ合せ写真に使われる女優の顔は、かって爺さんと接触があり、いっしょに写真をとったりした女優に限られていました。それらの女優の、もっともらしい顔——つまり縛られた胴体の上にのっかるにふさわしい苦悶や恐怖の表情を、映画雑誌なんかから見つけ出して来て、すげかえるというわけなんです。さいきんはスリラー仕立ての映画が多いし、そんな顔を探し出すのはワケはないことでした。

こうして、すっ裸で柱に縛りあげられた若尾文子や、太腿もムキ出しに縛られたまま突っころがされた山本富士子なんて写真が、何枚も何枚もできていきました。これが爺さんの復讐だったんです。しかも、その胴体の部分は、じぶんがよく知っている嫁の胴体であ



り縛りもポーズをつけることも、みんなじぶんでやったんですから、実感はひとしおだったと思われます。まるで、若尾文子や山本富士子をじぶんで裸にして、縛りあげたような錯覚を起し、その写真をみて、

「ヒヒ」

と笑っていたんじゃないですかね」

しかし、女優の顔はたくさんあるし、その顔にしたがってからだつきも当然変わってこなくちゃいけない。嫁さんのからだはよくしまった標準型で、たいていの顔にはくつつくのですが、それでも、やはりそぐわない場合もある。そこで、爺さんは東京あたりに出かけたが、かわいしいモデル斡旋所を漁ったり、夜の女に口をかけたたりして、秘密に借りたスタジオで、その種の責め写真を撮っていたようです。こんどは伊東絹子のからだが欲しい、そ

の次は島倉千代子だ、というふうには、それらしいからだを持った女を漁ってあるくんですね。そのうちモデルになった夜の女の一人が「あの助平爺、いったいどの奴だろう。金持は金持らしいが——」

と悪心を起し、たいへんな苦勞のすえに爺さんの素姓をつきとめ、ヒモをつかってゆすりに来たのが悲劇の発端なんです。むろん爺さんは世間体もあるから、金をやって口塞ぎをした。しかし、何回もゆすられ、しまいは怒ってドナリつけたりしているうちに、それが家人に知れてしまった。このとき、嫁さんははじめて、じぶんの縛られた裸写真の用途を知ったのです。これは彼女にとってショックであると同時に大へんな屈辱でした。

そこで、カーツとして、爺さんを殺し、自分も死のうと——。

そうそう。あの失火は、いうまでもなく嫁さんの放火ですよ。世間態をはばかって失火ということ片づけましたがね。

どうです。面白いネタでしょう。ネタ代を下さいよ。ナニ？ Eさんを通じてすでにタシマリ口止料をもらっただろうって？ それはそうですよ。しかし、それはそれ、これはこれです。あんた、いずれこの話を小説かなんかに書くんでしょ？



スーダンの反乱

# 身悶える白い人質

★二重は囚人の女  
★に悶苦する！

文・依田 精二  
画・豊田みのる

## ①大公の招宴

スーダンの砂漠の町、コトク。ルイ王朝を  
思わせるようなアラブ大公の私邸では、今宵  
招宴が開かれていた。

半円形をした大サロン——金の房をつけた  
真紅のビロードを敷きつめた上で、若い踊り

子達が、太鼓や笛のリズムに合わせて、妖精  
のように踊り狂っている。

「大公様……そろそろお暇いたしとう存じま  
す」招かれていたマルチーヌ夫人が、美しい  
ドレス姿で艶然と会釈しながら席から立ち上  
った。彼女は、フランスのスーダン派遣軍の  
基地司令官の夫人であった。







★白い皮膚

★扉の石牢

## ②石牢への招待

「おお、奥様。もう、お帰りですか」

茶色の背広を着こみ、隣に座っていた大公が、ブードー酒のグラスから口元を離した。

「でも、奥様……今晚はあなたをお帰しするわけにはいかないのです」

「まあ！」夫人は自分の耳を疑った。

「いや……お静かに、奥様。フフフ」

広くはげ上った狡そうな顔、黒い中で白い歯並が不気味に笑った。

「……」声を出しかけて夫人は、ハッと息を呑んで立ち竦んだ。いつの間に来たのか、黄色いトルコ帽と緑のダンダラ模様の服をつけた大公の護衛兵が二人。夫人の脇腹にピストルをつきつけている事に気づいたからだだった。

「……」喉がひきつって声が出なかった。

目だけが忙しく車を運転して来てくれた婦人軍曹のアイラの姿を求めて動いていた。

が、彼女の姿はサロンのどこにもなかった。

「どうぞ、こちらへ……奥様」ひそかにピストルをつきつけられていては、夫人もどうしようもなかった。

二人の男に付き添われ、複雑な表情を浮かべながら夫人は広間から連れ出されると、男達に両腕をきつくつかまれ、地下に続く階段を降ろされて行った。二重の鉄の扉の中、石油ランプの灯った狭い石牢につき入れられた。

「あっ！」

夫人は眼の前の怖い光景に眼を見張った。それは、一九四〇年。ちょうど、フランス本国では、首都パリにドイツ軍が迫っていた頃のある夜のできことであった。



### ③鉄棒の上の女

救いを求めようと探していたアイラ軍曹の姿を発見したのだった。

彼女はすでに制服を剥がされ、鉄棒の上にまたがらされ、両腕を頭の上で組むようにして縛られ、天井から下った鎖につながれていた。鉄棒の両側に垂れた足先は、床から二、三寸の間隔で宙に浮き、その上、足首に鉄の玉が結ばれていた。

スリッパの裾が白い太腿の中程までまぐれ上っている。

「むむむ……」鉄棒の背が、アイラの肌に喰い込むのであろう。彼女はしきりに身体を浮かそうと、縛られた手先で鎖の端を探し求めている。そして、耐え切れぬ苦痛に、

「あーあ、あーあ」と彼女は悲しい声を上げ少しでもこの地獄の責め苦から逃げ出したいと、身体をねじって悶え続けるのだった。

脂汗が額に浮かび、ブルネットの髪が苦悶に揺れている。

呻くたびに、腹がへこみ、胸が突き出、スリッパの布地を一杯に張った臀部の円みが、一層誇張されて妖しく浮き出ている。

その前で、平然とそれを凝視している二人の男——大公の腹心デカル達であった。



「なぜ、軍曹をこんなひどい目に遭わせるのですっ！ 私達を早く帰してください」

夫人は、夢中で口走った。

デカルの窪目が、ジロリと夫人を睨んだ。

「帰してくれと言われても、奥さん、あなた是人質なんだぜ」

「えっ！ 人質？」ギクリと身をふるわせ、

「なぜ、なぜなのです！」反問する声もあまりの驚きに上ずっていた。

スーダンが、フランスの統治を破壊し、みずからアラブ帝国を建設しようと企らみ、ひそかに動いていたことは夫人も知っていたが大公のこの暴挙は予期だにもしていなかったことである。



## ④恐怖の尋問

「奥様！ あなたはフランス派遣軍が、アラブ解放運動の指導者であるセク博士を、どこかに連れ去ったことを御存じでしょうな。その代償をわれわれはあなたに払っていたたのですよ。大公様は、今までかぶり通して来

た黒幕の仮面を剥ぐことなしに、博士の行方を探り出し、生きて取戻そうと計画しているのです。今、この婦人軍曹に、博士の居処を尋ねているんですが、しゃべらないのでね……こんな格好になってしまったのです。奥様でしたら、まさか知らないとはおっしゃらないでしょうがね。フフフ」

夫人の顔色から、見る見る血の気が引いて行った。

（まあ！ 大公が！）との呟きも声にはならなかった。

その間に、もうアイラの肢体は、激痛に耐えかね、両腕を哀れにも鎖で一杯に伸び切らせ、上体を斜めにねじ曲げて失神していた。

乱れた髪、グッタリと垂れた首——。動くうともしない若い女性の体の線に気づいて、デカルルの氷のように冷たい眼が、キラリと光って夫人の方に向けられた。

「おい！ 今度は、奥様にお尋ねして見ろ」デカルが、夫人の両腕を押さえていた男達に命令した。

（あっ！）夫人の瞳に恐怖の影が走った。

男達の腕が、激しくドレスを襲って来た。

「あっ、嫌！ ああ、助けてっ！ 誰か来てっ！」

絶望的な夫人の悲鳴が、石牢の壁に強くぶつかってはね返った。

「ああ……」

白いドレスが音を立てて裂け、その下から美貌の尊の高い夫人の肢体中でも、特にコケティッシュな魅惑をもった胸もとが、そして肩から乳房にかけての白い線が、小さきみにふるえながら現われた。



## ⑤ 苦悶する肌

ドレスがむしり取られて床に舞った。続いて頭ごしに脱がされたスリッパが白々とその上に重なった。

夫人の肉づいた大理石のような肌は、覆うこともできず、ただ、ピクリと腰を引くようにしてくねくねと悶えていた。

抵抗してもすべて無駄だと、哀しくあきらめた夫人の乳房が、薄い絹のブラジャーにはりついて、乳首を赤く透けさしている。

「全部、とれ！」デカルのきびしい語調が聞こえた。

「ああ……」夫人の化粧した楚々とした顔が男達の官能をそそるように喘いだ。

もう、ブラジャーと、レースで縁取りしたしなやかなピンクのパンティの下には何もつけていないのだ。

「そいつは×台に縛りつけろ！」

やがて、パンティ一枚にされた夫人のからだ——成熟しきった三十を過ぎたばかりの四肢は、両手を上に開いたまま、そして、両足も八の字に拡げて、台上に沿って、固定された。台にとめられたベルトが軋み、

「むむむ……」手にあまるような二つの美しい乳房、ムッチリと充実してクビれた腰が、



呻きとともに蠢めく。

「さあ……奥様。博士の居処を教えてください」

デカルが好色なまなざしで夫人の白い四肢を舐め回しながらいった。

「……」夫人は恥かしさと苦痛に唇を噛みしめ、それでもしっかりと首を横に振った。

「知らないのですか。フフ、あなたが知らない

わけはないはずですがね。水を御馳走して上げますから思い出してくださいませよう」

白人に対する、黒人大衆の生活の貧しさ。

このような日頃の劣等感を癒そうとするのかあるいは嗜虐の血に狂ってか。デカルは夫人を水責めにしようと考えついたのだった。



## ⑥朱唇に水を

怖しさに声さえ立てられない夫人の、やや厚い朱唇が無理にあけさせられて、漏斗が差し入れられた。  
その上から、水差しの水が次々と注がれ始めた。

台上に横たえられ、四肢を緊縛された白い裸身が、たちまち苦しさに喘いだ。  
息ができない。激しく眩き込む。漏斗から溢れた水が鼻からもしみる。  
夫人の足が苦しまぎれに伸び、豊満なフランス美人の肉体がヒクヒクと波打つ様は、異様な艶かしさを発散した。

ピンクのパンティにつつまれた腹部が、だんだんとふくれ上って来るのにつれて、一度充血した夫人の顔は次第に蒼ざめて行った。  
死よりも苦しい拷問——水責め。  
「あつ、あうっ……」大人は、自分の意志とは反対に、泣き声を上げながら水を吞み続けた。

あまりの苦しさに、幾度か、  
(セク博士は、砂漠の砦にいます……)  
と、咽喉まで言葉が出なかったのだったが軍人の妻であるという自覚が最後の線でそれを喰い止めさせた。

その翌日——

それは、マルチーヌ夫人を乗せて大公の私邸を出たはずの乗用車が、白ナイル川の支流に落ちているのが発見されてから、四時間ほどたった頃であった。

大公の私邸に、背が高く、肩幅の広い、一見紳士風の男が、通訳と称する若い女性を伴って訪れて来た。男は大公に面会を求めると「大公様、私はアメリカ貿易商社のロバートという者です。実は私どもの手もとに、ライフル銃が二千挺ほどございますが、いかがでございましょう。こちら様でお取引をお願いできませんでしょうか」と、切り出した。





## ⑦武器を売る男

「君、儂がなぜ、そのように多量の銃を必要とするのかね？」

大公は、貿易商ロバートの口上に、やや、景色ぼんで聞き返した。

「い、いいえ、別に……ただ、護衛兵の方達にでも御使用いただければと思ひまして……ハ、ハイ」男はあわてて言葉を足すと、ハンケチで額の汗を拭った。

「ほほう！ そうだったのか……」

大公の方でも、何かホツとした安堵の色を浮べた。

内心では、すぐにでも飛びつきたいと思ひながらも、暴動計画の黒幕である自分の身が事を起こす前に発覚してはと思うと、うかつな言葉も吐けないのだった。しかし、一方セク博士をフランス側に拉致された今、情勢はますます暴動発生に拍車をかけている事を思えば、ライフルは重要な武器なのである。

考え込む大公。

その眼がふと男の脇の婦人通訳の視線とぶつかった。

若いその女は、いかにもアメリカ人らしく襟を大きく抜いた薄黄のブラウスに、ピッチリと足につけた短か目のストラックスをはいて



きりつとした中にもどこか身軽な雰囲気漂よわせていた。

髪はショート・カットにしていた。

その青い瞳の底に、冷たさがあった。

(マルチーヌ夫人達のことを探り出そうとして来たのでは……) 大公は一瞬警戒の色を深めた。

「いかがでございましょう」男がまた、言葉を重ねた。

「儂は銃はいらん！ だが、せっかくの話だ。君のいう通り護衛兵用に適するかどうか、現物を見せて貰うとしようか」

大公は、断りともまた承諾ともつかない返事を男に与えた。



## ⑧暴動発生！

それから十日ほど過ぎた。

白ナイル川に落ちて、行方不明になったマルチーヌ夫人とアイラ軍曹の死体は、フランス側の綿密な捜査にもかかわらず、もとより発見できないでいた。

不審を抱きながらも、フランス軍当局が、その調査を打ち切ろうとしていた矢先――。

突然、スーダン独立の暴動がコトクの町を

中心にして発生した。

平和だった砂漠の町は、たちまち略奪と暴行の恐怖の町に変わった。

誰が首謀者なのか不明のまま、銀行が襲わ

れ、大使館が破られ、その上、店や街路の自動車に火が放たれて、すべての物が燃え始めた。

にわとり小屋のようなニッパ椰子の家と、ボロをまとったハダシの生活。陽の出とともに起き、夜ともなれば電灯もない暗闇の中ですわって時を過しているだけの、想像もつかないほどみじめな黒人達の生活。

これこそ、フランス植民地主義のための貧しさだ……と、煽動された暴徒の群は、喚声を上げて街路を走り、孤立した白人達に対して、略奪と暴行を働き続けた。

中でも婦人達に対する手口は残虐を極めていた。衣服を破られ血まみれになった人妻が泣く子の声に身もだえながら暴行を受けている場面もあった。

その中を、一台の乗用車が矢のように走り抜け、大公の私邸に滑りこんで行った。

貿易商のロバートだった。

「大公様ノ 匿まってくださいノ お願いですっ！」

「フフ、ロバートか。よし、安全な場所に匿まってやろう！ 最も安全な場所にな……さ、一緒に来い！」

ロバートは、ハッと息を呑んだ。大公の手に拳銃が握られ銃口がこっちを狙っている。





## ⑨大公の正体

「おい、ロバート君ノ君がこの前、フランスの諜報機関の女を連れて、儂の様子を探りに来たことくらい、こっちにはちゃんとわかっているのだぞ」

「えっ？」

「あの時、貴様達の後を男達につけさして確かめておいたのだ。お前は確かに商社の人間だった。しかし、あのフランス女にそそのかされて出て来たお前は馬鹿な奴さ。飛んで火に入る夏の虫の通り、ここに飛び込んで来た貴様に、儂の正体を見せた上、この弾丸を腹にブチ込んでやる。さあ、先に立って歩くのだ」

「畜生！」ロバートは叫びた。呻きながら、仕方なく歩を運んだ。行先は……いわずと知れた地下の部屋であった。

石牢の中！ そこには、マルチーヌ夫人とアイラが監禁され続けていた。

二人は、部屋の別々の隅に、あの時の裸身に近い肢体のまま、後手で鎖につながれて転がされていた。

その上、話し合えないように猿ぐつわが咬まされていた。

それは、金属製のものだった。



夫人は、金髪の毛先を上にあつめ、トップを高くした髪型の上から、轡についた革紐を後頭部と顚頂部へ丁字型にかけられていたしアイラも、同じように、まるで口が裂けたように、頬をくびれさして、革紐を髪の後で一文字に結ばれていた。

「むむ！」人の足音に、自由の利かない身体

を僅かに歪めて、ロバートの方を見ようとす二人。

（ああっ！ マルチーヌ夫人……）一瞬の間に、ロバートはすべての秘密を悟った。

「ウハハハ。どうだフランス軍基地司令官夫人の真珠の肌の色は！」

後で大公の勝ち誇った笑いが響いた。



## ⑩ ロバート活躍

夫人の美しい顔は蒼さめ、やつれ、幾度かの拷問に責め苛まれた痕を白い肌の処々に残してはいたが、それらはすべてグラママー的な裸身とふさわしく美しかった。

乱れた前髪の下、つぶらな瞳を破れるほど

に見開いて、彼女は二人の男の影を見上げていた。

「さあ、ロバート君。こっちを向きたまえ」  
大公の声が聞えた。その一瞬だった。

ロバートの長身が宙を跳んだ。

「野郎っ！」力一杯、鉄拳を大公の顔面に叩きつけた。

「うわっ！」叫び声とともに、銃声が一発空間に鳴った。

大公の顔が、続いて五、六度歪んだ。鼻血が散って、その白い背広を点々と染めた。

ガックリと、前に膝を折った彼の手から、拳銃が離れて床に落ちた。

素早くロバートは、それを拾った。

起き上がりかけた大公を、また一発、拳銃で肩先を撲りつけた。大公は床に延びて動かなくなった。

ロバートは急いで夫人の鎖を解き始めた。

アイラのも解いた。

「ありがとう！ ほんとうにあなたは命の恩人です。この大公こそ、仮面をかぶった暴動の張本人なのでした」喜び合う三人。

「あっ！ 誰か来る！」

突然、夫人が緊張した表情でロバートにいった。が、それは空耳であった。

（そうだ！ まだ完全に脱出できたわけではなかったのだ。ここは大公の私邸の中なのだ）  
それに夫人は、まだヒップの溝を割って張りついたように薄いパンティー一枚の裸身だったし、アイラも同じような姿だった。

ロバートはジッと次の手段を考え続けた。  
その耳に、フランス軍隊のラッパの音がかすかに伝わって流れて来た。

（終）



# 火焙りについての考察

★火刑による死に面した人はいかなる恐怖を  
★感じ、いかなる変化を刻々に経験したか？

吉田義雄

檜山紀太郎・画

火刑は切腹や磔と違って煩わしい解剖の知識は不要である。

ただ皮膚の感覚は一般感覚もそうであるが、対照的のものでありある程度以上は痛覚も熱覚も同じであり、かつ有限なる事を知れば充分である。そして死の転機は、第一に一酸化炭素中毒（これは青酸カリ、本当はシアン化水素ガスと同じ有毒力を持つ）による全身的呼吸停止、つまり即死と、第二に局所火傷による水分脱出や局所壊死による自家中毒等の結果ショック死の二様があることは知らねばならない。

前者の代表的例は八百屋お七であり、後者の代表的例はホルツ少佐であろう。ジャン・ダークはいくらか前者に近いが、まず中間で



ある。

結果的に見て日本の火刑はなほだ人道的といえる。

八百屋お七にしても、本当は恐怖だけで死そのものは即死、何の苦痛もなかったはずである。事実江戸時代においては火刑は非常にまれであったそう。

というのは火刑は一人につき二両という金がかかる。二両といえは大金だ。

何にそんな金がかかったか、また、なぜ八百屋お七は即死に近かったであろうか？

八百屋お七の場合、まず広大な矢来を組む。刑場の中央には四寸角以上の太い柱を立て泥をぬって固めておく。そしてその周囲に四畳半ほどの広さで、高さ三尺くらいに薪を並べておく。

犠牲者が引回しのあけく刑場に連れて来られると、役人が人物に誤りないかを確認し、最後の願を聞き、肉親と別れの対面が許される。

お七の場合は晴着の着用を許さ



れたというが、まず刑が残酷であるという先入感があるから、相当ここらあたりは寛大であったようだ。それがすむと中央に立てられた柱の所へ連れてゆかれ非人の手に渡される。犠牲者は己を焼き尽す薪をふんで柱を背にして立たねばならぬ。

西洋では鎖を使って身体を縛ったようだが、日本では縄を使用している。後ほどとどめ焼きをせねばならぬので、縄がそれまで燃え切れてはいけない。太い縄を使用し、幾重にもがんじがらめに縛り上げる。

要点は胸、腰で、ジャン・ダークの映画を見た記憶では鎖で強く腹部を縛り上げた時、軽い嘔気を催す場面があったが、あれは本当であろう。そして最後に両腕を後に廻して固く固定される。

日本の場合、それから泥を持って来て縄目を丁寧にぬり固めるのである。そして最後に胸部に竹のタガをはめて出来上りというわけである。

それから改めて役人は見物に向って罪状を表示読み上げ、犠牲者にもう一度云い分を聞き、覚悟を与えさせ、お上を恨むでないぞとか何とかいう。

役人が刑の執行を命ずるや、非人は犠牲者に猿轡をかませてから周囲にどンドン枯柴（時には草や薪、炭俵やわら）を積み重ねてゆく。

竹のタガはかくして積み重ねられた枯柴が犠牲者を圧迫し、圧死させないためのものである。どの程度まで積み重ねて行ったか、大抵は頭がすっぽりかくれ、まったく外から見えないくらいまで積み重ねたらしいが、私の見たお七処刑の図は乳のあたりまでしか積み重ねてない。とすれば即死でなくなるが、あれは頭までかぶせては絵にならぬからで、本当はやはり見えなくなるまで積み重ねられたことであろう。それならなんのために晴着を着せたかという問題になるが。

なにはともあれ柴が頭を覆って



しまうほど積み重ねると、それに油をかけておいて、役人の合図あり次第風上より点火、席のようなもので煽ぎ立てるわけである。

ところが火がもえる時というものは空気存在が必要であるから必ず表面からもえてゆく。大体酸素の充分ある時は炭酸ガスを発生して焰となるが、酸素不十分な時は一酸化炭素が発生する。すなわちお七の場合表面は焰となってもえ上っても、中の方は酸素が足らぬから、一酸化炭素が充満して来る。

しかしもちろん最初から一酸化炭素が充満するわけでなく、風上点火と同時に煙が犠牲者を襲う。お七は一呼吸もできぬであろう。だがそれは、そんなに長くはない。油をかけてあるから火勢は急に強くなり熱風が全身を襲う。と同時に一酸化炭素が充満するから猿轡の中で熱風に悲鳴を上げようと息を吸いこんだ瞬間、ガスを吸入して頭がフラフラとした時はもう即死である。



以上は頭上まで枯柴で覆った時の話であるが、図で見るように乳ぐらいまでしか積んでない時はそうはゆかない。一酸化炭素は焰の下にこそあれ焰の上にはほとんどなく、ばアッと柴がもえ上った時一度に乳から上が焼かれてゆくわけである。ジャン・ダークはこの方式により焼かれたと見るべきであらう。

ジャン・ダークの火刑は人道的な日本の方式と異なり柱の周囲と

彼女が乗る所はシッキイで固めてある。そして縛るのも軟い？ 縄ではなく鎖で、パークマンが縛られた時、鎖が腹部に喰い入るように固く、女優さんも大変だなと思ったことがある。そして英兵により柴はシッキイの四周に立てかけられ、その高さは膝ぐらいまでしかなかった。

記録によれば最後の叫びを聞くためにジャン・ダークには猿轡をかけられておらずまた全身に燐をぬってあったそうである。燐は刑を一層ひどいものにするためとい

うより、少しでも残ると宗教的にその一片でも民衆が保有することのないようにぬられたものだという。

かかる状態にして点火すれば、一酸化炭素の発生すべき中央はシッキイであるから、ガスの発生は僅少で、立っている場所より見て当初から焰が全身を包み、あまつさえ燐がぬられているからシクジクと深部へ焼入してゆくことは容易に想像できる。

その上当日は風の強い日であったというから煙で彼女を悩ますことも非常に少なかったであらう。

焰はまず下腹部を焦し、次いで乳房、顔面に上ってゆく。ジャン・ダークが聖母マリアの名を絶叫して死んだと書いてあるがそんなはずはない。恐しい野獣の悲鳴を上げて死んで行ったに違いない。

パークマンのジャン・ダークは煙の中で、静かに瞑目することになっっているが、悲しみよ今日のは主演女優がやった、ジャン・ダークの写真を見ると、必死の絶叫の



写真であった。この方が本当である。ジャン・ダークは火刑の恐怖にかられて一度は改宗し、また刑場へひかれてゆく道々、大声をあげて泣いていたというからまず聖母マリア云々の説は間違だろう。

私は彼女の処刑はちょうど、文明に名を借りた極東裁判のごとく宗教に名をかりた英軍の復讐と見ているので、多分ジャン・ダークがなんとかして、火刑から逃れんとしたもの、無理やりに執行して行ったものであらう。

さらにもう一つ、彼女が憐れなのは最初の一焰で刑衣がもえ切れ裸体を曝け出されたことである。

記録に彼女が女性なることを確認したと出ている。そして短く切った髪が焼け落ちると絶命したというから、数分そこそこではあるがずい分、苦痛を味わったものである。しかし彼女の死因は窒息である。火傷だけではそんなに早く絶命しない。

ジャン・ダークが『女性であることを確認した』のついでに思い



出したのであるが、日本の火刑にはとどめ焼きというのがある。頭上まで覆った柴がもえ落ちてから熊手で柴をかきわけて男なら罌丸女なら乳をもう一度たいまつ様のもので焼くのである。

もちろんそんなことは不要なのであるが、その当時の役人はまだ生きているかもしれないと思ったのであろうか。そして動かぬことを確認してから改めて、また柴を重ねて焼き尽すわけである。罌丸と乳嘴は敏感な所で、私の友人が満員電車の中で誤って、ネクタイピンで某嬢の乳嘴をつき立て、某嬢は悲鳴を上げて飛び上ったというから、九州の板倉氏のごとくどめ焼を最初にやったなどはひどい苦しみであつたろう。これを利用したのがホルツ少佐である。

ホルツ少佐は第二次大戦中、オランダの何とか市のゲシュタポ隊長である。ある時、列車を襲撃した地下運動の女を捕えた。

『なに、若い娘などは裸にすればすぐ白状するし、第一逃げる心配

はない、一つしめ上げて泥を吐かせてやろう』と思ったか、地下室に連れてゆき衣服をはぎ取った。

驚いたことにはその娘の下着はすべて新しいものであり、キチンとブラジャーを着け、コルセットをはいていた。当時かかる品は入手難である。というよりも明日をも知れぬ命でありながら、かかる品を着けていることは並々ならぬものである。とても尋常な手段では成功すまいと考えた。そこでブラジャーの中へパットの代りに、もぐさのようなものをつめこんでライターで点火した。もぐさはゆっくりと煙を上げてもえてゆく。

火が肌迫るにつれてだんだん乳が熱くなるのを、必死にこらえていたが、ついに肌に火が移って来たか頭を左右に激しくふり、このきしゃな娘のどこにあると思われるような大声で悲鳴をあげてさんさんと涙を流して、泣きたてた。そして左がもえ尽きて今度は右にライターを近づけた時、ついに一切を白状したのである。



ホルツ少佐はこれに味を覚え、女を捕えろと、この手により、ずい分多くの地下運動員を捕えてヒットラー總統から、鉄十字章を得た。ホルツ少佐によれば、両乳を焼かれて白状しない者はなく、まれにあつても陰挺(クリトリス)を蠟燭でせめる時は間違いなく降参するそうである。彼がドイツ兵砦部に要求した物品が変っている。

曰く『一日も早く鉄網の入ったブラジャーとコルセット』

では両乳と股を焼かれた女は、その後どうなったであろうか。

ホルツ少佐は射殺したことを思うが、射殺しなくても恐らく生存し得ない。

昔から火傷が全身の三分の一をこえる時は助からないというが、それは誤りで、軽いものなら適当な手当により半分以上でも助かることがある。また三分の一以下でも火傷の程度が深ければ充分死はまぬかれない。

中にはこんな小さな火傷が見えるものでも死ぬ人が沢山ある。



それはショック死である。ホルツ少佐式であると大へんな精神的苦痛が加わるから、まず女性では助かるまい。

またかりに神経が図太かったとしても、壊死組織の腐敗、及びその自家中毒、また水分脱出、化膿という要素が加わって来るから早くて三日、遅ければ十日内外で死に至る道を歩むものと思う。

面積が感応する。しかし刺激面が広くなったからといって、よい感ずるわけではない。火刑の場合、一センチ四方の火傷も十センチ四方の火傷も、そう差はない。かつ感覚は有限である。故にローマ帝王ネロがやったように、ばアッと全身一斉に焰に当たって、ほとんど瞬時に卒倒さすのより、ホルツ少佐のごとく、乳房だけ、それも片一方ずつ焰に当たてゆく方がずっと痛覚の量は大きい

わけである。どんな女でも降参し たというのは宜なる哉というべきである。ロシヤのピョートル大帝が股から頭まで焼き上げたというのは、ずい分ひどい刑である。終戦後、巢鴨プリズンで鼻の先を蠟燭で焼かれて、罪状に署名させられたという記事を読んだが、幸いにして日本人にはかかる残酷な例を聞かない。

見れば八百屋お七は、形は火刑でも厳密にいえば一酸化炭素ガス刑であり、ジャンダークも途中までは火刑であるが後室息により『介錯』されたと見るべきであろう。本当の火刑はホルツ少佐のごとく、またピョートル大帝のごとく執行して始めて成立するわけである。

完

——思わぬ時に、思いもかけぬ贈りもの——と、こう書くと、なんだか話が怪奇めくが実は、こうなのである。

去る日、郵便屋が私の旧住所へ、第参種郵便物を配達した。

ところが、その受取人たる私は、今年の四月に現住所へ引っ越してしまっていたので、その旧住所の家主さんが配達物を一応預っておこうかとも思ったが、もし永く私と会えなかつたら申し訳ないと思い、新住所への大体の道順を郵便屋に教えて、転送するように話しておいたが、そちらへ配達しましたか？と妙なもので、その日のうちに会わした私に念達したものである。

——しかも書籍らしかった——とのこと。

トタンに私は（ハテナ？）と首を傾げた。

——というのが、最近の私はどこからも書籍を送って貰えそうな覚えはなく、もちろん注文した覚えもない。しかし「書籍らしかった」と聞けば、以前K誌に寄稿したこともあったので、まんざらでもなく、とにかく早く現物を入手しておかぬと、返送でもされては……と思ったので、翌朝を待つて早速集配局に赴いて、直接にその書籍らしい第参種郵便物な

るものを受取ることができた。——すなわちこれが新装裏窓十月号であった。

さて、その誌上掲載の拙稿「天狗の安について」は、いつ頃裏窓誌に寄稿しておいたものやら、トンと忘却していたもので、なるほど読んでみて、思い出した次第である。

そして読んでみると、やはりなつかしい。不思議と永い間、放つたらかされたウツプンなどは露ほども感じないばかりか、むしろ編集部の「寄稿」を大切に保存して適宜に生かして用いられる、その誠意を嬉しく思った次第でもある。

——というのが、私が戦前二十余年の永きに亘って蒐集した「美女被縛構図」の中で子母沢寛氏の原作になる「天狗の安」の一場面

## 読者随筆 新装十月号に 寄せて



## 長岡変一郎

を挿絵にした、金森観陽えがくところの真裸美女の被縛体の背後を克明に画いたそれが、何物にも代えがたいほど、私にとっては貴重品であり、さらにその場面を期待（事実アノ時代にこんな場面の演出は許されまい？）とも思いつつ）できそうな、その天狗の安の映画化となったのだから、いやもう全く、今思い出してもアノ時（昭和十二年）大阪道頓堀の弁天座に、それを観に行く時の嬉しさと云ったら筆舌に尽しがたいほどであったものだ。

それ故に「天狗の安」に関する彼の場面への意見は、手前ミソではなはだ恐縮ながら、私の独壇場たる意気込を持っていたので、さこそ裏窓誌への寄稿となった訳であった。しかるにその事を、私が忘れてしまっていたムジユンについては、こうである。

十月号に掲載して頂いた拙稿「天狗の安について」には、ちゃんとその当時（昭和六年版）の金森画伯えがく挿絵が掲げてあった。実はアノ絵を私は文とともに提出したかったのだが戦災で蒐集品の全部を焼失してしまつたので残念ながらそれができなかった。……従つて、裏窓誌の性質上肝腎とも、看做すべき資料の欠けた、いわば骨抜きに等しい拙稿が「ボツ」になるのもムベなる哉——とこう思っていたからである。

さて、新装裏窓十月号を贈られて……の感激（感謝）は、まず第一にその私の提出し得なかつた貴重な挿絵が、ちゃんと補足されて掲載されている事であり、大げさな云い方の

ようだが、再びお眼にかかれまい……と思つていた「懐しのそれ」に接した欣喜もまた、大きかつた。そしてその欣喜が「天上天下我一人」との蒐集癖に対する秘かな誇りを、微塵に打砕くとともに一方また「世間には案外同好の志が居られるもの哉」——の意も強うしてくれた訳であつた。

拙稿と頁を別にしての随筆「戦前の雑誌に現われた責めの挿絵」での山根豊氏。私に貴重な挿絵補足の労を執つて下さつたのが、もし貴下であつたとするならば、あなたの大容の精神に敬服の他ありません。恐らくもう大分の御年輩と拝察しますが、誌上を通じて非常な親近感を覚えます。

貴殿が十月号誌上127頁の上の挿絵——何という題名であつたか——といわれているのは昭和四年十月号の講談雑誌に掲載されていた「乱行切髪外道」です。アノ十月号には、伊藤晴雨の「責められる女、苛まれる女」その他私達マニアのソクソクする嬉しいものが満載で、今でも忘れません。

さて、新装「裏窓十月号」への感想である。卒直にいつて、新装裏窓の出来栄は「上」である。旧装の製本様式かつ体裁では、少こうした特殊性内容を持つ雑誌としては、少しお粗末だナ？ とかねがね思わぬでもなか

つたのである。

——というのが、全部とはいえぬまでも、こうした特殊雑誌を愛好する者の習性と云うか習癖というか、内容を読んでしまったからといつて、すぐに古本屋に売払つたり、友人の誰彼に貸しまくるようなことを嫌つて、大事に保存しようとするものである。……そしてまた、こういう人に限つて、書籍そのものの汚損や破損を非常に厭うのであり、どうかすると、せつかく残しておきたいものでも、外装の一部の汚損や破損の為に、必要な幾頁かをスクラップして、あとを手放（棄）してしまつたりするものである。

こういつた事から見ても今度の裏窓の新装は、「我が意を得たり」の感が深い。

製本様式にしても、アレなれば本の背に角が立たないから、破損の率が少いし、また綴じを外して、必要な分だけスクラップするにしても、従来のように刃物で切り取つたりする必要なく、至極便利である。

紙質のよくなつたこと。内容の充実豪華さにおいて、僅かばかりの誌代値上げなど、物の数ではなからう。

外装にしても、大いにイカす。黒無地の空を多くしてのこの企画は、今後も変えないで欲しいものだ。もちろん、毎号黒ばかりを願うのではない。——時にブルー色結構。ピンクその他の色彩もよいが、要は十月号と変らぬ程度の無地の空地を多くする事によつて上品？ なお色気を醸し出すことを忘れないで欲しいと私は願つて止まない次第である。





昭和三十三年六月二十四日附の夕刊読売新聞に「ソフィア・ローレン大暴れ」と題して映画撮影の事が写真入りで出ていた。

説明によると、五十万ドル(一億八千万円)にのぼる宝石類を、一夜のうちに奪われ、すっかり逆上の形のソフィア・ローレンは、災難は災難として仕事は大切、現在「うらみ」のロンドン、それも犯人は発見されないが、空の宝石箱が浮かび上ったチームズ川はロン

ドン・ブリッジのほとりで、「女百万長者」(原作バーナード・ショー)のロケーションに取りかかった。ところがそのロケたるや、ローレン女史、今までになく大の男を相手にジュウドウを用いての大乱闘や、ロンドン・ブリッジから、ドンブリコといった荒事ばかり。宝石事件のウッポン晴らしとばかりデニス・プライスのスタンド・インのレイ・オーチンをスッテンコロリ投げとばし、勇まし

その豊かな肉の重みを  
背にずっしりと受けて  
はいまわるよろこびノ

現代MASO風俗 (二)

# お尻の下の男ども



# 泉谷 洋

いところを見せたが……（以下略）

とある。そして写真は、ローレンが大の男を投げとばす瞬間のものが出ていて、これは（キーストン提供）となっている。

膝小僧が見える綺麗な脚をみせて、髪ふり乱して「えい、やアッ」とばかり大男を投げつけようとするその表情の魅惑的なこと、マニアの私は早速切りとってスクラップした。

この新聞を私が縁側で見ていると、近所の娘で二十歳になったかならないかだが、遊びがてら庭からやって来てこの写真を見て曰く、

「今は女性の方が強いわね」

昭和三十五年三月二十八日附の観

光新聞第七面に、読者の方はすでに御承知かとも思うが、

「女が男をいじめる地上最低のショー」という海外だよりが写真つきで出ていた。その説明にはこう書いてある。

女のサディズムと男のマゾヒズムを満足させるショーが、ロンドンの「カシノ・ド・パリ」で上演されている。石綿でできたダブダブの奇妙な服を来た男を、パンティ一枚の美

女が鉛玉を入れた皮袋で所かまわずひっぱたくという「レディース・アンド・ゼントルメン・レスリング」で、女が男をいじめるのだから、女の客が多いと思いきや、お客はほとんど中年の男、「ショーもここまでではおしまい」とかなり非難の声もたかい。

というもので、私はこのショーをぜひ観たいと希っている。このショーが、よい悪いは別として、また、世のひんしゆくを買っている、いないも別として、女が男をいじめることに主眼をつけた点は、M系の人達にとって有意義なことである。それこそ、「地上最低」ではなく、「地上最高のショー」だと思っている。

さて先月号に引続き昭和二十五年五月号の「りべらる」に出たもので風土記「女尊男卑部落」を紹介する。

書いた人は組坂松史、挿絵は土端一美となっている。

これは九州のある地方の部落のことを記録したもので冒頭にこう書かれている。

ここは雲に明け雲に暮れる。霧ふかく野猿群れる太古のままの高山の中、住む人もないかと思われるような幽邃の峡谷にも、なお人家があり部落があった。ここでは、女の子が

成長して初潮をみると、さっそく部落の男女が客になって集ってくる。てんでにこれらの客はお祝の品を持っている。野猪もあれば、山鳥もあり、冬なら兎もある。あるいは珍しそうに赤い柄の反物、ネル、薩摩上布などもある。——そしてこの成人祝のヒロインをヒロエという娘にするとして、その祝の模様のことを次のように書いてある。

ヒロエは注連を張った神棚を背に、あぐらを組み、髪をすべらかしにし化粧して、盛装である。そのヒロエの横に、その母親が付添っていて、客の挨拶へそれぞれ、

「おかげさまをもちまして、これからお目見得できることになりましたがす」と答える。

客の顔が揃ったところで、

「それでは、これからお宴にいたします」

とヒロエの父親が現れて客達へ告げる。

客達は、ヒロエを中心に、左右へまず女客達が居流れ、それに続いて男客達が坐る。ひろい家ではないので、円陣になるが男達は、とにかく末座である。——

と座につくのにも男は末座という題名通りの女尊男卑部落のことはこのあともなお続けられる。

それは酒宴半ばになってこのヒロエが奥へかくれると、男客の中から前もって企画され



た、髯むじやの逞しそうな男が岩戸神樂の男神になって舞うというのだ。それをみんなが笛や太鼓ではやしても、かくれているヒロエは出て来ない。幕のかげにいる女の子を出そうとして、腕力でそれを明けようとして明かない演技はなおも続けられて途方にくれる態の芝居となる。そこへやはり企画されたもののだが、女客の中から福々しい一人の女が、この男神の前に現われて、いわゆる女神が舞いを舞い始める。そして、それがだんだんエロチックになって一枚ずつ身にまとっているものを取ってゆく。客がドツと笑ったりするとかくれていたヒロエがそつと顔を出して待ちかまえていた男神が、彼女の手をとって迎へ出すというのである。

それは、男の暴力では応じない。しかし女性の性衝動のどうにもならぬ時が来たら、誘われなくても男を迎えるという女性の矜持をうたいあげた岩戸神樂だというのだ。

作者はこのあとを、

裸ショーは、ただのエロを見せて、観衆の卑俗さに迎合するだけのことである。しかしこの山中の神樂行事は、いよいよ女として今後生きてゆくべきものに、女はいかにあるべきかを教えている。女はまず自己の性的欲求を尊敬する、という気風がここにはあり、男

女の性器を形どった木彫のものを神棚に祀っている。これはあの二つのものから、子供ができるということが、どう考えても不思議であり、神秘でならなかった古代人の、生へ対する敬虔なおそれからきていよう。この敬虔さ、このおそれを嘲う前に、現代人はこうした気風の純粹性について三思しなければならぬのではないか。科学はどれだけ人間を高めたか、今日、自己の性器に対して、うやまい心とおそれ心を抱いている都会人はおそろく一人もいないだろう。そしてそのことは自己の生、人間の生命、永遠、悠久、未来、こういうことを考える能力を喪失してしまったことではないか——と続けている。

このあとヒロエは、好きだと思ふ男をみつめて風習通り男の名を母親へ訴える。母親はすぐ、ヒロエがいった名の四郎の家に行く。

二人の母親の間で、日取りが決められ、その日の夜になると四郎の家では、彼だけを置いて皆、どこかへ行ってしまう。神棚の灯明をつけ、ランプのホヤもよく磨いてある。門口には盛塩がしてあるが、塩は不浄をきよめ邪魔魔を退散させるもので、この山中ではめつたなことには塩を使わない。四郎は寒中でも、溪谷の清流で身をすすぎ、神に礼拝して床に待つのだ。ヒロエもまた、清流に身をす

すいで一人こっそり夜更けてしのんで来る。大体、夜這いは男とされているが、ここでは女の方が男の処へ行くのだ。三日月が十五夜の月になり、雨や風、螢や虫の声と、日がうつりかわるとき、娘は、折々に男の許へそつと通ってゆき、そして懐妊する。日が満ちて生れ出た赤チャンは彼女の方で——もう母親になったがこの方で育てる。これで男の役は終り、そのうち女に機が熟すると、今度は誰にも打ちあけず、これぞと思う男へ直接、思慕を訴える。そしてまた双方、齋戒沐浴、懐妊こうして女は子供を産む機能のある間は、結婚しないで自由に好きな男を選ぶ。これほど女というものに拘束のないところはあるまい。そしてこの女尊男卑の部落がなぜこうなったのかの説明が、母系家族の勝利と題して詳しく書かれているが、それは省略し、天照大神に準じて、いまだに民族発祥のときのままだに俗臭にけがれず、主権在女であることを述べて紹介を終わりたい。

さて次は昭和二十六年暮頃に、発行されたもので「読切ロマンス」というB5版型の小型雑誌、一月号の裏表紙に、川柳風俗百態の中に一つ傑作があった。

新妻の ねだるは 女上位なり



神奈川ナオミ

る。

そして挿絵は男を馬にして跨っている女性の図、あまりうまくない絵だが女はシュミーズ一枚、男はパンツ一枚の半裸体である。なお、この雑誌の中だったと思うが、読物アマトリアとして、女上位の悦楽境という特集があつて、その序文に次のように書いてあ

弱き者は女なり——なんていったのは昔のお話、性欲も生活も、いざとなれば女の方がはるかに強い。だからもし、閨房においての力が本当に発揮されたとしたら、男子専制の夢など一朝にしてヒっくり返って、それこそ女上位時代が到来するだろう。それかあら

ぬか、世の多くの御円満な閨房では、いわゆる女上位家庭がシックリいつているようである。が、だからといって、女上位かならずしも亭主を尻に敷くという意味でない。いや亭主を尻に敷くことも、閨房でなら大いにやってしかるべきであろう。とにかく千の理屈よりも、まあ本文を一読の上その実相をつかみたまえ……と。

そして六つの読物が掲載されているが、みんなマゾ向きのものである。

まず篠木六郎作「愛妻は寝室で乗馬の練習」細君の敏子さんに、乗馬を習いたいとせがまれたときには、その遠大にして深遠なる理由が、勝又君にはわからなかったのである。

とこの読物は始まって、夫婦の会話で、妻が子供のできない間、一人、家にポツンとしているのも淋しいから、乗馬でも習いたいとい、やがてその練習が始まったが、寝物語で夫は妻から、落馬してあちこちが痛いと言われる。それで勝又君は、美人で友人間に鼻の高い恋女房の敏子に、もしものことがあつたらと心配して乗馬練習をやめるようにすすめるが妻はそれをきかない。そして勝又君が落馬しないよい工夫はないかといったのに対して、

「ええ、あるわよ。いともやさしいものよ。」





こうしてお布団の中へ入ったときね、旦那様にお馬になってもらって、ハイハイドウドウト、やるんですって……」

「あら、だって実験ずみの方が、ずい分いらっしてよ。脚のしめぐあいや、お尻の位置が固まって、すこし位の震動にはへこたれないんですって」と敏子さんは強調する。

そして次の光景となる。

恋女房に怪我させないために、馬になるのもまた、やむを得ない。勝又君は悲壮な覚悟を決めて、くるりと布団の上に起き上ると四ツ足をふんまえた。

「乗ってもいいよ、練習してごらん」

「あら、すみません。でもね、寝巻を着ていたらだめよ。裸にならないと馬と感触が違うから、びったり来ないワ」

なるほどそうかも知れないと勝又君はいさぎよく裸になった。

「さあ、乗るわよ」という敏子さんをみて驚いた。いつのまにかピンクのタオルを脱いでパンティだけのストリップ姿である。こんもりと高くなった胸の丘で、ぶどうのような可愛らしい乳首がゆさゆさゆれている。

「ハイハイ」

ふんわりと、やわらかいお尻が背に乗ったと思うと、騒々しいソプラノが夜のしじまを

破った。——中略——やがて勝又君は布団の上に仰向けになってハアハアといきをつく。

「つまらないワ、もう疲れたの」

「とてもたまらん、手も足も、もう一步も動かんね」

「弱虫ね、じゃそのままの姿勢でいいから、あたし乗るわよ」

白い裸像が、びよんと馬乗りになった。

「ハイドウドウ」

敏子さんは子供のようにはしゃいで、しなやかな身体を上下にゆする。

そして、次の会話でこの読物が結ばれている。翌日の朝食の時、

「今日は乗馬練習もうまくゆくだろうね」

と勝又君が苦笑した。

「ホホホ……もう行かないワ」

「えッ！ どうして」

「もう乗馬練習の必要ないわ。だって、あなたに、馬っていうものが、どんなにいいかってこと、わかっていただいたンですもの」

続いてその(二)

「体位で解決した閨房の不満」

夫婦の位置を逆転して暴君の夫を征服し

た細君のお手柄

仙石規男作

これは靴下までもはかせてやらないと、気嫌の悪いわがままな一人息子として育った夫

青木の妻、芳子のお話、青木は死んだ父親のあとをついで、製紙会社の若社長をしているが、いつも遅くまで酒を飲んで帰って来ては自分の思う通りにならないと芳子を殴ったり蹴ったり、狂ったように暴れ廻っている。それに芳子は結婚して三月だというのに、充分に寝室のよろこびをうけることをしらない。全く芳子は新妻というどころか奴隷扱いをされているのだ。

「何とかしなければ、とても、我慢できないワ」と彼女はしみじみ考えるのだがどうにもならない。そして今日もこの間、投げとばされた時にできた紫色のお尻のアザをさすっていたが、その時、(お酒でも飲んで攻勢に出てやるのよ)といつか身の上を相談した友達の言葉が頭によみがえって来る。

(そうだわ。思いきって沢山お酒をのみ、今夜は驚かしてあげよう)

芳子は悩ましい気持を晴らし、恨み重なる夫を圧倒してやろうと、ついに、かって口にしたことのない酒を飲むことに決心する。彼女はそのままでは苦くてのめないで、砂糖をまぜたり鼻をつまんだりして二合余りをぐうっとのんでしまう。

その夜、例によって遅く帰った青木を引きずるように寝室へ連れ込んだ芳子は、



「なぜもつと早く、帰っていらっしやらないの」

ヒステリカルに叫んで、夫を布団の上におし倒す。青木はいつもと違って出鼻をくじかれた様子で「……………」言葉もない。

「あなたっ、あなたって人は、実に薄情だね、今夜こそもう承知しないわよっ」

芳子は色白の美しい顔を妖しく紅潮させて夫の身体に半裸のまま跨って、それでも軽く夫の首に両手をあてて、ぐいぐいと身体をおしつける。

「お、おい何をするんだッ」

「あなたが愛してくれないからよオ」

いつもと違った妖しい妻の態度に、そしてふだんは右をといえ右を、まるで機械のように、すなおにいうことを聞いて、何の刺激もなかった芳子のこの暴威には、さすがの暴君亭主もかつて覚えのないものを感じて妙に芳子がいとしくなってきた。

そしてこのことを次のように書いてある。

——それはどんな場合においても、つねに上位にあって命令と強制で暴君ぶりを発揮している夫が逆に、妻からはげしく愛され、悦びを求められ、おさえつけられているといういつもと変った位置から、妻の強さを発見したためでなからうか？——

芳子は高い位置にあって、愛し愛される悦びと、彼女の日頃の奴隷的な根性もいつか消えて暴君を征服し、女の権利を取り戻したような素晴らしい優越感を覚える。

そしてこれも、次の夫婦の会話で終わっている。その翌日、酒ものまずに帰った青木が、「うん、実はね、今まで妻を大事にしなかつ

たことをつくづく後悔しているんだよ。お前はつねに僕の上にいななければいけないのだ。これからは僕は、何をする場合でも、お前の下にいることに決めた。レディ・ファースト万事それでなければ、家庭は円満じゃない。夫婦仲もよくないのだ。ことにね、あの場合は。ハッハッハ……………」





「その通りよ。いままで貴方は、いつも私を下に敷いて亭主面をしていたのがいけなかったんだわ。これからはいつも……ホッホッホ……」

そして第三話「夫を乗り潰した騎馬夫人」となる。島陽子作。

これはまず「原爆的女上位」と題して、妻が男のとりて位をとって満足していることが私小説の形式で描かれている。

「不思議だなア」

気だるい虚脱感の中で、夫が私にこうささやきました。

「私も不思議でたまらないのよ」

夫の胸に顔を埋めて私が答えました。

「いつもそうなのかい」

「ええ……イヤ、そんなに顔なんか見ちゃア……」

といったような訳でこの私なる女性が、女上位にたつと、原爆の連鎖反応さながらにエネルギーが彼女の体内で爆発を続け、それが男を征服したという心理的なものはわからないが、今度は夫がいつも私にその体位を求めるようになったというのである。

そしてこの夫婦は、この体位以外には、全然興味もよろこびも感じなくなって、さすがに不安を覚え、大河内博士の診断をうけるこ

とになる。大河内博士というのは、ある病院の精神科の医長で、この女性なる私にいろいろ質問をしたあと、

「あなたは、まだ小さい頃、お父さんとお母さんの行為を見たことがある筈です」という。その時、幼い視野にやきついた肢態と、耳で聞いた音が、現在の彼女の精神を固定させてしまったという訳で、結局何の心配もないとわかり、大いにこの母親の遺伝なる体位をもって楽しむという話である。

第四話、「荒馬を乗りこなす馬乗り芸者」  
鯨孫六作。

これは主な処をかいつままで説明する。私が軽演劇団の座長兼座付役者をして一座を引きつれ四国地方に巡業の時のことだ。K県S町に一座の後援者がいて、その木藤という土建会社の重役が、この町に世にもまれな名物があることを話す。そしてそれは、馬乗り芸者だという。私は馬の好きな芸者のことかと思ったのだが、尋ねてみると、つまり客を馬にして、それに乗りながら楽しく遊ばせてくれるのだということを知る。

この芸者の名は歌子といったが、御面相はおかめの化けそこないかと思われる不美人である。だがそれにもかかわらず、四国全体で屈指の売れっ子というのだから、いかに珍芸

の馬乗りが上手だかを想像し、私はとうとう数日後にこの馬乗り芸者と遊ぶことになる。

——なるほど絵にも書けないようにまずい女だが、二十三歳という成熟しきった身体は不思議な色気と魅力をもっていて、七難をかくすといわれる色の白さが、どうにか女らしさを感じさせていた。

「君、すばらしい芸をもっているんだってね？」

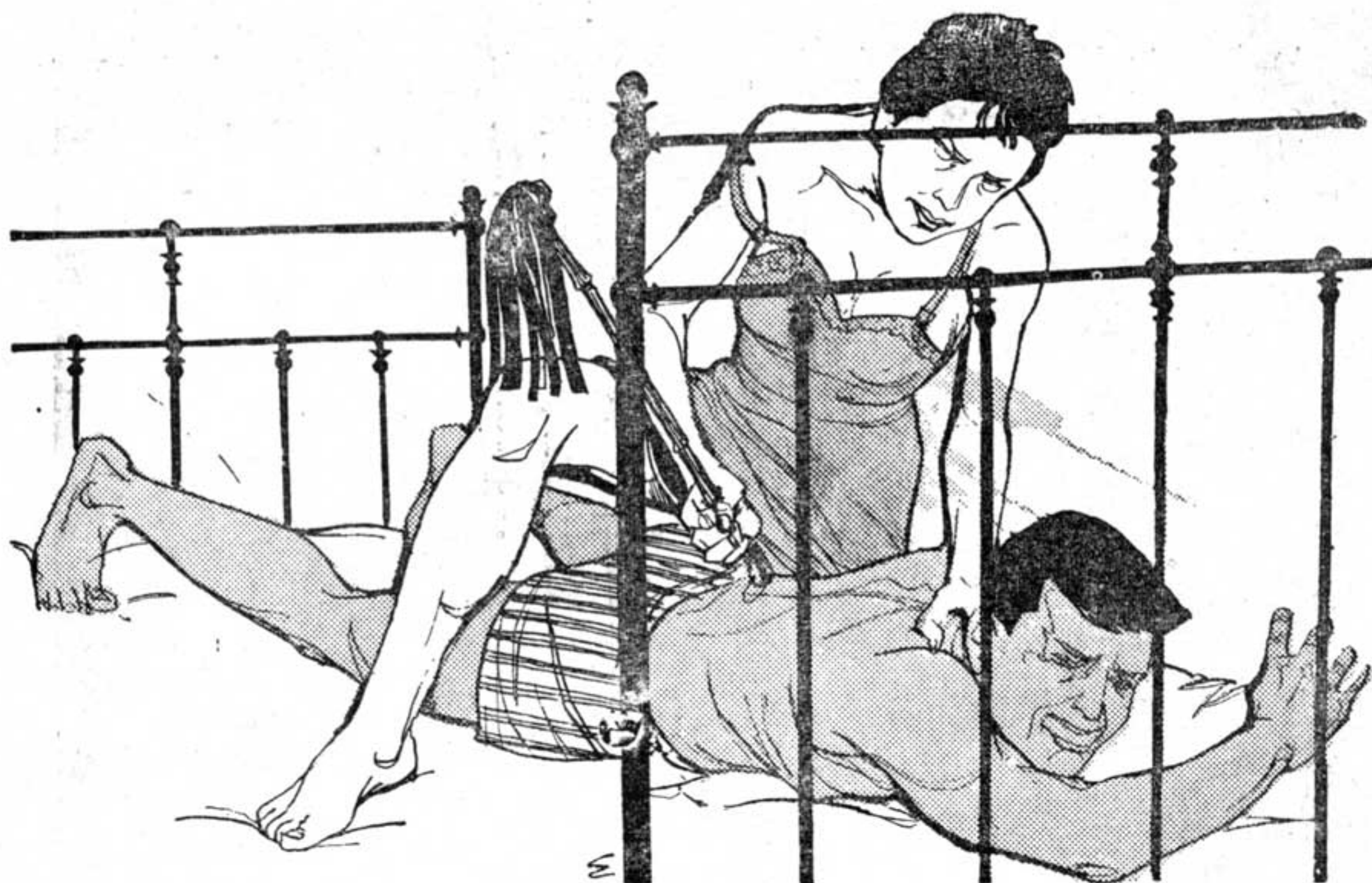
「まア、お恥ずかしいわ」

「早速やってもらいたいもんだね」——

こうして位置が代ると男は妙に受け身になり弱々しさを与えられることを知る。愛するというよりも愛されるという立場を感じ、それがまた、変った味覚をおぼえさせる。さて馬乗り歌子は、おもむろに、馬に一鞭くれて天晴れな女騎手ぶり。馬の私は、谷を渡り、川を越え、雲にのって夢のような花園のある天国へまっしぐらだ。そして巧みな手綱のさばきや、脚のしめぐあい、どんな暴れ馬でも乗りこなす名騎手ぶりについて私は、「ヒ、ヒヒーン」と歓声ならぬ悲鳴をあげさせられてしまう。

さてこの歌子が馬乗り芸者と仇名されるようになったといういきさつは彼女の話で次の通り。





「私は、今の芸者屋で十四の時から下働きの女中をしていました。ところが芸事が好きでもちろんこんな顔では芸者になれないと思いました。好きで清元だけを習わしてもらいましたところ、それが大変上達して、十八の年には名取りになりました。それまではあんなおたふくが清元なんか習ってどうするのだと笑われたり、お歌坊が男をこしらえたらお天道様は西から出るなどと、ずい分ひどい嫌味をいわれたりして私は本当に男の人を憎みました。(中略)そのうちに、私のようなものでもいいという人が二人や三人ありまして、お床をつけるようになったのですが、も

ちろん、こんなお多福では、お客さんを満足させることはできませんでした。そこで私はどうしたら多くの客をとれるかを考えたすえ私は何か違った方法でお客さんをたのしませようと、恥をしのいで、この馬乗りをあるお客に試験してみましたところ、これが大変よろこばれ、その上、私自身がやしい芸者であるという気持を忘れて、とても高く大きい気持になったのです。(中略)今ではおかしくって三味線なんかとれませんワ。私はどんな暴れ馬でも乗りこなして、とてつもなく愉快になるすばらしい騎手よ。ほッほッほッ……」

そしてこの作者は最後に次のようにいっている。

「男を本当によろこばせてくれるのは美しい女の顔ではない。男より上の位置にあって、どんな男でもリードしてゆくが上手な女でなければならぬ」

第五話「逆もまた真なり」という体位。注がついていて、☆女房の尻の下に敷かれるということに、しみじみ幸福を感じた夫……☆これはある女性といっても人妻が語っているもので——小さい時から、そりやアお転婆ムスメなんていわれてきた私です。別に養子をもらったからって威張っている訳ではないん



ですが、うちのヒトと来たら本当に弱虫なん  
でいやになってしまいうわ——という言葉から  
始まっている。戦争にも狩り出されなかった  
優さ男の夫は新婚旅行ではこの女性を抱いた  
ままガタガタふるえていたという気の弱さ。  
何とかコンプレックスという劣等感があつた  
のか、とにかく養子という圧倒された気持ち  
あり、また体重にしてもこの夫は妻より五〇  
〇匁（今でいう約二キロ）少い十三貫二〇〇  
匁ということも原因だったのだろう。

とにかく気の勝った妻と気の弱い夫の必然  
的に到着したところは、いわゆる「逆もまた  
真なり」の文字通りのことだった。そして彼  
女は続ける。

——私があの人を尻に敷いてみて、やっと  
私はこれなるかなと思ひました。よく「亭主  
を尻に敷く女」がいる等と耳にしますが、女  
房の尻に敷かれるのはやっぱり、ウチのヒト  
のように意気地がない人に違いありません。  
何しろ、人聞きはわるいかも知れないけど、  
尻に敷かれて、それで満足する亭主がいたら  
何もハタでうるさくいうことはないんじゃない  
かしら——。

こうしてこの夫婦は仲よく過し、夫には、  
自分から乱暴されると、それがうれしい等と  
いうので変態じやないかと疑ってもみる。

だが男には征服欲と同時に被征服欲のある  
ことを知って安心する。それでも時たまこの  
夫は自分が主導権を握ってみたいくなるが、今  
度は妻の方で頑として許さない。

「私はあなたより上なのよ」

ときめつけければ夫は、

「僕は君のお尻の下に敷かれる運命に生れた  
らしい」

とあきらめてしまっている。そしてある日、  
会社から帰ったこの夫がニヤニヤしている。

——「お前は僕ばかりでなく、何でも尻に  
敷くのが上手なはずさ。だってお前の友達が  
そういつてたよ、女学校時代に、お前はとて  
も馬に乗るのが上手だったって……」

「まア……」

私はあいた口がふさがりませんでした。い  
くら馬に乗るのがうまかったからって、別に  
私は女学校時代からそのつもりで馬に乗って  
たんじやなかったのに——いいわ、今晚はお  
もいきり走らせてアゴを出させてやるから……

とにかくろくに整理されていない書棚の中  
から、無雑作に引っ張り出しては書いてゆこ  
うというのだから、年順はおろか、いろいろ  
の種類についても、本当にマチマチで大変申  
し訳ないと思うが、整理するにも、相当の時

日を要するので、当分このまま続けさせてい  
ただく。

昭和三十三年の六月号、写真雑誌の「アサ  
ヒカメラ」の中に、マゾむぎの記事をみつけ  
てサツと私は買ってしまった。もちろんフオ  
ト雑誌は好きでよく求めてはいたが、この誌  
はこの時が始めてだった。そういう傾向の雑  
誌にマゾ記事があるのは何とも思わないが、  
一流のしかも相当広く読者をもつ雑誌の中に  
現われていると全く得がたく感じるから不思議だ。

このアサヒカメラの一四八頁から始まる、  
「写真商売うらおもて」(2)というもので写真  
モデル嬢四人と司会者を交えての座談会記事  
中に、このマゾ向きのものがあつたという訳  
だ。この四人の女性達は、モデル嬢だけあつ  
てみんな若く美しい人達ばかり。近代的な感  
覚の持主で相当の教養も身につけているよう  
に話の内容から思えるが、気持ちの悪いフアン  
レターというところにこう話されている。

中島(司会者)「フアンからの手紙なんかあ  
りませんか」

久世泰子(T・F・M・C)「ありますわ。  
へんなものもあるんですよ。たとえば私のところ  
に来た手紙と一言一句まったく同じのがお  
友達のところにもいつているんですね」



## 見たもの聞いたもの

### スーパーウーマン

牧博子(F・M・G)「私の処に來たのと多  
身同じだワ(笑) ちよつと「痴人の愛」的な  
の」

牧「足蹴にしてくださいでも、馬乗りにな  
ってくださいでも、あなたのおみ足のもとに  
ひれ伏して、献身的に、一生ドレイとして捧  
げます。といったようなことばかり書いてあ  
るのよ、(笑) ちよつと考えられないような  
ことが、ずらずらと三枚くらい並んでいる。  
(笑) びっくりしちゃった、ちゃんと住所も  
書いてあるんです」以下略。

以前、東大崎のオール・ロマンス社から、  
オール・ロマンスという雑誌が発行されてい  
たが、この雑誌のグラビアの頁に、風流写真  
川柳というのがあった。なかなかセンスと機  
微、そしてふんわりとした色気の味をもった

よいものだったが、後にこの写真川柳を一冊  
にまとめて特別増刊を出したが、これが昭和  
二十八年の七月一日附発行となっている。

二、三ひろってみると、

屠蘇機嫌ナオミになってたわむれる

写真には半裸の肉感的な女性が美しく笑っ  
て、ワイシャツとずぼん姿の肥った男を部屋  
の中で四ツ這いの馬にし、背中に跨って、ハ  
タキを鞭の代りにふりあげている。太腿と脚  
の線がことに美しい女性で写真だから東京の  
どこかで行われた現実のものである。

昼間みた、映画のポーズまねてみる

句としてはマゾ的ではないが、写真が、イ  
キな芸者風の和服の女の膝に抱きついた男が  
その女の腰あたりに顔を埋めているもので、  
ちよつとよい姿態。

外は雪、だれも居ぬまに股火鉢

跨った女性の恰好がよい。

腋の下、剃ってる夫の手がふるえ

痴人の愛のラストを想い出す。

移り香を嗅ぎ分けて妻、証拠だて

うすいネグリジェのようなパジャマを着た  
女性が足を開いて火鉢に腰をおろし、その前  
に夫が正座して小さくなって謝っている図。

氣の弱い彼氏おすおす腰を抱き

高い壁に額をかけようとして、オルガンの  
上に乗った彼女が、太腿もあらわに片足を壁  
にかけ、そのお尻に頬をあてて彼氏が下から  
おさえている。

そのほかまだまだあるがこれくらいに止め  
よう。

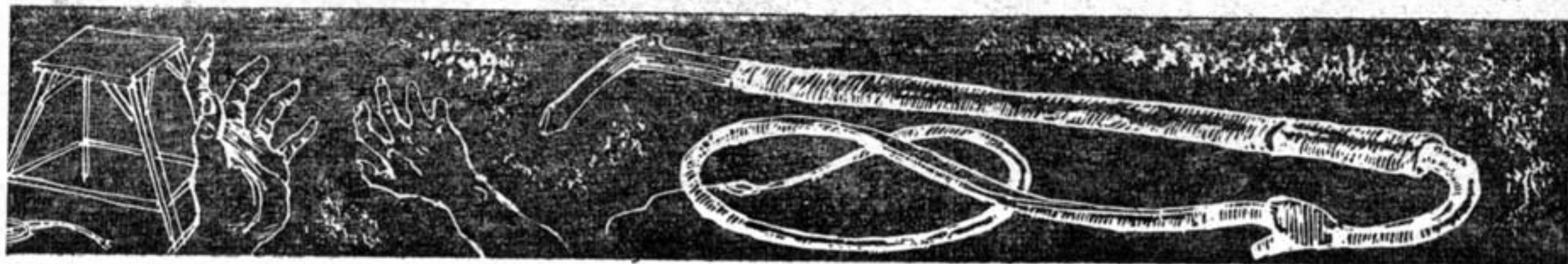
画・江淵晃夫

▼フジテレビで毎日曜の朝九時三十  
分から放送している「怪獣マリコン  
グ」。完全にジャリ向きのTV映画  
だが、ここに登場してくる紅(くれ  
ない)天使というヒロインがけっさ  
く▼天使というからには心やさしく  
おしとやかなレディだと思いが、そ  
れが逆。月光仮面を女にしたような

マスクと衣裳で、腕ツぶしのほう  
も、すこぶる強い。まさにスーパ  
ーウーマン▼善玉が危機にひんすると  
たちまち出現して、悪漢ども(もち  
ろん男性)をボカスカとやつつける。  
悪漢の手から拳銃を叩き落とし、腰  
を蹴とばして地面に這わせ、拳銃に  
のぼそうとする男の手を、靴の裏で

グイグイ踏まえる。手首を踏んづけ  
られた悪漢が、ヒイヒイ悲鳴をあげ  
て「おたすけ、おたすけ」などと哀  
願するとこなんか、とってもマゾ的  
▼このスーパーウーマンに扮するの  
はもと日活女優の筑波久子。ポリュ  
ウムがあるから男がねじ伏せられる  
のも自然でちよいと楽しめます(蘭)





## 出版物印刷物に現れた マゾヒズム への招待 II

### 七、暗い夜の記録

許広平女史者  
安藤彦太郎訳

一九五五年九月岩波書店刊（岩波新書青二一五）

（許女史は文豪魯迅の未亡人）

多くの政治犯収容所の体験記と同様に、この書物の中にも一読目を覆わしめる記述がある。ここに描かれているのは我々日本人の中国人に対する残虐の記録である。

常々、私は、政治的顧慮をこの種の欄に導入すべきでないという主張を持っているのだが、本項に限って、多少の顧慮を払わないわけにはゆかない。もっともそれは政治思想上の問題についてではなく、行政の執行者につ



森 下 高 茂

カット・沖 渉 司

いての事であるが。

まず、私は、この書籍が、その中に多くの鞭打、打擲辱かしめ、拷問の描写を含んでいるにもかかわらず、マゾヒズムをそのままに誘発させるところの少ない書籍である事をまず述べておく。その理由は、加虐者の救いが見かけた「日本憲兵」なるものの、済度しがたい下等さが、行間に泌み出ているからである。そして、最も注意しなくてはならないことは、これらの吸血鬼の大部分が、サディストでなかったということである。サディズムを最もよく翻訳した言葉は「淫虐」という語である。





憲兵の頭の中には、実に、残虐や本能的な思い上りはあっても、何等淫情に関連した心理は存在しなかったのである。淫情は、その本来含んでいるロマネスクによって必ず、残虐行為の方向、種類、程度を規制するものだ。

これと同様の風景心理は、現在も猶わが国の検察、警察機構の中に充滿している。それはこれらの司法関係者が、自己の中途半端な考えを妙に正義や道徳と思い誤まっているからに他ならない。戦前、戦中、戦後を通じてこれらの人達が、本質的に変わっていない。

これは、「淫虐」ではない、冷血、残忍な非人道的行為を、権力によって実行したのである。

もし、この行為が、美しい女性によってなされたとしたら、という仮定が、私達を楽しませるだけである。美はすべてに於いて、全能である。残虐な行為に於いてさえ、美女は全能なのである。しかもそれが想像の世界であるならなおさらである。

本文については次のような部分が興味をひく。

昭和十六年十二月、許広平女史は、上海の日本憲兵隊に捕まり、虹口（ホンキウ）の徳隣公寓に一ヶ月拘留されて、鞭や、電気拷問によって責められた。有名な魯迅未亡人の名をもってしても、憲兵軍曹達の暴虐を止めさせる事はできなかった。その尋問や拷問の様子を、女史はこうかいている。

「まだあるだろう」

「ありません」

「ウソをつけ！」

兇暴な叫びと共に、頬を何回かなぐりとばされた。耳の鼓腹が、がーんと鳴った。胸に怒りがこみ上げてきたが――

「こんどは褐色の革の長靴で急に力一杯、わたしのものを蹴飛ばして来た。――」

「――わたしは知らないのです」といった。あきらかに抗戦的な内容のものだから、かれはこの答を信用しない。

「ウソをつけ！」

皮の鞭がピシリと打ちおろされた。あまり力を入れすぎたためだろう。ちよつと手をやすめてかれは云った。

「お前は何でも魯迅にかこつけるな！」

「事務室の中には、ぜんぶで七八人の男が机をかこんで居り、この人間が人間を食う宴席の相伴にあずかっている。わたしが鞭うたれると、かれらの興味はいよいよ増すらしい。」

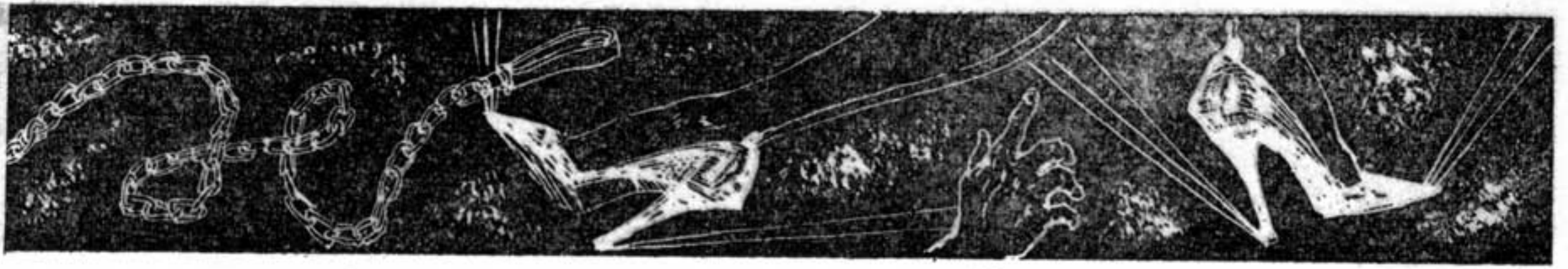
「着物をぬげ！」

――さいごは下着だけになってしまった。年の暮のことして、ひどい寒さだ。全身、鳥肌になり、ふるえて歯がガクガク鳴った。ところが、かたわらに見ていた一味のひとりが、

「着ろ！」

と、どなった。そこで、また一枚一枚と、ゆっくり着はじめた。これは、まさに、新式な滑稽劇的一幕ではないか。だが、喜劇ではない。気の狂った暴君の命令劇だ。いにしえの暴君紂王が冬に水をくぐらせたり、





足の骨をけずりとったりしたのと同様の暴虐行為だ。

「白状しろ！ はやく！ 知っている人間のことを云ったらどうだ」

一味の親分である奥谷が、また口をひらいたが、こんどは頼むような調子にかわった。

「わたしの知っている人は、あまりたくさんいるので云い切れません」

「おまえのゆききしている人間を云えばいいのだ」

「わたしのところにくる人はありますが、私の方から行ったことはないのです」

「それはだれか」

「おほえていません」

「着物をぬげ！」

またしても命令だ。また、ゆっくりぬいだ。

「どうだ、白状しないのか」

それには答えなかった。するとピシピシと音を立てて皮の鞭が、手にも肩にも、足にもところきらわすふりそそいだ。

「白状しないか。しなければ、裸のまま南京路をひきまわすぞ」

奥谷は腰をおろし、スイッチをまわして、電気を入れた。ジージーと音がして、電気がコードをつたわり、馬蹄形の鉄の環にくる。それが、びったりとくっついた腕の肉に伝わり脳の神経をとおして全身にはしる。細胞の一つ一つが電気であぶられる。大きい神経、小さい神経がビリビリふるえる。血管をとおり、骨の髄

にくい入る。全身に劇的な変化がおこる。電流の強弱につれて、ひとりでに痺撃する。船酔いよりもっとものすごい苦しみだ。全身が沸騰する。自分ではどうにもならない。内臓から、手足から、骨から、みんなバラバラだ。この苦しみを一言でいえば、———どうにも形容のしようがない。一回電気を入れることに、苦しみが襲う。———

“こうして朝の九時から午後にかかるまで、つづけざまに、電気をとおしたり、とめたりして自白を強要された———”

“しまいに飽きて来たらしく、まわりに見ていた軍曹共のひとりがスイッチをうばいといって腹を立てたように「白状しないんだな」

と、さげんだ。そして目盛をまわして一番強いところまでもってゆき、スイッチをいれたままにした。強い電流だ。劇的な反応のもとで、わたしは段々思考がおとろえて来た。———

突然、猛烈な叫び声に眼をさまされた。死んで生きかえるとは、このことを云うのだ。衝撃をうけてちょうど長い旅路に疲れて死にかかった牛か馬のように———太陽も、人間の行う残虐な演劇を、これ以上見物するのがはずかしくなったのか、西に沈んでしまったのを見ると、時刻はすでにおそくなったようである。よろめく体を追い立てられて、また留置場へ戻った。重傷を負った猛獣が、おもい足どりで、ころび乍ら、自分の巢へかえる姿にも似ていようか。”





このような尋問は、ひとり許女史だけではなかった。他のものは、もっとひどい訊問をうけていた。

一人の青年が部屋につれて来られる。「二言三言訊問したと思ったら、皮の鞭をとって滅茶苦茶にたたいた。鞭は、(掩った) 手の上にビシビシと鳴った。」

「髪の毛もバラバラに、犬のようにひきずられて来る人もある。」

「四階には、いろいろの拷問をやる部屋があり、鞭のビシビシいう音につれて、叫ぶ声が、ときには、かすかに、ときには、はっきりと、まるで狼の泣き声のように聞えて来る。」

そして、豚も喰べないような食物を与えられ罵られ、監視される毎日の生活だった。

この原文のままに、この光景を頭に描くと私達は、ホモ傾向のある人は別として、老婆を責める帝国軍人のおぞましい、不快な想念を得る事しか出来ない。だから、この加虐者を、美しい女性士官におきかえてみよう。そうすることによって、この光景は生きてくる、また事実こうした秘密警察や憲兵には、女性も属していたのだから。

## 八、「ウキーンの子等」 阿部知二訳

(一九五九年 岩波書店刊、岩波新書)

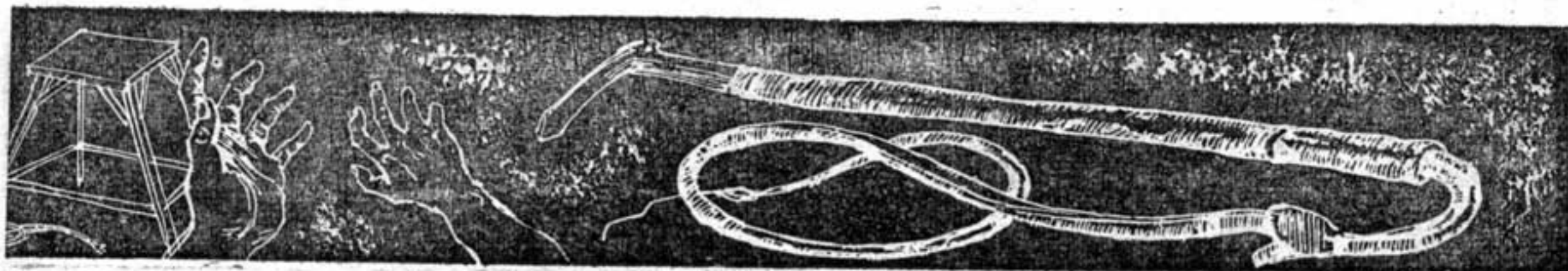
戦中の異様な頽廃と破倫の世界を描いた珍らしい作品である。私達はかつて、フランス・ヴェルフェルの幾つかの作品に遭遇して、オーストリア作家のダダイズム的な表現の方法を知っているが、この作品も亦、珍らしい、

唐突な表現を以って敘述されている。その描く世界は、まさしく、グロテスクが描いた不健康な世界である。ユダ公と呼ばれるユダヤ人とアリア族(ゲルマン民族)との不思議な差別感、進駐して来たアメリカ軍の黒人兵に対する奇妙な性的描写、そして、そこに惹き起される異った形での差別感、総体を包む自暴自棄的な色情の世界、そこにはまさしくアルゴラグニイの匂いが充満している。

作者が断っているように、この作中の固有名詞——ウキーンという街の名でさえも——が、固定、固有のものではないという、その不思議な前提は、さらに面白い連想や共感をサド・マゾヒストに投げかけている。これらの点は、作中に、次のような形で表現されている。

「アーテが聞いた。「淫売屋に入れられたことあって? あたし一度あったのよ。ロシヤ人があたしを浮浪人だっけって入れたの。あんな家だったものだから、あたし逃げ出したんだけど、だって……とてもややこしい話だわ。だって、ヒトラー少女隊の収容所から脱走した時、どこへ行けばよかったの? あたし、精神病院に入ったわ。あたしが、自分の自由意志で、孤児としていくと、意地悪な連中がいて、あたしを本当の狂人だっけっていったのよ。そして狂人は殺すのよ。でもわれわれは殺してもいいと思うわ。——狂人だの猶太だの、それからすべてのホモ、——つまり男をあれする男なんか、殺っちゃうのが国家として正当なことだわ。注射なんかうけるものですか。石油の注射なんか、だれが! 二時間も、石油でわめくのよ。——」





おや、あたし混線しちゃったかしら」優美に茶をすすった。もうすっかり温まっていた。「あたし恋が好き」といった。「それから祖国。それからうるわしい河。あなたローレライの岩知って？　むかし、あたしのお部屋の寝台の上にローレライの写真があったわ。ハレのお家。もちろん、今はないわ。あたし、偉大なるものが好きよ。あなた分って？　われらのフューラー（ヒトラー達）は偉大だったわ。」――

「赤魔が西方文明を破壊しつつあるのよ。」

アーテはきちんと坐って云った。

この部分では、アーテという女が、持っている、一般のドイツ人の気持に共通した考えが、お茶を優美にすすり、きちんと坐って、「赤魔が、西方文明を破壊しつつあるのよ」ということによって示される。ユダヤ人、それは、ドイツの腐った盲腸だった。だから、ドイツ人はユダヤ人を殺した。

「青きドナウだぜ。オスウィーチム（アウシュヴィッツ）でやってたつけ。ガスで殺すときに、騒ぎをかくす為に」

そして、ユダヤの浮浪者が、云う。

「第六条。ナチ専制を撃破したのち、我等は、あらゆる国民が、その土地に於いて平和に住み、また、あらゆる国のあらゆる人間は、生涯、恐怖と飢餓より、自由生きる事を希望す。」彼の声はかすかになつてゆく。彼はしかめっ面をして立っている。

「チャーチルとローズヴェルトだぞ」と、

そして、ドイツ少女イーヴは毛布にくるまっただけの汚れた恰好をして云うのである。

「そんなもの詩じゃないよ。」

詩！　それは、たしかに十九世紀で終わったかに見えた領域の一つであった。ヒトラーの哲学、彼の施政には、「詩」があった。ネローネの暴政も詩を求めた結果だった。その実現の有無は別として、英米両国が、人道と自由の名に於いて、練り上げた、感動的な文章にも、イーヴは詩を感じなかった。

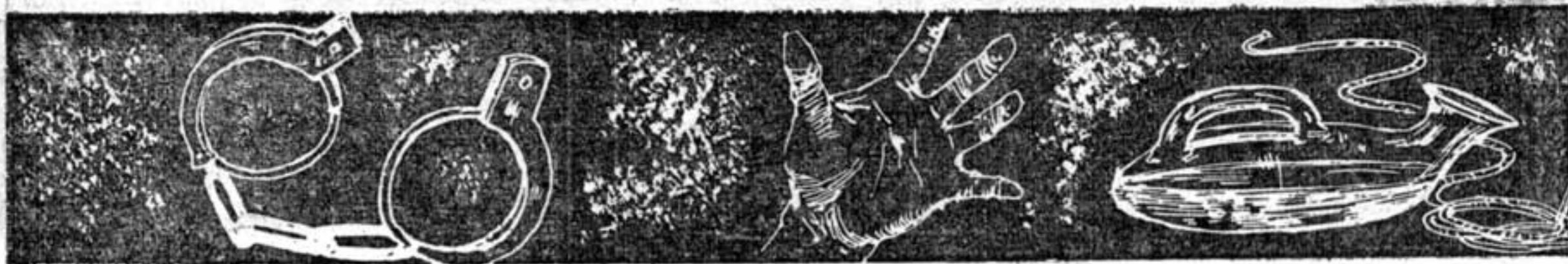
不合理であるかに見えるものの中に、真実がある。正常性愛と異常性愛との相違も、実にここにあるのだという事を認めざるを得ない。マゾヒズムとして、一番注目すべき点は、これらの女達が、屢々「私達高等民族は」という言葉を使っている事である。高等民族しか理解出来ない「詩」その中には、下等人間への軽蔑、酷使、虐殺及玩弄の正当化が認められる。

私は以前、「残酷な女達」という、ヨハネス・ビルリッガー教授の著書の中でこういう事を読んだ事がある。

「女性は、多くの場合、法的、道徳的な環境が許すならば、男性よりはるかに多く、はるかに根強く、性的感覚をもって残忍な行為を夢想し、観覧し、聴き、又実行する慾望に燃え、又屢々その実行者となる。」

奇妙に簡潔な文体、観念の断片化などによって、宛ら近代独乙音楽のような感じのするこの書物は、又、魅惑的な主題をかかえている事によって、私達に容易に数多くの刺激的場面を想わせる。直接的な描写が少いからと





いって、刺激が間接的なものとなるとは決っていないという好き一例でもある。

## 九、痛ましきダニエラ

原著者カ・ツェトニック  
英訳者モシエ・M・コオン

(原題 人形の家) 邦訳

この本は一九五二年に初めて邦訳されたけれども、この原稿が発見されたのは一九四六年であった。強制収容所に収容されて居た、ある無名のユダヤ女性によって綴られた手記を基にして——巷間伝えられるように、手記そのものではない。——改編された小説風の作品である。

元来は、生体実験や毒瓦斯の研究、強制的な慰安行為などが中心となった余りにも悲惨な手記だったと伝えられて居るが、果してその手記がどの程度の分量であって、その表現の方法がどのような程度のものであったかは全く疑問である。というのは、収容所内で、手記など書く事のできようわけもなく、紙や鉛筆そのものが入手できるはずがないので、長大なメモを書くことは不可能であったということ、実状が外部に洩れる事を極度に嫌っていた当局が、そのメモの保管を可能ならしめるような事をするわけがないからである。従って、ここにいう手記は、その大部分を少くとも解放後に書いたものと見てよからう。ポーランド映画「アウシュウィッツの女囚」は旧収容者の共同製作による作品であるといわれているが、その雰囲気よりも、何か明るい感じが、全篇を流れている。邦訳は原文のヘブライ語から英訳したものからの重訳である。英訳原題は、表記した通り「人形の家」

だが、これは、被圧迫民族婦女子によって作られた独軍兵士に対する性的慰安所の、別名であったといわれている。原著者として書かれているカー・ツェトニックとは「収容者」という意味である。A一三五六三三は、その収容者の番号。これらの番号は、収容された時に本書の中にも出て来るような電気灼付器で胸と腕とにやきつけられるものである。英訳本の表紙には、胸をひろげて、肉体に灼きつけられた番号を見せている女性の姿が印刷されている。番号を付けて、肉体に記するという行為は対等の立場では決して行われない。古来西欧では、自己の所有する家畜に目印として自己所有の印を烙印で灼きつけた。ナチス・ドイツ当局者は収容者を決して人間とは見做さなかった。ヒトラーのマイン・カムプにも明記してあるように、非アリアン人は、只アリアン人に奉仕する為にのみ存在した。アリアン人種は優越民族であり非アリアン人種は半人間(ウンテルメンシュ)だからだった。この番号はその収容者が、ナチス政府の所有物であることを形の上ではつきりと示しているのである。ユダヤ人や、日本人にも選民意識は觀念として存在したがだからといって、教義的に或いは哲学的に他民族を半人間という考えはなかった。ここに、現代の最も公然たる最も徹底的な人間の奴隷化が存在する原因があった。筆者はいま、ナチス(国家社会主義)の理論の是非、ヒトラーやナチスの施政の善悪について触れることはさけよう。何となれば、それは、觀念的にサド・マゾヒズムの基底になる因子を多分に含んでいるものの、余りにも





複雑、余りにも尨大であるばかりでなく、論及するに足る十分な資料が整っていないからである。

さて、この書物は、まず、ナチスドイツの支配下に入ったばかりの時代の、ワルシャワから始まっている。不吉な遠足、それは、再び戻る事のできない収容所への旅行に変わった。始めの三分の一は、収容所に入るまでの記述である。続いて、彼女達は、受付のようなところで、氏名をきかれ、番号をきめられ、持物を渡す。すべての財産権を奪われ、ただ、餌によって飼われ、強制労働と無目的な虐使と、死への新しい生活が始まる。

受付には、鳶色のセーターを着、乗馬ズボンをはき、黒くツヤツヤと光っている長靴をはき、手には、その先端に鉛の丸のついている革鞭を持った女看守長が、股をひろげて坐っている。ダニエラは、ここで、お守りをも取り上げられ、「家族の写真を持っていたい」と申出た為に、早くも全裸にされて、その女の鞭をうける。これはダニエラが生れてはじめて身にうけた鞭の味だった。数多くの看守達はすべて女性だった。中でもヤーガという女は恐れられて居た。そのヤーガについて、こう書いている。

「脚に磨き立てた長靴をはき、軍帽を小粋に冠り、わきの下に革鞭をはさんだ」ヤーガは所内を「威風堂々」と歩く。すると方々からヤーガ、ヤーガという声が起る。

女囚達が尻打ちの刑をうけると、全員が整列して、ヤーガの点検をうける。彼女は、それを終ると、受刑者が括りつけられた何台もの処刑台の側で、女囚のスカ―

トをまくり上げて尻をむき出し、手に手に鞭や棍棒をもって構えているカボ（女囚の中から択ばれた看守の助手）の一人の背中を手にした革鞭で打ちのめす。これが「尻打ち始め」の合図である。尻打ちは、ドイツでは、公開刑として昔から重用されたものだったが、その効果は、恐ろしい程の苦痛を与えるものだった。二十以上の鞭打ちで、大抵の者は気を失い、血管が破れて、しばらくの間は血の小便が出るといふ。しかも、その鞭の先が軟かい革ならともかく、鉛の丸がついていると、鉛の丸は、一打ち毎に尻の肉を千切ってゆくのだ。猛獣や犬に対してさえも、このような鞭打は、滅多に行われない。ヤーガはしかし、公開尻打ちを非常に好んだ。その上、同性的傾向のあったヤーガは、美しい少女を見付けると、それを自室に連れ込んで狂暴に嗜虐の鞭を加え、あらゆる恥しめを与えた後に、自分の情慾を満足させるのだった。ある時は、二人の女に同性同志の性行為を営ませて自分は、それを眺めて悦んだとか。ドイツ兵と少女とを関係させた後に、死ぬ程少女を鞭打ったとかいう事実はフィクションではあるまい。すでにユダヤ人女性は、人間ではなく、豚、或はそれ以下のものだったのだから。

こうした収容所から、ダニエラは、不妊手術をうけた後に、慰安所に送られる。戦線から帰って来た情慾に飢えたドイツ兵達の為の無料娼婦である。すでに彼女は手術の為に快楽を味わう事は出来なかった。ただ、ドイツ兵の快楽を完全なものにすることだけが務めだった。この慰安所でも、使用に耐えなくなった女達はどんどん処





置されて行った。非アリアン族は、ただアリアン族の為にのみ存在した。収容所で女看守達が、常に鞭を持っているという事も、彼等にとっては一つもおかしな事ではなかった。私達が、動物の飼育をする時には、大抵鞭を携えるように、鞭は、異民族に対する支配の絶対的必要品なのだ。今では、馬に乗る時でさえ、多くの女性は鞭を持たない。たとえ持っていたとしても、それを実際に使うことは滅多にない。けれど、ダニエラの入った収容所では、そうはいかなかった。鞭は、常時裸の肉体に直接打ちおろされた。看守達やヤーガのはいっている長靴は囚人達を蹴り、踏みしだくために必要だったのだ。そして、彼女等は、その靴を磨く為にいつも女囚を使った。長靴は、一点のくもりもなく、輝いて居なければならなかった。時によって、女看守達は、革鞭に油を塗る仕事をも女囚にやらせた。仕上った革鞭で、効果を驗す為にそれを手入れた女囚が素裸にされて打たれる事もあった。これらの最も原則的な責道具の他に、多くの方法、つまり、烙印、鉄棒、棍棒、刺のついた帯革、皮革製拘束具、減食、電気による拷問などが屢々使われた。しかも、これら拷問は、訊問の為にではなく、大部分は加虐者の気紛れから使用された。大抵は淋しい原野や沼地に建てられていた収容所では、囚人を虐める事以外に、暇のつぶしようななかったのだった。ダニエラは書いていないが、私達は同種の文献で、生きた人間を走らせて実弾で射つ射的のこと、それを更に面白く観せる為にわざわざ伯林から女芸人が招かれて曲射ちをやってみせたこ

とを知る事が出来る。

「コンツェントラチオンラーガー」この言葉は、一九四六、七年に、関係者が処刑されるころまでは、徒らに呪いと憎悪の的だった。けれど、今や、私達は、血腥いその記録の中から、サディズムに直接関連した事実を抽出することが出来る。その上、私達は、実例をあげて、これらの行為が、必らずしもナチスとユダヤ人という当事者だけに限られるべきものではないという事を立証出来るのである。特に範圍を女性サディストに限ったとしても、私達はソ連、米国、土耳其、中南米、スペイン、フランス、アフリカ及び中共にその例を求めることが出来る。「ダニエラ」は、よき引例の一つにすぎない。女性の一部が本来的に持ち合せているサディズムの欲望は、こうして特殊な社会に於いては、突然として、急激に華やかに花開くことがある。

ダニエラは、慰安所で殺される前に死を択んだ。鉄条網の方に走ったのだ。政治が人を殺した何億もの実例が更に一つ増えた。しかし、銘記すべきである。これらの死はサド・マソヒズムの犠牲ではない。それは単なる政治の犠牲である。サド・マソヒズムもフェティシズムも他の不良な因子の合併による以外に決して生を否定するものではない。

シヨペンハウエルが、飽食暖衣して、みちたりた享樂をつづけながら、虚無と死とを語りつづけたように、そこには、不合理な詩心のみが知る事のできる妖しい転倒した夢がある。

(未完)





呪縛の一夜

# 能面の女は悶える

九十九 十郎

画・山田彬弘

★能面のような顔にゆらめく妖★

★しい情熱は旅人を誘うのだノ★

★口絵より続く

「参りましょう」

女は、ハッと顔をあげた。自分で誘っておきながら、その表情をかすめ去った困惑の色は何だったのだろうか。しかし、女はすぐ元の冷たい頬を取り戻した。「こちらへ」と、私に傘をさしかけながら、女は着物の裾をさばいて先に立つ。少し後もどりして、私は土塀に続く門の内へと導かれて行った。

門から玄関までの距離といい、式台の格式といい、その家は「屋敷」と呼ぶのにふさわしい広壮なものであった。いずれは名のある武家の屋敷だったのであろう。古びたたたずまいの中にも、時代の重みが至る所に感じられ、電灯の設備がむしろそぐわない感じさえた。

女は私に背を見せたきり、白足袋を黒光りする廊下に冷たくヒタヒタと滑らせて行く。

長い廊下を幾曲りかして、やがて招じ入れられたのは、二方を障子、二方をそれぞれ壁と襖で仕切られた八畳間であった。壁際には茶棚をすえ、その前には銅の火桶に鉄びんが白い湯気をあげていた。

女は、火桶近くの座ぶとんを私にすすめ、熱い煎茶をたっぷり湯呑みについて私の前に



置いた。

女は面もあげず、口も開かない。黒っぽい地味な和服が、抜けるような肌の白さにしっくりとうつつて、喪服の未亡人の醸し出すような沈んだ色気をただよわせている。しかしそういった中にも、男の淫らな心をすくませるような、気品があった。

女は、しばらくさしうつむいたまま私と対座していたが、やがて、キッと顔をあげると強い決意でも述べるかのように言った。

「しばらくお待ちくださいませ」

女がいなくなると、私は呪縛を解かれた思いで、ホッと姿勢をくずした。しばらくは、湯のたぎる音のほか、何の物音も聞えない。時々バサッと雪の落ちる音が聞えるのは、障子の外が庭になっているのだろうか。

時間がたつにつれて、さっき女が立ち去る時にチラと見せた、蹴出しの緋の色が、私の意識に、次第に重くのしかかって来た。女のいない所では、私も並みの男にすぎなかったのである。

(地味なつくりだが、まだ若い。二十五、六という所か。ぎこちない態度から見ると、まだ商売を始めて間がないな。いや、今夜がはじめかも知れんぞ。あんな何気ない顔をした女に限って、いざ抱いて見ると燃え上って、

男を夢中にさせるんだ——)

さほどの経験もないくせに、ひとかどの女蕩しめいたことを考えては、チラチラ襖の方に眼をやった。あの向うには、なまめかしい夜具が、一對のくくり枕を並べて人待ち顔のべてあるに違いない、と私はなぜか信じ込んでいたのである。

それにしても、これが売春の新しいテだとして思い込んでしまったのだろうか。自分をたぶらかして金品を奪うテと考えても、不自然ではないではないか。さっき、式台上った時、女は、カバンをおあずかりします、というて、どこかへ持ち去った。あのカバンはどこにあるのだ。今飲んだ茶にしたって、眠り薬が入っていないという保証はどこにもないではないか。

私は独りよがりな思い込みに気づいて、愕然と腰を浮かした。

その時である。襖の向うで、だしぬけにもつれるような足音がしたかと思うと、女の押し殺した悲鳴があがった。

## ⑤ 妖しい情景

「ああッ、かんにんしてッ——」

私は混乱する頭をふり切って、境の襖を大きく引き開けた。

「あッ」

ギラギラする白熱灯のあかりの中に展開されている、異様な情景に、私は敷居ぎわに棒立ちになって息をのんだ。

目のさめるような青畳を敷きつめた八畳間は広縁に向って障子いっぱいに開け放たれ、その向うには室内の明りがとどかぬ遠さまで、うっそうと繁った竹やぶが、重い雪にうなだれている。冷え切った外気にさらされた室内には、目もあやな無残絵巻が繰り広げられていた。

さっきの女が、どてら姿の毛むくじやらない裸に剥がれているのである。

華やかにのべられた絹の夜具がしどけなく乱れ、解きすてられた帯紐が、蛇のようにのたくっている。

今しも、男は、襟くびから一気に肌着もろとも女の着物をはぎ取った。女は、赤い腰のもののひとつにされた足を、蒲団の上にくの字なりに屈めて、突伏した。

一体どうしたというのだ。私はもつれ合う男女を呆然と眺めて立ちつくしていた。

男はそんな私に目もくれず、はだけたどてらの胸を弾ませて、布を通して豊かに張った女の腰を足蹴にする。

「立て、売女！」



「あッ」

女は苦痛の呻きをもらして、よろよろと身を起す。両手は胸のふくらみを隠して、縁の方に歩み出る。

男は再び女の弱腰を力一杯蹴とばした。女の体は、縁端から二十センチばかり積った庭の雪の中に、頭から転げ落ちた。

（これは間男をしようとした妻に対する折檻だろうか）

だとすれば、その手は次に私に向けられるはずである。私は、さっきの色男ぶりはどこへやら、なえ切った四肢を震わせ、冷汗を流して、そこにうずくまってしまった。

「あなた、もうゆるして、許してくださいまし」

女は、雪の中に腰を折ったまま、縁がわに仁王立ちになっている夫に哀願している。しかし男は黙殺して庭に降り、胸をおおっている女の両腕を背中にねじり上げた。

「ヒィー」

たわわな胸をそらして身をよじる女をかまわず引立てて後の竹藪の所に連れて行った。強い室内の明りが、そこまでも真ひるの明るさに照し出して、深く深くしななった竹が、まるで白衣の妖怪の群のようである。雪はいつしか止んでいた。

「ああ、それだけは止めてッ——」

女の恐怖に引きつった声だ。男は懷から取り出した細引きをしごいて、女の体を竹の幹に縛りつけ始めたのである。

女が悶えるたびに、その肩に雪が大きな塊になってふりかかった。

## ⑥ 悶える皮膚

やがて、二本の太竹の間に、女は両手足を大の字に拡げた恰好でくくりつけられてしまった。抵抗に力尽きた女は、ガックリと頭を垂れ、さっきまで、襟脚も美しくアップに結い上げていた髪が、くずれ乱れて胸のあたりにもふるえている。雪にもまごう肌の白さに、裾も露わに割れた紅の布が無残である。

女の前に立つ男の背が激しく上下しているのは、はげしい運動のためか、それとも、めくるめく興奮のためか。はじめて私の方を見返ったその眼は、燃え上るように赤かった。

男は、やおら地上の雪を両手いっぱいに把み取ると、女の素肌にくまなくこすりつけ始めた。肩から背中へ、さらにゆるやかに起伏する腹から上って双の乳房へ。伸び切った両手足も例外とはならなかった。

女は、柔肌を容赦なく襲う氷の感触に、鳥肌立てて身をよじり、悲鳴をあげ続ける。

だが、本当の責めはその後から来た。雪解けの水にビッシヨリ濡れた女の肌を、男は乾いたタオルでこしこしやり始めたのである。

私ははじめてこの男の真意を覚って戦慄した。誰しも霜やけになった経験があるう。冷たい雪水が、温かい肌にぬくもって蒸発する時霜やけのあのたまらないかゆみと同じ効果をもたらす。男はタオルで肌をこすることによってそれをさらに促進しようとするらしい。果して、女ははりつけられた裸身を、波のように悶えさせ始めた。気も狂うような、たまらないむずがゆさが、背から腹から、内股から、果てはふつくりと盛り上った乳房からその繊細な皮膚を通して、毛虫のはいずりまわるように、じわじわと襲いかかって来たのである。

女は、一つだけ自由な頭を狂気のように振って、この陰惨な攻撃を少しでものがれようと、空しい戦いを続けた。いましめをのがれようとともかく四肢に、竹の雪がひとしきり激しく落ちかかる。

凍りつく夜気の中に、上気した素肌が桃色に色づいて湯気をあげているさまは、無残を通り越して、淫靡な美しさがあった。

耐え切れずに口をもれる悲鳴が、やがて切なげに長く尾を引く呻き声に変って行った。



女は、今やガックリと顔をのけぞらせて、肌身をさいなむ甘美な苦痛に身をまかせ切っている。

あらわになった腰が、悩ましげにくねるのを見て、私は気の遠くなる思いだった。

私の記憶は、そこでハタと切れる。

## ⑦ 一夜の謎

明け方、私は鞆をしっかりと抱えこんだ恰好で、電車通りに近い、とある露路裏にうずくまっているのを、新聞配達の子供にやり起されたのである。

「昨夜は私共の見ぐるしい狂態をお眼にかけて、穴があれば——の思いでございます。

見も知らぬ旅のお方を無理にお引き止めまして、なぜにあのような醜態をお見せしなければならなかったのか、ひとこと釈明いたすのが務めかと存じます。

私の夫は高利貸を業としております。私の父は、生前、事業たて直しにとて、多額の金子を夫（その当時はまだ赤の他人でございました）より融通してもらったことがあります。しかし、それもむなしく、会社は破産、父は心労の中に急死し、ひとり残された私は頼る者としてない身を、弱みにつけ込んだ夫に無理やり操を奪われた末、今は夫の手に落ち

た父の家屋敷に、かたちだけの妻として住むことになったのでございます。

これだけならば、世にありふれた不運のひとつとして、あきらめることもできたことではないでしょうか。ところが、夫は、私が名のある士族の末であるのにくらべて、自分は土百姓の小作に過ぎないという、どうしようもない劣等感にさいなまれて、今や手中のものとした私を、さらに苦悶の淵にのたうちまわらせようと、いまわしい計画をめぐらしたのでございます。

はじめは、事ごとに、お前は俺を見下している、何気ない顔をしていても、心の底では俺のことを下賤のものと軽蔑しているのだろ、と根もないいいがかりをつけては私を責めるのでございましたが、やがての事に、その責めにのたうつ私を、人様の眼にまで晒そうとて、夜な夜な私を街角に立たせて、己が裸身を晒すべき人を待ち受けさせるようにしたのでございます。

父の仇ともいうべき男に、かような恥を見せられてまで、のうのうと生きのびている私を、いかほどきげすまれることかと、ひとり頬の染まる思いでございますが、私の心情をもあわれんでやって下さいませ……」

鞆の中からハラリと落ちたこの手紙で、私

の愚劣な空想がまったく的外れていたことが判明するとともに、一切の謎は氷解したのである。

しかし、私は不思議でならない。なぜ彼女は、あの非道な夫のもとから逃げ出さないのか。

このような不当な行為から妻を守る法律はいくらもあるのに、なぜ彼女は唯々諸々と柔肌を男の責めにゆだねたままでいるのか。

私は、あの記憶の切れ目に眼底に焼きついた、彼女の恍惚たる呻きが、この疑問を解決する鍵となるのではないかと思う。

彼女は、あの手紙の末尾にひとことだけ書きそえることを、故意に、おこたったのである。

「——私もやがては被虐のとりことなり、責められる我が身を人眼に晒すことに、いまわしい快樂を見出すようになったのでございます」

と……。

そして、今夜も、私はK市の曲りくねった小路から小路へと、さまよい歩く。あの凍りついた頬のかけから、かげろうのようにゆらめきのほってくる妖しい情熱のほむらに魅せられて。



# マンハッタン倶楽部

## III

ジョージ・ケーリー  
鴉 嘔吐夫・訳

### 第一章

世の中には、人々が全く窺い知れぬ世界もある。

ニューヨークの真中であって、上流階級の人だけが集る、アメリカの上品な社交倶楽部、マンハッタン倶楽部がそれである。それぞれの世界で名の知れた、一流の紳士淑女達

が、機智に富む上品な会話と、洗練された身ぶりとで、夜の一時を楽しむと思われるのに、実際そこで繰り上げられることは、普通では到底考えられない淫虐の世界であった。

ニューヨークの私立探偵、ジョン・ファイルドは、早くも、その倶楽部の内情を嗅ぎつけた。だが、彼は入る資格がない。そこで高い





報酬につられて、倶楽部へ雇われて行く、幾人かの貧しい少女から、内情を聞き出そうとしたが、そのたびに、彼が頼んだ少女達は、どこから監視されているのか無残に殺されて行くのだった。

そして今、ジョン・フィルドも、彼等自身の黒い手に掴まった。天井から全裸の姿で吊された彼の体は、コードのついた鞭で絶え間なく打たれている。打たれるたびに、高圧電流のついたコードから、火花がばちばちと飛んだ。そして、たくましい筋肉と頑健な体質をほこる彼の体が、苦痛で蛙のように歪んでちぢんだ。はらわたが絞り上げられるような苦痛だったのだ。

だが、ジョン・フィルドは、少くとも、男であり、自分がそれを計画した当人なのであるから、このように責められても仕方がない。可哀想なのは、何も知らず、ただ、金もうけのために、倶楽部へ通っていた、十六歳の少女ヘレンである。

彼女は勿論、いくら体に苦痛であっても、この割のよい内職について、他人に洩らすつもりはなかった。又、洩らしたらどんなひどい目に合わされるか、それもよく知っていた。だが、彼女のアパートへ半ば強引にやってきて、いやがる彼女から、色々と聞き出そう

とした、ジョン・フィルドと、同じ部屋に居る所を見つかっただけで、彼女は、倶楽部の反逆者として怖い処罰を受けることになったのである。

## 第二章

彼女の体に加えられた最初の処罰は肉体の内部改造であった。口の中から薬剤を体の中に飲まされ、同時に、トルコ風呂のような装置で、それを汗となって発散させ、体中の神経を、特殊な状態に変えられた。

彼女の体は、いつも、甘く、やるせなく、奇妙にむずかゆく、もし、蹴られたり、打たれたりしたら、とたんにそこに走る苦痛が、喜びとなってくるようにされてしまったのだ。

しかも、彼女の体は耐えず苦痛を求めているわけではないらしい状態になってきていた。

そのため、彼女はすすんで自転車にまたがった。自転車の後には風車がついており、彼女がペダルを廻すと、それはいつも、ぐるぐる動いた。風車の先には、結び玉のついていて鞭がついている。それはびしりびしりと、彼女の体に当たった。そしてペダルを踏むたびに、背中や尻に、荒々しく鞭の跡がつき、苦痛が走ったが、それが耐らなく甘美で、いく

ら求めても求めたりないので、彼女は、いつまでも、踏みつづけるのだった。

やがて、一人で充分楽しみ、背中じゅうが赤い傷跡にまみれ、血がにじんでいる。ヘレンは、係の女に命じられて、その自転車を下りた。彼女にとっては、いつまでもそこにしがみついていたかったのであるが、何か別の仕事があるらしい。

「いらっしやい」

黒いブラジャーと、黒いパンティだけをしたら、係の女は、全裸のヘレンを連れて、地下へ下りて行った。

暗い石段を下り、冷たい石の壁の廊下を渡って行く。ヘレンは、今まで、この華麗な装飾に包まれた倶楽部の中に、このような怖し

柔い肉は絶え間なくいたため  
つけられ鎖につながれた女  
たちの地虫のような日々！

中 川 彩 子・画



い場所のあることは全然知らなかった。どこからどこまで冷え冷えとしている。足の裏に当る床の石も、ざらついて気持ち悪い。やがてその先に大きな鉄格子があり、その中に二十人近くの女がうごめいている、牢屋のような場所に出た。

彼女は、係の女にその中へどんと突き入れられた。

「よいかね。お前もこの仲間になるんだね」

ヘレンは中へ入った。

他の女達は、広い牢屋の中のそれぞれの位置から動こうとせず、物憂そうにその場に坐って、ただじっと、ヘレンを見るだけであつた。

「一体どうしたんです、皆さん」

ヘレンは、その中の人々に聞いた。女達は一人一人が一米四方ぐらいの間隔をおいて、五列に四人ずつ、きちんと並んで坐っていて、その場を動こうとしない。ヘレンは、その女の一人のそばに近寄ってアッと言った。

女達はそれぞれ短い太い鎖でコンクリートの床につながれているのであつた。だから、動こうとしても、それぞれの場所から二十センチ以上は決して体を動かすことができないのだった。

すると、見られた女の一人が憎たらしげに

言った。

「どうせ、お前さんもまた、すぐここへ体を固定されるのだ。そして特別の御用がない時以外は、いつも、この冷たいコンクリートの部屋で暮さなくてはならないのだよ」

「いやですわ私、こんなこと」

彼女は、女達のように、体の一部に穴をあけられ、鎖を埋めこまれることを思つてぞつとした。だが、他の女達は、

「いくらいやだからと言って、もう逃げられないね。こうして、永遠の奴隷として生きるんだね」

そういう味を言われた。

ヘレンは怖しさのあまり、部屋の隅で一人しくしくと泣き出した。床に鎖で固定されたままの二十人の女は、不幸な自分達の仲間が一人ふえた喜びで、かえって、嬉しそうにしていた。

### 第三章

牢屋の中は、まるで地虫の世界であつた。

人間の恥も、名誉も、女の特権も一切認められず、あるがままの動物に陥ることをまず要請されるのであつた。朝になると、食事係の男や女がやってくる。そして、床に固定されたままの女の体を適当にいたずらをしながら

パンやスープをあたえて行く。飼い馴らした動物に餌をあたえるように、あーんと口をあ

けさせたり、足を曲げて、ちんちんさせたりあるいはもっと別の恰好を要求したりした。

その男女は、どうも倶楽部の紳士淑女らしかった。彼等は、その時の餌の喰べ振りで、女達の従順さを試し、気に入った女がみつかったら、その日の惨虐な楽しみの相手として指名し、その日一日中、もっと高度の、もっと苦痛の強い楽しみに使うのであろう。

彼等は、ヘレンの所に来た。

一晩中、床にうち伏していたヘレンの体はまだ鎖がつけられていないのを見ると、

「何だ新入りか。お前も早く、体に鎖を埋めこんで貰わなくちゃいけないね」と言った。

「いやです私。そんなこと。どうか許して下さい」

ヘレンは一人の男の足もとに膝まずいた。すると男は憎々しげに顔を歪めた。

「ふん、よくも、いやだなんて言葉が言えたな。ここの世界に入った人間は誰でも、一言でも、いやという言葉は言えないことになっているんだよ。そして一回でもそんなことを言つたという実績は一生の間の激しい処罰を招くんだよ」





ヘレンは、黙って泣き伏していた。どんなひどい目にこれから合わされるのか、もう見当がつかなかった。

「さあ、そこで、犬のように、ちんちんをしな」

ヘレンは、泣き伏したままだった。すると淑女の一人がいらいらした声で言った。

「おや、この子は、どうも、私達の言うこと

が聞けないらしいよ。まだまだ教育が足りないらしいからね」

いきなり、男の手に持っていた、太い革鞭が彼女の背中に激しくびしりと走った。

「あっ！」

彼女は思わず反射的にのけぞった。おそろく皮膚がもぎとれたかもしれない。まるで背骨が碎けるほどの強さであった。もう一度受

ければ、体が参ってしまう。ヘレンは、反射的に立ち上った。そして、両膝を前にしてかがみ、手を犬のように前にたらしめた。

「おやおや、どうやらわかったらしいね。さあその恰好で、ワンと泣いてごらん」

ヘレンの眼から、あまりにあさましい自分の恰好を思っ、悲しみの涙がほとばしった。

「まあ、何てことでしよう。この子は、もう嬉し涙を流して喜んでいるよ。さあ、お手」

ヘレンは、片手を出した。男はその手を握ると、

「こういうふう、いつでも言うことをきくんだよ」

ときとした。ヘレンは、うなずいた。

「さあ、口をあんとあけてごらん」

今のヘレンは、一つも、物を喰べたくはなかったが仕方なく、口をあんとあけた。その口へ、ビスケットがほうりこまれた。

「食事と入浴とトイレが終わったら、一つこの子の体にも、鎖をつけてやらなくちゃいけないね」

「そうだな。早速今日でもつけてやるか」  
彼等は、口々にそう話しながら去って行った。

やがて、今度は、まるで、今まで野良で百姓をしていたような、ごっつい体つきの、四



十ぐらいの男がいくつかの便器をかかえてやってきた。

「さあ、さあ、みんなお手洗いの時間だよ。今、すませておかないと、後、一日中、来てやらないからね」

裸で何日も牢屋の中に入れられて、羞恥にかなり馴れている女達も、さすがに、彼が入ってきた時には、恥しそうにした。しかし彼はかまわず、一人一人の体の下に、便器をさしこんで行った。

そしてヘレンの所までやって来ると、  
「おやおや、あんたはまだ、鎖がつけられていないんだね。それじゃ、この便器に馴れていないね」

ヘレンは、耳をおおいたかった。しかし、男は、まったく平気だ。無理に、ヘレンを中腰にさせて、便器にかけさせると、  
「さあ、さあ、誰にも遠慮しないで、するんだね。なに、わしが見ていたって、恥しいことは何もありやしない。人間、誰でもすることだからね」

彼女は、こんなことをされるより、殺されるぐらい打たれることの方が、よっぽどいいと考えたぐらいであった。

男が便器を全部片付けてしまうと、入浴の時間が来た。係の女がやってきて、二十人の

女達に、手拭と石鹸をくばった。

「皆さんは、これから、えらい紳士淑女方の玩具になる大事なお体ですから、きれいに洗わないといけません。特に鎖が埋めこんである部分は、こういう時に清潔にしておかないと、鉄の錆が体をいためますからね」

係の女の注意が終ると、女は、ホースを牢屋の入口に持ちこんできた。そして、まず、一人一人の体に、水をかけ出した。びっくりするほど冷たい水であったが、コンクリートに固定された女は、嬉しそうに、水を浴びて体を洗った。

やがて別なホースが突き出された。そこからは、温い湯がほとばしり出ている。女達の体は、今度は、ほんのりと桃色に色づくまで温められ、石鹸は全部流された。

床に落ちた水は、どんどん吸いこまれて行く。最後にもう一度、水がかけられ、女達はその後を、タオルで固く拭きとって、入浴の時間が終わった。

## 第四章

女達は入浴が終った後は、これから、倶楽部の人々に指名されるのを待つばかりとなった。それでも女は女である。髪を編んだり、せっせと、肌を磨いたり、何もないのに、一

生懸命、自分を美しく見せようと努力し続けていた。

そして、一人一人、それぞれ、おとくいの客を持っているらしく、ぼつりぼつりと呼び出し係がやってきて連れて行った。外へ連れ出される時、始めて、女達の鎖は、コンクリートから外されて、自由に立って歩けるようになるのであった。

女達の数が大分減った頃、一人の女が、  
「ヘレン居るかい」  
と言ってやってきた。

「ハイ」

彼女はやつれた青い顔を上げた。

「ここへ出ておいで」

彼女には、まだ鎖がつけられていない。すぐ立上って、鉄の格子戸の所へ来た。

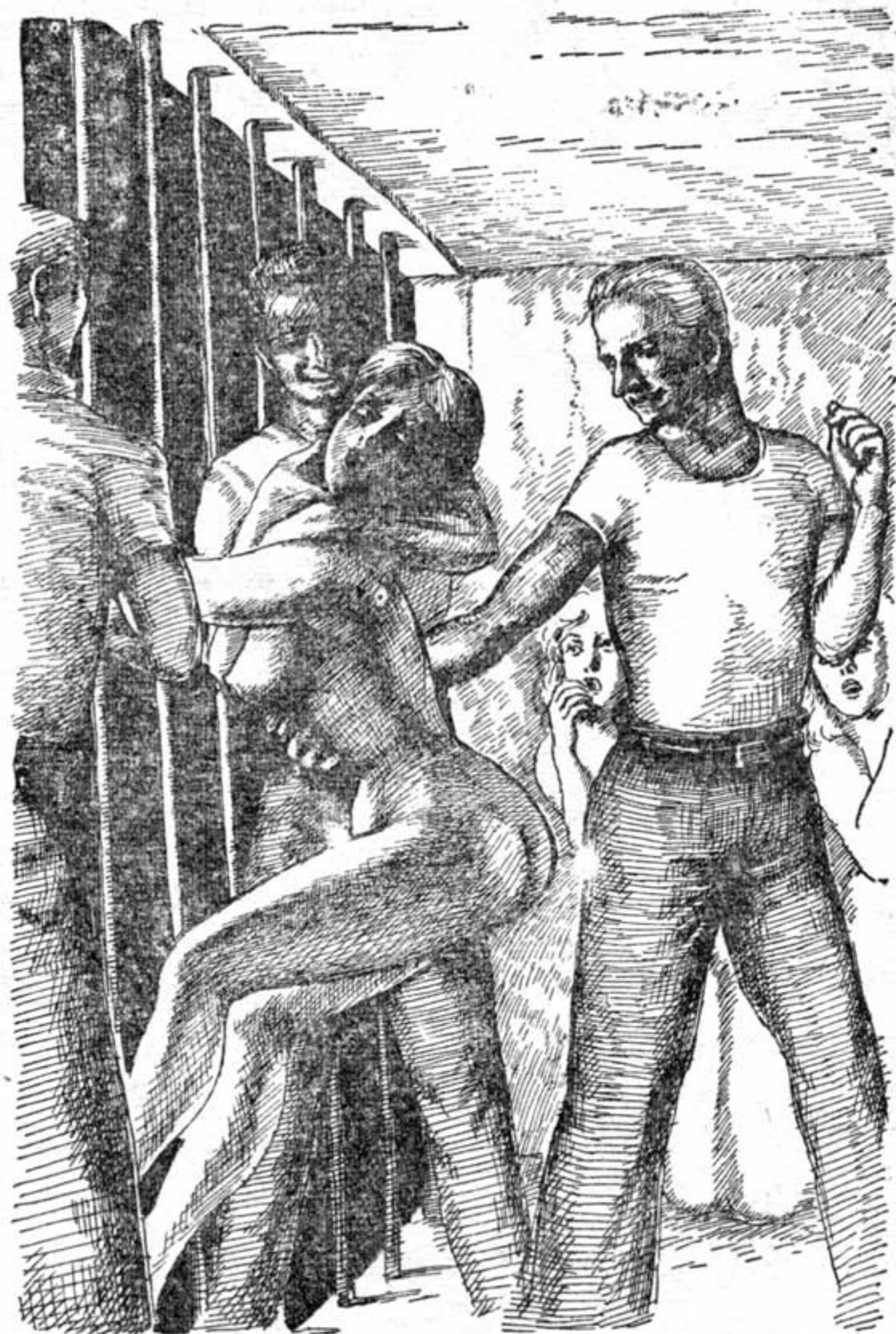
女は入口の扉をあけ、彼女を外へ連れ出した。

それから、廊下に立たせて、じっと彼女の体を眺め、手でさすった。

「お前は、本当に良い体をしているねえ。艶があつて、なめらかで、これからお前の体はここにいていつまでも人々に愛されるようすっかり変えられるんだよ。さあお出で」

そう言うてから、彼女はヘレンを連れて、また、暗い廊下を歩いて行った。ヘレンは何





がこれから起るのか、心配でたまらなかった。おずおずと女の後へついて行く。廊下の石だたみは足に冷たく、ひたひたと打った。やがて、いくつか廊下を曲り階段を登ると一つの丸い大きな部屋に彼女は連れこまれた。真中に赤々と火が燃え、屈強そうな男が大きなファイゴで、コークスの赤く燃える火に風を送っている。

その前に、ちょうど、腰かけぐらいの鉄の丸い椅子がおいてあった。よく見ると部屋の廻りには、スタンドのような席が何段もしつらえられてあり、そこに、紳士淑女達が大勢腰かけていた。そこへまた、四人の屈強な男達が出てきてその廻りの見物人に一礼をした。いずれも、力士のような良い体格をした男達で、革のパ

ンツをしており、胸や腕は隆々とした筋肉が盛り上っていた。赤く日にやけた筋肉をこりこりさせながら、ヘレンのそばへやってくると、彼女の両手をつかみ人々に良く見えるようにぐるぐると廻って見せた。

男達に手を掴まれ、全部を見られている、ヘレンは、何か言おうと思ったが、頭に血が逆流して何も言い出せない。やがて、彼女は今度は鉄の椅子の上にまたがされた。

## 第五章

彼女は立ちあがろうとして、「あっ！」

と悲鳴を上げた。うっかり体を動かすと、腰に苦痛が走る。よく見ると、彼女の体は他の女のようにコンクリートの突起にしっかりと固定されたままなのだ。

鎖の余裕は二十センチぐらいしかない。彼女もまた、他の女と同じように、そのコンクリートの牢屋の一隅に、坐らされて、一つも動くことができない身体にされてしまったのだ。

少しでも体を動かせば、まるで腰が機械でしめ上げられるように痛む。いつでも不安定な形のままだが、いなくてはならないのだ。



「とうとうお前も、私達みたいになつたんだよ」

他の女の一人が、わざと意地悪な言い方でそう言つてからかった。しかし、ヘレンはもう、それに言い返す気力も残っていなかった。

そして、ヘレンにとつて、まるで思いもかけない屈辱の日が始まつた。ただヘレンのお得意はまだできなかったから、他の女達が日課として呼び出されて、一体、何をされるのかはわからなかった。

しかし、午前十時頃呼び出されて夕方帰ってくる女達は、いずれも、体中、血や鞭の跡で塗れ、ぐったりとして自分では起き上れないほどであつた。それでも、三日も呼び出しが来ないと、女達は淋しがつて、ぶつぶつ、文句を言つたりした。そんな気持ちを不思議がつている、ヘレンに、他の女が言つた。

「お前さんも、傷が治りさえすれば、すぐ、呼び出されて、偉い皆様方の玩具にされるのだよ。それまでの休みだよ。どうだね、まだ痛むかい。私たちも、初めはとても痛んだもんさ」

「玩具つて、どういうことをされるんです」  
「それはとても口では言えないやね。それに人によつて違うし。でも、いままでに外から通つてやられたこととは、とても比べものに

ならない、ひどい苦しいことさ」

「怖いわ」

「それは怖いさ。私がいまだつて怖いんだもの、でも怖いけど、やはり嬉しいのさ」

女はそう言つてうつとりとしてみせた。

するとその時、慌ただしく廊下を駆け出してきた女があつた。いつも、必らず係のものに持たせなければいけない鎖を膝にぶら下げ必死になつて逃げている。その後を、五人ぐらの男女が追いかけてきているのだが、格子戸の所で行きづまりになつた。

女は格子戸に掴まつて、わつと泣き出した。

「許して。お願い。私を元の社会に返して。」

私は、ママや、パパの所に帰りたい」

しかし、その女の体は、追いかけてきた男女にがっしり掴まれてしまつた。もう逃げることはできない。必死になつて鉄格子に掴まつている彼女の指を、一本一本、もぎ放すようにして、体を離すと、男達は、泣き叫び、もがき暴れる女をかついで去つて行つた。

それから、十分ぐらい経つたろうか。大勢の女や男がどやどやとやつてきて、てんでに牢屋に入り、鎖をコンクリートから外し、それを持つて女達をひきたてて、廊下に出た。  
「お前達に、いま、見せしめのため、さっき逃亡をはかつた女の処刑を見せてやるから

な」

ヘレンも、一人の初老のでっぱり肥つた紳士に鎖を掴まれて歩いた。しかし、そんな歩行に馴れていないので、鎖がいつも体を痛めて、思うように歩けなかった。

が、ぐんぐんと、容赦なく腰の鎖はひきずられる。それをゆるめるには小走りに走つて鎖をいつもたるませておかねばならないのであつた。そして、皆はいつか、ヘレンが、鎖をはめられた丸い部屋へやつてきた。今日の女達は、紳士淑女とともに並んで、スタンドに腰かけた。

そして、さっき逃げた女は、鉄の椅子の上に、うつ伏せにくくりつけられていた。人々の眼には、彼女の丸い、ぶっくりした、豊かな尻だけが眼に入つた。

女はもう、泣き声を上げる気力もなくただ泣きじゃくつてゐる。

ふと、鉄が焼ける匂いがしてきた。みると真赤に燃えた炉の中に、二本の鉄串がさしこんである。男達が、その中から、鉄串をとり上げた。先が、真赤に焼けている。どうも焼印らしい。二人の男が、一つずつそれを取り上げてから、いきなり、女の尻の両側にそれを押しつけた。

「ぎゃーっ」



## 十月号を読んで

まるで踏み潰されたような声が女の口から洩れて、焼印が白い尻にあてられた。尻の肉が、じゅーっと音をたて、煙をあげて燃えた。女は失神してしまったらしい。

一つ、二つ、三つと、紳士淑女達は、ゆっくり数を数えた。そして五つ目を数え終るとやっとその焼印を放した。

ヘレンは、見ている間、怖ろしさに膝がガクガク震えた。紳士はそのヘレンに言った。

「お前達も、ここを逃げ出そうと考えれば、いつでもああして、お尻に深く印を押されるのだよ」

「私は決してそんなことは考えません」

「それならよいがね」

やがて女達は、それぞれ牢屋に連れ戻された。

あの焼印を押された女もやがて戻された。まだ痛むのか、しきりに泣きじゃくっている。

た。他の女も、さすがに、慰める言葉もなくしーんと黙って眺めていた。

その彼女の尻には右には、S。左にはNという字が大きく深く抉られたようについていた。

ヘレンはぞっとする思いで、それを眺めていた。

やがて彼女もまた、きびしい日課に参加するようになるのだ。

○わが愛する『裏窓』の10月号を手にして、私は、道をまちがえた旅人のように、『オヤ?』と、とまどいました。何という素晴らしい進歩ぶりでしょう。美しい絵と、ボリウムと、そして気品のたかい9月号までのゆき方も好きでしたが、今10月号を手にして『まったく今までに見られなかった新しいスタイルの創造』に大拍手を送ります。風俗探求の雑誌だから、表現はどうでもよい、といった投げやりの雑誌の多い世の中に（中には、編集子自身MもSもサッパリご存じなくMとSをゴツチャに扱ったなんてひどい雑誌も横行していますが本誌のごとく、高踏的御気品を失わず、しかもズバリと

『M—Sマガジン』とタイトルを打つゆき方に、心から共感をおぼえます。

○10月号では、Mの傾向が多いのも嬉しいきわみでした。

—ピララの敗北、才女になりたい男、黒髪執着、それぞれに、本誌ならではの好読物で一気に読みました。

『マゾヒズムへの招待』『現代MASO

風俗は面白い企画ですが、もう一と押し筆者の主観をとり入れたら、面白いと思います、とくに後者には現代に通ず息吹

きがなく、なんだか大正年代か、昭和初期のエロ雑誌を読むような感じが気になります。モット新しく、コクのあるものがほしいのです。

深刻な内容を、サラリと、さりげなく書いてゆく、アブノーマルを、ロマンティックに表現していつてほしいのです。

内容—量的には、S・M半々にしてく

ださい。ときには醜悪なグロテスクなものもよいでしょう。時代ものは、あまりダブらぬように、どうもアブとちよんま

げは両立しないようです。但し、一本はよいでしょうが。ロマンの香りがたい、しびれるような長篇マゾ小説をぜひほしいのです。

また、S一本に徹した小説もあつてよいのではないのでしょうか。それと、手記もの。また実例を入れた。アブ風俗講座物などはいかがでしょう。（とやま生）



## 読者短評



◎他にも御投書は多くありましたが頁数の都合で掲載出来ませんでした事をおわびします。この欄の投稿は、ハガキでも便箋でも結構です。御自由にお書き下さってお送り下さい。今月掲載しました方には本誌十一月号をお送り申し上げます。誌上匿名は御自由ですが住所と氏名はお書き入れ下さい。  
(変者短評係)

◎「裏窓」が一〇月号を期して装いを新たにすると予告を見て、どのようなスタイルになるのかと気にしていたが、昨日店頭で見てすっかり変ってしまつたのでおどろいた次第。見開き針金とじのスタイルは最近の探偵、空想物の雑誌の流行だったが遂にそれが「裏窓」にまで影響したのかと思つた。この形式が悪いと云うのではないが、今迄の時代小説にマッチした表紙の方になつたかを感じた。しかし「裏窓」本来の意味からすれば、現在のものを取り入れるべきだろうが、十月その表紙は正直の所がつかりした。ではどういうのがよいのかと云われると困るが、やはり写真よりは絵

の方が効果的の様に思う。が個人としてはこの様な形式になるのではなからうかと予感していたのではあるが。

内容も時代物はわずかに二編のみというさみしさ。しかし「裏窓」の再出発ともなれば「現代物」に重点をおくのも当然でもあろう。

本文に入つてよかつたのは山根豊氏の「責め挿絵」だった。殊に「祐天吉松」の挿絵の、まな板上の美女は、すばらしかつた。何とも云えない位なまめかしい。

この切抜きの労に大して感謝の意を表したい。

飯田豊吉氏の「鬼乳房伝奇」の一五ページの堂昌一氏の挿

絵が私の好みのポーズなので気に入つた。湯につかっている所が何とも云えない。中島喜美氏のもものは今月は凡作。暴言多謝。

(東一郎)

◎盛夏も去り今更の如く歳月の早い経過に驚いています。

十月号。全くの新装ぶりです。アンとして非常にうれしい限りです。表紙、装幀、紙質等々、

正にデラックスな新装と思ひます。内容も読む誌より見る誌へ

の変化がうかがわれ興味深かつたです。随筆、風俗時評が多く

なり小説が少くなつたことも面白いです。ですがやはり小生が

今号でも最も面白く読んだのは「鏡の中に」と「黒髪」であつ

たことを告白します。風俗時評

的な記事では「マゾへの招待」が面白かつたです。だがこうした頁はややもするとマンネリ化の危険があると思います。告白記で思い出すのですが、三十二年七月号の佐々木力氏の「むしだんご」はいつまでも印象に残る得がたい手記です。告白記をのせるならあつた特異な作を見落さぬことがマンネリ化しない秘けつではないでしょうか。裏窓タウンの「初代天勝の奇行」は傑作です。こうした記事を読めからもどしどしおせ下さい。号を追つて発展して行く裏窓誌に讃嘆の声を思はず放つたことを告白して勝手な批評を終わります。  
(大津部生)

(大津部生)

◎新装の十月号は装幀の一変と共に内容の一新充実が図られてやはり特異な存在であることに変わりはありません。グラビアのフォトの中で、藤沢氏の作品には幻想美があり、清潔な感じのモデルを活かし得た演出の妙があります。編集部のものは、モデルや小道具背景など、どこかで見かけたように思えて新味に乏しい感じがします。読物の中では男性Mやフェチを満足させそうなもの比率が割に多く、それが他誌に対する特色でしょう



が、その反面S的読物が弱くなつて、胸奥にしみ入るようなムードに乏しいのは残念でした。僅かに「マンハッタン倶楽部」がよく、漫画が姿を消した十月号では「裏窓タウン」とか「見聞の記事に思いがけぬ惹かれ方をするものです。その中で吉田義雄氏のレポートは大いに得るところがあり、次回が楽しみです。」(白川 裕)

◎スマートな新装裏窓十月号！恐らく全読者の拍手と好感を以て迎えられたものと信じて居ります。紙質の向上と写真の鮮明さもさる事ながらその企画の充実さ読者をして充分にたんのうさせた編集部御努力に敬意を表すると共に厚く御礼申し上げます。読物もピララの敗北・悦虚作家の秘密・鏡の中に他人がいる・俺の心に悪魔が住む・外数編の期待に背かぬ力作揃いで二三日で読了するだけの迫力あるものばかりで、全国諸兄と共に喜びにたえません。

倒するアイデアを続々と発表していただき、一線クラスの雑誌から超一線クラスへ飛躍される様、応援にやぶさかでありません。思いついたままの批評で恐縮ですがこれで失礼致します。

(越路・絹之助)

◎何如なる変貌をとげて登場する事かと期待に胸おどらせて手に取った十月号。まことに期待を二重にも三重にも満足させてくれた。マンハントを始めとする翻訳推理小説誌に見られる二折りの造本、向上した紙質、それにふさわしいイラスト等全く申し分なし。数多い大衆小説誌に見られる泥くささから脱皮したスマートさは何にもまして喜ばしい。この外見のスマートさを内容にも盛り込んで行かれん事を切に祈る。とかくうすぎたなくなり勝ちなSM的内容を如何に近代感覚にマッチさせて行くかが今後の本誌に課せられた最大の問題と思う。自重を望ぬや切。

以下、感想、希望を若干。

表紙にヌード写真そのもののズバリは愚。絵の方が良い。檜山氏の怪物等は如何？ 写真より幻想的なものが良いと思う。写真ページに何を取りあげるかは

今後もつと研究を要す。映画のS・M場面を取りあげるのも一方法。読者投稿による風俗時評その他のエッセイにページを取りすぎているはいらないか？ 但し「見たものの聞いたもの」の様なカコミ記事としてのせるのは賛成。往年の責めの挿絵も大いに結構、裏窓既刊号挿絵選が終つたらその欄をこれに当てたら如何？ とに角ページ数減少の割にバラエティの豊富さをねらうのだから、編集も大変だろうが小説の充実を第一とする事をお忘れなきよう。小生の望みとして、文献、記録等のページは成るだけ少ない方がよい。これがダメなら、活字の面で圧縮してほしい。これがのさばると雑誌としての興味半減。この意味で既刊目録を毎号のせるのは不可せいせい三月に一度でよい。

希望をいえば、常連画家の諸氏交代で、一枚絵の口絵をのせる事。中川彩子氏の復活を機会に都築峰子氏の再登場をはかる事。外国の責め絵を旧号のように掲載する事、等。

最後に十月号の批評を少々。

庄巻は「俺の心に悪魔が住む」こう見ると、堂氏は現代ものの方が良い様だ。次いで「悦虚作

家の秘密」「切腹と磔について」の考察」「マンハッタン倶楽部」(外国ものの挿絵では中川氏のエクソチシズムに勝るものなし)等。「鬼乳房伝奇」は番外。「女間諜の最期」は挿絵に沖氏を期待していたのだが残念だった。豊田氏の絵はどこか生硬でいただけでない。小生の関心は小説もさる事ながら挿絵の方に傾いているので、文句はつけてもこれだけのスタッフをそろえている編集部の苦心にはただ感心する。(C・C)

◎貴社発行の雑誌「裏窓」を以前より愛読しておるものですが十月号よりは新らしい企画により雑誌が発刊されましたことは私として嬉しく存じます。と云いますのは、私達マニアにとりましては自分達の望む雑誌が一種増加したからであります。以前より「裏窓」はSM的な小説が多く喜んでおりましたのに今回からは挿絵及び写真まで掲載したものであり、その写真は構図と云いアイデアと云い、申分のないものでありますので、十月号を手に入れた時は何とも云いようのない嬉しさで一ぱいでした。新しい企画に対して絶大なる支援をお願いします。(大阪のマニアより)



# 敵の鎗



スパイ都市上海にひしめく国際諜  
報員の暗躍！ 憲兵の拷問に会う女スパイの  
苦悶に歪む肢体の妖しい美しさは  
一場の悪夢だったろうか

1

昭和十八年の初冬、私は亜細亜通信の記者として上海にいた。

この「魔の都」とよばれる国際都市で、私はいまだに忘れることのできない、悪夢をみた。いや、妖夢というのか。

一人の若い日華混血の女性が、スパイの容疑者として、日本の憲兵に拷問を受けた。その始終を目撃したのである。

職業柄、私は過去に多くの変死体やら殺人現場、その他各種の眼をそむけたいくなるような残酷な場面にでくわしてきた。たいていのことには、おどろかない度胸がついているはずだった。度胸というよりは「馴れ」だった。

しかし、生身の女が、しかも裸で責められている現場にぶつかったのは、はじめてだったし、若かった私の眼には、どうにも妖しく強烈だった。

十一月中旬のある日、一日の勤務を終えて支局を出た私は、瀘東の憲兵分隊に足をむけていた。

その分隊に所属している沼垂五郎という憲兵曹長が、私とは旧知の間柄だった。旧知というよりも、先輩にあたる。



# 女スパイと

# 鬼憲兵

東京の高等学校で、上級の沼垂五郎は剣道部の主将をしていた。私は彼より二年後輩の同じ剣道部員だった。

上海の支局へ赴任して一週間目、私は見物がてらにバンドからガーデンブリッジを渡って、左側に見える二十四階建てのブロードウェイ・マンションを仰ぎながら、揚樹浦へのくだり坂を歩いていた。

武昌路の交叉点にさしかかったとき、

「おい、笹木、笹木恵一じゃないか」

と、私は名を呼ばれ、うしろから肩を叩かれた。ふりかえると、色の浅黒い、というよりは赤黒い、眼の細い男が微笑していた。

その男が、沼垂憲兵曹長だった。

「やあ、先輩、奇遇ですな」

私も声をあげ、握手を求めたというわけなのだ。

沼垂曹長は、私を虹口のカフェへ案内し、酒と女をこちそうしてくれた。学生時代の剣道部の猛将の面影が、そのまま残っていて、私はなつかしかった。

彼の方でもなつかしがつて、その夜は東京のあれこれ話や回顧談にうち興じた。

その後も私は、仕事の関係も兼ねて、ときどき彼と逢っていた。憲兵というのは、いくら給料をもらうのか知らないが、彼はいつも

豪勢な金使いで、私に酒をのませてくれた。

2

「やあ、笹木。いいところへきたな。おもしろいものを見せてやろうか」

瀧東の憲兵隊を訪ねた私に、沼垂曹長は笑いながら、いきなりそんなことをいった。

「おもしろいものって、なんですか？」

と、私もそのときは、そんな拷問なんか見せつけられるとは思っていなかったから、気軽にこたえたものだ。

「まあ、きてみる」

沼垂曹長は、そういつて先に立ち、地下への階段をおりていく。地下室に取調べ室や留置場があることは私も知っていた。

うす暗く湿った廊下。汚れたコンクリートの壁。鉄格子のはまった黒いドアがならんでいて、あまり気持ちのよいものではない。

その一室のドアをあけて沼垂曹長はつかつかと中へ入っていく。私をふりかえり、無言で入れと顎をしゃ

## 笹木恵一

沖 渉 司・画



くった。私もつづいて足を踏みこみ、ギョツとして立ちどまった。

全裸の女がうしろ手に縛られ、椅子にくくりつけられているのだった。

女の前には、私も顔見知りの、今井という若い憲兵が突っ立っていた。今井は沼垂曹長の部下だった。

「まだ口を割らんのか」

と、沼垂曹長がいった。

「はッ、なかなかしぶといです」

今井上等兵がこたえた。そして、上気した赤い顔で、女の髪を見おろした。

女は、がつくりと首うなだれていた。乱れて額の前に垂れ下がっている髪の毛が、こまかくふるえていた。左右の腕は、たかだかと背中にくくりあげられ、両手首は肩近くのところまでひきしぼられている。腕がつけ根から極端にねじまげられているので、二の腕の内側の肉がぶつくりと盛りあがっていた。縄は普通の線ロープのようだったが、手垢で黒ずんでいた。

にぶい光りの裸電球が、室内をほんやりと照らしている。そのせいか女の肌は、水銀燈のように、ぼうッとはの白く浮かんでいた。

椅子に縛りつけられているのが女で、しかも素裸だということがわかったとき、私は思

わず顔を伏せた。見てはいけないものを見たときのような、反射的な衝動だった。心臓の鼓動がきゆうに音をたて、血が熱くなるような気がした。

しかし、私はおそろおそろ眼をあげて、そのむごい情景を盗むようにして見はじめたのだった。陰惨な、なまぐさい空気が私の鼻さきにただよった。

拷問されているのが男だったら、私はおそらくその部屋から逃げだしただろう。

女、それも若い女だったということが、私の足をそこへ釘づけにした。こわいもの見たさという心理に加えて、男の私には、やはりエロチシズムが気になったのだ。

あとでわかったのだが、そのスパイ容疑の女性も、名を朱明芳といって、日本名は百合子。日本人の母親をもつ日華混血娘だった。年齢は二十一歳。大柄な肉づきをしていた。

私は、靴音を殺すようにして、そっと椅子の前にまわった。女の顔が見たかった。

だが、首を前に倒して顔を伏せているので見えない。私の視線は、しぜん女乳房にむけられた。肉づきがいいせいか、娘らしくない、ゆたかな乳房だった。

乳房の上と下の部分に、縄が喰いこんでいるので、ことに大きく盛りあがってみえたの

かも知れない。青い静脈が透いてみえるほどの白い乳房だった。

縄目が肉のなかに陥没するほど強く喰いこんでいるので、見ているとこちらの胸まで痛くなってくる。私は無意識のうちに、片方ののひらで鼻をおおっていた。

裸の女が、椅子に縛りつけられているのを見ただけで、私は酸鼻という言葉を思いだした。それほど隙間も容赦もなく、びっしりと肌をしめあげた縄だった。

「顔をあげろ」

沼垂曹長がいった。凄みのこもった声だった。しかし、女は固くうなだれたまま、身じろぎもしなかった。とみるや、横に立っていった今井上等兵が、女の髪をわしづかみにつかんで、ぐいッと上にむかせた。髪の毛を強くひっぱられ、なにか咽喉をきしませるような声をあげて、女は顔をあげた。眉と眼が、ほそく吊りあがっていた。

血の気を失った白い表情のなかに、高く形のいい鼻があった。鋭いほどの知的な容貌だった。唇には、濃い紅を塗りつけてあるが、かなりの教育を受けたインテリ女性にちがいはなかった。

私は、沼垂曹長にささやいた。

「美人ですね」



「そうだろう。だからお前は、いいところへきたと言ったんだ」

たしかに、私のような一介の特派記者が、憲兵隊の拷問の現場を見学できるのは、沼垂曹長の特別の好意にちがいなかった。これが

音にきこえた日本帝国憲兵の拷問なのだ。

「女だから、いちどにやらずにじわじわとやる。手間をかけないうちに、知ってることを吐いてしまえよ」

沼垂曹長は、少年のようにニキビのふきで

た赤黒い顔に、凄みをふくんだ微笑をうかべていった。それまで表情が変って、残忍冷酷な形相になった。

私は彼が、ほかの同僚や部下たちから、赤鬼憲兵と呼ばれているのを、改めて思いだした。

唇をへの字にむすび、女を凝視する赤鬼憲兵には、学生時代の童顔は消えていた。

### 3

国際都市上海は、またスパイ都市でもあった。人口は七百数十万。四十九カ国からの人間が、すべてなにかを求めてひしめき、うごめいていた。

緊迫した世界情勢をそのままに反映して、あらゆる謀略と悪徳、情報あさがはびこり渦巻いていたのだ。

朱明芳が、どんなスパイ容疑の現場をおさえられて検挙されたのか、私にはわからなかった。質問したところで憲兵隊は答えてくれない。だが、想像は容易につく。

「こいつは武昌路の『オリエント』でダンサーに化けて活動していやがったんだ」と、沼垂曹長が洩らした。

「オリエント」は上海でもかなり規模の大きなキャバレーだった。経営者は白系露人で、ダンサーには、米、英、ユダヤ、中国姑娘など雑多に入り乱れてサービスをふりまいていた。むろん、日本の軍人将校たちの遊興も多い。

ダンサーに化けて敵の将校に近づくななどというのは、いかにも定石的だが、女に弱いのは男の常で、やはり馬鹿にならない成果があるにちがいなかった。

「すこし、叩いてみましょうか」

今井上等兵が、沼垂曹長の顔色をうかがうようにいった。

「待て。こんどはおれがやる」

沼垂曹長がいった。

今井上等兵は、部屋の片隅に置いてある木





刀を一本取ってきて沼垂曹長に手渡した。

「よし」

沼垂曹長は、右手に木刀をつかみなおし、女の顔の前で、二、三度鋭く素振りした。これは威嚇らしかった。

「白状しないと、息の根をとめてしまうかも知れんぞ」

沼垂曹長は、言葉でも女を脅迫した。

女はあくまでも無言だった。顔色が蒼白になっていくうちに、唇だけが赤く光って目立った。

殺される、とふるえあがったのは私のほうだった。私は沼垂五郎の腕力を知っている。

竹刀ならまだしも、固い櫓の木刀でやられたら、骨まで砕かれてしまう。

だが、赤鬼憲兵はさすがに拷問のコツを心得ていた。椅子に腰かけて縛りつけられている女の、その水平になった太腿のところを狙って打ち据えたのだった。それも骨まで打ちおろさずに、肉だけをピシリッと鳴らしたのだ。

「ぐうッ！」と、女の咽喉から、にぶい悲鳴があがった。椅子の脚が、ガタガタと床に鳴った。

女の両足首は、椅子の脚にややひらきかげんに縛りつけられてあった。だから、下半身

を動かすことも不可能だった。

スベスベと白い太腿の上に、たちまち一本の線が赤くふくれあがった。木刀の痕がしみついた。その痛みに、まるみをおびた腿の筋肉が、びりびりとけいれんしていた。

「どうだ」

沼垂曹長は女の横に立ち、木刀をさしのべて、女の顎の下に当てた。ちょうど首斬り役人が、女囚の首を打つときのような恰好だった。さすがに剣道五段だけあって、ピタリと板についた形だった。木刀で女の顎を、ぐいぐいともちあげた。

女は眼をとじていた。とじたまぶたの上に漆黒の髪の毛が数本垂れ下がっていた。形のいい鼻が、あらい息のためにふくらみ、赤い唇もひらいていた。唇のなかには、真珠色の歯がならんでいた。凄じょうな美貌だった。私は、ふと寒気をおぼえた。

沼垂曹長の木刀は、いかにもやわらかそうな二本の太腿を、数回打ち据えた。

弾力ゆたかな肉からはねかえる陰惨な音が室内いっぱいひびいた。

女は悲鳴を噛み殺し、髪をふり乱してうめいた。顎をのけぞらせ、また背を猫のようにまるめて木刀の痛みを耐えていた。

肉ぜんたいが、白いゴム人形のようにふく

れあがって、苦悶の呼吸をしているようにみえた。女の胸もとから、あぶら汗がふきだしていた。

私の背すじに、つめたい戦慄が走った。悪感のようなふるえがきた。とても見てはいられなかった。しかし、それでも私は、この場から立ち去ることができなかった。

#### 4

沼垂曹長は、女のななめ背後にまわると、こんどは木刀を逆手に持った。そして、木刀の先端を、女の胸にかかった縄目のあいだにこじ入れようとした。

それはしかし、容易なことではなかった。乳房の上下に、ぎゅぐゅと縄は喰いこんでいる。若い憲兵が、おそらく力いっぱい縛りあげた縄目なのだ。

木刀の先は、縄と肌の上を、いくどかすべり空転した。

「曹長どの、お手伝いしましょう」

今井上等兵がいった。そして、乳房の下に陥没している縄を、指さきでつかみだすようにして持ちあげた。縄と皮膚のあいだに、からくも小指一本ほどの隙間ができた。

「よし」というと、沼垂曹長は、すかさずその隙間へ木刀の先端をねじこませた。ぐりぐ



りとこじ入れた。

女は「くうーッ！」というさけび声をあげると、鶏のように首をのぼしてのけぞった。胸をゆすり、乳房をふるわせて、なんとか木刀の先をはねかえそうとした。

しかし、木刀はすでに二寸余りも縄目の下にもぐりこんでいた。女の抵抗はむなしく、無駄だった。苦しい呼吸とともに、乳房がさらにふくれあがった。うす紅い乳首が、茶色に変色して固いとがりをみせた。

「さあ、泥を吐くなら、いまだぞ」

赤鬼憲兵は、ひと呼吸休んだ。

女が歯をくいしばって応じないのを見てとると、手に握った木刀を、じわじわとゆすりだした。

これは女の柔肌にとっては、強烈な苦痛にちがいがなかった。たちまち「ひいーッ！」という悲鳴をあげて、女は泣きだした。見栄も恥もないといった形相になった。首だけを必死に前後左右に動かした。

だが、乳房と乳房のあいだに、木刀はほとんど垂直にねじこまれ、固い樫の先端はちょうど腹部のあたりを、ぐりぐりと突きなぶった。女は「キッキッキッ」と歯を噛み鳴らすようなうめきをあげた。

ぎりぎり縄がしまって、いっそう肌身に

くいこんでいくのが、私の眼にもはっきりわかるのだ。

縄を噛みこんだ肉が、むっくりと盛りあがって、紫色になっていた。喰いこんだ縄の強さは、おそらく骨にまで届くだろうと思われた。

私は女の苦悶を正面から眺めることに苦痛をおぼえた。私は椅子の背後にまわった。だが、苦悶の表情は、女の背面にもあった。

肩のあたりまでしほりあげられた両手首が強烈な縄目に血の流通を絶たれ、白っぽくなっていた。十本の指が、白蠟のような色になってもがいているのだ。なんというむごい、うしろ手縛りだろうか。

私の両手も、いつのまにか握り拳をつくっていた。腋の汗がつめたく流れた。この凄絶な見世物を前にして、私は落着きを失い、頭のなかで、ズキズキとひびく血の音をきいていた。

こんな非人道的なことが、ゆるされているものだろうか。いかに敵側のスパイだからといって……

私には、いま眼の前で責められ、のけぞっている女に、敵意も憎しみも感じられなかった。日本軍の敵としての実感が、どうしても湧かなかった。

だからといって憲兵たちに「やめろ」などという権限は私にない。そんなことを言ったら、私が代わりになぐられて、留置場におちこまれるだけである。

「どうした、笹木、顔色が悪いぞ」

沼垂曹長がニヤニヤしながら私にいった。

「はあ、いえ、その……」

私は声がかすれて、言葉にならなかった。ひどく咽喉がかわいていた。そのくせ、水を飲みにくい心の余裕もないのだ。

「お前にもすこし、この女を叩かせてやろうか。そんなに悪い気持ちのものでもないぞ」

赤鬼憲兵は、そんなこともいった。

「いえ、けっこうです」

私は、額の汗をぬぐいながら辞退した。ここにこうして立っているだけで、私も加害者の一人ではないか。

「こんな軽い責めを見ておどろいては、とうてい憲兵にはなれんな。いくじのない奴だ。こんなのはまだ序の口だぞ。責めているどころか、可愛がって撫でてやっている程度のものだ。日本の憲兵の拷問は、こんなまぬるいもんじゃない。女がなにしろ美人だから、おれも手加減してるんだ、ははは」

沼垂曹長は、女の肌をぐりぐりとこじりあげながら、そういつて笑った。





5

百ボルトの電流を、女の乳首に接続するとうような、おそろしい拷問も、実際にどこかの憲兵隊の取調べ室で、行なわれているにちがいないのだ。

「こんな木刀での責めなんか、撫でているよなもんだ」という赤鬼憲兵の言葉も、まんざら誇張ではないのだった。

スパイ容疑者朱明芳は、苦しげなうめきを吐きだしながらも、ついに沈黙を守りとおし

た。立派なものだった。私は感心した。私だったら、とても耐えきれぬものではない。

木刀のために、朱明芳は二度失神し、そのたびに頭から水をぶちまけられた。髪が海草のようにびしょ濡れになった。

沼垂曹長が私をつれて、この地下の取調べ室に入ってから、すでに一時間近く経過していた。

「いつまでもこの女一人のために時間をつぶしてはいられないな。よし、いよいよ、あれをやるか」

沼垂曹長が、今井上等兵をふりかえっていった。

「は、あれとは？」

若い憲兵は、げんな顔をした。

「あれだ。おれの得意の漢法薬だ」

沼垂曹長は、意味ありげな微笑をした。

私は、これ以上の残酷な場面を見るのは、いやだった。そこで、沼垂曹長にもう帰ってもよいかとたずねた。すると彼は、

「おいおい、これからがみものなんだぞ。まあ、そこでもうすこし見学している。どんなに強情な女でも、結局は一匹の牝犬だってことを教えてやる」

といって、その「漢法薬」の調製を、今井上等兵に命じたのだった。

やがて、今井憲兵はその「漢法薬」を、てのひらにのせて持ってきた。片手にのる大きさで、ガーゼのようないすい生地布袋のなかに、なにか白いドロドロしたものが入っているのだ。それを見て私は思わず、

「なんですか、それは？」

と、きいた。

「こいつか、うふふふ、この袋のなかには、山芋をすって、そこへ唐辛子の粉を混ぜ合わせたごちそうが入っているんだ」

「それを、なにに使うんです？」



「見ていればわかる。人間の肌のやわらかい部分にこいつを押しあてるとな、かゆくたまらなくなるんだ。むずむずしてどうにもならなくなるんだ。見ていろ」

赤鬼憲兵は、得意げにそのぬらぬらした布袋を私に見せびらかした。私はすべてを察した。私は頭痛がするとかんたか言って、この拷問室から逃げようと思った。そんな残忍なショウを、もう見ている勇氣はなかった。しかし、その反面この醜惡な拷問を、いまここで見逃したら、もう見る機会はないぞ、という悪魔的な誘惑も私の心を妖しくそそのかすのだった。

私の足は、ついにこの部屋の床から離れなかった。私は私の卑しい好奇心を嫌悪した。嫌悪しながらも去ることはできなかった。

沼垂曹長と今井上等兵の眼が、真正面から女をのぞきこんだ。私は反対側の、縛られた女の背面を凝視していた。

女の肩が、うごめきはじめた。

白い肌が、もだえながら次第に赤みをあびていくのがわかった。

「あああ、むむむ」という、苦痛のうめきとはちがつた声が、女の咽喉の奥からこみあがするようにふきだした。

やがて全身が、蛇のようにくねりだした。

いかにもたまらないといった身悶えだった。胸、腕、足首を、ぎっちり椅子に縛りつけられているので、もがくと椅子の脚がガタガタと鳴った。

「あああ、ううう」うめきがいつそう激しくなった。泣くような声になった。

うしろから見ていると、腰の筋肉がまるで白い獣のように、もくもくと動くのだ。縄にくびれた腕の筋肉が、ねじ切られるようにゆがんでいた。

「さあ、もう白状するだろうな？」

沼垂曹長が、女の顔をのぞきこんで、なぶるようにいった。女は首を横にふった。女の肩から、汗が粒になって流れだした。

「そうか。それなら、あと十五分もそのままにしておくか」

その十五分が経過しないうちに、女の両膝は、まるでかけ足をするときのように、ガクガクとふるえだした。いかにもせつなげな、あえぎが洩れつづけた。

「ううう、な、なんでも、いいいます！」

女は、海老のように身体を縮めて、ついにそういった。沼垂曹長は、満足げに白い歯をみせて笑った。

女が白状をしはじめると、私はその部屋から追いだされた。それは当然だった。女の口

から吐きだされるのは、軍の機密に関する情報にちがいがなかったから。

それにしても、私は同胞ながら沼垂曹長の非情さに戦慄した。戦争、そして軍隊というもののおそろしさが、はじめてわかったような気がした。

## 6

あれから十五年たつ。あの上海の地下室で目撃した一時間は、悪夢だったか、妖夢だったか。私はいまでも、背中に固く縛りあげられた両手首のもだえと、白い巨大な腰の筋肉が、もくもくと苦しげにくねる夢をみる。その白いうごめきに重なつて、あのせつなげな「あああ……」という、うめきの声を。

あの女は、あれからどうなったか。処刑されたのだろうか。

終戦後、沼垂曹長はうまく民間人に化けて日本へ帰ってきたという噂をきいた。その後、消息はきかない。戦争に敗けて、帝国憲兵隊の組織は滅亡した。しかし私は、この日本のどこかに、かつてのあの帝国憲兵要務綱領が通用するような組織が復活し、実存しているのではないだろうかという疑惑をときどき抱く。そんな馬鹿なことはないだろうと思う。ないだろうとは思うが……。



読者随筆

# 歩散髪黒



|   |   |
|---|---|
| 黒 | 崎 |
| 良 | 之 |

ところがある。彼女の豊かな黒髪を輪に結んで、太い綱を通し、滑車につないで吊り上げるのであったが、さすがは練達の大御所だけに、真に迫ること凄まじく、中島喜美先生の画とあいまって、まさに眼のあたり見る思いであった。

最近の本誌を見るにつけ、がぜん

黒髪にひかれて買い続けた本誌

いただきたいものである。

「黒髪物」であるが、世の中に出版物多しといえども、黒髪愛好者をして、かくまで陶酔させるものは、「裏窓」誌ただ一つであることは、だれしもが認めるところである。

は、はや幾十冊となって、いまさらのごとく私を驚かせているが、既刊号にあらわれた「黒髪物」を少しばかり拾ってみると、大御所島本春雄先生の連載された「乱れ夜探り」の一節に、女忍者お蘭が敵方に捕えられて、拷問を受ける

飯田豊吉先生の「泣き兵衛」物にも、艶々しく結いあげた十九娘の島田鬘を、鬘の形もそのままに根元からザックリ切ってしまうのがあってドキリとしたが、そのあとで、耳までも切って血だらけになっ



がれた。

三十四年の三月号に「皿を割る女」なる作品がある。女主人と老婆とが住む屋敷へ、黒髪の長い若い女が、女中奉公に行くと、眠ら

されている間に、自慢の黒髪をキ

レイに剃りとられてしまう。剃り

盗んだ若い女の黒髪を鞭に編み込

んで、マゾの老婆を黒髪の鞭で打

つのであるが、若い女をツルツル



に剃りあげ、その黒髪を長く編んで鞭にすると、構想もなかなか奇抜である。

三十四年の四月号は「淫祠邪教特集号」であり、まず表紙の絵からして私の魂を奪った。黒髪を神仕えのおすべらかしにした、妖艶

わい

読まされる。

この上ない色巫子の絵は、邪教ならではの吸引力を持ち、魅力あふれる名画と思われた。この淫祠邪教号には、三尺の黒髪を背にすべ







い気持で、今に到るも変ったことであつた。今まで大冊読みかえしている。

さて、ここで志摩不二氏の登場となるが、三十三年九月号より彗星のように出現したこの黒髪作家のことについては、毎号の「黒髪物」において、あまりにも有名である。当時氏の登場第一作の髪地獄を一読したときの興奮は今でも忘れない。これはやはり、氏の最高傑作というべきであろう。それにつく傑作は「黒髪を織る兵隊」であり、また、今回終了した「黒髪教」である。これらのすばらしさは、従来のどの刊行物にも求め得られなかったもので、真の黒髪愛好作家の出現は、まことによろこばしい限りである。

本誌十月号、一見するなり驚いたことは、まず薄いことと表紙の

の島田髻を、根元よりぶつとりとこぶるよく、無理無態に押さえつけられて根元より髻を切りとられ、切りとられた島田髻の黒髪が艶々、てしまった腰元の悲嘆した姿や、しく油光りに光って、生き物のよザンバラ髪となった女の頭に、現うに見える。古正英生氏の絵も、実的な迫力があり、こたえられな





ることができる、というものである。「黒髪教」は今回で終了とのことであるが、次号よりまた手を変え品をかえて、黒髪物を永続し私どもを楽しませてもらいたいものである。

本号にはまた、黒髪をしゃぶる

——という写真入りの好ましい作

品がある。黒髪豊かな美女の写真

黒髪愛好者といっても、対象が

数葉をはさんで、女の黒髪について談じたもので、はじめあまり期待せずに読んだが、予想に反して

黒髪であるまでは同じで、あとは各人各様、なかなか個性的な偏執があるもので、志摩氏の作品において、油などをつけたものでな

た、やや長目の黒髪もまたすてが

く、その女自体から発する黒髪本

来の匂いと味とに重点をおかれて

いる。

パーマされた黒髪だけでなく、地髪で結った髻の女の写真ものせてほしいものである。

癖のない、二尺にあまるなよやかなすばらしい女の黒髪をよくすいて、水油をぬり、片手にグッと握りしめて、白元結で強く縛りながら、キリリと結いあげてゆく日本髪。

長い美しい黒髪を綺麗にときあげて、根をキッチリ結んで結いあげたアップスタイルの後姿。

あるいはまた、のびかかったパーマの髪を、ちょっと襟元でリボンで結えた黒髪……等、考えればきりが無い。

黒髪愛好者にとって現代はまったく不利である。

志摩氏の作品にある、二尺もある黒髪を根元からぶつ切り切って奉納するどころか、短かいパーマ髪の奉納すら皆無なのではあるまいか。まことに嘆かわしい時代である。



# 悪女の栄え

弱者を踏みにじる傲慢  
な美への怒りと憧憬！

西田 仁

画・根元 裕

「まあ、それじゃまるであたしがごまかしたみたいね」

一度出かけてから忘れものを思い出して下宿に戻り、庭を廻って廊下に上ろうとしたとき、不意にヒステリックな節子の声が聞えて来た。私は思わずその場に立ち止って耳を澄ませた。立ち聞きをする気は毛頭なかったが

しかし昼間は女子供と老人だけの無用心な家だ。気をつけてやるのが下宿人の義務だろう。それに、平生はきわめて物静かな若い未亡人の節子が、こんな疍高い声音でものを云うのも珍らしい。私は足音を忍ばせて、その部屋のほうへちかづいていった。

朝っぱらから、あまり愉快でないお客さまでも来ているのかと思ったのだが、節子の相手は目の不自由な武林老人で、これは低い声

でなにかほそほそと呟いている。それが終るか終らないうちに、ふたたびおつかおせるような早口で、

「その気持はよくわかりますわ。だけど、それはムリというものじゃないかしら。そうでしょう。あの頃は終戦直後のどさくさで誰でもじぶんだけ生きるのが精いっぱい。借りたも貸したもあつたもんじゃなかったわ。人殺しだって十五年もたてば時効にかかるのよ。ましてそんな古証文、今頃持ち出して騒いだって、先さまじゃ、とっくの昔に忘れてますわよ」

なんのことだかわからないが、これだけ聞くとずいぶん乱暴な論理である。しかも云い募る節子の声はますます高くなる。息子の良夫は学校だし、私の戻って来たのには気がつかないのだろう、遠慮会釈もなくまくし立てる節子の弁口に煽られて、老人はもう口をつぐんだ模様であった。ぴったりと閉じられた両の瞼と、不幸な老年の苦悩を刻んだ額の皺とが目に見えるようだ。

が、しかし、この節子の権幕に驚いたのは、げんにやり込められている老人よりもむしろ、かげでその言葉を聞いている私のほうであつたろう。良人の死後もこうしてひとつの家に住み、女中も使わずに切り盛りをしてい



る節子が、かりにも亡夫の父親である武林氏に對してこんなぞんざいな口のききかたをしていようとは思わなかった。そういえばこの二人が話しているのを、そばで聞いたことは一度もない。

老人が黙ってしまふと、節子はさらに止めを刺すような厳しい口調で、

「とにかく、そのお金のことは二度と口になさらないでいただきます。きつと返してくれるはずだ、そうしたら養老院にはいるんだなんて、二タ言目には云われたんじゃ、あたしがあいだでなにかしているようで気持がわるいもの。それにたとえ送って来たにしても、それだけで賄えるわけじゃなし、手続きだって荷造りだってあんた一人じゃどうにもならないでしょ。もうお手紙の代筆もお断りよ」と云った。

それに対して、老人はやはり一ト言も答えず、しばらく沈黙の時間が流れた。

私はハンカチを取り出して汗を拭いたが、そのうちに節子の立ち上る気配がしたのでこんどは慌てて戸袋の蔭に身を寄せた。やがてずかずかと畳を踏む荒い足音が聞え、つづいて明け放してある障子のあいだからすらりとした節子の姿があらわれた。

「あ」

それを一ト目見た私は、ぎょっとして一瞬息を呑んだ。これはいったいどういうことだ。私はわれとわが目を疑いながら、黒いナイロンのスリッパのほかにはなにも身につけていない節子のしなやかな姿態を見つめた。衣服の上から想像するよりもずっと肉づきのよい、引き締まってきりりとした白いからだだ。きれいにアップされた襟足の流れがゆるやかに拡がっている肩から背へかけての皮膚は、匂い立つような女盛りの色艶を見せていた。そしてその悪魔的な黒い裳裾からあらわれている二本の脚は、心持ち左右に開かれて





しつかりと廊下の板を踏まえていた。

その節子のうしろ姿を、折からの強い日射しがまともに照りつけていた。爛熟の女体にまよっているたつた一枚の薄物は、夏の朝の陽光の下ではなきにひとしい。私は覗き見をしている身も忘れて視線を凝らした。

下宿の主婦と間借人——。そんな無責任な関係が、私をいくらか大胆にさせていたのかも知れない。とにかく私は息を殺し、うっとりとして停立していた。

しかし私の時ならぬ白昼夢は、やがて立ったままで老人に呼びかけた節子の一声によって、あっけなく破られてしまった。

「そんなところでゴロ寝するとカゼを引くわよ」

と節子は云った。

私ははっとして我に返り、もう忘れ物はそのままにして素早く門の外に逃れ出た。

私はさつきから、ある女流作家の告白を思っている。それは戦争ちゅう疎開していた良人の生家で、やはり盲目の、これは口喧ましい舅のまえで大胡坐をかき、配給の酒を盗んで茶碗で呷るのが唯一の憂さ晴らしだったというのである。いかにも女らしい陰険な報復の手段だと思い、私は興味を持って読んだのだが、それが女性一般の偽らない心情だ

とすれば節子のやりかたも納得できる。節子もあんなことで、孤獨に悩む身の鬱憤を晴らしているのか。しかしその作家と、節子未亡人との立場のあいだには、かなりの懸隔があるように私には思われた。

それは例えばこういうことだ。

いまの二人の話のなかに出て来た、時効にかかった古証文うんぬんということが私の心にひっかかっている。じつは二、三日まえ、門のなかですれ違った郵便配達の手、書留らしい大きな白い封筒があったのを私はこの目で見ていたのだ。薄紙の受取書と重ねて持っており、たくさん切手の貼ってある角がちらっと見えたので、ああ書留だなと思ったのだが、私の許にそんなものが来るはずもなく気にもしないのでいたのだ。しかし門のなかですれ違ったのだから、あの家に配達されたことは確かだった。さっきの話を綜合すると、老人が節子に代筆させて、むかし誰かに貸してやった金の催促をしたところ、いまだに返済して来ないというのが争いの因であるらしかった。してみれば、私の見たあの白い封筒が、老人の待ちこがれている便りではなかったのか。必要以上にいきり立っていた節子の態度と支離滅裂な論法から推して、それに違いないと私は直感した。

身寄りというものもないらしく、目も不自由な老人としてはそんなことまで息子の嫁であつた節子に頼るほか手がないのだ。節子はそれを百も承知で金はじぶんのものにしてしまい、先方へは受取りを書き、老人へは返して来ないと報告する。そしてその金のことはいま云わないでくれと宣告する。あり得ることだ。他の家族の目を盗んで茶碗酒を呑むのとはわけが違う。下宿人の私と小学生の良夫とがいないうちは、たとえまるはだかで家のなかを歩きまわろうと老人の目は絶対にそれを見ることはできないのだ。

私はそのとき、ふっと節子の立場を羨しく思った。

しかし——。私はいくらか落着きを取り戻して、かんかん日に照らされて歩きながら考えつづける。金を送って来たら養老院にはいると云っているらしいが、果して武林老人はそんなにも貧しいのだろうか。妻に先立たれた頼りにしていた一人息子にもまた逆を見せられた老寡夫の身の振りがたとして誰でもが考へることは、早く家を処分してじぶんは適当な施設にでもはいり、節子と良夫はべつに小さな家を買うとか、あるいは気軽なアパート住いでもさせればよいのではないかということなのだ。交通も便利な場所だし商店街も近

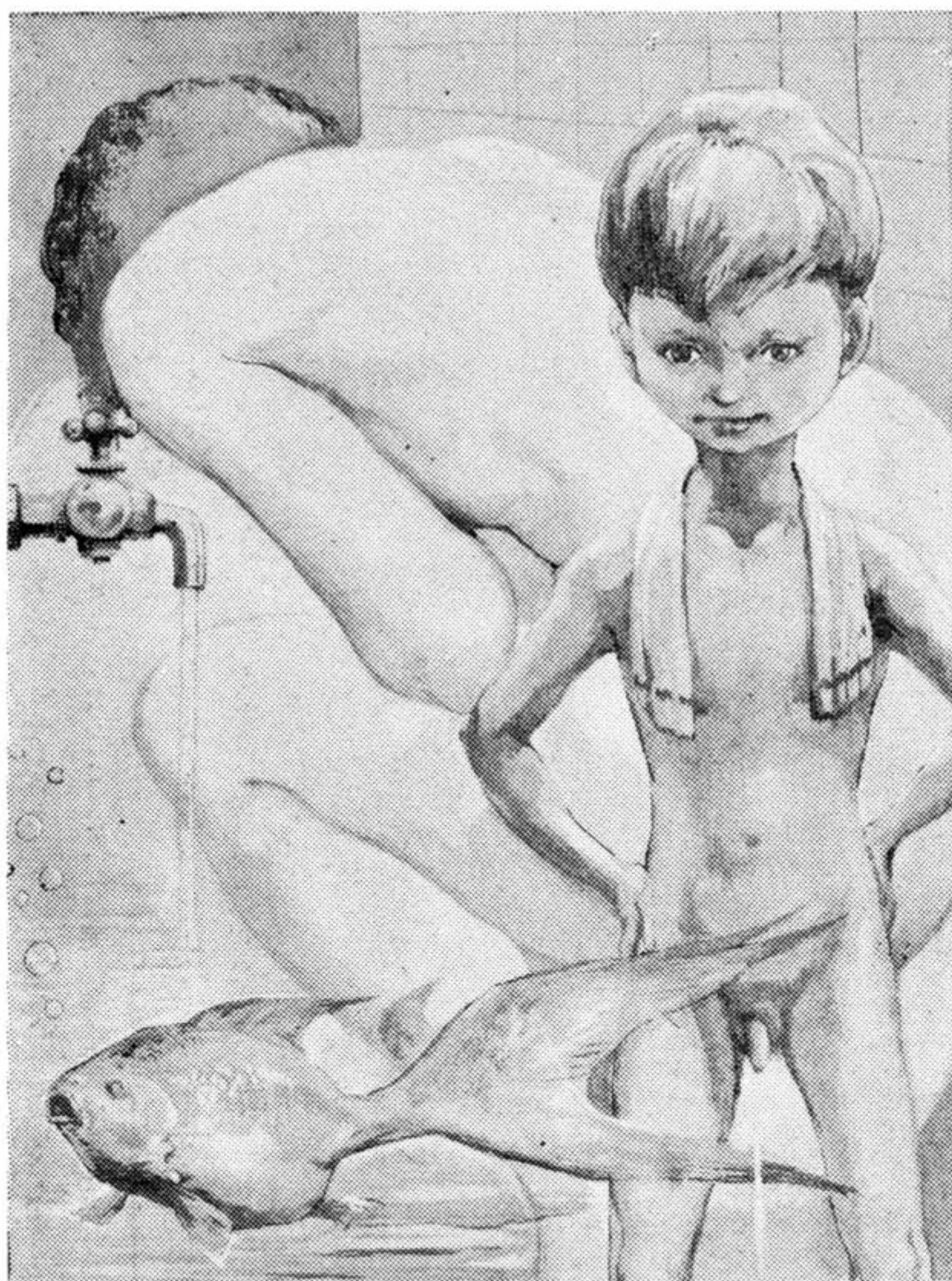


い。まだ新しい建物だから、うまくすれば二百万ぐらいには売れるかも知れない。あてにならない返済など待つよりもそのほうがずっとつとりばやいではないか。一生節子の世話を受けるわけにもいかないのだろうが、はたしてどういふつもりなのか。まして二人が

仲よくないのだとすれば、こういう疑問も浮んで来る。

それに節子はどうしてあんなに威張っているのか。また武林氏はどうしてああまで卑屈なのか。

私は持ち前の穿鑿癖を起し、どうせ会社は



遅刻なのだから、今日はひとつあの家の持主を調べてやろうと思い立った。それは区の税務事務所へいき、固定資産の課税台帳を見ればすぐわかるのだが、私がそんな妙なことに手をつける気になったのは、右に述べたような偶然から、節子という女性の別の一面を人知れず目撃したからにほかならなかった。

## 二

私の下宿しているこの家が、法律上は確かに節子の所有になっている事実を知ってから、私はさらに深い関心をもって彼女の言動を見つめなければならなくなった。

家はさいしょ今は亡い節子の良人なる人の名で登記されており、彼の死後は当然のことながら残された妻の節子と長男の良夫とによって相続されているのであった。新築されたのは六年まえだから、節子の良人は学校を出るか出ないかの頃で、とてもこれだけの家を建てる力はなかったろう。きっと武林老人がなにかの都合で息子の名義にしておいたものに相違なく、良人の死ということをやつにしておいた。考えれば節子にはなほだうまいことをしたわけになる。老人があてのない古証文を持ち出して養老院にいきたいというのも、無理のない願いのように思われた。これだけのこと



を調べ上げておいてから、私はあるとき何気ないふうに、しかし単刀直入に尋ねてみた。

「この家は奥さんのものなのですか」

すると節子はいまいに笑いながら、それでもはつきりと否定した。

「いいえ。ちちのものですわ。あたしたちは店候よ。どうして？」

「どうしてってこともないんですが、亡くなった御主人のものだったのなら、当然奥さんと良夫くんが相続されるはずだと思って」

「みなさんそうおっしゃるんですけれどね。」

まさかあんなに早く逝かれるとは思わなかったものだから。あたしたちに遺されたものといったら、十把一からげの株券だけよ」

といって屈託なげに笑うのだった。その十把一からげの株券なるものがどういうものか私は時折郵便受けに投げ込まれている、宛名の部分が窓になった配当金の受取書らしきものや、節子宛に来る往復はがきの株主総会の通知状などを見てよく知っている。最低に見積っても相当な財産だ。私はこれが母子の現在と将来の生活を保証しているのだと思っていた。ところが節子はそれだけではなく、税務事務所の評価でさえ百二十万円というこの家屋まで合法的にじぶんのものになっている。いずれも名目上は良人の財産だったのを奇貨

としてその上にどっかりと坐り込み、一生を蓄財に献げて来たのであろう武林老人をないがしろに扱っている。結婚生活も短かったのだし、実質的な所有者である武林老人もこんな状態だから相続についてもきつと一悶着あったに違いない。しかし節子は法規を楯にとつて一步も譲らず、あくまでもじぶんの良夫の権利を主張したものだろう。背後に知恵をつける者もあったかも知れない。弁護士などにすれば絶好の稼ぎ場所だ。

ひどい女だ。

そうは思いながらも、私は節子にひかれていった。あの日の朝垣間見た豊満な裸身は、私の脳裡に消えがたく灼きついていた。

私はそれとなく良夫と仲よくなることに努めた。下宿してからまだ日も浅いので、このようなこともそれほど不自然な感じを伴わずに、やり終せたつもりであったが、「将ヲ射ントスレバ」の諺が思い出されて私はしばしば苦笑を噛み殺した。しかし、利流で可愛らしい一年生を連れて動物園にいったり、ジェットコースターに乗ったりすることは、若い母親に対する思惑とはべつに、それ自体心の安らぎを覚える時間でもあった。出かけるたびに節子から渡されるお小遣いにも魅力があった。独身男の常として、金のない日曜な

どにはほんとうに体をもてあましていた私だったが、良夫と仲よしになってからは童心にかえって遊び、豪華な昼飯を摂ることができるようになった。

このようにして、私は案外容易に母子の生活のなかにはいりこんでいった。父親のない淋しさからか、良夫は私によくなつき、いるかぎりは私の部屋に遊びに来る。しぜん食事もしつしよ、テレビもいっしよということになり、秋風の立ち初める頃には早くも家族の一員のごとく遇されるようになった。が、私の相手はもっぱら子供のほうであり、肝心の母親との距離をちぢめることはできなかった。

そんなある日のこと、例によって良夫といっしょに入浴し、さきに上って何気なく見てみると、子供が流し場に立ったまま湯漕のなかめがけてじゃあじゃあと放尿しはじめたのにびっくりした私は、

「こらッ！」

と叱りつけ、

「こんどそんなお行儀のわるいことをしたらママにいいつけるよ」

というと、良夫はけろりとして答えたものだ。

「ママだっていつもこうしてるよ」



「嘘いいなさい」

とはいったものの、次の瞬間、もしかすると良夫の言葉は嘘ではないのかも知れないと思ひ慄然とした。節子の心事が私には諒解できるような気がしたのだ。良夫のいうのはおそらくほんとうのことだろうと私は思った。そうだとすれば、老人が好んで寝しなに使う仕舞湯はことあるうに節子の不浄のものでわざわざ濁らせられていることになる。それならば私のときはどうなのか。私がいり、さらに老人がはいるあいだに節子のこの「浄化作業」が行われていたのだろうか。節子とても、子供の目の前でそんな所作をしたわけでもないのだろうが、そこは子供の敏感さで母親の行為をいつか盗み見したものにちがいない。

「ママもそんなことするのかい」

私は声をひそめ、思い切って聞いてみた。興奮のために声がかすれ、かすかに震えているのがじぶんでもわかった。

「向うのほうで」

私は排水孔を指さして云った。「するんじゃないのかい」

「ううん、この縁に、こうしてしゃがんでるんだよ」

良夫は身軽に浴槽の縁に飛び上ってみせ

た。

突如として激しい感情がどっと私を襲い、目の眩むような緊迫感とともに全身が硬直した。湯のなかに沈んだまま、そつと内緒でするのではなく、わざわざ便器のように使用するという節子の姿を思い描き、たとえ目の前でそれをされても見咎めることのできない武林老人の憐れさを思った。それはきわめてひそやかな悦虐の昂ぶりを覚えさせる行為だった。

この時を境にして、私はまたまた新しい妄想の虜になった。入浴のたびにとつぷりと顎まで湯に浸り、なんとかして節子の体臭を嗅ぎ出そうとした。しかし豊かに湛えられた湯はあくまでも透明に澄みわたって、とても女の排泄物を混えた汚れは感じさせなかった。それどころか、なにかの拍子に、ほのかな香料さえ漂ってくるのだ。生来の入浴嫌いで、それまではたまにしか使わなかった下宿の浴室が、こうして私にとって辛い、しかし為さざるを得ない秘密の楽しみを味わう場所となった。

### 三

このような慎ましきの裏に棘を隠した節子の意地の悪さも、ただ一度だけ不覚にも馬脚

を露わしたことがあった。

秋も深くなつたある夜のことで。

良夫も寝てしまい、私もじぶんの部屋でぼんやり転がっていると、とつぜん、「きやッ」

というような短く鋭い悲鳴が聞えて来た。節子の声だ。

私は跳ね起きて部屋を飛び出した。鼠や守宮に驚いた声ではない。私はとつさにそう思った。急いで廊下を曲つた角の六畳間、いつか二人が口論していた部屋の前まで来ると、閉め切つたなかでどたりと人の倒れる気配がし、ついで痰が咽喉にからんだような苦しげな老人の呻き声が聞えた。

どうしたのだろう。

私はてっきり老人の身に何事かが起つたのだと判断して声もかけず、がらりと障子を引きあげた。部屋いっぱい溢れている螢光灯の白い光がさつと廊下に流れ出た。——どうしたんです？　というおとしたがそれは声にならず、私は息を呑んでその場に棒立ちになった。一步も部屋へはいることはできず、ただ目だけがそこに繰り展げられている光景に対して大きく見開かれただけであつた。

節子は髪を振り乱し、朱い唇をきりきりと噛みしめていた。スリープレスのワンピース



から長く伸びた二本の腕は、武林老人の襟髪を把え部屋の中央にしっかりと引き据えていた。渾身の力を両腕に籠めて老人の抵抗を封じている節子の目には一種の笑みが湛えられて、照り輝やく電光の下に異様な鬼気を醸し出していた。そのときの節子の目を私はいまだに忘れることができない。それは楽しんでいるようでもあり、また苦しんでいるようでもあった。残忍なようでもあり、またその残忍なじぶんの心をみずから恥じているようでもあった。いわば節子という女の心に果喰う一切の謎が、その小さな瞳に封じ込められ、光っているように思われた。

いっぽう俯向けざまに畳に押し伏せられた老人のほうは、横に捻じ向けられた顔を醜く歪め、

「う、う、うウ」

と呻きながら、懸命に起き上ろうともがいているが、それははかないあがきだった。争うはずみにちぎられたのだろう、弁慶縞の浴衣の片袖が腕にからまってますます動きがとれなくなっている。しかしばたばたと畳を蹴る足は案外に太く、柔らかそうな脂肪に包まれているのがかえって無惨だった。節子の腕に力がいいるたびに、

「う、う、うウ」

と唸りながら、なんとかこの桎梏から逃れようと身悶えするばかりで、もはや顔勢は蓋うべくもない。

これに対して節子のほうは余裕綽々、手さぐりで掴まえに来るのをそのたびに体をよじらせて避けながら、

「さ、どう？ これでもあたしのことぶてるの？ ぶてるものならぶってごらんさい。女だと思って急に手を挙げたりして、あたしあんたにぶたれる覚えはありませんからね」低い、刺すような語調でいい放つと、矢庭に老人の上に跨がろうとした。

が――。それまで逡巡していた私が思い切って踏み込むのと、節子が私を認めたのとが同時だった。

「あら！」

さすがにぱっと赧くなり、露わになった膝頭を服の裾にくるんだ。そしてもうぐったりしている老人を邪檻に突放すと、せせら笑って、

「この人ったら、いい年をして」

と呟くように云った。これはどのようなでも解釈できる言葉だった。節子は私に貞操の危機を防いだのだという印象を植えつけたかったのだろうが、加害者が節子であることは

誰の目にも明白な態勢だったし、ついさっきの文句も聞いているのでせつかくの節子の名科白も私には通用しなかった。おそらく例の話がこじれた揚句、たまりかねた老人が打つてかかるのを、待ってましたとばかりあべこべに突きのめし、腕ずくで黙らせようとしたのが真相だろう。が、そんなことより、私は止めに出るのが少し早過ぎたような、物足りない気持を感じていた。もうあと数秒、私の駆けつけるのが遅ければ事態はもっと興味のあるものに進展していたに相違ない。節子に汚された湯水のなかで、ひとり興奮していたような私の性情からすれば、それこそ金を払っても見物したい好箇な見世物になるはずであつた。しかし、私はうかつにも早く飛び出し過ぎてしまった。もう少しおもてで様子を見ていればよかった。老人の上にのしかかるうとしていた白い膝頭は、スカートの下に隠れてしまってもう見えない。私は形だけは二人をへだてながら、節子が私の手を振り払って立ち上り、ふたたび猛然と相手に襲いかかることを期待していた。そうしたら私はもう邪魔をせず、節子のしたい放題にさせるだろう。

しかし節子は私の切なる願望にそむき、氣勢を殺がれたように黙然と坐ったまま、無表



情に宙を見つめていた。とんだ修羅場を私に見られ、口から出まかせの科白を吐いた照れ臭さをそんなふうにしてつくろっていたのかも知れないのである。下宿人のいるときに老人を怒らせ、しかも不用意に悲鳴まで挙げてしまったのは、節子にしてみればくやんでも

足りない計算違いであつたろう。せつかく老人に手を出させながら、思わぬ邪魔がはいって、嗜虐の悦楽をほしきままにすることができなかつた。老人を捻じ伏せていたときの節子の、あの複雑な目の色を私は想い出した。「ま、事情はよく知らないけど、ケガでもす

るといけないから」

私は、そんなことをいって見たが、誰も答えはしなかつた。

老人は畳に打ち伏したまま肩で荒い呼吸をしていた。助け起こす者もいなかった。三人三様の心を抱いたまま、重苦しい時間の経過に耐えているだけであつた。

やがていちばん先に老人がよろよろと起き上り、

「わしはもうなにもいわん。今にわかるときが来る」

という一言を残すと、柱や簾筥につかまりながら自室のほうへ引き返していった。ここ数年来の失明ということでカンが悪く、私が傍にるのがわからないのか、それとももうものを云う元気もないのか、片袖がだらりとぶらさがった浴衣の肩のあたりに悲惨な晩年の佇びしさをいっばいに漂わせながら、私たちの前から消えていった。

その夜も更けて、武林老人が苦しい眠りに就いたと思われる頃、なんの前触れもなく節子がひっそりと私の部屋にはいつて来た。

「先程はほんとにお騒がせして、申し訳ありませんでしたわ」

節子はまずそう云って丁寧にあたまを下げ





た。さっきとは別人のような変りよう、ふだんの節子に戻っていた。

「あたしのこと、ひどい女だと思ひになるでしょうね」

先に口を切ったのは節子であった。紋切型の科白だが、この場合、こうでも云うよりほかしようがないだろう。

「そうですね、だいいち、やはりこの家は奥さんのものなのでしょう」

私は無愛想にずばりと云った。今夜の喧嘩の原因は決してあんたのいうようなものじゃない、確かにじぶんでも認めているとおりの、あんたはほんとにひどい女だ、おれはなんでも知っているんだぞという意味を籠めて、節子の痛いところを突いたつもりだった。

「いつかもそれをお聞きになったわね」

手の甲を口に当てて節子は笑った。

「これはあの年寄りが、九州の県庁に居りました頃、業者の入札に助言して談合させ、その謝礼金を本にして建てたもののだそうです。勿論それだけではなく、恩給や退職金も注ぎ込んだでしょうが、万一のときを思つて、息子の名にしておいたのでございましょう」

「談合」という箇処に、ことさらにアクセントを置いて節子は語った。私は全身の血が凍

りつくようなショックに堪えながら、じっと上眼づかいに相手の様子を窺った。一瞬心なしか節子の目のなかに、さっき武林老人を押え込んでいたときと同じ翳が、さっと光ったように思われた。

ああ――。

私は思わず絶望的な吐息を洩らした。

知っている！

仲間の顔がひとつひとつ、私の脳裡に浮んでは消えた。つい二ヶ月程まえのこと、ある官庁の入札に応じたとき、私は会社には内密で誘われるままに談合の仲間入りをして、僅かながらも談合金なるものを受取っていたのだ。あのときは会社でずいぶん大きな口をきいた。高利潤を追求し過ぎるから落札できないのだと、かえって幹部のやり方を批判して彼等を僻易させたのだが。絶対に洩れる気遣いのない秘密であった。節子はどこからそれを嗅ぎつけたのか。下宿の主婦に気をつけろ。それが借間住いの金言なのだ。とくに鍵のかかるようにできていない日本間の場合、節子はその気になって調べれば、会社には置いておけないメモの類などを探し当てることは容易だろう。二食付きで一万円という、われわれの身分としては贅沢な下宿住いをつづけていられるのも、まさに悪銭身につかずの

例えどおりだった。黙りこくった私に向つて節子はさらに語を継いだ。

「あの人は若い頃からお金を貯めるのに夢中で、高利貸のようなひどいこともしたそうですわ。目のつぶれたのもその酬いだなんて、大きな声じゃ云えないけど、むかしを知っている人は笑うんです」

「貸したまま、コゲついているというようなのは無いんですか」

私は辛うじて捲き返しに出た。

「さア、くわしいことはわかりませんが今でも毎月返して来る人もいるのよ。でも、もとはもうすっかり取ってんじゃないかしら」そして少しも悪びれずに、

「そういうのはあたしが預ってますの。どうせ一生面倒は見られませんが、いずれは本人の布望どおり、どこかのお世話にならなければいけないんだから、そのときの足しに思つて。目が不自由なのにお金持っていたって使い途もなし用心が悪いだけですものね。だから本人には送つて来ないということにしてりますのよ」

「しかし奥さんとしては、もう武林さんの生活に責任を持たれる必要はないわけでしょう」

私は節子の心を見透したつもりでそう云つ



た。

「それは、理屈はそうでしょうけれど」

私の書生論を蔑むような笑いを洩らし、  
「それではあたしの気も済まないし、世間も通りません。ここにいろかぎりにはできるだけのことをしてやりたいと思っっているのですけれど——」

立派な云い草だった。どこへ出しても恥ずかしくないものだ。しかし、できるだけのことはなにか。田舎の小役人が一生一代の汚職を犯して手に入れた金に、恩給の前借りまでしてやっと建てた家を奪い取り、その債権を横取りし、小便風呂に入れ、揚句の果てに暴力さえ振いながら、世間には立派に通用する澄ました顔をしている節子。医者には見放され、食費しかかからない老人の生活などいくらもかかりはしないだろう。それだつてもとはといえば老人の金だ。世話を焼くためではなく、節子はじぶんの嗜虐性を満足させる好箇の対象として、老人をこの家に置いているのだと私は思った。節子という巧妙な飼育者に依って、彼女の意志ひとつでどうにもなる存在として養われているのがあの可愛想な武林老人なのだ。なにかの都合で老人の必要がなくなれば（例えば再婚でもするときには）節子はさっさと彼を療養所か養老院に

送り込んでしまふに違いない。どっちみち、節子に損はないのである。世間も法律も、この点にはきわめて寛容である。

畜生なんでも知ってやがると私は思った。

#### 四

それから一ヶ月ほどは何事もなく過ぎ去った。節子はあの夜の暴虐ぶりを忘れたようにすくなくとも私の見ているところでは、よく気のつく優しい女性に立ち返っていた。

老人の髭を剃ってやっている姿を見かけることもあった。老人は相かわらず額に深い立皺を刻み込んだまま、節子の手に顔を委ねていた。あの夜の格闘のことは、いっぽうが盲目のためにさほどのこだわりを残さずに済んだようであった。

「談合」のことが節子に知られると思ったのは私の取越苦勞であつたのかと、吻と胸を撫でおろすきもちだったが、しかし節子の私に対する態度は徐々に変わってきた。良夫といっしょに遊びに行く機会も減らされていった。あの夜私の部屋に訪ねて来た媚めかしい感じが消えて、事務的な下宿の女主人になってしまった節子の胸中を察することは、もうそのときにはできなかつた。「談合」のことで、私は競々とした月日を過していた。

いつそのこと、下宿を変つてしまおうかと思つたが、一度私の胸に芽生えた節子への殺伐な思慕の情が、そうした決然たる行動をとることを妨げていた。

が、間もなく私は、否応なしにこの下宿を引き払わなくてはならなくなつた。暮を前にして、私は突然紋別の営業所への転勤を命ぜられたのである。明らかにそれは左遷だつた。私は暗然として、北海道の長い冬を想つた。仕事の上で失敗もなく、最近成績も向上していたのにどうしてこんな異動が発令されたのか、しかしそれを聞くことはとんだ藪蛇になる怖れがあつた。「談合」のことが、どこからか上司の耳に入つたのだとしか思ひようがなかつた。

私がいなくなつたあとの節子の跳梁ぶりが想像された。邪魔者を追い出して、のうのうとし、思う存分武林老人をいじめつけるにちがいない。私に懲りてもう下宿人は置かないかも知れない。それとも、もつとうすぽんやりした柔道の選手にでも部屋を貸すか。

紋別の佗びしい寮の一室で、私はさまざまに節子の肢態を思い描きながら一人興奮した年が改まると、私は節子の許へ、年賀状に添えて名産の昆布を送つたが、返事はついに貰えなかつた。



戦前の出版  
物に現れた

# 責めの挿絵

山根 豊



上図は、昭和九年頃の報知新聞に連載された神田ろ山氏の「姫妃のお百」の一場面で、お百にそそのかされた桑名屋徳兵衛が、土蔵の中で女房を責めているところ。絵は当時有名だった大橋月皎画伯の筆である。

中の図は、題名も筆者も忘れてしまったが「吊り」の対象に並べてみた。当時はこの作品も得難いものの一つだったが……。

下図は三上於菟吉氏の「新月風流隊」昭和九年の講談倶楽部に掲載されたもので、絵は美人画の大家、山川秀峰画伯の筆になるもの。線の柔らかさ、姿態のよさは流石である。



或るポーズ

吉田久











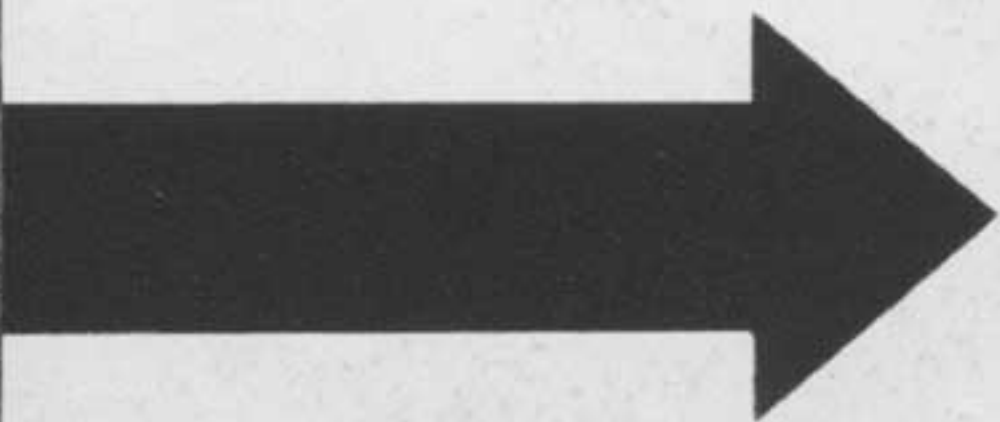




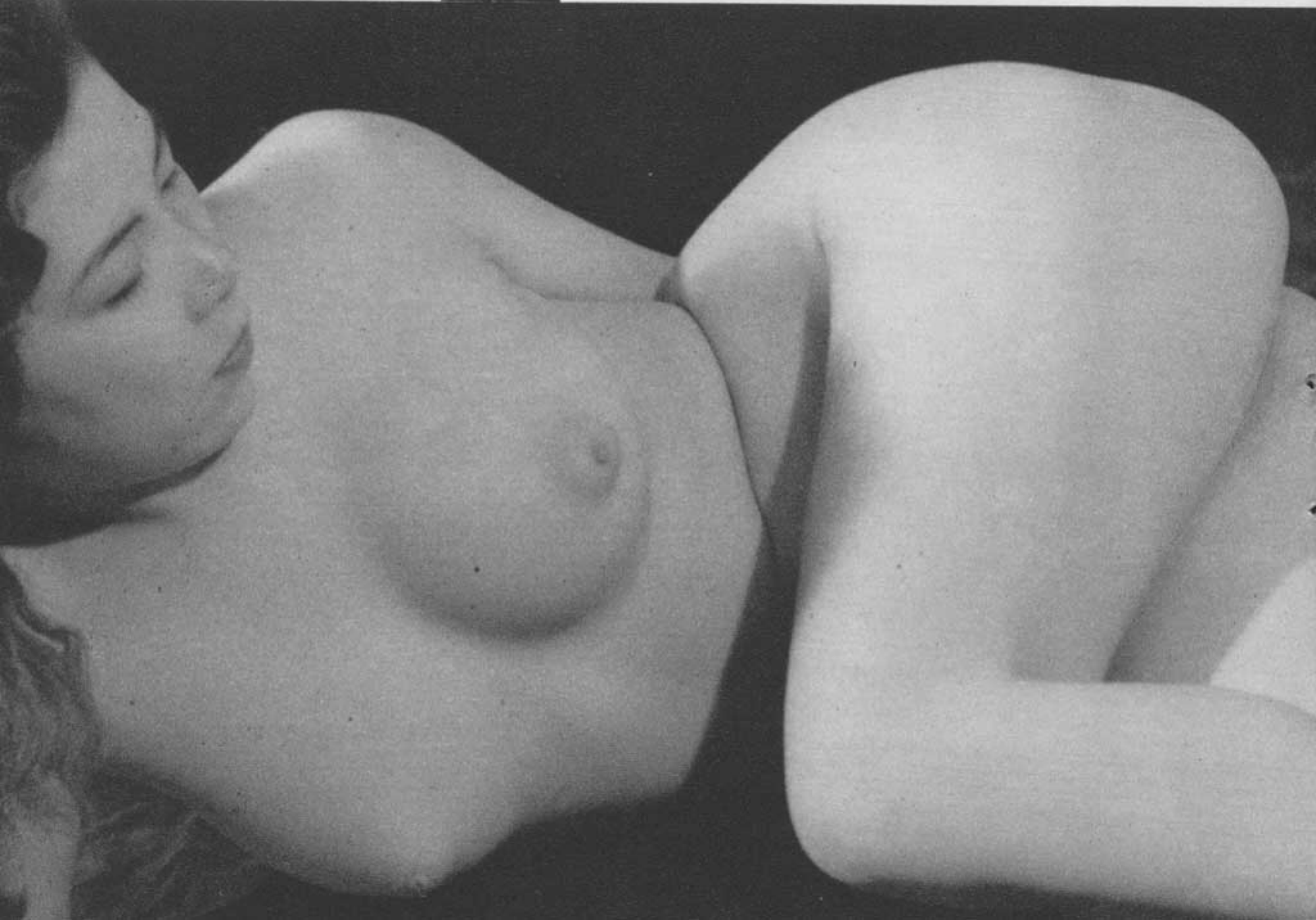
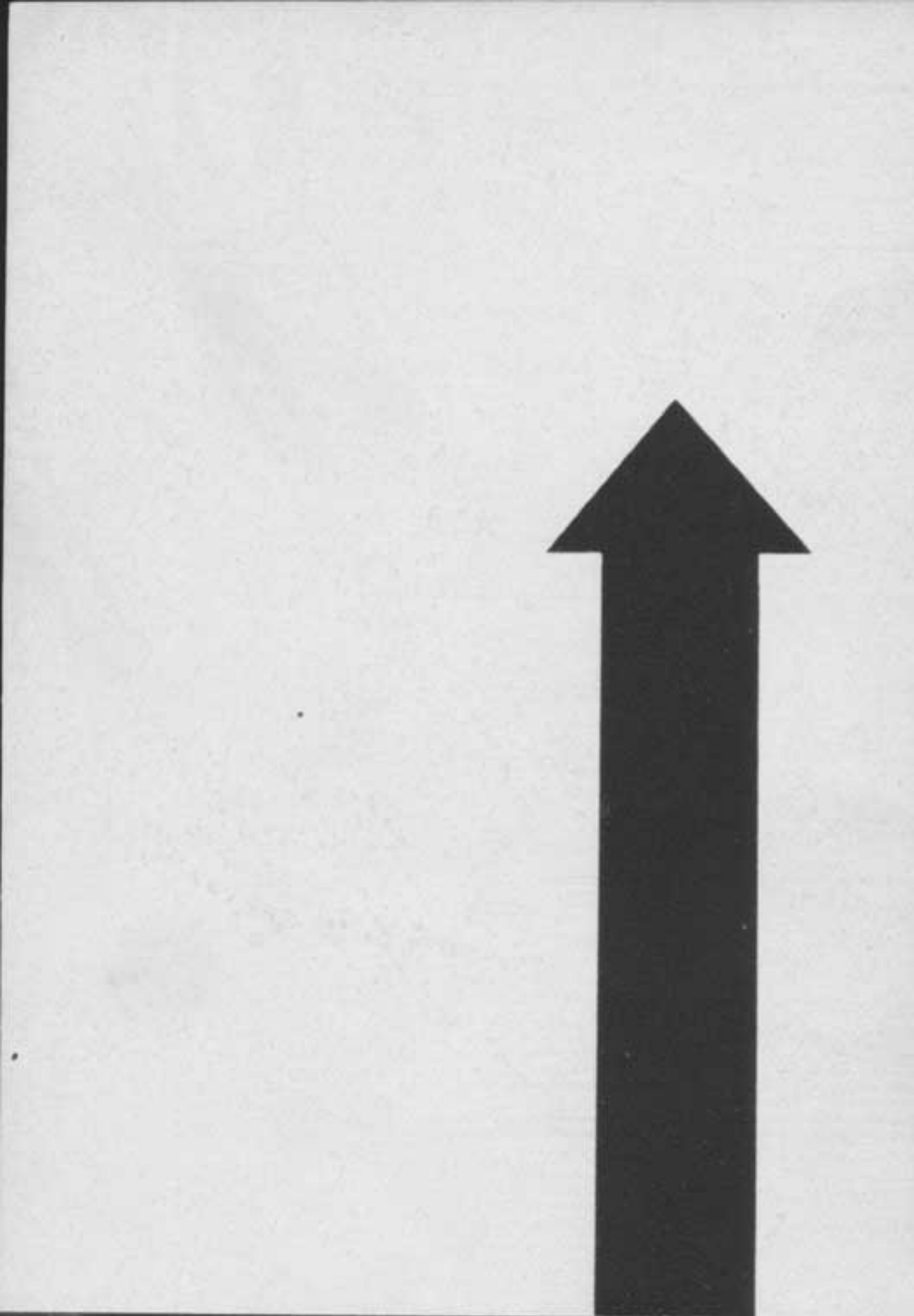


















# 鬼髪の白痴の執念

☆作・藤見 郁☆

☆画・堂 昌一☆

## ① 袋の中身

ギギギーという扉のあく音がした。重くきしんだ、いやな音だった。つぎに、どたり、どたりという、これも鈍重な足音がひびいた。それが近づいてくる。

——おお、帰ってきたのう、春彦……

老婆はソファから腰をあげた。細くしなびた指で白髪をかきあげ、かきあげ、玄関の方へ歩きはじめる。

「おかあさま、ただいまもどりました」

やはり春彦が帰ってきたのだ。裾の長い洋服をひきずりながら、老母は涙ぐんだ。

「おかえり、春彦。それで、きょうは、うまくいったかえ？」

老婆はきいた。細い視線が、息子の肩にかつがれて、いる大きな布袋をみあげて、針のように光った。

「はア、おかあさま。きょうはやっと、うまくいきましたよ」

春彦は肩の布袋を、どっこいしょと床におろした。すると、その袋の中身が、もぞもぞとうごいた。春彦は袋の口を結んである紐を解いた。口を大きくひろげて中に詰めこんだ収獲を、老母の前にひきだす。

それは——若い女だった。美しい娘が手足を縛られ、猿ぐつわを噛まされて押しこめられていたのだ。





## 2 狂笑

春彦が「アアア！」と笑った。  
老婆も「ヒヒヒ！」と笑った。

「でかしたぞ、せがれ。まちがいない、これはまさしくマリ子だ。あの竜王寺信貴の娘にちがいない。眼もと、口もと、高慢ちきな鼻すじ、父親によく似ておるわ、イヒヒヒ……」

老婆はふかぶかと腰を折りまげ、なめるように娘の顔をのぞきこんだ。

「あッ、あなた方は誰？ どうして私に、こんなひどいことをなさるの！」

竜王寺マリ子は、恐怖の瞳をいっぱいにみひらいて、狂人じみた親子を凝視した。見渡せば不気味な部屋、逃げようとしても、身体のはうばわれている。両手両足には、厳重な縄がかかっている。

マリ子は一流のファッションモデルだった。今夜、赤坂のナイトクラブで開催された「シャンソンとモード・ショウ」に出演し、帰宅が深夜になった。車をおりて自分の家の門に立ったとき、いきなり春彦に襲われたのだった。



## 3 吊られた白鳥

塵と埃と蜘蛛の巣だら

けの室内である。壁はくずれ、床には穴があいていた。それでも昔は、ぜいたくな洋間だったのだろう。天井からは小さなシャンデリヤが吊り下がり、その面影はのこっていた。

老婆は、破れたソファにふたたび腰をおろし、隙間風のようなしわがれ声で、白痴の息子に命じた。

「さあ、これからこの娘を責めるのじゃ。ヒイヒイと泣き声をあげ、この肌が血の花ざかりになるまで、いじめつくさねばならぬ。そうじゃ、このわたしが四十年前に、竜王寺信貴、つまりこのマリ子の父親に責めさいなまれたように……」

「はア、おかあさま。そしてそれがすんだら、このひとを、ぼくのお嫁さんにしてくれるんですね？」

春彦はうなずいた。春彦のブヨブヨと白い芋虫のような指がマリ子の頬を愛撫した。







「ああ、お嫁さんにでも、なんにでもしてあげるよ。だから、さあ早く、裸にむいて仕事を始めるのです」

息子の唇に微笑がうかび、母親の命令を、忠実に実行しはじめた。裸にするため、手を縛った縄を一度解き、それからマリ子の着ているものを、つぎつぎにむしり剥いでいくのだ。

黄色い悲鳴が、マリ子の口からほとばしった。スリップが裂かれ、ブラジャーがひきちぎられた。白痴男の腕力はそれだけに集中した。もどかしい速度ながらも、異常な強さだった。あらわになったマリ子の白い腕は、人形の手をもぎとるように背中へねじあげられ、重ね合わされた両手首に、ぎりぎり縄がからみついた。

「ああッ、痛いッ——マリ子も抵抗した。理由はわからないが、身に切迫したこの危機から、逃げださねばならない。

だが、暴風のような馬鹿力の前に、たちまち押し潰された。くくりあげられ、縄尻をしぼりあげられると、乳房のなかにぎゆうッと縄が喰いこんで、マリ子は思わずうめいた。

「おお、さすがにいまどきの娘じゃ。よい身体つきをしておるのう。なんとまあ、長い脚じゃこと。これ、春彦、娘の身体がもつとよく見えるように、シャンデリヤの下に立たせなさい」老婆は感嘆し、それから命じた。

「アアアイ」と春彦は返事し、踏み台にのったり、いろいろと苦心した末に、マリ子の縄尻をシャンデリヤにつないだ。

「ああッ、やめて、あぶない！」

頭上をみあげて、マリ子は戦慄した。小型とはいえ、金属とガラスの装飾をつけたシャンデリヤが真上に光り揺れている。

つまさき立ちのまま、マリ子は動くことができない。古い天井であった。マリ子が力を入れれば、天井が抜けるか、シャンデリヤを吊るした鎖が、プツリと切れるだろう。そうなれば、マリ子の頭上に落ちてくることは確実である。マリ子は両膝をのばして立ちすくんだ。シャンデリヤに吊られた白鳥だった。



#### 4 あぶら汗

春彦は床の上にぺたりと腰をおとし、まぶしいものを見るような目つきで、吊り下がっている裸身をみあげていた。昏からよだれを流し、鼻の頭をこすりながら「ううう……」という犬のような、うなり声をあげている。

さすがに均勢のとれたモデルの身体だった。よく磨かれた肌には、匂うような光沢があり、それだけに、その柔肌をしめあげる縄は、蛇のような残忍な力を秘めているかにみえた。

マリ子の額から、汗がにじみだした。羞恥と苦痛のあぶら汗だった。悪夢ならば早くさめてくれればいい、と念じた。頭上のシャンデリヤが、ぎしぎしと不気味にきしんでゆれた。膝が疲れてきた。だが、腰をおとせば、縄尻がひっぱられ、鎖が切れてシャンデリヤが落下してくる。うしろ手の手首は吊られたままの形だ。

「あ、あなた方は、どうして私を、こんなに苦しめるんです！」

マリ子はうめいた。マリ子にはそれがわからない。身に覚えのない、この危難だった。

「フッフ……それを知りたいか。知りたくば教えてあげよう。——いまのそなたの姿、それはいまから四十年前の、わたしの姿なのじゃ。当時二十才だった私は、そなたの父親のために、日毎夜毎、そういうみじめな恰好に縛られて、なぐさみものにされたのじゃ。それ、わたしの

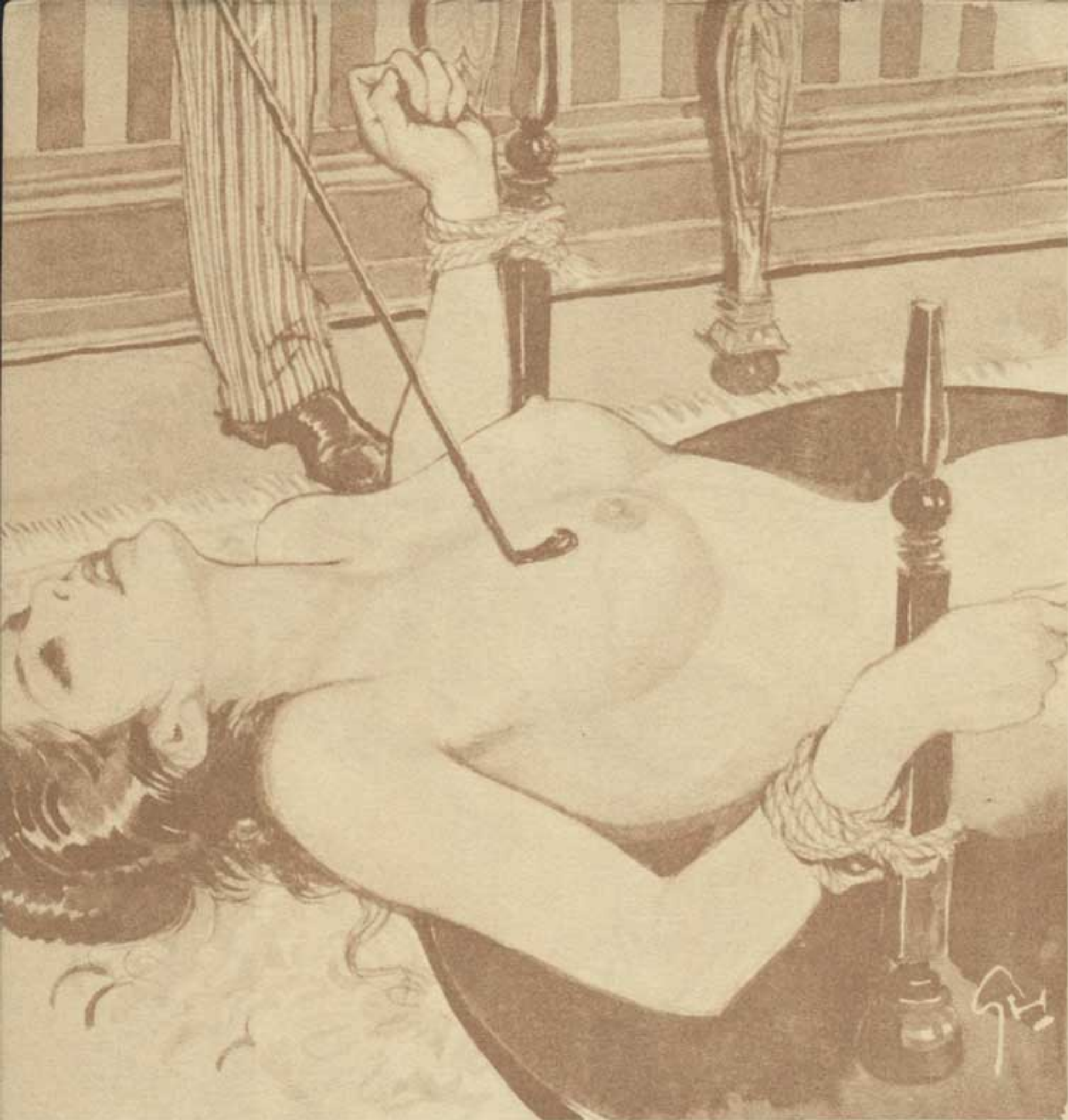




背中をみるがよい」

老婆は着ている洋服の襟ボタンをはずし、肩からそれを脱ぐと、あらわになった背中を、マリ子の眼の前に示した。

「あッ、それは！」——マリ子はさげんだ。



## 5 若様の悪戯

老婆の背中いっばいに、醜惡な刺青

がぎざまれていたのだ。肉が落ち、背骨がつきでている背中なので、なんの図柄かはわからないが、一見して稚拙な、しろうとが悪戯したものとわかる刺青だった。

老婆は、憎惡に満ちた眼光で語りだした。

「——四十年前、そなたの父の竜王寺信貴は、華族の御曹子で大きなお邸に住み、わたしはその小間使だった。いまでこそこのように枯れ果てたが、その頃のわたしは、それは愛らしい、汚れを知らぬ小娘じゃった、ウフフフ……」

老婆の名は、三千代といった。華族の若様で、わがままいっばいに育った信貴は、この愛らしい小間使の三千代を、生きた玩具として扱ったのだ。なんの粗相も手落ちもないのに、裸にむかれて縛りあげられ、笞で叩かれた。主人の眼を盗んでなまけたりしたことなど一度もなかった。それなのに、テーブルを逆さにして天井にむけた四本脚に、三千代の手足は縛りつけられ、笞の先で突きまわされた。すべては信貴の性癖であり、悪戯なのだった。莫大な財産をもち、仕事はなにもなく、あり余るひまをつぶすための、あくどい若様の遊戯だった。

三千代はしかし反抗したり、その命令にそむくことはできなかった。当時の華族邸につかえる小間使や女中は、奴隸に似ていた。信貴の心に巢喰う嗜虐の炎は、ますます燃えさかった。







## ⑥ 白髪の執念

どこから手に入れてきたのか、信貴は刺青道具の一式を持ちだし、三千代にむかって「お前の背中に刺青するんだ、そこへ寝ろ」と、駄々をこねた。

「そればかりは」と、青くなって哀願する三千代を、ソファの上に俯伏せにすると、もがく手足をがんじがらめに縛りつけた。そして残酷にも、三千代の背面いっぱい、刺青針をぞんぶんに突きまわしたのである。

「ヒイ、ヒイ、ヒイッッ！」

三千代は泣きさけび、もがきまわった。だが、信貴は容赦しなかった。なおさらにおもしろがった。三千代の背中に白い部分がなくなるまで、刺青針の遊びをやめなかった。肌は血にそまり、ついには熱をだした。

その結果、三千代は嫁にいけぬ身体になった。信貴の両親も、これを見てさすがに仰天し、あわてた。そこで郊外にある竜王寺家の別荘と、かなりの大金を与えて、この不詳事を内聞にするようにと、いいふくめた。

三千代は泣く泣く竜王寺邸を辞して、与えられた別荘にとじこもった。中年になって一度縁づいたが、それはやはり不幸な結果に終わった。白痴の男子を一人生み、それが三千代の唯一の望みになったのである……。





## 7 のけぞる乳房

老婆のしなびた手が、マリ子の胸に触れてそろそろと撫でた。

「フフフ……すべすべと美しい肌よのう。わたしの若いときそっくりじゃ。それにしても世の中も変わったもの。華族さまの御令嬢が、ファッションモデルとはの。この白絹のような肌を、ずたずたに切りさいなんだら、さぞ父親がなげくじゃろう……」不気味な老婆のつぶやきだった。そのつぶやきに呼応するかのように春彦が口をあけ「アアア……」と、うつろな声で笑った。

「ゆるして！ ゆるしてください！」——マリ子は髪の毛を逆立ててふるえた。

「ゆるすわけにはいかぬよ。お前の父親は、わたしの一生を墓場にした。父親の罪を娘のそなたが、あがなうのじゃ。それ、春彦、用意してある皮の鞭で、この娘の背中を打ちのめせ！」

残忍な老婆の言葉に、春彦はのろのろと立ちあがって皮鞭を握った。

しらじらと光り、魚の腹のようになめらかなマリ子の肩さきへ、白痴の鞭がふりおろされた。金属的な悲鳴が、マリ子の口からふきあがり、老婆は耳をおさえた。

鞭はつづけざまになり、マリ子は乳房を上へのけぞらせ、また腹をかがめた。縄尻が引っぱられてシャンデリヤが激しくゆれた。天井からの鎖がギリギリとよじれた。

「ひいーッ！」ひときわ鋭い悲鳴があがったとき、ついにその鎖が切れた。シャンデリヤが、マリ子の頭に落下してきた。マリ子は倒れ、気を失った。室内がまっくらになった。暗闇のなかで、老婆がさげんだ。

「春彦、ろうそくを、早くろうそくに火をつけるのじゃ！」



「——どうじゃ、マリ子。わたしが竜王寺信貴を恨み、この四十年間、一途に復讐を誓って生きてきた気持ち、そなたにもわかるであらう。フフフ……」

老女三千代の長い話は終わった。あらたな憎悪に燃える眼が、マリ子の顔を鋭くにらみあげた。

「知りません！ あたし、そんなこと、ちっとも！」

マリ子は激しく首を横にふる。なんという執念！……





## 8 苦悶の白獣

息をふきかえしたとき、マリ子の身体は仰向けに古テ  
ーブルの上に縛りつけられていた。乳房の上にかかった  
縄目の間に、一本のろうそくが立っている。ゆらゆらと  
ゆれるほの赤い火が、室内を洞窟のように照らした。

「あ、あ、熱いッ！」マリ子のもだえ、炎がゆれた。

「うごくではない。ろうそくが倒れる。倒れれば肌を焼  
くぞよ」———そういいながらも、老婆はべつのろうそく  
に火をつけ、その炎をマリ子の乳房に近づけるのだ。

「ううッ、熱うッ！」のけぞって絶叫し、あまりの恐怖  
に、マリ子はまた気が遠くなっていた。

失神の間に、どれほどの凌辱が加えられたか。腕が、  
肩から抜けるような疼痛に、マリ子は正気にもどった。

マリ子の両腕は柱を抱きかかえるような恰好で縛りつ  
けられ、両足もまた、柱をはさんでくくりつけられてい  
た。生け捕られた白い獣の恰好だった。

荒廃した別荘の一室で、この深夜、復讐に憑かれた白  
髪のお婆が、白痴の倅をそのかして、美しい裸身を責  
めなぶる光景は、鬼気迫り、妖気ただようものだった。

「さあ、この白い背中彫るがよい。この女はおれのも  
の。春彦のものだとな、イヒヒヒ……」

呪詛の言葉を吐きだす老婆。春彦はケケケケと笑い、  
木にとまった蟬のようにマリ子の背中にとりすがると、  
その首すじのあたりを、ペロペロとなめまわしはじめる  
のだ。

「これはぼくのお嫁さんだ、ケケケ、ぼくのきれいな  
お嫁さんだ！」

と、うれしげにあえぎながら……。

———終。





囚われの構図

深森映士



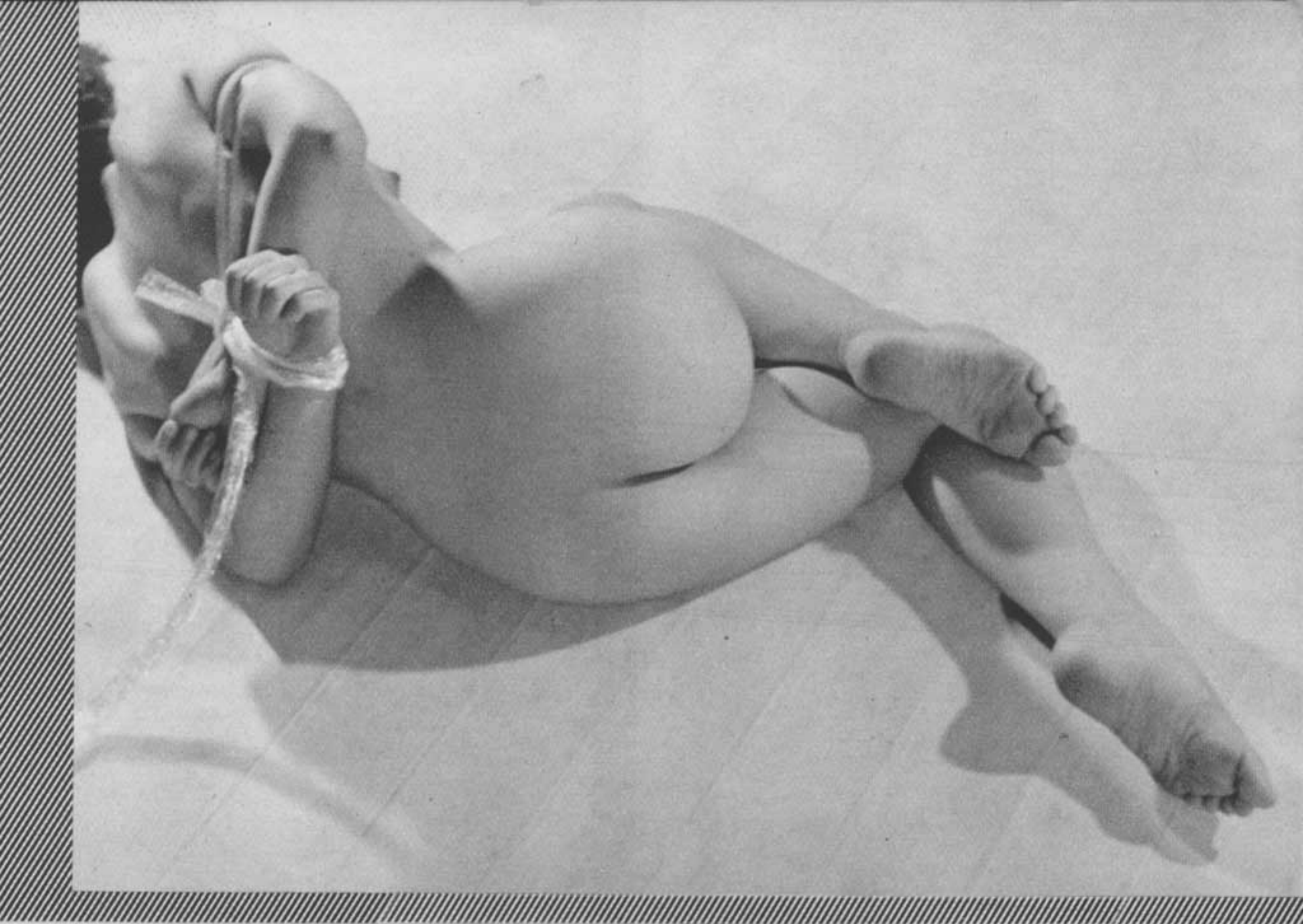












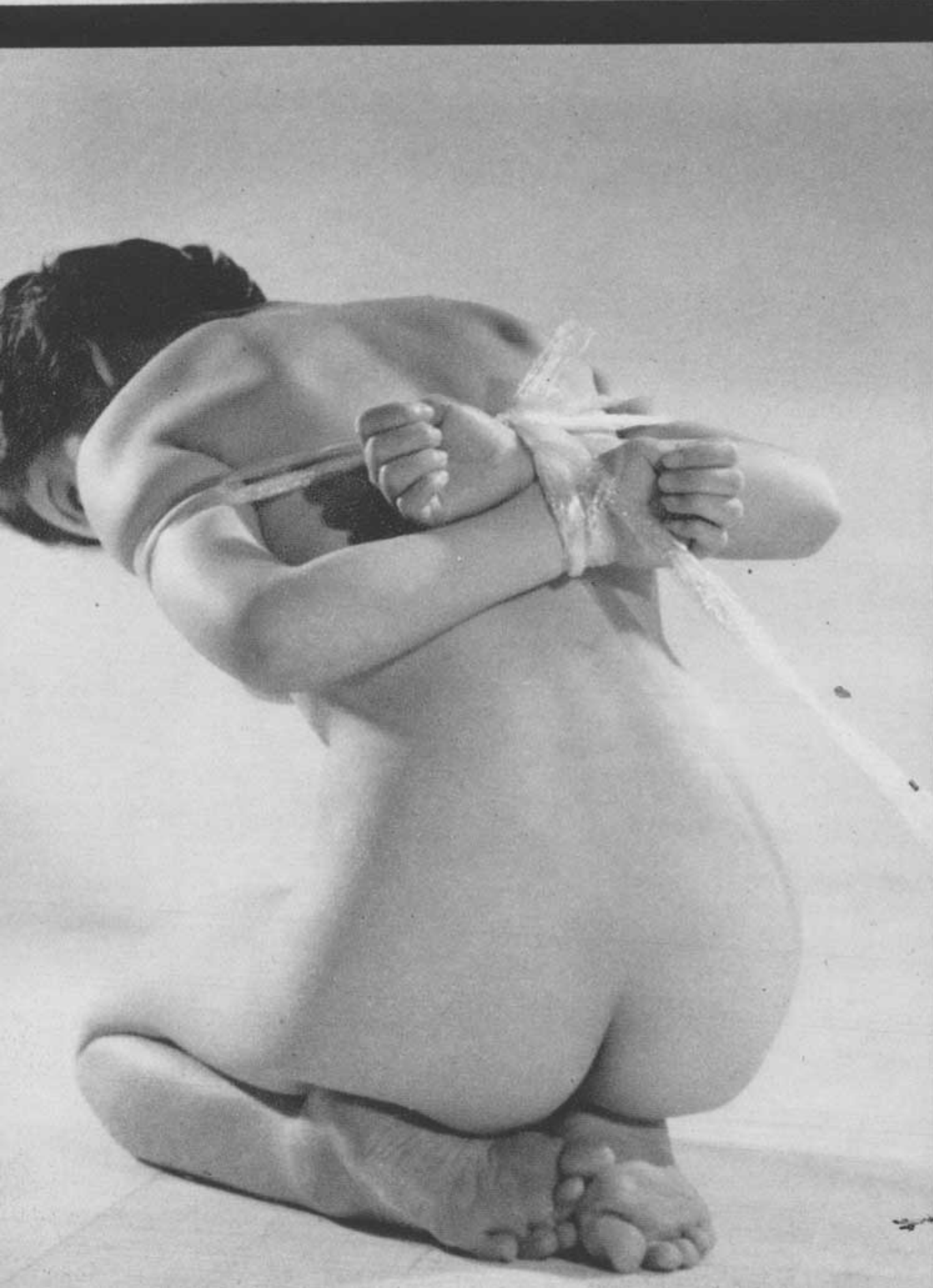


















原

稿

募

集



★本誌と読者との間をより以上緊密にし、愛読者の「裏窓」としてますます発展する為、大巾に読者に頁を開放することに致しました。

★他に類例のない雑誌の形態を作り出すためにも、愛読者の皆様の誌上への御参加をお待ちします。

★読者随筆★

(四百字詰 原稿用紙)

5枚(10枚まで)

本誌に適する、風俗、社会、身边雑記、感想、見聞記等の随筆。思いついたままを書いてお送り下さい。原稿料は一枚百五十円。

★告白体験記★

(四百字詰)

20枚前後。

真実の告白手記、得がたい体験といったものを求めます。本誌むきの原稿をどしどしお送り下さい。原稿料は一枚につき百五十円。

★創作★

(四百字詰)

25枚まで。

S、M、その他を扱った作品をお寄せ下さい。妖気ただよう、異色あるものを募ります。稿料は一枚につき百円(二百円)。

★読者短評★

(四百字詰)

1枚(3枚程度)

本誌最近号に対する批評をお書き下さい。全般的な批評や、個々の作品、挿絵、編集のあり方等について、いろいろ御不満な点や御希望や、良かったと思つたことなどがあると思います。が、真面目な短評をお寄せ下さい。

これに対する御礼は、郵券代として百円と本誌一冊(短評掲載号の次号)をお送り致します。

★裏窓雑報★

(四百字詰)

3枚(20枚程度)

映画、演劇、テレビ、ラジオ、週刊誌、月刊誌、新聞記事、その他における裏窓的な見聞をお知らせ下さい。週刊誌、新聞の場合は切り抜きをお送り下さっても結構です。いずれの場合でも、必ず次の点を明らかにすること。「新聞・雑誌」の場合は、新聞・雑誌名、作者・筆者名、年月号。「映画・演劇」の場合は映画社名、劇場名、監督、演出者名、題名、出演者、日時等。「テレビ・ラジオ」の場合は、局名、題名、演出者、出演者、日時等。

原稿料は一枚につき、百円(百五十円)。

◎応募原稿はそれぞれの種別を朱書すること。

◎原稿は第五種郵便になりますから、百グラム毎に八円の郵券を貼り、開封して投函して下さい。

◎原則として、応募原稿はお返し致しませんから、必要ある場合はコピーをとっておいて下さい。

◎原稿の送り先は左記の通りです。

東京都中野局区内江古田一の二三〇二

久保書店内 裏窓編集部



# 女中になりたい男の話 2

阿麻哲郎

江淵晃夫・画



■誇り高い女主人とピチピチした若いメイドと  
■の二人に仕える幸運を私は胸躍らせて願った■

## 1

アメリカ婦人と日本婦人と、どちらがより好ましいかにはここでは触れない。

アメリカ婦人だとばかり思いこんでいた女主人が、じつはまぎれもない日本女性であったことに、ぼくは失望しなかった、ということから、日ごろのぼくの西洋女性崇拜のアイディアは、さして根の深いものではなかったというふうにいえるかもしれない。

しかし、ぼくが感激のあまり、少しのためらいもなしに、彼女の足元の床の上にじかにすわることができたのは、彼女が日常生活の上で自然に身につけた西欧的雰囲気のおかげで

あつたに違いない。

女主人は一度は椅子をすすめてくれた。ぼくも一度は椅子に腰をおろした。そして履歴書を差しだした。履歴書には小学校卒だけの学歴と、雑役や見習いの職歴しか持たない無気力な男のたどたどしい筆跡があるだけで、その書面に見入る気位の高そうな女主人のようすを見守っているうちに、ぼくは全能の女神の前で、虫けらにもおとる無能力な畜獣に化してもしたように、からだが緊張のあまり硬直した。

思わず立ち上がり、直立不動の姿勢をとった。女主人と対等に座して向かい合うなどは、かりそめにもできることではなかった。





女主人は書面から目を離し、しずかにこちらを見た。その目に魅入られてほくはへなへと床の上にすわりこんだ。

ちゃんと椅子があるのに、その椅子をさけて床の上にじかにおせんずわりでかきこまつたほくの様子は、きつとおかしなものであったに違いない。

「ご主人さまの前では、ひざまずくかキチツと立っているか、どっちかしてなきゃならなんでしょう？」

おかしさついでに、まず最初にこのおかしな作法上のことでほくはたずねた。おかしな問いであるというよりは、女主人の機先を制するみたいな形でもあった。

女主人は笑い出した。笑いながら自分の足元の床の上にかきこまっている間の抜けたジャンパー姿の男を見おろしている。そしてそのまま、お世辞にも、「そんなところにおすわりにならずに、どうぞ、この椅子の方におかけなさい」とはいわなかった。相手の男のようすが、もすこし気の利いたような気配でも示していたら、この程度の挨拶ぐらいはいつてくれただろうに……。

「まだ採用するかしないか、決まったわけじゃないんだから、それまではだれでも対等なのよ」

と女主人はいつてくれたが、足元のほくにお立ちなさいとはついにいわなかった。

「給料が安いわよ、よくって」

「はい、もう使ってさえもらったら、いくらでもいいんです」

「そう。じゃいうけど、住み込みで月四千円……それとね、朝が早いんだから、四時には起きてもらわなくちゃね、あなた、起きれる？」

「はい、起きれます」

とっさにほくはそう返事した。朝起きがにが手のほくは、起きられるかどうか、じつは心許ない限りではあったが、この場でそれのためらう余裕もなく、第一、ご主人がぐっすり朝寝を楽しんでいる時、犬を散歩させ餌をこしらえ、毎朝入浴するのが習慣らしい女主人のためにボイラーをたき、陽が高くなってから起き出してくる女主人の前に手を仕え、お早うございます。と挨拶をする朝の日課のことを思うと、四時であろうが三時であろうが、勇んで起きるだけの励みはちゃんと持っていた。

ところで、ほくは女主人の年令のことにふれるのを忘れていた。というのは、ほくにだって彼女の年令の見当がよくつかめなかったからでもある。



あてやかな裾にまで届く幅広のガウンを着こなし、濃い目の化粧に隠した実際の年令は、かなりふけたものかもしれないが、いちおう見たところ、三十三、四歳の年輩には見られた。が、実のところ、はつきりした見当はつかなかったのである。

「お坊ちゃまかお嬢さまか、いらっしゃるんですか」

「いいえ、一人もないわ」

ということ、殊にお嬢さまがいないというのに、なんとなく失望させられはしたが、しかし、欧風の様式を身につけた気位の高い中年の美しい女主人は、マゾヒストにとつて、ただそれだけで充分にドミナたるにふさわしい資質を備えていた。

## 2

応募者は五、六名は来ていたろうか。それからさらに、向い合わせのための電話が、ひっきりなしにかかってきた。

メイドが電話口で答えている。

「はい、そうです。……成城学園前駅でおられて、北口の通りを線路沿いに喜多見の方へいらっしゃって、それから……」

それから、それから、ほくはそれからどうなるのだ。

メイドのてきばきとしたあの応答ぶりは好ましい。その声につられて、まだかなりの数のドッグボーイ志願者が集まるだろう。現にほくのあとから五、六名は来ていた。みんなはつらつとした若者たちだ。かれらは、働けるものなら、本気で働く気である。新聞広告ひとつで、たちどころに人は集まる。たとえドッグボーイだろうと月四千円の薄給であろりと人は集まる。

四千円でもってひとりの青年を拘束できるという事実は、女主人にとってはなんと愉快な楽しみではなからうか。

気晴らしに銀座へ出て、それから食事をする。と、もう四千円では足をだしてしまふ。

一食の外食代に当たるか当たらずか、おこづかいのごく一部でもって、ひとりの青年が拘束される。と、これほどおもしろい遊びはあまりあるまい。

有閑夫人にとっては、しかしこれは当りまえな日常のことだ。あらたまつての、何の興味も刺激も感じてはいぬかもしれない。

彼女にとっては、はいて捨てるほどいる失業者たちは、たんに消耗品でいどにしか映ってはいまい。ひとりのドッグボーイがやめてくにへ帰る。ドッグボーイという日用品の一部品をとりかえるだけの意味しかここではな

い。

ほくのあとから次の青年が、それからまた次が……かれらはみな美しい審判官の前でかくしゃちこぼり、「はい、わたしは犬が大好きです。からだもこの通り丈夫ですし、一生懸命働きます」と、誓ってみせていることだろう。ゆったりとソファに足を組む女主人の、征服者としての誇りと優越感が、彼女の表情にやさしげな微笑をうかばせる。

「はい、もうかなり来てらっしゃいます。しめきりは四時ですから、いらっしゃるんでしたら……いえ、まだ決定はしていません。そうです。成城学園、北口を左へ、それから……」電話口でのメイドの声。

それから、それから、ほくはそれからどうするつもりだったのか。

いずれにしても日ごろ苦労症なほうではあったが、このときには採用決定の自信がほくには十分あった。

いくらなんでも、ほくのように彼女の足元に平伏するようにして面接を受ける受験者はいるはずもない。履歴書に書いた亀文という名前も、あくまでも女主人の便利のためを思つてほくが考えた名であった。

「ほく、お願いがあるんですが」面接のときにおずおずと試みてみたのだっ



た。

「何ですか」

「ぼくは小さいときから、カメ、カメで通っているんです。だから……」

「だから？」

「ぼくをやっぱりカメ、カメって、呼び捨てに呼んでいたきたいんです」

「カメさんじゃなく、カメッていうの」

女主人の意表をつかれたようなあのまぶしいとまどい！

しかし、彼女にとってこれは愉快な発見だった。うやまいたてまつられることは愉快だ。特に女性にしてみれば……。ましてそれをそのまま優越者としての立場を少しもくずす必要もなく、一個の男性を犬と呼ぶときと全く

同じにカメ、カメと呼びつけにできることは愉快だ。「奥様」と男性が呼び、女性が「カメッ」と呼びつける、このくすぐったい快感！

ホホホッ。

女主人は高らかな笑い声を立てることにくぼくかのてれくさをまぎらした。

「まだあなたに、決めたわけじゃないのだから、そうもいかないけど、もし決まったんならカメッて呼んだげるわ。いいんでしょう。カメッて」

ぼくははっきり覚えている。一言一句、まちがいもなく彼女はそういった。

「ぼくは犬が大好きです。犬といっしょに犬小屋に寝てもいいんです」

と、こんなにまでできてれつな自己表現をなし得るのは、ほかの志望者にいるはずもなかった。

ぼくは採用されることに、十分自信があった。くにへ帰るんだという先輩のボーイも、それからメイドもぼくのそばへ来て、「奥様はあなたが気に入ったらいいわよっ」

先輩のボーイは、いちばん先に来たのがほくであったためか、何くれとなく好意をよせてくれた。「あなたに早く決まりさえしたらおれ、二、三日面倒見て、それからすぐくにへ帰れるんだがな」といったりした。

ところで、採用が決まったら、ほんとうに住みこんでまで働く気がぼくにはあったろう





か。

### 3

家族がいて、友人がいて、仕事があつて、それに当然ともなう公的生活があつて……。

それらのすべてを打ちすててまでドッグボ  
ーイの境遇に飛びこむ真意がほくにはあつた  
ろうか。ごまかしはきかない。決定したらす  
ぐに住みこまねばならない。

ここではつきりいえることは、打ちつづく  
不運や不幸に、手痛い打撃を受けつづけた両  
親が、ことに母親が、ほくの不意の失踪にも  
その寿命をちぢめるほどの決定的な打撃は決  
して受けないという確かな保証があつたとし  
たら、ほくは少しのためらいなく、ドッグボ  
ーイはおろか、もっと下層な生活に喜んで身  
を投じただろう。

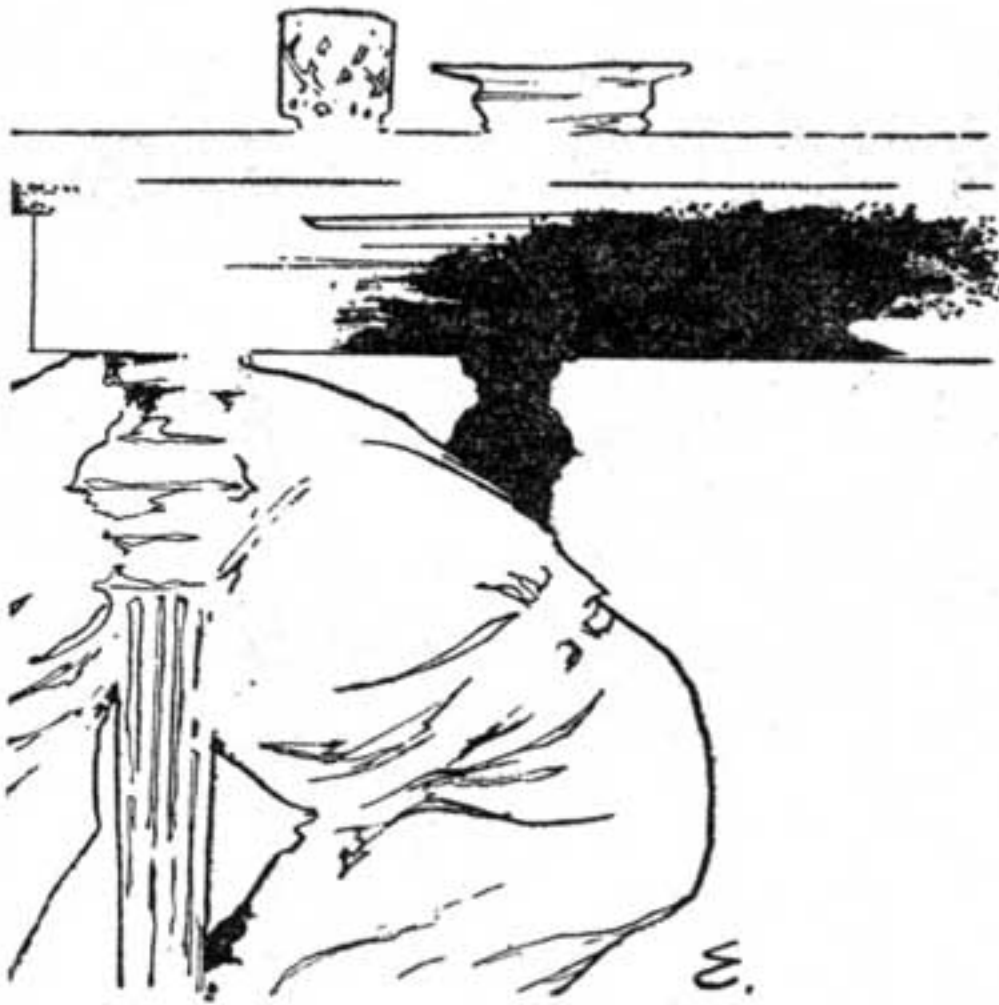
ということは二つの意味合いを持つ。一つ  
は、根本的には今の自己の生活環境と全く絶  
縁してまで目的を達し得ないこと。二つは、  
しかし、だからといって目的をすべてなげう  
つことはがまんできない。趣味としてのマゾ  
ヒズムではなく生活信条としてのマゾヒズム  
が環境条件上の困難さを理由に、目的から目  
を離させることを絶対に許さないのである。  
もし、採用が本決まりになったら、ある期

間、許されるぎりぎりの期間だけは働いてみ  
よう、とほくは思った。ぎりぎりの期間が何  
日間、何か月間か、とっさに判断はつかなか  
ったが、考えることはあとからだつていいん  
だ、とにかく採用されさえすれば、とだけ思  
っていた。

面接がおわつて立ち上がったとき、ほくは  
奥さまにお願いした。「はやく結果が知りた  
いものですから、みんながおわつてしまうこ  
ろまで、帰らずにお待ちしててよろしいでし  
ょうか」

奥さまはころよく許してくれた。これは  
採用がなかば決まったも同然だとほくは受け  
とつた。

積極的に最初から好意をよせてくれた先輩  
のボーイにくらべ、メイドの方はどちらかと  
いえば無関心の様子だった。



そのメイドが、奥の面接場所での情報を、  
刻々台所にいるほくたちのところに持つてき  
てくれた。台所には、先輩のボーイと、それ  
からおばさんがひとりいた。このおばさんが  
だいたい家事のいっさいを取りしきっている  
らしく、メイドは逐一報告を彼女にもたらし  
た。時刻も大分すぎ、ほとんど面接人も消化  
しおえたころ、ほくにとつて最大の競争相手  
があらわれたらしかった。

「すごくハンサムな人。目下浪人で勉強中な  
んですって。東大を三度失敗したけど、来年  
は必ずはいってみせるって、奥さまもかなり  
真剣に話しこんでいらしたわ」

それを横で聞きながら、いささか、失望し  
た。難敵が現われたという失望ではなく、東  
大を三度失敗してまだこりぬばかさ加減を、  
とくとくと吹聴する青年の話を、多少感動ま  
じりにうけたまわっている女性のあさはかさ  
に失望したのである。そしてその青年は、メ  
イドのことばを借りると、ホールデンばりの  
色男であるという。

女性はかしこくあつてほしい。ずっと賢明  
で聡明で、誇り高くあつてほしい。ほくに  
とつて女性は神なのだ。神が神の座を自身の手  
ですべりおりにくはくは耐えられない。  
しかし、終局のところ、ほくには確信があ



った。たかだか職種はドッグボーイである。奥さまにとっては消耗品の一つであり、召使いのひとりにすぎぬ。

女性はいったい、尊敬に価する召使いを使いたがっているものだろうか。

ほくにだって、やろうと思えばできた。東大出で旧華族の遺児などと身辺を紛飾して面接の時には、しさいありげに、

「いろいろと事情があるものですから……いえいえ、そんな……今は時代が違います。職業に貴賤の別はありません。ドッグボーイだろうとなんだろうと、要するにほくは働く場所がほしいのです」

幾人かの女性は、この話に引きこまれて、採用してくれるかもしれないのだ。好意的な保護者の立場で……。

しかし本当に女性は、このような尊敬や畏敬の念だけで、召使いを使いたいものだろうか。ほくはそうは思わない。なんの気がねも一片の顧慮も払う必要もなく、ただ無制限に自分にひざまずき尊敬の情をささげてくれる召使いをこそはべらしたいのだ、いつの時代にも、このことに変わりはない。

地位と権力を女性に持たしたら、犬に等しい扱いに尾をふって満足する従者を彼女らは欲するのだ。



ほくはそこで犬の道を選んだ。はつきりとした確信のもとに、犬の道を選んだ。

#### 4

やっと面接者の全員がおわった。奥さまが奥から台所に現われ、おばさんと二、三ことばを交わした。

奥さまはたしかに美しかった。中年婦人の持つ魅力的な美しさを、それもその残んの香ではありながら年令のことを十分に忘れさせるほどのものだった。

これは彼女の環境のせいでもあった。上流社会に属するというだけで、女性は若返り、美しさを持続することができる。召使いにかしずかれ君臨する楽しみのうちに起居をする婦人というものは、それだけですでに十分美しくなるものだ。

ほくは台所のすみの床の上にじかにかしこまっていた。

女性が立つか椅子に腰かけているとき、その前の床にすわることはすばらしい。いちおう椅子をすすめてはくれる。しかしほくはおびえたようなまなざしでそれをこぼんだ。

どうせ一時的な羞恥や、外聞をはばかる恐れなく、後天的な習慣がかりに女性をして召使いやばかにも対等の場としての椅子を



すすめさせて、決してそれが彼女の内奥から  
でる本意ではないということ。

恋人をすら、時としては、自分の足下にひ  
ざまずかせたい欲求を持つ女性が、答礼をす  
ら心要としない最敬礼を受けることに満足し  
ないはずはない。

床の上のほくは、椅子にすわった奥さまと  
それからメイドの方にも、ひたいを床につけ  
ておじぎをした。

メイドの方は、第一若くもあり、ちよつと  
とまどつたような表情を見せたが、奥さまは  
おもしろそうに笑いながら、ほくの方を見お  
ろしていた。

そうそう、これがいい。慣れっこになりさ  
えすれば、どんな突飛なことだって、女性は  
それを奇異とは感じなくなるものだ。

カメは椅子になど掛けるものでなく、床に  
いつもすわらせるべきだ、という観念を、奥  
さまとメイドに植えつけるのは、多少の時日  
さえあれば、そうむずかしいことではないと  
思った。

ただ、ほくの自由な振舞いを多少ともセー  
ヴしたのは、先輩のボーイとおぼさんの存在  
だった。残念なことに、かれら二人は、ほく  
の拝跪の対象としての埒外にあったからだ。  
登場人物としてではなく、関係のない第三

者として、女性ふたりを相手にして演ずるほ  
くの行為を観察するとき、迫真であればある  
ほど本当にその奇異さかげんを奇異だと感じ  
とるだろうから。

しかし、いつしかかれらもほくの行為に納  
得するようになるだろう。しよせん理解はで  
きないはずだから。

「ダンテを十分に理解するためには、カソリ  
ック教徒であり、芸術家であり、フィレンツ  
エ人であることが必要である」——とパピニ  
がいったように、ほくを理解するためには、  
一にも二にもマゾヒストであることが必要な  
のだ。

さて、奥さまは笑顔を見せながらほくにい  
った。

「せっかく待ってはもらったけど、やっぱり  
いちおう主人と相談しないとね。……あした  
夕方、電話をください。そうしたらちゃんと  
はつきりしたことをいいますからね」

ほくは再び床の上での最敬礼を繰り返した  
のち立ち上がった。

いささか氣勢をそがれたような気持ちにな  
ったが、それもほんの一次的なこと、ほくは  
最後まで確信を失わなかった。

東大志望のハンサムボーイを選ぶか、椅子  
の上での権勢を味わってみたいか、この二者

択一が奥さまにとっての問題であつたのだろ  
う。またこれはほくにとっても、女性の心理  
を知る貴重なテストケースの意味をば持って  
いた。

翌日夕刻、電話をしてみたが、ほくに決ま  
ったから早く来てくれ、とメイドがいった。  
当然の成り行きとは思つたが、しかし異様  
な興奮を伴う通告ではあつた。

正常で真面目な青年が何人か、ほくのほか  
にいたであろうに、何をえり好んでおかしな  
男を採用する気になったのか。

後でできたところによれば、やはりあの東  
大志望の書生とほくとが、最後まで選考の対  
象として残っていたそうだ。

主人の方は夫人からの報告をもとに、前者  
を推し、夫人はほくの方を推して結果はほく  
の採用と決定したのだそうだ。

カメと呼びつけにできる男、犬小屋にでも  
喜んで寝る男、封建時代さながらに土下座を  
してみせる男を、夫人は多くの中から召使  
に選びだしたのである。

## 5

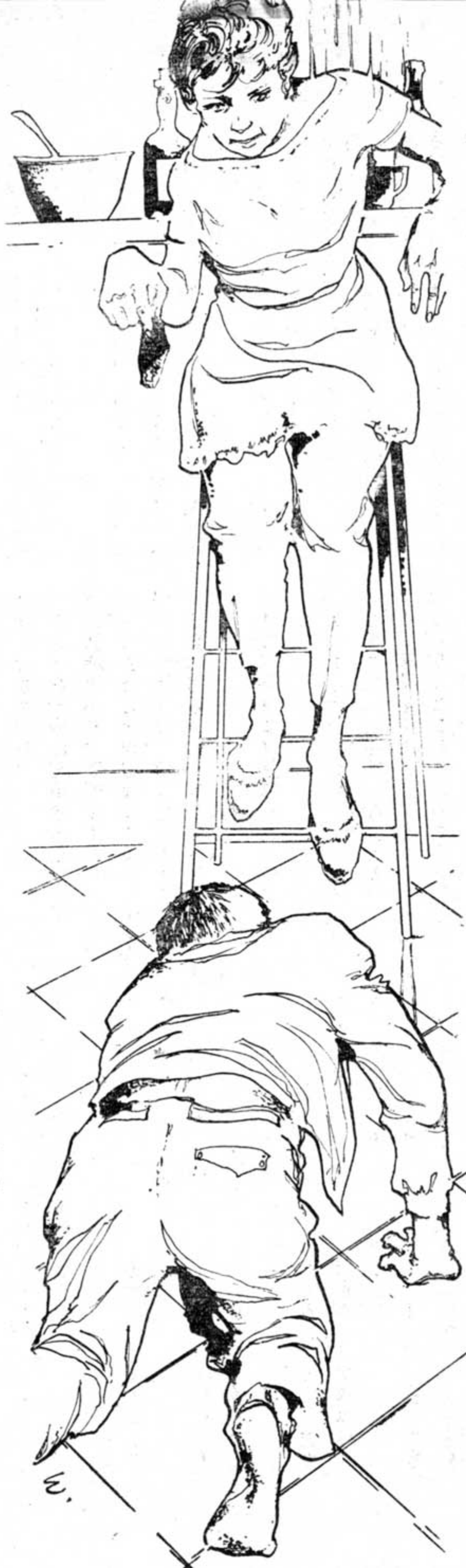
ほくがまず注意してやらなければならなかつたのは、蒲団と保証人の件である。秘密は  
だれにも感づかれたくなかつた。すべてを秘



密のうちに、とはいえ、細心の注意のうちに  
も大胆さがなくては事は成るものではない。  
ところで、住み込みで働く場合の二つの条  
件、蒲団をどうして運び保証人をだれに依頼  
するか、を、もしもと厳格に審査されたら  
ぼくは初手から望みを果たせなかったろう。

いの三文判でどうにか間に合わせ、筆蹟も変  
えてどうやら保証書なるものも作った。  
ぼくは、「いなかの友人に招かれたので」  
とだけいいおいて家を出た。ただ、先方の夫  
人の手許にさしだした履歴書には、いつわら  
ない正銘の住所を書いておいたのが気がかり

われ男の子意気の子名の子つるぎの子詩の  
子恋の子あもだえの子——  
鉄幹ばりの心境もときには無縁ではない。  
短い期間ではあったが、かくしてぼくは、  
夫は外人の貿易商、夫人は国際色を豊かに身  
につけた日本婦人のもとに、すすんで飼われ



かなしいことに、ぼくはいつまでも、無期  
限に失踪していることはできなかった。折り  
を見て逃げ帰らねばならない立場にあった。  
で、幸いなことに、蒲団を持ってこいとは  
ついに一度もいわれなかったので、その点は  
ほおかむりすることにした。保証人もでき合

だった……これは無謀ではない。でなかつ  
たら、永久にマゾヒズムへの道は閉ざされた  
ままにおわるだろうから。ある一線から先は  
すべての物事と同じく、賭である。  
マゾヒストにも勇気が必要である。実行力  
が必要である。

る身となった。  
ぼくは自分の置かれた立場を再確認するこ  
とに、陶然たる酔心地に落ちた。さまざま  
な空想が甘いささやきをもたらした。  
ぼくは思う。ほとんどなに人にもあれ、蜘蛛  
のように、己の内部から、己自身の空霊の



城砦を紡ぎだすことができる——

蜘蛛がその仕事の手がかりとする葉末や小紋はとほしいが、しかも彼女はうるわしい網目で空を満たす。人もまた己の魂のこまかな糸をつなぐ先が、まことにとほしいことには耐えなければならず、彼の魂の目には、広がり満ち、彼の栄耀には高貴さに満つるところの靈妙の織物を織りなすべきである。

日課はこうだ。

朝四時起床、まずボイラーをたく。それから犬の散歩、犬は全部で四頭いた。うち一頭はブルドックでほとんど面倒はいらないが、三頭のグレートデンはいずれも真黒な小牛ほどもある大犬で、かなりな手数を要した。

散歩から戻ったところで二階の居間の、おばさんとメイドを起こす。彼女らが起きだすころは、ちょうどボイラーも熱せられて、あらゆる個所の蛇口からは、勢いよく熱湯がほとぼしる。炊事の苦勞がずい分はぶけるわけである。ぼくは、奥さまの召使いであるより先に、まずメイドの召使いであった。

メイドはよし乃という。最初二十二、三歳に思えた彼女が、実は十九歳、高校から文化服装学院の教程をおえたばかりのお嬢さんであることを知った。

ぼくにとつては、思わぬ福音であった。第

一、彼女はひじょうに活発で賢そうだった。

ぼくは彼女を呼ぶのに、よし乃お嬢さまといつてもいい承諾を得るのにずいぶん苦勞した。で、彼女は、人のいないところでは、お嬢さまと呼んでさしつかえないことをやっと許してくれた。そのときもぼくは、ひざまずいて彼女に感謝した。

大きなボールで犬の食食用の牛や豚の内臓をたいて、それから車の掃除。旦那さまの通勤用の車だが今のところ運転手がいなくて自分で運転をする。

シャワーを浴び食事を済ませ八時にでかける。はんこで押したように規則だしい。召使いたち全員でお見送りする。ぼくは自動車の扉を開けて乗せ、うやうやしく礼をする。自動車がすべりだすと、いそいで門前の通りに飛びだし、車を見送る。つい先の四辻を左に曲がる時、車の窓から旦那さまは左手の指三本を立てて軽くふる。ぼくも手を振って歓送する。

旦那さまは旧アメリカ海軍中佐だそうで、負傷した左足がいまもなおらず、軽いびっこをひく。五十近いと思われるが若々しい。半白の頭髪を持つ優雅な紳士である。

ところでおかしいことに、全員お送りするときでも奥さまはおやすみになったままだ。

奥さまはお昼近い、十一時を回ったころ、やつとお目ざめになる。

メイドとおばさんが朝の挨拶に伺候する。ぼくは風呂場をきれいに磨き上げる。磨き上げたところで挨拶がてら報告に伺う。奥さまはたいいていこの時は化粧室に居られる。

ばかな男がドアをノックし、はいってくる椅子にかけた奥さまの前の床の上にひざまずき平伏する。

「奥さま、お早うございます。お風呂場の用意が済みました」

## 6

宝石まがいの装飾でふちどりされた奥さまの靴を磨きながら、ぼくは似たような靴だなと思った。

それほど以前のことはではない。六本木の電停そばにあるMデザインルームに雑役で働き、まず最初の仕事が靴棚の整理であり、M女史の靴磨きであった。東京でも五本の指に折られる洋裁界の大物M女史は、三十歳台の活動家、男女混じえて数十名のデザイナーや縫子たち、あるいは出入りの商人などに君臨していた。

彼女の靴も、このような装飾がほどこされてあった。ある限度以上の地位を得ると、女



性はだれでもこのようににぎやかな靴をはきたくなるものだろうか。

先輩のボーイ、といってもずっと若く、二十歳のきらくな人好きのする青年、名をかりに吉雄とする。親切でさくばらんでおしゃべりで、当然のことながらメイドのよし乃にかわいそうなほど真剣な慕情を寄せている。あと十日間ぐらいいて、ほくに仕事のいっさいをのみこませ、だいたい慣れたところでくにの青森へ帰るということ。

ただ気がかりなのはよし乃と別れねばならぬことにあるらしい。いつも彼女につきまとは、いろいろなぐちめいた話でねばる。

「おれ、さびしいよ」

「なぜ」

「あんたの顔が見られなくなるもの」

「一人前なこと、いうんじゃないわよ。さつさと帰んなさい。あんたがいなくなると、すつとするわ」

てきびしい扱いである。横からおばさんまでもが口を出す。

「くにでは、こえたごでもかつぐんだろう」と、やられている。いぎたないやりとりがあるが、吉雄はどんなにいわれても腹を立てない。それで座はべつに白けもせず、明るい笑いだけが起る。彼は結局、おばさんにも

そしてよし乃にも愛されているのだ。どこか憎めない甘えん坊の味があるからでもある。

メイドのよし乃は、本当にけなげな賢い女性であることが、だんだんに一層はつきりした。なぜメイドになったんだ、という友だちからの問い合わせの手紙が舞いこんできてもそれから吉雄が心の底から、「メイドになんか、もったいないな」というのにも、自信に満ちた明るい笑いで返すだけだ。

「わたしはわがままなんだから、自分で親の反対を押しきってまできたのよ。メイドをやつてなせいけないの。わたしはわたしなりにちゃんと考えもあるんだから」

ほくがもし、マゾヒストなどでなく、若い一個の健全な青年であったとしたら、文句なく彼女に結婚を申しこんでいただろう。このような女性を妻に迎える男性はきっとそれだけで十分に幸福だろうことは確かだ。

よし乃は適当にわがままですばらである。それが彼女の印象を一層明るくする。メイドとしての、思い詰めた悲愴さが、これっぽっちもない。おばさんから陰口をきかれていることを、吉雄の口から聞かされても、

「ふーん、いやーね」

というだけで、陰にこもったこだわりを全く残さない。

ほくがそのような彼女の前に手をつかえるのも、自然の成り行きでもあったのだ。

ほくは、ついに一同の前で、椅子をこぼみ通し、常に一同の椅子の足許にはいつくばることを当然なこととして受けとらせることに成功した。したがって食事も床の上で犬と同じようにしてとる。人目のないところだけでしかよし乃お嬢さま、と呼びかけることを許されないが、一同の前でも彼女はほくを奥さまと同じくカメと呼びすてに呼んでくれる。

食事のとき、「ハイ、カメ、お前にこれを上げる」といって、足許にうずくまるほくの食器皿の中へ、食べ残しの肉片を投げこんだりしてくれる。

犬の食糧買い出しには、近くの屠殺場までかけるが、彼女に牛の殺される場面を説明するとぜひ行ってみたいという。

「だって、おもしろそうじゃない？」

「牛がかわいそうですよ」

「そうは思わないわ。相手は牛ですもの、仕方がないわ」

さて、ほくは立ち上がった。ほくは一匹の犬である。仕方がないのだ。ほくの仕事のひとつになったトイレの掃除をするために。

今奥さまがご用中である。お済みになってからきれいに、ピカピカに磨き上げるのだ。



# 悪魔が覗くバスルーム

だれ知るはずもない浴室の痴態を探る見えない悪魔ノ



ピンクと白の市松模様のタイルが、浴室の天井の灯にはえて、美しく光っていた。三人はたっぷり入れる浴槽がある。透明な湯があふれて、市松模様の洗い場の上に音もなく流れた。豪華な浴室だった。

文・東城京太郎  
画・沖 涉司

## ①浴室の美女

そして、ここに、こんな浴室にふさわしい女がいた。

女は、洗い場の半分を占めるスポンジのマットの上にいた。ながながと横になっているのだが、死体ではなかった。

牛乳のような、白い美しい肌が、桜色に上気していたし、仰向けになっても、すこしも形を崩さない鞠のような乳房が、ゆっくり上下していた。

女は、両手を頭の下に組んだ。そしていきなり腰を曲げ、両足を揃えて、ピインと立てた。美容体操のつもりかもしれない。こんどは、立てた両あしを、大きく左右に開いた。

「う、ふふん……う、ふふん……」

鼻歌をうたっている。

動く脚線美。それを支える腰の豊満さ。くびれた胴……なにもかも、あけっぴろげだ。たった一人の浴室だからいいようなものの、もし覗き見る男があったら、この美しい肢体に悩殺されて、ぶっ倒れてしまうことである。



## ② 覗

### く 男

美容体操の真似事みたいなのが終ると、彼女は、浴室の壁につくり付けになっている大鏡に向って、いかにも惚れ惚れした——とでもいうように、おのれの身体を眺めはじめた。

両手で形のいい乳房を支えてみたり、横向きになってみたり、片眼を閉じて、鏡の中の自分にウインクしてみたり……  
たっぷり五分は、そうしていたらうか。やがて、

「ふふふ……」

と笑いだして、やっとな身体を洗う気になった。

まず湯をかけ、シャボンを塗りたくり、首筋、乳房、腋の下、下腹部——と洗っていくのだが、その間も鼻唄を忘れない女だ。

——彼女は何も知らない。

こんな、あられもない姿態の、一部始終を眼の痛くなるような真剣さで見詰めている男のあることを。

男は、壁の穴に眼をおしつけていた。

こんな場合、男って奴は、だれでもこんな顔になるのだろう。

——口が半開きになって、だらしなくゆる

んでいる。

（ふふふ、そこだ。もうちょっと、こつちを向けばいいのに……もうちょっと。ふふふ、向いた向いた）

どこに眼をつけているのか、その顔がえらく真剣になった。

三分。

「ちっ。どうしたんだろ？ 急に出て行きアがって」

壁の穴から眼を離して、男が呟やいた。だが、しばらくして、また未練氣に覗きはじめる。

「あ、男を風呂場に連れこんだぞ……」





### ③夕起子

代々木上町の高級アパート「鈴蘭荘」。

浴室の女の標札を見ると、——柴野夕起子とある。8号室だ。浴室の、鏡をつくり付けた壁を境にしている隣室には、独身の男が住んでいて、この男は須賀原貢と名乗っていた。部屋番号は7号室で、ともに二階にある。

夕起子は、もと銀座のバー「ナポリ」の女給だったが、そのみことな肉体と、幾分白痴美的な感じのする美貌が、東洋商事の社長、牧浦豪造を魅了し、今では退屈な二号であった。もともと夕起子は浮気っぽい。それを知っている豪造社長は、こんな風にいったものである。

「わしが死んだら、お前に千五百万の遺産をやる。しかし浮気の証拠があがればビタ一文もやらん」そして、遺言状も見せている。

もともと貧苦に育った夕起子には、千五百万の遺産は、何ものにもかえがたい魅力であった。それなら、おとなしくしていればよいのだが、そうもいかないところに現実がある。もともと浮気性だ。そこへもって来て、豪造社長は六十に近く、好色ではあっても、若い女を、それも夕起子のようなよく発達したグラマーを満足させるだけの体力がない。

夕起子ならずとも、若いびちびちした青年との情事を考えるようになるだろう。

女給時代は、男の客の気嫌ばかりとって来た。豪造社長の想われ者となってからは、一人の、年配の、醜くくふとった男の気嫌を取り続けねばならない。

——その反動が、もう来ていた。

男に、わたしの気嫌を取らせてやるんだ。若い、健康な、頑丈な、びちびちした男を、意のままに動かし、愛撫を強要し、足下にひざまずかせる。現在、そののできる金と美貌を持っていた。彼女は幾人かの男を作った。





## ④二枚の写真

柴野夕起子様——と達筆に書いてある。ありふれた茶封筒で、裏には差出人の名がなかった。

「だれかしら……？」

眉をひそめて、夕起子は配達されたその封書を開いた。便箋を開くと、白いものがひらひらと舞い落ちた。何気なく拾って、彼女は思わず小さく叫んだ。

「だ、誰が……」

舞い落ちたのは二葉の写真であった。裏にその一その二と書いてある。

その一。——それは彼女と情人伊達正夫が浴室にいる写真であった。二人とも全裸で、男は、彼女の右あしを捧げ持つようにして、足首に唇を押しつけている。

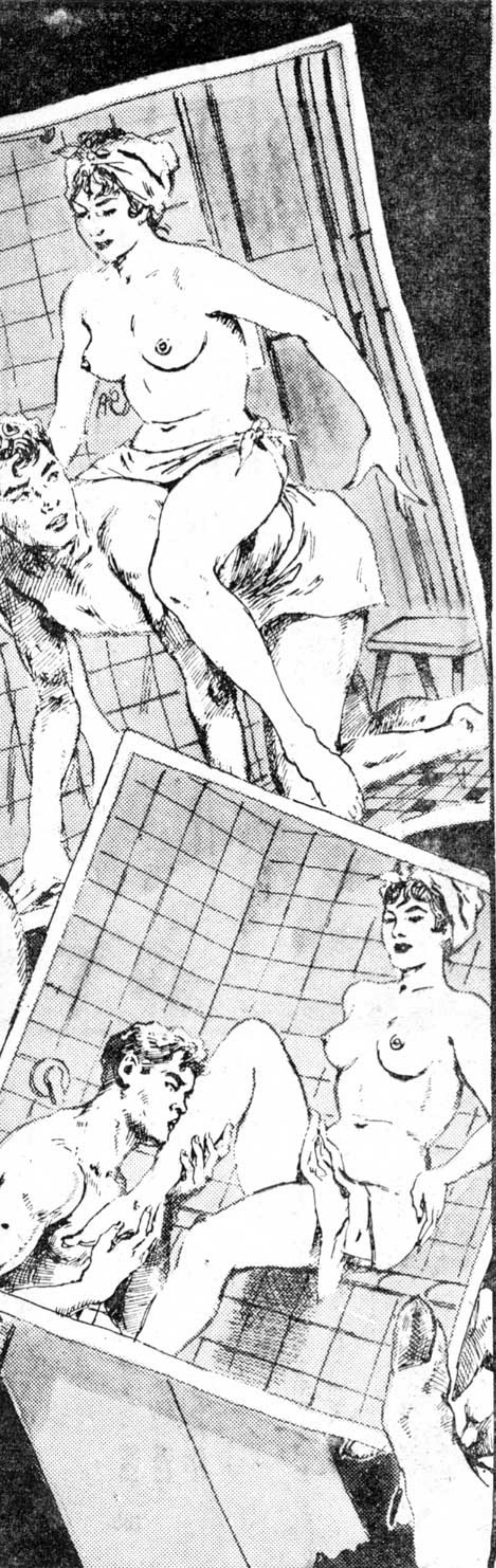
その二。——それは、やはり伊達正夫との浴室場面で、四つん這いになった男の背にまたがった夕起子の裸身を、真正面から撮ってあった。

——便箋には、何と書かれていたろう。それは星印から始まっていた。

★興味ある写真を同封します。それぞれ興味の意味に相違こそあれ、貴女にも、小生にも、そして牧浦豪造氏にも、たしかに興味の

ある写真です。このネガは、いったいどうしたものでしょうか。豪造氏に提供してもよろしいが、「鈴蘭荘」裏通りの公衆電話ボックスの電話器の背後に、五万円の札束を新聞に包んで、午前一時頃、押し込まれたならば、折返しネガは貴女あてお送りしてもよいと考えております。期限は明後十九日の午前一時までです。豪造氏ならば、軽く十万円は出すでしょうが、小生は何しろ女性第一主義です……。★

と、やはり末尾は星印で終わっていた。差し出し人の名は、封筒にも脅迫状にもない。しかし、二枚の写真は厳然たる実写であった。







## ⑤五万円の指環

柴野夕起子は動揺した。たしかに覚えがあるし、豪造社長の手に入ったら、間違いなく千五百万の遺産がフイになる危険な写真であった。

密室のような浴室の中の情事を撮った写真——なぜ、どうしてそんなことができたのか

……それを考える前に、彼女の心は、公衆電話のボックスに走っていた。

「五万円なら、指環一つを売ればすむ。期限は明後日と書いてあるけど、今夜のうちにでも……」

夕起子は銀座へ車を走らせた。豪造社長から貰った指環のうち、プラチナ台のダイヤの指環が六万円で売れた。

金の用意はできた。

午後九時。夜中の一時まで、どうして時間を過したらいいのだろう。テレビを見る気にもなれない。本を読む気にはなおさらなれない。

肌が汗ばんでいた。気持ちが悪い！

「かまうもんか。お風呂に入ってやろう。どこからか、誰かが見ているとしたって、今夜はあたし一人なんだから……」

空間の誰かに向っていい、夕起子は浴室へ入った。栓をひねると、湯と水がいつでも出てくる。

彼女は、一日でも入浴しないと落ちつけない女になっていたのである。

——が、さすがに気になり、そんなことはしたことがないのだが、タオルで胸や下腹部をおおい、キョロキョロ辺りを見廻した。

どこにも異常はない。

ピンクの壁と曇りガラスの小さな窓——どこにも穴はない。そしてここは二階であった。

「ばからしいけど……」

つぶやくと、鏡の中の彼女も、複雑な表情で、ばからしい——と呟やいた。

「だれかが梯子をかけて、小窓から……。きつとそうだわ。あたし窓なんか全然、気にとめなかったのだもの……」



## ⑥夜の公衆電話

午前一時。

夕起子は、「鈴蘭荘」の裏通りにある公衆電話のボックスに入った。

昼間でも利用者の少ないボックスである。

まして午前一時だ。辺りに人影はまったくなく、寂然と静まりかえっている。

自家用車が一台通りすぎた。

ハンドバックから五万円の札束を包んだ新聞包みを出す。そいつを、電話器の背後に押しこんだ。

ほっとした。

（——でも、このまま帰るテはないわ。見張っていて、脅迫者がどんな奴か、つきとめなきゃア……。あとあとのこともあるし）

脅迫者は、きつとどこかで見張っているのだろう。そいつに気どられちゃいけない。

夕起子は、さっさとボックスを出た。

銀座へ出るときは、すっきりとした単色の

着物だったが、入浴後の今は、軽いスーツに

した。美しいあしが、何の未練気もなく活潑

に動き、ハイヒールの音が午前一時の夜気を

ふるわせて軽快に鳴る。

（ふり返ったり、きよろきよろしてはいけな  
いんだわ）

彼女は裏通りの角を廻ってしばらく歩き、足音を忍ばせて角まで戻った。

そして待った。

五分。十分。

（きつとあいつは現われるわ。きつと……）

しかし、十分を経過し、二十分たっても、

電話ボックスに近寄る人影はなかった。

一時間。

夕起子は、あきらめて歩きはじめた。

（——うふふ、たまらねえな、あの腰つぷり

……）

彼女があきらめて去る後姿を眺めて、こんなふうにはやいた男があったのだが。





## ⑦ 安堵の裏

二枚のネガに手紙を添えて配達されると、さすがに夕起子は安堵した。手紙も、こう書いている。

——約束は守った。お互いに。五万円はたしかに受けとったし、かわりにネガを同封した。この写真に関しては、もう二度とふたたび、永久に、貴女を悩ます者はないだろう。

「よかった……」

と、彼女はつぶやいた。十日たち、二十日たち、一カ月がすぎた。

彼女は、次第に大胆になって来た。

「窓だわ、窓さえ気をつけたら……」

ふたたび、浴室の女王としての彼女の生活がはじまった。

「ふふふ……また始まったな」

隣室の男——須賀原貢は、ここ一カ月、夕起子の入浴姿を覗くことだけで満足せざるをえなかったが、また楽しみが増えたので、御満悦だった。

もっとも、この一カ月のうちでも、夕起子のバー時代の女友達が訪ねて来て、三人で浴室狭しとふざけ散らす光景を見る好運があるにはあったが……。

（三人で、おっぱい較べ、てのがあったな。



うっふふ……」

思いだしてニタリとしている。

（おじいちゃんの感想はどう？——と、受

いた。

け唇で、三人のうちでは、一番おっぱいの大きな女がたずねると、隣りの女が——まるでゆるんだゼンマイよ、と答える。てなぐあい

に声まで聞こえると申し分ないのだが……）

覗き男の須賀原が欲を出している。

（あ、はじまった！）

この男の眼が、壁の穴に蛭のように食いつ

た。浴室では、夕起子の新しい愛人が、まるで女王に奉仕するように、彼女の身体を、隅から隅まで、丹念に洗っていた。

（かわりたいようなもんだ……）

と、須賀原が胸のうちで呟やいた。



## ⑧ 第二一の脅迫状

柴野夕起子の顔が蒼白になった。白痴的な、男の保護欲をそそのめるその美貌が歪んでいる。眼に怒りの色がありありと現われた。

第二の脅迫状が来たのである。

写真は、やはり二枚であった。夕起子の別の愛人、河野義郎との、浴室の図である。

その一。——河野と夕起子が、浴槽の中で抱擁している。唇を合わせていた。

その二。——浴槽のふちに腰かけた夕起子の足の指を、河野がせっせと磨いている。

★先の写真については、もう解決している

が、小生の手許には別のネガがある。前回同様、このネガについても、五万円で円満に解決したい。方法は前回同様である。牧野豪造氏をお忘れなく★

脅迫状はこうだ。彼女は、ビリッと引き裂いた。この分では、脅迫者の手に、何枚ネガが用意されているか知れたものでない。

彼女は、六人も愛人を変えたし、浴室での痴戯は、記憶にないほど重ねているのだ。(どうしても脅迫者を突きとめてやるんだ。でないと、あたしの破滅になる)

彼女は、凄い形相で浴室にとび込んだ。入念に壁を調べたが、異常はない。窓も用

心したから大丈夫のはずだった。とにかく河野は、あの脅迫があつてからの愛人だった。呆然として鏡を見る。

「あッ！」

彼女の脳裡にある考えが走った。近寄って仔細に鏡を調べる。鏡の両端が白く丸く曇っていた。古くなつたからと思つていたが……

ネジ廻して鏡を壁にとめた鉄をとり、鏡をはずした。穴があつた。木栓を詰めてはあるが、たしかに穴だ。その穴の部分に当る鏡の水銀がけずり取られていた。その部分だけ、向うから見透した。脅迫者は隣りの男だ——と、夕起子は思った。発見だった。







## ⑨ 肉体の罠

(——どうしよう……)

正体を知られたとわかったら、隣室の男——須賀原は、やけくそになって、かえって莫大な要求を出すかもしれない。

あるいは、豪造社長のところへ、写真を送りつけるかも……。

そんなことになったら破滅だ。千五百万円の遺産がフイだ。

(あたしのとる手段は一つ。あの男に、うまく近づいて、——そして、邪魔者は消せ、だわ)

まだ怒りが消えていない。夕起子は、管理人に、須賀原のことを、それとなく尋ねた。

五十年配の小男で、管理人のくせに、いつ

も夕起子を見ると、いやらしい眼つきをする田村重吉だ。夕起子には、まるでべたべたの親切である。

須賀原貢。二十九歳。独身と称す。

自動車のセールスマンで、こんな豪華アパートに住むくらいだから、腕利きで収入も多いらしい。しかし、最近、ちょっと落ち目のようだという。

(それで、あたしを脅迫して……)

夕起子は唇をかんだ。田村管理人の情報は、大したこともないが、参考にはなった。

(いつも、あたしを覗いているんだから、須賀原は、あたしが浮気なことを知っている。うまく誘えば乗ってくるだろう)

肉体の罠には、十分の自信があった。独身の男なら、もう成功疑いなしである。

須賀原は留守がちで、仕事の都合上、一週間くらい帰らないこともあるらしいが、先刻見かけたから、いま在室していることはたしかだった。

(善は急げだわ……でないと明後日までに、また五万円拵えなきアならない)

気軽にやることにきめた。お酒がのみたくなったんだけど、一人じゃつままないから……とでもいって、須賀原を誘う。一緒の時を持てば、あとは簡単——自信があった。



## ⑩悪魔は死なず

夕起子と須賀原は、日比谷公園の人目にふれない木蔭にいた。

(助平なんだわ、この男……)

肉体の罨は、至極簡単だった。予想以上に簡単だった。

(でも、この男、腹のうちじゃ、きつと笑っているんだわ。へっ、脅迫者を俺とも知らずに、金ばかりか肉体までくれようというのかい。遠慮なしに頂くぜ——って。ふふふ、あたしの真意も知らず……)

夕起子はポケット・ウイスキーの蓋をとつ

た。長い接吻のあとである。

「ね、一口いかが……」

「うん、貰おうか」

そのウイスキーの中には、毒物が仕込んであった。バー勤め時代に、毒薬自殺した女友達がくれた毒物である。

「うっ！」

一口吞んで、須賀原は呻いた。

「死ぬのよ、あんた。よくも鏡の裏に細工して、あたしの浴室を覗いたわね。それに写真をとって、脅迫したりして」

夕起子の眉が吊りあがっている。

「違う。脅迫なんて、……お、おれは……」

あとは聞こえなかったが、彼はこういうつもりだった。壁の穴は、前からあった。木栓で隠してあったが、それに気づいて、ただ覗きをやっただけだ——と。が、彼は死んだ。

その頃、管理人の田村重吉は、覗き写真を拡げて、独り悦に入っていた。夕起子のあられもない写真集……。脅迫者はこの男だったのである。壁の細工も、写真もこの男。この男は、各室の鍵——合鍵を持っている。どの部屋にも出入りは自由だった。

——越して来た夕起子に魅惑され、当時空いていた隣室との壁にあんな細工をしたのである。管理人には気をつける——。





時代巷談

# くすぐり部屋

達寺城四

子玲夢花・絵

## 縄つき遊女

火事騒ぎを幸いに、吉原の扇屋から大門の外に逃げ出した花魁の緋扇を、助けてやろうとだましたあげく、知りあいの女衞の家に投げこんでおいてから、男衆の伊助は扇屋に託ってかえしてなに喰わぬ顔をしていた。

そればかりか、逃げた緋扇の年期証文をたてにとつて、その妹のお美代に残りの年期を背負わせ、苦界の中に引きずりこむお先棒まで伊助はかついでいる。

こうして、妹のお美代を、扇屋の主人庄兵衛の目の前にひきずり出しておけば、あの緋扇に追手がかかる心配も、よほどすくなくうと云うものだ……それが伊助の悪智恵だった。伊助は、女衞の家に預けてある緋扇を、ゆつくりと料理するつもりでいるのだ。

一方、ふって涌いたような危難にとりまかれた妹のお美代は、逃げた姉の身代りに、扇屋の折檻部屋の中に投げこまれて、どうにもならぬ羞恥の姿に身をもがいていた。

庄兵衛。妙な笑いを口元に浮べながら、谷中の和尚の掌の中に、折檻部屋の鍵と鷹の羽を手渡したところだ。

「ふふふ。これが鍵じやな」

「え、へえ、さようで。それから、これが……」  
「う、判った。みなまで云いなさるな」

「へへ、へへへッ。おたのしみなことだ」

「ふふッ、業じや、病氣じやよ。ふふッ、いやいや、この楽しみが本当の極楽浄土のものかも知れぬがのう」

みだら坊主め、勝手な世迷いことを並べながら、心はもうすでにうわの空。

手に持たされたくすぐり責めの鷹の羽根と折檻部屋の鍵とを、汗ばむほどに握りしめてもう腰を上げようとする。

「てまえが、御案内を……」

「ふふ……そうか」

どれほどの金子がこの客から庄兵衛の手に渡ったものか、庄兵衛、いつになく愛相がよかった。

この、縄つき遊女を好んで買いにくる谷中のみだら坊主が、あの折檻部屋でどんなことをするのか、庄兵衛には判りすぎるほどわかっている。

どのみち、逃げた遊女が捕えられれば、ひどい折檻をされるのが当然のこの世界で、それを金を出してまで引きうけてくれる客があることは、遊女屋の主人にとって、有難いことでもあつた。だから、庄兵衛は谷中の生臭さ和尚を下にもおかず、もてなしているつも





りである。

ただひとつの心配は、この生臭さ和尚が、  
緋扇の顔を知っていたとしたら、その身代り  
に折檻部屋に投げこまれているお美代の化け  
の皮がはがれてしまうことになるのだ。

「あの……へへッ、和尚さま」

と、庄兵衛は、うす暗い折檻部屋の前で坊  
主に声をかけた。

「うむ。もう用事がなければ、向うに行って  
もよろしいぞ」

「へえ。そ、そりやあもう、そのつもりでは  
おりますが。その、なるべく、猿轡は外さね

えでおいで貰いたいと思いますんで……」

姉妹だから、猿轡さえ外さねば、ニセの緋  
扇と判ることもあるまいと思う庄兵衛の気持  
だった。

「ふむ、猿轡をな……」

「へえ。うつかりすると舌を噛み切ったりす  
ることがありますんで……」

これは、おどかしである。こう云っておけ  
ば、よもや和尚はお美代の猿轡を外すこと  
もあるまい。

「……………」

和尚、もう庄兵衛を無視して、折檻部屋の



鍵をあけにかかっている。用事が済んだら、あっちに行け、と云わんばかりのその後姿に庄兵衛はチェツと口の中で舌を鳴らした。

## 生き身菩薩

「う、うッ、うッ！」

お美代は、絲くず一つ身につけていない裸身を、必死に硬くしてふるえた。

全身に羞恥の脂汗がねつとりと浮んで、手首と足首に喰いこんだ麻縄が、今はもう、うらめしいと云うより、死にも勝る地獄だった。折檻部屋の厚い板戸が、ガラリと開いた。

「ふふ。……」

咽喉の奥で、みだら坊主は声もなく笑いをもらして、それから中に入る。

戸を閉めて、内側から心張棒をかった。

「……緋扇だな……」

ちがう、違います……と、お美代は必死にかぶりを振るのだが、それはみだら坊主の眼には悶えているとしかうつらなかった。

「う、うッ！」

坊主の手に、鷹の羽根が持たれているのをお美代は見た。総身が、そそけ立つような思いに、お美代は眼をしっかとして、耐えようとしている。

何故、こんなことにならなければならない

のか、混乱したお美代の心の中では判りようもないのだったが、気が狂いそうな、くすぐり責めの魔の手が、たったいま、襲ってくる。と云うことは、避けることもできない現実だった。

「ほほう……」

生臭さ和尚は、身動きもできずに身を硬くしているお美代の姿を見て、思わず声を洩らした。

そのはずである。それは、泥水に汚れた遊女の身体ではなかった。

生き身の菩薩が、そのまま、地獄の業火の中に陥ちて悶えている……としか考えられぬ美しさが、そこにはあった。

この菩薩の軀に、鷹の羽根が這いまわった。気もそろになるような、七色の虹が、この折檻部屋の中に立ちこめるかも知れないと、みだら坊主は思った。

タラリ……。と、坊主の唇のはしから、ねばつこいよだれが糸を引いて落ちる。

お美代は、声にならぬ猿轡の下で、必死に

姉の名を呼んでいた。

## 仲間割れ

自分の名を呼ばれたように思っ、緋扇はふと眼を覚した。

暗い、天井裏のような部屋である。

緋扇は、自分の身体にかけてある、せんべい蒲団をはねのけて、身をおこした。

窓もない部屋だった。そのまま立ち上がり、頭のつかえそうな斜になつた低い天井。出入口はたった一つ、部屋の隅にポツカリと口をあけた階下に通じる穴ばかりだ。

取り外しのできる梯子が、引き降ろしてあるところを見ると、緋扇をこの天井裏の部屋にとじこめておく用意かもしれない。

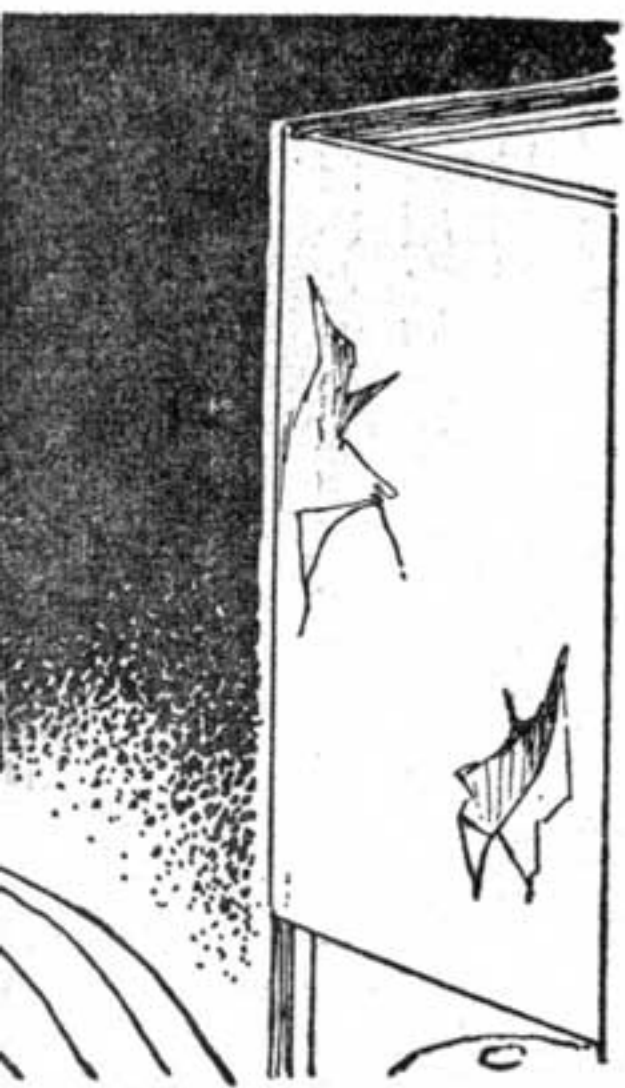
その、梯子口のところから、灯りが見えている。

緋扇は、そこから下を覗いてみた。

うす汚れた行灯を傍に引きつけて、男が二人、酒を呑みながら、ボソボソと話しているのが眼に入った。

「……だからよ。ほとぼりがさめる間、四五日ここへ置いてよ、あとのこたあ、おめえと俺との相談で、うまく儲けようじゃあねえか……」

そう云って、伊助の顔をのぞきこんだのは





女衞の勘六である。

「そ、そりやあいいが、その前に……」

そうこたえているのは、扇屋の男衆の伊助だった。

女買いが専門のこの勘六は、いわくつきの女と知つた上で、緋扇を伊助から預つてゐるのだ。いずれはあの上玉を、大枚の金にするつもりでゐる奴である。

三日前の夜に、地獄のような苦界から逃れ出たと思つた緋扇も、やはり、まだ、鬼の手からのがれきつた読ではなかつた。

囚われの場所が谷つたというだけのことで、どのみち女の生血を吸う青鬼どもの手の中にあることは間違いないのである。

火事騒ぎ、脱出。そして、伊助につかまつて、この家に連れてこられるまでの心身の激動に、緋扇は疲れ果てて、半病人のようになつてしまつてゐた。

薬り代りに吞まされた酒が利いて、あのまま、うつつのように眠りこけていたのであつた。

「な、なにお云いやがる！ それじゃ、おめえは、いい目ばかりじゃあねえかよう！」

「けッ。この慾張り野郎め、それじゃ、約束が違うぜ！」

先刻から、ボソボソと話し合つてゐたのが



だんだん声高になつてきた伊助と勘六。

儲け仕事の分け前が、お互いの目算と違つて、どう話が喰ひ違つたものか、今にもつかみかかりそうな雲行きになつてきたようだ。

「俺のところだから、足抜き女郎を引き受けてやつたんだ。おまけに、五両もやろうと云うのに、いってえ、何が不足なんでえ」

「くそッ。あの緋扇つてえ花魁はな、捨て値にしても三十両は右から左に出てくる玉だ。そ、それを、てめえ、分け前が五両ぼつちたあ、どこを押したら出る値だろうッ」

「そうは云わせねえ。吉原の囲いの中から脱け出してきた玉だぜ、うっかりそれがばれてみる、大変なことになろうと云うもんだ。危い網渡りをするのはこの勘六さまの方だぜ、分け前を多く取つて、ケチをつけられる筋はねえはずだ」

「なにを云やがる。あの緋扇の残り年期の身代りは、本所割下水の裏長屋から、妹を引つこ抜いてきて扇屋にはめこんであるんだ。いはば二階の玉は、年期に縛られた足抜き花魁じゃやねえ訳だ。大手を振つて売れる玉だぜここまで芝居を仕組んだのがこの俺だからおめえが五両で、おいらが二十五両取つても、文句があるめえ！」

伊助はまだそのうえに、緋扇を裸にして縛



## 菩薩の唇

★美しい菩薩の唇に浮ぶ  
★微笑に魅せられた男！

り上げ、ひいひい泣かせて楽しもうと云う下心まであるのだから、色と慾との深みにうごめく虫けら達の争いはいつ果てるともおもえなかった。

二人の云い争う声を聞いて、緋扇はハッとした。妹のお美代にまで危難が及ぼうとは、今の今まで思っても見なかったことだったが、伊助の云った事は本当かもしれない。だとすれば、今頃、妹のお美代は……？

### 血しぶき

おどしに抜いた勘六の七首が、行灯のあかりを受けてピカリと光ったとき、伊助の頭にカッと血が上っていた。

たんまりと金が入ったそのうえに、緋扇の羽二重餅のような肌を覗めて、あの、気もうわずるような泣き声をたんのうできると思ったのが、見事に外れたばかりか、勘六の七首が自分の胸板を狙う破目にまでなってしまう

たのだ。

獣たちは、お互いに吠えて、立ち上っていた。えものを前にして奪いあう、あの妥協を知らぬ野獣の血が、めらめらとほのおを上げてかみあっているのだ。

「くそッ！」伊助も土間にとび降りると、戸口にあった心張り棒をつかんでふり上げた。こんなことなら、この男に片棒かつがせるのではなかったと、そんな思いがチラと伊助の頭の中をかすめたが。それは一瞬の間で、勘六の突きだしてくる七首のきつ光が、土間の空間に流れたとき、伊助の首筋からふき出した血しぶきが、音をたてて、破れ行灯にとび散っていた。

勘六は相手が夢中で振り下した棒の為に、頭の鉢をしたたか打たれて、うッ！と呻ったまま、その場にうずくまってしまう。そんな光景の中で、緋扇は、なんとかしてこの天井裏から下に降りようとあせつてい

た。

淡紅色のしごきや腰紐をつなぎ合わせて、それを伝って落ちるように下に降りたのは、やっとの思いであった。

今戸の勘六の家から、何処をどうして歩いたものか、緋扇が吉原の大門に、幽霊のような姿でたどりついたのは、その夜も明け方のことだった。

「なにっ、緋扇が帰ってきたと！」

扇屋の庄兵衛はにやりとしたものの、帰ってきた緋扇には、その笑いが地獄の鬼の笑いのように見えたのも当然かもしれない。

伊助を殺した勘六が捕われて、事件が明るみに出たものの、緋扇は矢張り苦界からは逃れられなかった。

役人の手で家に帰されたお美代は折檻部屋で気が狂うようなくすぐり責めにあって、本当に気が狂ってしまったという。

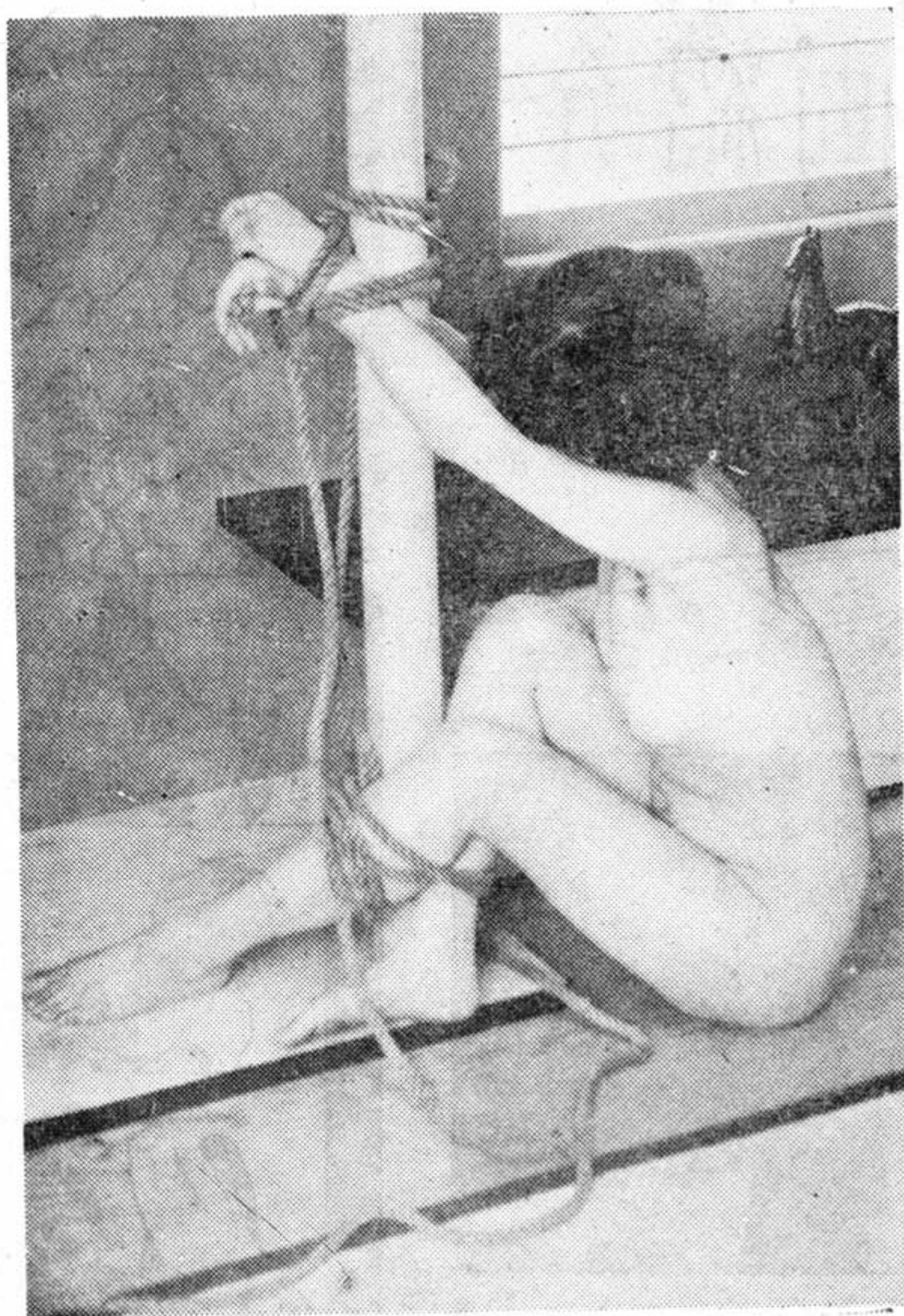
★京都、広隆寺にある弥勒菩薩の指

がある朝ボキリと折れていた。その

犯人は、菩薩像に心惹かれた学生と  
わかったという話。  
その時、かれは感動を求めて、身を乗り出した。気がついてみたら、

その学生、久万知良君は、こう告白したという。  
かの女に、菩薩様に抱きついていて。ほほになにかが当たった感じがし





たが、夢中のあまり、何も覚えていなかったという。愛の為に書いたという故事を思い出した。

★私は、チラリと、フランスの大作曲家ジュウルマスネエが、舞踏曲「復仇の三女神」(レゼルニイ)を、ギリシアの小さなヴィナスの像への

横溢していなかった甘美な頰磨が、はじめて、レ・ゼルニイにきざし

た。人形に対する愛、ピグマリオニスムの華やかな、深い発揚であったといえよう。

そして、私達は、ここに、二〇才の少年の無意識の行為の中に、著るしく複雑で、高踏的なフェチズムの発現を認めることができる。掲載誌文春は、「たとえ、美の盗賊であっても、盗賊は盗賊だ」と、昔の予審判事のようなことをいって結んでいる。

★弥勒菩薩の唇許に泛べている、不可解な、挑発的な微笑は、愛をもつて対するものにのみ、何かをささやくのかもしれない。

そして、私は数年前、ある若い友人から貰った手紙の一節を想いだす。

「ああ、ほくは飲みたい。大日如來の小水を飲みたい！」  
という一節を。

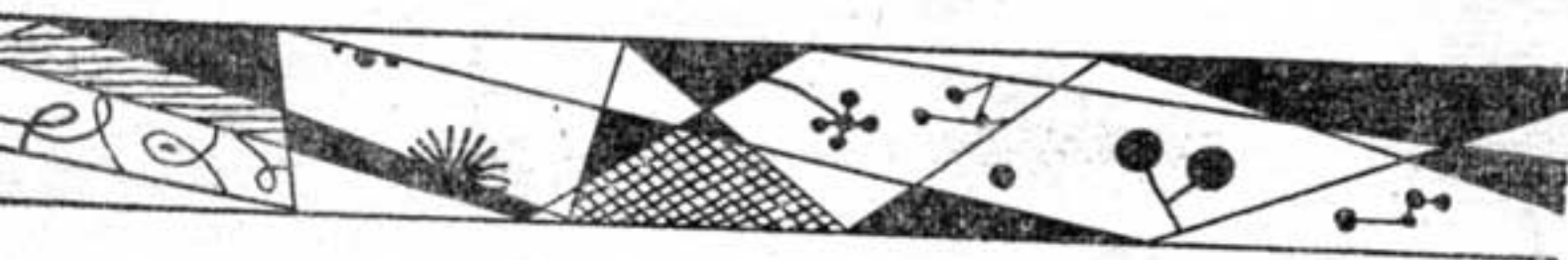
(H生)



裏窓雑報

# 新映画紹介

砂路 寛



コケオドカシの紙芝居

○生きていた吸血鬼（エロス・フィルム製作、RKO配給、S・Y系

八月一週封切）監督 ヘンリー・

カス

百年前の、ババリアの監獄を主舞台に展開する怪奇映画。

吸血鬼といえば、まずあのドラキュラを思い出すが、この作品では、吸血鬼の血が流れているとみずから信じた監獄長（ドナルド・ウルフィット）と彼に利用される若い医師（ヴァインセント・ポール）、その救出に奔走する美しい許嫁（バーバラ・シェリーン）といったところが主役である。

秘密の地下室には、実験用の女達が

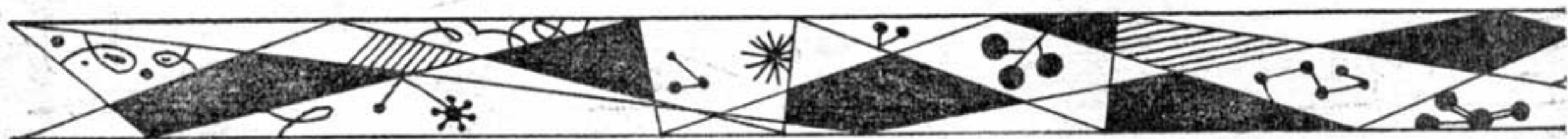




監禁されている。手錠、鉄鎖で壁に吊られた女達。破れた下着から、豊満な乳房が苦痛に波打っている。やがて一人の女が手術台に革紐で拘束される。乳房、腹、手足を縛りつけられて、女は絶叫する。その頸筋に針を刺され、全身の血を絞り取られるのである。無実の恋人を救おうと、家政婦として潜入したマドレーンにも、同じ運命



『生きていた吸血鬼』より



が待っていた。しかし、意外な結末から彼女と恋人の若い医師は、無事脱出し得る事になっている。

三角台に、両手両足を荒縄で縛られて失神している男。その背を、凄まじい鞭跡が走っている。手錠足錠のまま鉄鎖の音を響かせて歩く囚人達。殺されて、拷問室の十字架に張られている共犯の判事(フライアン・コールマン)と、道具だてはなかなかだが、演出が全く冴えない。話が話なのだから、せめてこっちの方にも熱を入れればよいのだが、画面からの異称な迫力、といったものは全然感じられない。隙間風の吹く、何ともうすら寒い作品ではある。

大川恵子の縛り場面

### ○人形佐七捕物帖・血染の肌着

(東映作品、八月二週封切)

原作 横溝正史。監督 山崎大助

町娘を腰元に仕立て、阿片と交換に海外に売り飛ばそうとする旗本榊原家の悪用人真垣十郎左衛門(堀正夫)、侍医の熊谷玄斎(原健策)に挑む人形佐七(若山富三郎)と子分の辰五郎(大泉滉)の活躍を描いている。

真垣一味の奸計に、佐七の恋人お照(大川恵子)が誘拐される。猿轡を噛まされ、後手の両手はさらに駕籠の背に縛られている。手出しのできぬ佐七を、お照が猿轡の下から、悲しく見つめる。大川恵子扮するだけに、このお照の眼は素晴らしい。

佐七の焦燥をよそに、お照は榊原家の土蔵に監禁される。後手、猿轡のまだまだ。さらに佐七の幻想で、縄を解かれたお照が、激しい鞭責めに呻く場面がある。しかし、縄を解いての責めはうなずけない。他に不満は、猿轡のかけ方である。四つ折りのごくお上品なかけ方で、「姉さんかぶり」を思わせる清潔感が漂う。また大川恵子の、よくいえば清楚な、悪くいえば色気のない個性は、サディスティックな興味からすれば不適役だったといえよう。

特撮技術駆使の快作

### ○地獄 (新東宝作品、八月一週封切)

脚本、監督 中川信夫

メフィスト的な友人に唆されて罪の意識に悩む青年が、死の直前に恐るべき地獄絵図を夢想するという設定。三途の河に始まり、等活地獄、黒縄地獄



衆合地獄、号叫地獄、大叫喚地獄、炎熱地獄、大熱地獄、無間地獄等の八大地獄に現世の報いを受けて苦悶する亡者達の姿を、特撮技術によってグロテスクに展開する。前半のシンボリックな画面構成を混えたりリアルな描写から後半、凄絶なタッチの地獄の表現に至る全篇、胸が悪くなり食欲が減退すること請け合いである。内容的には平凡なイマージュが不満だが、新東宝のエロ・グロも、ここまで昇化すれば可とすべきであろう。もちろん、見所は地獄における数々の刑罰描写にある。

閻魔大王（嵐寛寿郎）の前に、逆吊りにあう四郎（天知茂）。その首を太い鉄串が貫き、鮮血が滴り落ちる。燃えさかる地獄釜の中で、のたうち廻る女達。全裸の女達が、逆さに吊られた衆合地獄。血の池地獄には、老若男女が蠢めいている。こうした中を、四郎は幸子（三つ矢歌子）を求めて彷徨する。

メフィストの田村（沼田曜一）強欲非道な四郎の父剛造（林寛）らは、さらに苛烈な拷問を受ける。——大きな顔のアップ、その口に報いの鉄鎖が鋭い音をたて、歯は飛散し、血がほとば



しる。剛造は、さらに鋸引きにあう。下腹部に鋸の喰い入る音が凄まじい。縦横に斬りさいなまれる、その背のアップ。最後に剛造は全身の皮膚を剥がれる。白骨の中で心臓だけが脈打っている。豚の心臓を代用した由だが解剖をまのあたりに見る不気味さである。

手足をつけ根から斬落される悪徳記者赤間（官浩一）、刑事（新宮寺寛）、医師草間（大谷友彦）。この間に、地獄から地獄への道を蠶き歩く男女の姿をカットバックで見せる。剛造の妾絹子（山下明子）、息子の復讐に狂う老婆やす（津路洋子）、情婦の洋子（小野彰子）達は、首枷、手枷のまま歩かされている。一枚板に首と手の自由を奪われて彼女達は限らない報いの道を歩いて行く。といった内容の作品だが、数年間この素材を温めて来たといわれる中川監督は、素材のわりにこの方面の関心は薄いように思われる。しかし、今夏最高のエロ・グロ映画と評して、過言ではないであろう。寝そべった洋子を「あおり」でその股間を狙うといった奇抜なショットもある事を附記しておこう。



ソフィア・ローレンの男装

○西部に賭ける女（バラマウント作

品、S・Y系八月二週封切）

監督 ジョージ・キューカー



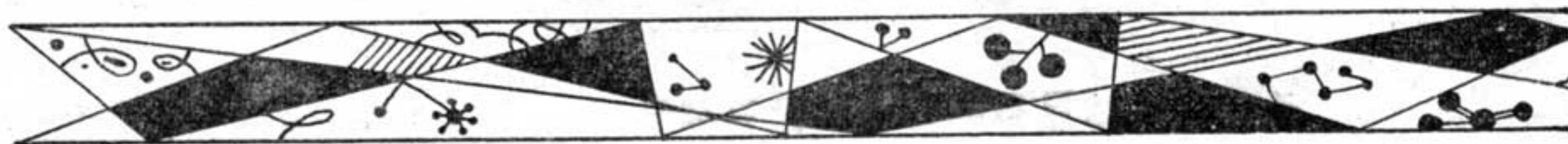
ガン・マンの活躍華やかなりし頃、  
“ピンク・タイツの無法者”と異名をとった淑女？ 実伝の映画化。ソフィア・ローレン、アンソニー・クイン、マーガレット・オブライエンの顔合せジョージ・キューカーの演出と揃うとスケールの大きな娯楽大作を期待させるが内容的には余り載けない出来である。劇中劇で隣国の領主を暗殺して捕われた王子（ソフィア・ローレン扮する）が、馬の背に両手両足を縛りつけられて、劇場内を一周する。このアイディアが拍手喝采を浴びる訳だが、馬の動きがもう少し遅い方が楽しめたように思う。しかし、この後原始的スクリーン・プロセスで疾駆する馬上に不自由な肉体を弾ませるソフィアをゆっくり拝ませる仕掛けになっている——ピチツと緊ったピンク・タイツも観物である。文字通りの競艶かどうか？

### ○競艶八剣伝（大映作品、九月三週

封切）

原作 島田一男。監督 西山正輝

罪なくして亡んだ一族の復讐に起つ八人の女性の悲願と活躍を描いている敵本多佐渡守邸に腰元として潜入し



た一枝（美川純子）は、その正体を見抜かれて庭先に引据えられる。高手小手の縄尻を取られ、折れ弓で責められた一枝は、打続く鞭に遂に悶絶する。その光景を目前にしながら、墨染の少将を偽った月姫（阿井美千子）は、声をかける事さえ出来ない。しかも、その月姫も亦佐渡守の奸計に陥ち、牢前に引据えられる。荒々しく片肌剥がれると、そこに女の証しの青い乳房がのぞく。月姫は、観念の目を閉じて為すに任せる——。 “お話” はシナリオ通りの出来でお粗末だが、責めの場面もシナリオ通りなので、楽しめる。

山本弘子（一枝に扮する）のとぼけた表情は余り適役とはいえないが、豊かな胸に三本の縄が喰い込み、苦痛に歪む顔のアップは、流れる汗にまみれて迫真性がある。カメラに向かって倒れ伏すと、背中に本縄で吊られた両腕をはっきりと見せて呉れる。

お得意の責め場面

### ○切られ与三郎（大映作品、七月二

週封切）脚本・監督 伊藤大輔

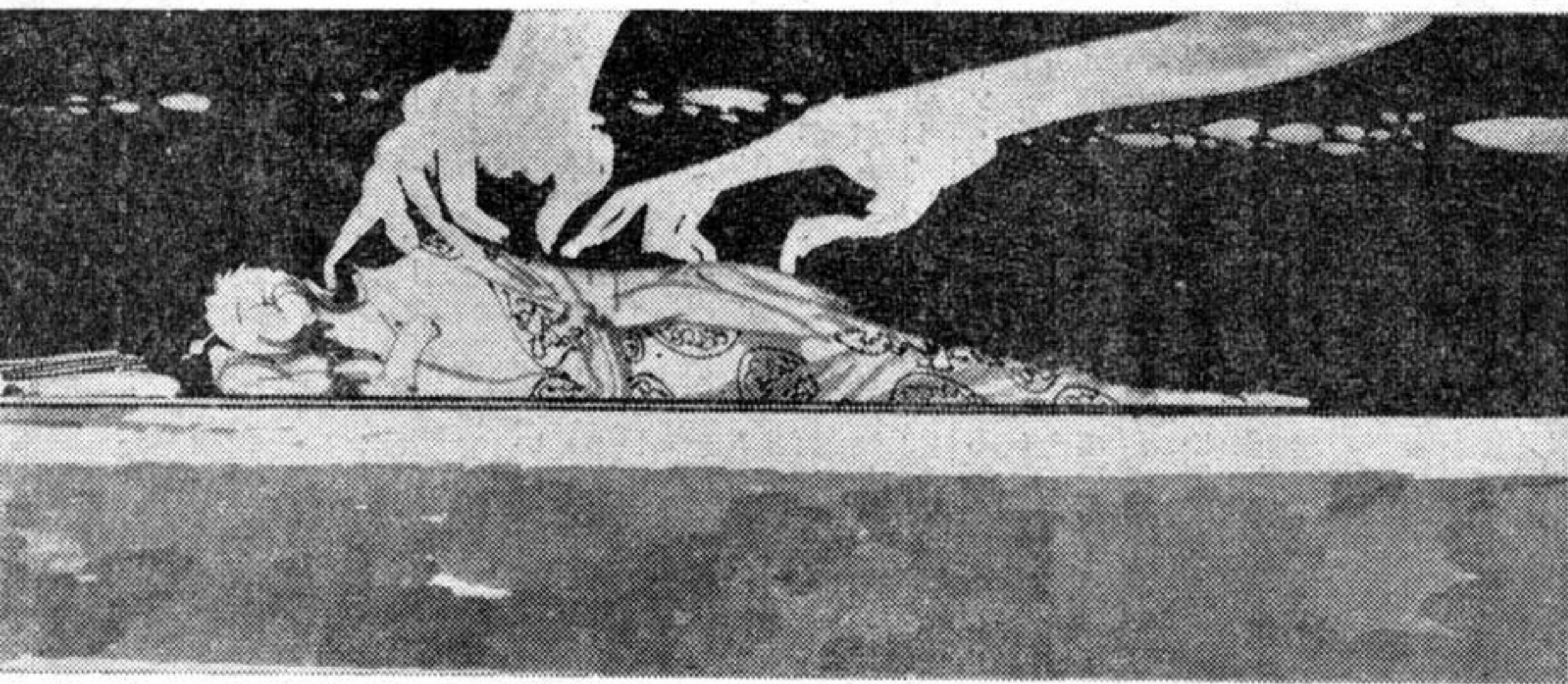
お馴染みの与三郎に三人の女をからませて、真実の愛を謳う新解釈のラブ

・ロマソンとしている。

妾のお富（淡路恵子）と与三郎（京川雷蔵）の軼落ちを怒った網元の源左衛門（潮方太郎）は、二人を捕えて激しい折檻をする。お富は、湯文字一枚の露わな姿で乳房の上下を荒縄で絞められ、柱を背に縛りあげられている。乱れ髪と、きっちり嵌められた猿轡が痛々しい。淡路の豊満な肉体を、伊藤監督は存分に責めている。その背後の壁に梁に吊られた与三郎の影が映る。全身を長脇差でめった斬りにされた与三郎の血が、お富の足許に滴り落ちる。異名 “切られの与三” の由来である。

ラスト・シーン。自首を覚悟の与三郎を慕って、後を追おうとする義妹のお金（富士真奈美）を扱いかねた与三郎は、涙ながらにお金を縛りあげて番小屋の窓に縄尻を繋ぐ。後手に縛られたお金は不自由な身体を折って、帯の間に覗く剃刀を口に咬えて引抜く。その剃刀で縄を切ったお金は、与三郎の止めるより早く、己れの咽喉にあてがって自害する。息を引取ったお金をしっかりと抱きしめて、与三郎は一步一步海の中へ身を沈めて行くのだった。





その見れば見るほどヘンテコなもの  
は私の心を吸い込もうとする！

## 須能伝五郎

絵・鈴木初男

### エ、耳の穴おそろじイ

東京は大都会でいろんな人間が棲んでいるから、ちよつと常識では考えられない珍奇な職業が存在していることは事実だ。しかし、私が他人様の耳の穴を専門にホジってごはんを喰べていると言ったら、

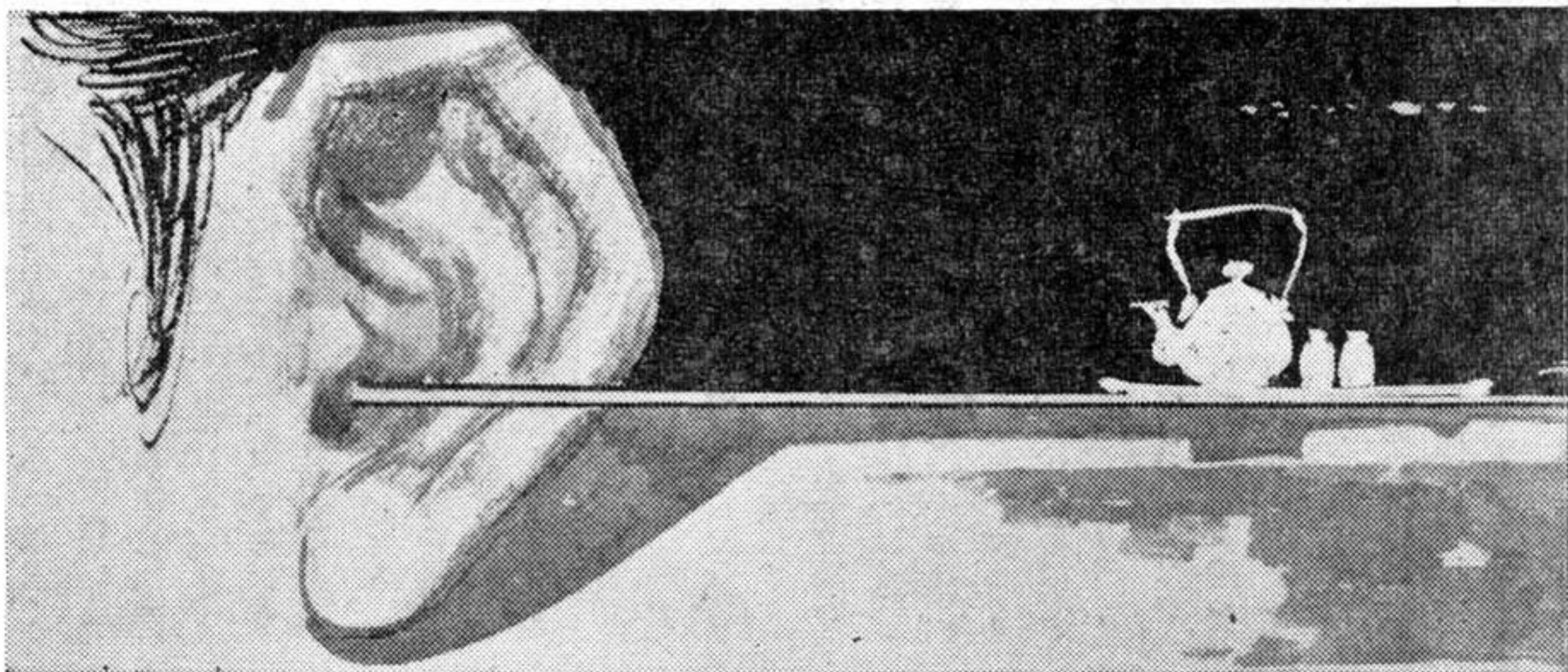
「そんなバカな……」

と、本気にしない人もあるかもしれない。が、そんな人だって床屋で耳をホジられたことはあるだろうし、それが気持よくて、目をほそくして、

「もっとホジってくれ。もっとホジってくれ」  
心の中ではいくらホジられてもいいような気になって、耳の穴をヒクつかせるようにしたことがなかったとは言ひ切れまい。

もっとも、なかには耳の穴をホジられたりするのをいやがる人もある。私の経験によればそんな人は排他的、そして猜疑心や警戒心の強い性格の者が、どうも多いようだ。耳の穴だけではなく、からだのいろんな部分に触れられることをいやがる。ほんとうはイヤでないにしても、警戒心がつよくて心に幾重にもヨロイをつけているので、気持がよいから気持がよいと素直に意志表示のできない人なのだ。





# 私は耳の穴 そうじ師

また若い、まだ性的には無垢の娘などでは耳の穴をホジられたりすることに、おそろしいような反応——ないし抵抗をしめす場合もある。

「きゃっ」

とさけんで首をすくめ、手足をちぢめてしまふのだ。

この場合は、前述のように警戒心が強くて心を開こうとしない人とは異なり、しゅう恥からの反撥のほうがつよい。処女の、反射的な防衛本能がはたらくのである。それだけつまり、耳をホジられたり脇の下をくすぐられたりすることは、あまりにも性的な接触として感じ取られるのだろう。ふつうのマッサージだって、そうである。若い娘なんかには死ぬほどくすぐったがって、マッサージどころか、指先さえ触れさせないのがある。子供もそうで、ある子守り女が、四つ五つの男の子を子守りしていて、なんかのはずみに子供をくすぐったところ、

「クッククック」

と、からだをねじって、もがいたり、笑い声をあげたりするので、なおも面白がってくすぐるうち、とうとう子供がくすぐられ責めで笑いながら悶死してしまったという実例さえある。



子守りは頭の程度がひくいので、子供がすぐられて笑い声をあげるので、喜んでいるものとカンちがいして、じぶんも夢中になつてくすぐりつづけたのだが、あにはからんや子供にとっては、文字通り死にもぐるいの抵抗だったわけである。たしかにくすぐりは、死の苦しみの絶叫が笑い声に化けてしまふような、感覚的な瞞着性があつて、それだからこそ濫用がおそろしい。

じっさい、若い娘など、これでもかこれでもかとくすぐられると、

「ああ、死にそう」

身も世もない声をあげたりする。目はうるみ、顔は何かに酔つたように赤く上気し、からだじゅうの粘膜という粘膜は、水分を吸いこんでふくらむズイキのように、熱っぽく膨張している気配が一目瞭然である。そんな相手に、ツボを外さず、くすぐりの手をぐんぐん強めてゆけば、じっさいくすぐり責めに死なすことも不可能ではないのだ。

つまり、こうしたくすぐりのコツをマスターしている私たちは職能としての武器を持っているわけで、これは手の動かし方によつては、ずいぶんキワどいことにもなりかねないから、職場ではよほどの自戒が必要なことは言うまでもない。第三者の目のない、男女

一対一のくつろいだ場面では、とかく魔がさしやすいのである。とくに女の人は、耳の穴をホジられることには弱いから……。

はじめは出張のマッサージ師とも床屋ともつかない組み合わせのサービスで売りこんだ私が、フトしたはずみに耳の穴そうじを営業品目に加えたのも、その効果の大きいのに着目したからだだった。

これをやるようになってから、私と客との関係はより親密の度合をますますになり、絶対のおとくいきさんになった。そして、いまでは私でなければいけないという客が何十人もつき、そこを回つてあるだけで、けっこう生活の糧は得られるのである。

「エエ、お耳の穴そうじイ」

声を出してふれてあるきこそしないが、知る人ぞ知るである。いまの私は、この種のしがない業者としては、まず商売はんじょうの部類といつてよいかも知れない。

## 中国でおぼえる

私はもともと理髪職人だから、剃刀やハサミのほうはお手のものだった。戦争中は兵隊で中支那に五、六年も行っていたが、この技術はずいぶん重宝がられ、中隊の中だけではなく、部隊長の御用まで勤めさせられたもの

である。もちろん、そのために甘い物とか、その他私物の衣糧の貰い物という役得があつたことはいふまでもない。

中国の田舎では、よく道具を前後にかついだ流しの床屋がやってきた。冬はダメだが、陽気のいい時はけっこう商売になるらしい。

日蔭の涼しいところに即席の店をひろげて商売にかかる。ロクな衛生設備もないので不潔といえは不潔だが、なんともいえない、ひなびたノンビリした味があることも事実だ。

私は、よくこれを愛用した。

こうした流しの床屋でもチャンとした店舗を張ったところでも、中国人の職人は概して剃刀の技術はうまいとは言えなかった。セツケンもつけないで、ヒゲをいっぽんいっぽん掘るように逆さ剃刀をつかう。顔がツルツルになるまでムキたてるのだ。だから、剃られた跡がヒリヒリする。脂肪食の多い中国人の肌はそれを好むのかも知れないが、日本人にはキツすぎる。しかし、そうした剃刀の使い方のみならずを除いては、私たちクロウトが、「ほほう」

と感心させられるような点が、いくつもあつた。サービスの徹底していること。ことに耳そうじは天下一品だった。細い棒かみそりを耳の穴ふかく入れてコジまわすようにする



あたりぐあいのよさ。耳かきの棒にしてもそうだった。細くて思い切って長いやつを、よくもこんなに入ると思うくらい深く深く入れて、奥の奥の暗く細い穴の壁にこびりついて、年数を組でまるでカサブタのように固くなっている耳糞をカリカリとつつきまわし

「ああ何時までも耳そうじが終らなければいいなあ」

と思い、人生のほかのことなんかどうでもいいような、なんとも言えないけだるい陶醉の気分に乗るのだった。

あるとき私は、例のように中国人の理髪職

色となっている、という話を何処かできいたこともある。

中国人はもとと、さまざまな快楽をつくり出す天才である。耽溺的なものが多いのだ。とくに身体サービスはゆきとどいている。

浴場に行つて湯から上るとベッドを備えて



浮きあがらせ、ほじくり出すうまさにはヨダレが出そうだった。じっさい、床屋に耳たぽをひっぱられたままぐったりと相好をくずしてヨダレをたらしている客を見ることは、珍しいことではなかった。それをやられているあいだ、私はいつも、

人に耳をそうじさせながら、

「日本でもこのくらい念入りに耳そうじをやつたら、ずいぶん客がつくだらうなあ」

と思った。

長崎あたりには中国人の床屋があつて、耳そうじに独得の腕をふるって、それが店の特

ある個室があつて、そこでいろんな身体サービスをやってくれる。全身マッサージがいくら、何がいくら——というぐあいに、まるで菜单子(メニュー)みたいな価目表があつて、それによつて注文するわけだが、そのなかに「刮々」といって、足の指の股のやわらかい



甘皮を、ヘラで削り取ってくれるのがある。湯から上りたてで皮膚が柔らかくなっている。甘皮は面白いようにヘラにたまった。ことに水虫なんかのある者は、そのところが白っぽくうじゃうじゃけており、痒みもある。それをヘラで器用にしごかれると、声を出したいような気持ちのよさだった。削って削って、足指の骨の髄があらわれるまでも削りとももらいたいほどだった。湯あがりのけだるいからだをベッドに横たえ、そうやって足指の股をヘラで削らせていると、

「人生の無上の快楽とは、こういう境地を言うのかなあ」

という気がしてくるのだった。

耳そうじは、そうした中国人が得意とする身体サービスの傑作の一つだった。私は彼らのやり方を熱心に研究し、戦友の耳をかりてそれを試してもみた。もともと素養はあるのだから、すぐうまくなった。戦友で自信をつけた私は、それを中隊の将校や、また部隊長のときにもやってみた。

「部隊長殿。だいぶ耳垢がたまっているようであります。掃除してよくありますか」

私が、耳そうじ道具を入れる小さな容器から耳掻きを出してヒラヒラさせると、部隊長は、

「耳？ あ、そうか。よし……」

などと言いながら、耳の穴をこっちに向けようにする。耳掻きを穴に入れて私が指を動かしはじめると、部隊長の目はすぐ細くなった。その鼻からはスウスウと気持ちよさそうな息がもれ、大兵肥満の男が、椅子から崩れ落ちそうにぐったりと股をひろげ、すっかり私のなすがままだった。

その次からは、部隊長のほうから、

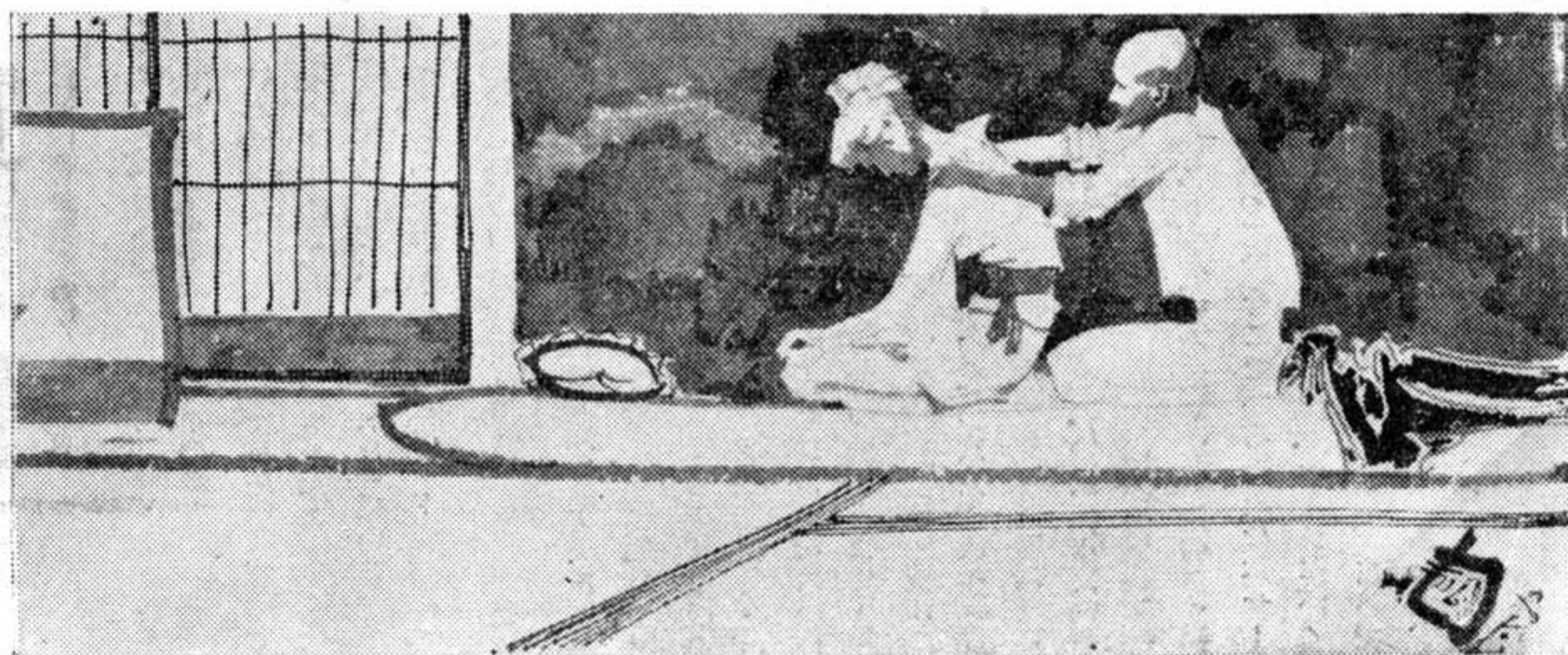
「オイ、耳をやってくれや」

さいそくするようになった。私が時間をかけ、たんねんに耳そうじしてやるあいだ、部隊長はほとんど一言も口をきかず、死んだように椅子の上にノビていた。そして、やっとそれが終わると、いかにも名残り惜しそうに、「フム、そうか。御苦労」

やおら椅子からからだを起すのだったが、その顔は見果てぬ夢を追うようにトロンと上気し、まるで女人と交った後のように、ねっちやりと脂を浮かせているのだった。

一般には鬼のように恐れられている部隊長が、耳掻きの動き一つでコロリとなるのを見て、私はひそかに自信をつけた。人間の弱点をつかんだような思いだった。

たちまちコロリと





終戦後復員してきてから四、五年のあいだ私は床屋の渡り職人で暮した。この世界くらい渡り者の多い世界もない。腕一本で転がりこめばその日から飯を喰うには困らないという気楽さがわざわいして、二十代の終りから三十代のはじめまでウカウカと暮してしまった。もう渡り職人としてもトウがたち、肩身のせまい思いだった。それに使われの身ではいくら客にサービスしてやったって、わが身には返ってこない。第一、一人の客の頭に四十分以上かけてはいけない、なんていう大量生産の店ではオチオチ耳そうじなんかやっていられない勘定である。

三十五で、やっと店を持った。四年つづいたが店をツブしてしまった。競馬競輪にコッタあげく商売は左前、女房ににげられるというおきまりのコースである。

四十の坂を目の前にして、さすがに落漠の思いが身に沁みた。

私はにわかには思いたち、N先生の指圧道場に通い半年間の講習を受けた。店はツブしたが店舗は残っていたので、それを売って私自身は安アパートに引っ越すことで、なんとかその間は喰いつないでゆけたのである。

講習を終え、さらに地区の支部に所属して支部長についてインターンもどきで治療者の

家を回ったりしているうちに、どうやら一本立ちできるようになったが、この一、二年がいちばん苦しかった頃だった。その後、私が独自のやり方で、「私だけの」客をつかんだことは、冒頭に述べた通りである。

しかし正直の話、はじめて、

「おくさま、お耳を……」

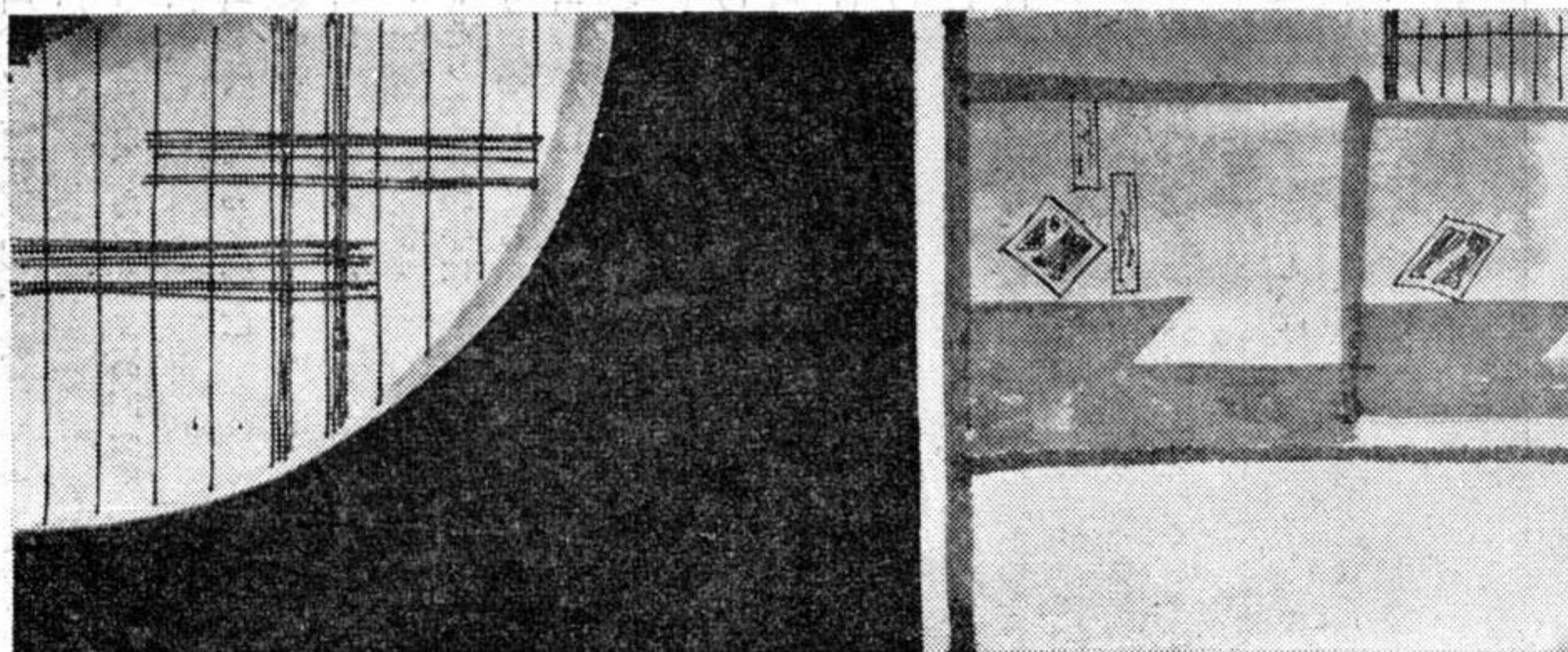
とやったときは、かなり勇気が要ったものだった。指圧療法師として耳そうじをさせてくれというのは不自然である。まして、指圧療法師の中には、まるで医者のように先生気取りで接している者もある。そんなばあい、なおさら、

「耳を……」

などとは言いにくいし、相手も耳の穴を出しにくい。

私のばあいは、最初から「気さくな揉み屋さん」ぐらいの感じで通っていたので、まだしもよかったのかも知れない。それと、私は前身が理髪職人だけに、ムダ毛や不精ヒゲは目につくほうで、何時も指圧に出かけるときは剃刀も携行していた。相手の首筋を揉みながら、何気ない調子で、

「おくさん、えり足が、だいぶ生えていますね。ちょっと、整えさせていただきますか」「えっ？」





「剃ってさしあげますよ」

「あら……」

それからあとの、たたみかけかたが問題である。

「モヤモヤしてて、暑苦しいですよ。私はどうも気になりましたね」

言いながら、間髪を入れず剃刀を出して構え、気がついてみたら、もう刃がうなじのあたりをナメていた、というくらいの手回しによさが必要である。相手にヘンなしゆう恥心やしらけた気分を起させてはいけない。

「血行がよくなるんです。皮膚もたまには剃刀などで刺戟したほうがよろしい」

といった暗示をあたえてやると、相手はよほどのって来やすくなる。

「すぐ応じて、はしたないと思われやしないか」

といった懸念が、相手の心にはあるから、それを適切な言葉の助け舟でときほぐしてやるのだ。女は、どんな場合でも自分の行為や感情を正当化するための口実を欲しがっているのだから、その口実をあたえてやればよかった。口実さえあたえれば、かなり思い切った誘いかけにもなってくる。おまけに、マッサージ師には、ある意味で身心をすっかり委ねてしまうだけの信頼感を抱いているのだから、

ら、そのマッサージ師の口から出る指令にはほとんど無抵抗になっているといってもよかった。

剃刀の前に首をさしのべた女性は、心理的にもまったく無防禦と言つてよかった。もし催眠術を用いるとすれば、こんな効果的な瞬間はあるまいと思われるくらいである。ほどよく剃刀をあしらひながら、

「オヤ、こんなところに、フケがたかっている。おくさんはノボセ性じゃありませんか。頭が痒いことはいですか？」

おかしなもので、そんなふうに言われるとなんだか頭の毛のツケ根のあたりが、ムズムズと痒いような気持ちに、なってくるものである。つづいて私は、第二のサインを出す。

「耳の穴が痒いことはありませんか。ノボセ性の方は往々そういうことがありますよ。これはそのままにしておくとはやはりウツ血や肩こりの原因になります。耳のそうじも、やはり全身的にいい効果がありますよ」

こうして、だんだんに水を向けてやると、ほとんどコロリとなるのが通例だった。

「そう。やつてもらおうかしら。でも……」

なんとなく相手がためらいを見せているうちに、私はさっきの要領で、さつさと耳そうじの道具を出す。

「これも商売道具ですよ。関連があるのですからね」

すました、あたりまえの商売の顔で言いながら、

「どれ、ちょっと拝見」

それから、

「ワッ。こりや、だいぶタマっているよ、たぞ」

そうなると相手はもう耳の穴がムズ痒いような気がしてくるから、

「悪いわね。きたない耳の穴なんかそうじさせて……」

そんなテレかくしを言いながらも、もうそのときは一膝のり出すようにしているのだ。いったん、はじまってしまうえば、もうこっちのものだった。まず、棒カミソリで穴の中のウブ毛をじやりじやりやるのだが、ウブ毛にまじって、うすくコピリついている耳垢もはがされてくる。耳の中の鼓膜にちかいところだけにその音は本人にはいとも大げさに聴え、じぶんの耳穴の中がまるでウジャウジャとした垢の巣窟みたいな気になってくる。はじめに私に、

「ワッ。こりやひどい」

と言われたことも、ひとつの暗示になっているのだった。もうこうなると、しゆう恥心



はかげをひそめ、むしろ、どんらん、ホジラれたい気持ちのほうに前面にせり出してくる。

そうした表情の変化、そしてからだの変化までが、手にとるようにわかった。鼻の孔からもれる棒のような息が、どうかしたはずみに私の手に触れるのだが、それがまるで蒸気のように熱くなっている。からだ、むれてくるのだった。

私が、

「ホーラ、こんなに大きなのが出ましたよ」

掘りだしたかたまりを、耳掻きのサジの上にのせたまま相手の顔のそばにちかづけてやると、

「アーラ、いやだ」

うす目をひらき、みだらっぽいくぐもり声で言いながら、からだは早く早くとつづきをせがんでいる。

そんなとき、私の目の前に横たわっている女の姿は、まったくの無防禦だった。

「だんなさん以外に、こんな姿を見せていいのかしら」

こっちでそう思うほどスキだらけだった。

もっとも、女の人たちが私の前でこんなに大胆にふるまうのは、私の容貌や態度にも関係がある。私は四十を過ぎたばかりだというのに五十二三に見えたとし、顔といったら、い

たって趣味のないヒョットコ面だった。耳の穴ほじりにはあつらえむきの顔だった。そんな好人物らしいマスクが女たちに、いくらか軽侮の気持ちをふくめた親しみをもたせ、私の商売をたすけていたのだから、何がしあわせになるか判らない。

ところで、私がほじり屋さんとして客のあいだに知られはじめたころ、耳の穴ほじりという、この奇妙な特技の効果のほどを、イヤというほど思い知らされた一事がある。

Mさんと言って、小さな町工場をやっている一家があつた。家長のMさんが六十位。奥さんが五十七、八。ともに親しみのもてる人だったが、この奥さんのほうが私のファンだった。その感化で旦那さんも私にかかるようになった。もっとも、これは耳そうじというより、指圧療法のほうである。

私は週に一度くらいその家に呼ばれていたが、そのうち、家族の様子もだんだんわかってきた。

二十七、八の、長女らしい女がいたが、これはどういうわけか、最近婚家から帰って、ずっと親元にいついていた。夫婦の不和とか何か事情があるらしい。その下が二十二、三の娘で、これは板橋のN大病院の事務局につとめている。その下が高校三年になる、やは

り女の子。

母親は娘たちにも指圧をうけてみなさいとすすめるが、下の二人は、

「いやあよ」

と批判的だ。婚家から来ている長女だけがやってはみたいけれど、妹たちの手前なんだか恥かしい、といったところだった。それがある日、

「私、やっていたかどうかしら」と言い出した。妹たちが留守なのだ。ナルほど。

じぶんの部屋に当てられている二階に来てくれというので、私は彼女の後から階段をあがる。スカートの裾が円く輪になり、目の前をのぼってゆく彼女の太股のあたりまでのぞけた。匂いのある空気が、コボれてくるようだ。私は神妙をよそおいながら、しずかに階段を踏んだ。

### こんな失敗も

階段を上りきり踊り場からフスマをあけると六帖の間だった。夫婦仲が思わしくなく、実家へ帰っている女の部屋らしい、ひっそりとした感じだった。だが、それはそれとして二十七、八といえど女ざかり、その強い体臭があたりの空気ににじんでいるような、なまめかしさもある。



「どうぞ」

と座ぶとんをすすめられて、私はその上に膝を下ろした。

「で、どんなふうなのです。どこかぐあいでも……」

私の問診にこたえ、彼女が話すところによると、なんとなく全身が重く頭痛がする。便秘がほとんど慢性的だし、月のものも不順だというようなことだった。

「ああ、それなら」

と、私は言った。

「すこし、つづけて揉めば、よほど快くなりますよ。頭痛なんかはたちどころです」

それから、

「じゃ、どうぞ」

それとなく、彼女にそこに横になるようにうながした。

「お風邪を召すといけません。何か毛布でも……」

それをまきつけて横になるように、という思いやりを示すことも忘れなかった。たったいちまいの布が、思いのほか女たちのしゅう恥を柔らげるのである。

言われたように女は押入れから毛布を一枚出し、それを下半身にまくかっこうで、つつしみぶかく横になった。つつしみのある中に

も、やはり生娘にはない、ちよっとくずれたような感じの色気がある。

「三年くらいは結婚生活をしているな」

私は毛布の上から、かるく女のからだに手を触れながら、そう思った。

「それにしても、子供ができないのはどうしたのだろう。こんなに立派なからだをしているのに……」

順を追って揉んでゆくうち、私は彼女のからだの「患部」をさぐりあてていた。中断された性生活、そしてみたされない欲望が、シコリのようにからだのどこどこに巣喰っていた。そして、用心ぶかくそこを揉みほぐすとき、肉体のひそやかなタメ息を聴いたように思った。

私のなさけぶかい指先は、そうなるとよけいしんとろりと熱っぽく揉みあげ、相手をたのしませ、よろこばせてやりたいと思うのである。そして指先は雄弁になり、あるひそやかなことばを相手にささやきつづけるのだった。

こうしたばあい、相手の反応はつねに半信半疑だった。私の指が何かの下心を持っているのか、それとも虚心なのかはかりかねているのだった。私の指は深入りしそうになってはさりげなくかわし、折をみてはまたひそか

なサインを出す、といった、微妙なたわむれをくりかえしていた。そんなへんてこな、心理的な鬼ごっこにじれて、相手はホーッとふかいタメ息をつく。徐々に私のペースにまきこまれていくのだった。

「ハイ、あおにどうぞ」

私は焼けかけたパンをうら返すように、彼女をおおむけにさせた。その動作につれ、熱っぽい、女くさい空気がからだの下からフワッとして立ちのぼった。顔も上気していた。あかるさを恥じるように腕をひたいの上にのせ顔を隠すようにしたが、のぞいている唇のはしには心の深味をのぞかせた謎のような、いくらかコワ張ったうす笑いが浮んでいる。

「あの、ちよっと……」

途中で彼女はひそやかに階段を下りてゆきまたひそやかに上ってくると、じぶんの体温が残っている場所へ、ふたたびゴロリと横になった。

なにか悪事をはたらいてでもいるような、ひそやかな、ひかえ目な動作だった。途中で手洗いに立たなければならなかった彼女の生理を、私は知っているのである。しかし、それに気がついたような顔をしてはいけけないのだ。

私はつづけて彼女を揉みながら、そっと横



にそむけた彼女の顔の耳の穴へ視線を釘づけにされていた。その、みればみるほどヘンテコな形のは、その中に吸いこんでしまいそうな奇妙な力で私を誘惑するのだった。その小さな穴に細い長い棒を、深く、するどくしずかにどこまでもどこまでも挿入してゆく

私はほとんど自分の衝動をおさえることができないほどだったので、揉みながら上体を屈めると、彼女の耳のそばへ口を近づけて、「お耳をそうじしましょう」

ささやくように言った。

相手はビクリとし、瞬間、陶醉の表情がさ

耳の穴そうじの効用を話し、なんとか不得要領のまま彼女をなっとくさせたのである。

それから、道具を出し、いよいよ耳の穴そうじがはじまるまでのあいだ。私はオカしいほどドギマギしていた。こんなに強い誘惑にかられたことはじめてだし、はじめて揉ん



ときのあの感じ、そして棒の先端が急所にふれたとき、はっと稲妻のように相手の顔にはしる甘美な苦悶の表情を思うとき、私はクラクラと目がまわるようになるのを感じた。

いつのまにか、私は耳の穴、それも美しい耳の穴に憑かれた男になっていたのである。

めて、警戒の色がその顔に浮んだ。無理もない。私はこのMさんの家では、そんな奥の手は出していなかったのだから――

しかし私はいったん言い出してしまったので、なんとかつじつまだけは合わせなければならなかった。で、夢中でクドクドと、私の

だ人に、いきなり耳そうじを申し出たことも珍らしいことだった。その日を逸すると二度と機会がないように思われたことと、彼女の生理をすっかり見通したように思ったことが私を大胆にしていたのかも知れなかった。

ところが、いよいよ耳の穴へ棒を入れ、カ



リカリとやったかと思うと、彼女は、

「う」

とからだを硬直させ、私がおどろいて手をひくあいだに起き上ると、顔を両手で覆ったままバタバタと階段を下りてゆき、二度と上ってこなかったのである。どんなに私が動揺しているとはいえ、熟練の指先に狂いがあるうはずはなかった。耳を傷つけたのでないとするれば、それはあまりにも露骨に、彼女の恥かしい感覚を刺戟しすぎたのだろうか。私はいまだにその時の彼女の行動と心理の動きを理解することができないが、わずかに想像がつくことは、夫婦生活の中断でとかくひがみつぽくなっている心理と、異常に鋭くなっている感覚が妙な風に作用し、一気にバク発して、あんなヒステリックな行動に走ったのではないか、ということである。とにかく、クスのききすぎた一例で、それ以来私はなんとなくMさんの家のシキイが跨ぎにくくなってしまったのである。もっとも、その長女はそれからまもなく我を折って夫の許へ帰ったそうだから、私もとんだところで夫婦の和解に一役買っているのかも知れなかった。

### ウラ側をさぐる

M家では失敗したが、ほかでは、いっぺん



耳そうじをやらしてもらったら最後、その客はぜったいつかんでしまう自信が、私はあった。犬とお客さんをいっしょにしては申しわけないが、犬を手なづける方法としては、餌をやるよりも、どこからだの部分はいじって気持のいいことをしてやるのがいちばんである。たとえば蚤やダニを取ってやるとか、毛なみをブラシで梳き、かゆいところを刺戟してやるなどもよい。犬がゴロリと寝そべって、

「もっとやってくれ」

というようなそぶりを見せたら、その犬の信頼感はゼツタイである。餌は、警戒している人間の投げあたえた餌でも、嗅いでみて異常がないとわかればすぐ口へ入れる。しかしちよつとでも警戒している人間には、ゴロツと寝そべって腹の内側までさらけ出すということはゼツタイにしない。私に耳の穴をさし出すお客さんは、つまりシンからなついた犬のようなもので、耳そうじという特殊な感覚を通じてしっかり結びついているのである。

これは男でも女でも同じことだった。

いっぺん私に耳そうじをやらせたお客さんは、私の顔をみると耳の穴がかゆくなるらしい。私はそれが判るのだが、今日はといっていきなり耳そうじでは気分的にもシツクリし



ないから、それはおたのしみとして最後までとっておく。そして、全身を揉むなり、それらしい前座で気分を盛りあげたところで、

「ではお耳を……」

とやる。すると、まるで催眠術にかかったように、相手はコロリとなって耳の穴をさし出す。私の客の一人である、ある乾物屋のおかみさんなんかは、私が言うよりはやく、目をうつとり半眼に閉じ、鼻翼をふくらませ、そこからスウスウ息をもらしながら、耳をビクビクさせて、棒の挿入されるのを待っている。

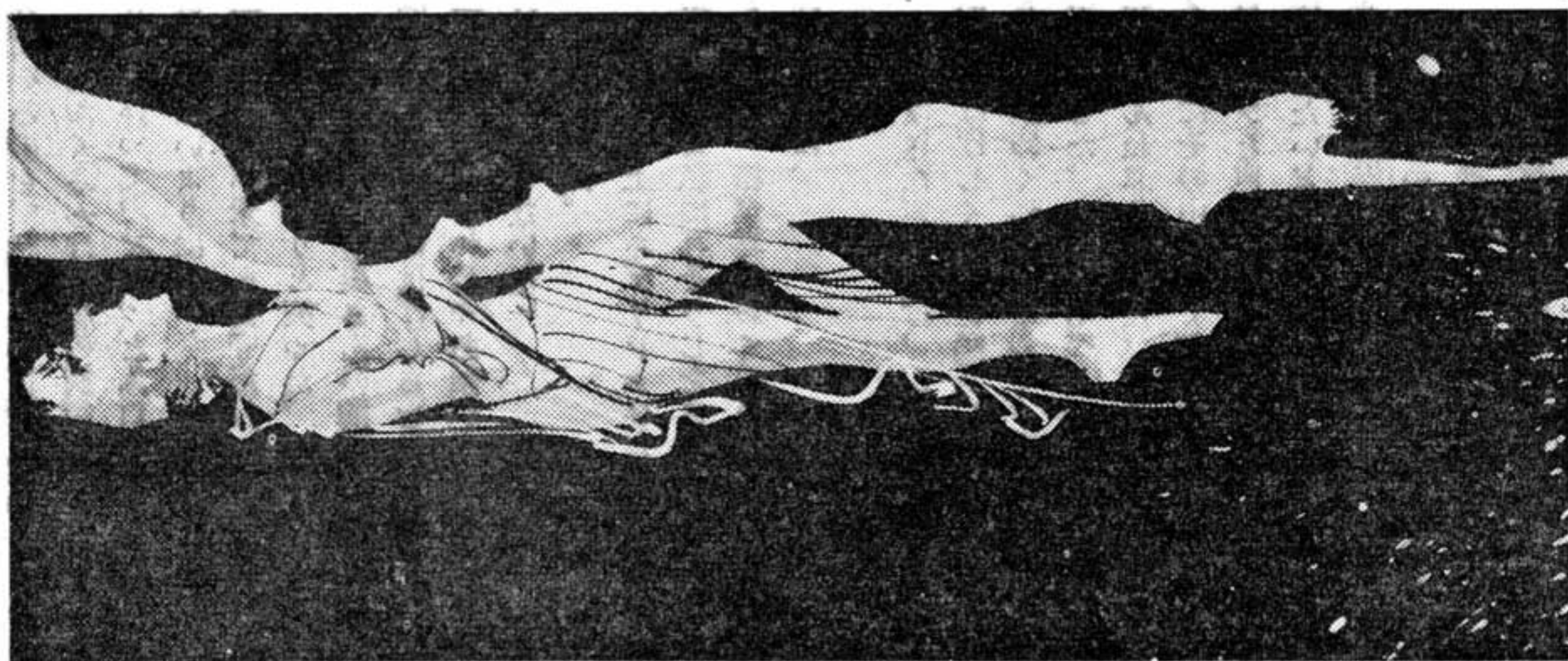
彼女の述懐によれば、そのときが計算も店のことも忘れて陶醉できる唯一の境地で、

「ほんとに寿命が伸びるようだ」

という。そうかと思うと、あけすけな彼女

は、  
「これさえありゃ、おとうさんは要らないねえ」

そんなことを言って、アハハと笑うのだった。たしかに、それは彼女の心理のいったんをのぞかせていた。もう年齢から言って、お内儀さんはそれほど烈しく男を求める心もなくなっており、いわば耳そうじくらいがほどほどのだった。こんな、更年期前後の女のお客さんは意外に多かった。



またもう一人の私のとくいである旅館のお内儀は十七、八貫もあろうかと言う、気性も男まさりの女丈夫だが、耳の穴に細い棒を入れると、すぐ気持よさそうな鼻息をたてて、あさいまどろみのような、状態に入ってしまう。五十にちかいが、青白くふくらんだ四肢にはまだ脂がのり切っていた。女中たちの話では、とても精力家で若い坊やを二、三人可愛がっているらしい。彼女のように、細い棒を耳からさしこむだけで、すぐスヤスヤ死んでしまうのは、たいてい性的には充足している例が多い。耳そうじに対する反応の仕方であるていど、その人の性生活の裏側や、愛情的に充ち足りているかどうか、判るのである。

この旅館のおかみのように陶醉が開放的で一コロというのは、むしろ男性にちかい反応で、これは彼女がパトロンも持たず女手一つで屋台骨をささえ、経済的にも自立していることを考えあわせれば、おのずから説明がつく。

それに反して、ひどく往生際がわるいというか、反応の複雑な女性がある。タメ息をついたり、足を行儀わるく交互にパタパタと動かしたり、何かわけのわからないことをムニヤムニヤと口走ったり、そうかと思うと棒が



耳に入っているのも無視して頭を動かし私をあわてさせたりする。よっぱらいのように始末がわるくて、からみつくような、調子がある。こういう手あいは性生活に飢えているからせいぜい蛇の生殺し程度の性にしかめぐまれないといっている。

しかしそんな連中がいくら誘惑にモロそうだといって、私はよけいなイタズラをする気はなかった。耳の穴をそうじし、相手をたんのうさせることだけが私のはりあいで、それ以上のことには興味はなかった。

## 今日も団地では

さいきんボツボツ開拓されてきている客の層のなかで、やはり目立つのは団地族の夫人連中だろう。家庭電化で大いにヒマができて時間をもてあましているせいか、私のようなものに対する需要が出てきている。

団地内では各家庭の横のつながりはあまりないから、私がどの部屋とどの部屋に出入りしているかというような、具体的なことはあまりわからない。その団地内に入出入りしているらしい、という漠然としたことはわかって

も――  
厚い壁で、個々の生活が完全に区切られている団地の家屋構造では、意外な秘密が保た

れているのを、私はこの目で見た。

あるおくさんは、私の施術がはじまる前に立っていった、ピシッと入口のドアを内側から開かないようにし、

「今日は誰が来ても留守だわ」

と言ってクスリと笑った。

じっさい、その奥さんの陶醉の深さと、姿態のとり乱し方のはげしさを見たら、

「なるほど、これじゃあ誰が来ても起きてゆけるものじゃないな」

と思われた。

ベッドの上にネグリジェひとつでからだを投げたまま私に耳そうじをさせる若いおくさんがいた。棒が耳のおくの急所に触れるたびに、彼女は、

「ああ」

と大げさな声をあげ、かけている夏ぶとんの下ではげしく下肢を動かした。しまいにはふとんがめくれてしまつて、太股のあたりまで露出した。まるで七つ八つの女の子のようなおねんねぶりだった。そうしては、枕を抱くようにその中に深く顔を埋め、ウッフン、ウッフンと声をもらした。私の耳搔きを伴奏にいったいどんな淫らな夢を見ていることやら――。

私がくるのと入れちがいに、何かのセール

スマンらしい、若い男が部屋から出てゆくこともあった。妻君のかっこうや、部屋の中の様子を見ただけで、いましがた其処で何が行われたか、あまりにも瞭然としていた。彼女は情事の後のひとときを、さらにたのしもうというのである。そんなとき、私はわざと刺戟を強くしてやった。すると、彼女の口辺からは、いましがたまで浮んでいたふてぶてしいようなうす笑いがたちまち消え、眉を八の字にしかめ、シーツをつかんで、苦悶にたえた。

それを見ながら私は、

「ざまあ見やがれ」

と思うのである。

それにしても、私の耳そうじを愛用している御婦人方は、多かれすくなかれ、それに中毒していた。

どうかしたはずみに耳がムズムズしだすと、もうがまんしきれず、私の電話番号のダイヤルを回しているというわけだ。

ある団地にすぐ反応の強烈な妻君がいて私はその人に耳そうじをするときは、何か殺人を犯してでもいるような、悪魔的な戦慄を禁ずることができなかった。ウーンと手足を硬直させてのけぞり、そしてある瞬間にはその足の指は浮世絵に出てくる女のようにぐっ



## 見たもの聞いたもの

### 残酷はいい感じ

と深く内側に折りまげられ、ケイレンしていた。

その折れ曲る指と、血がにじむほど赤く上気している耳朶のあたりがなんとも言えない凄艶さだった。そして、そんな張りつめた状態がしばらくつづくと、今度は関節も何もフニャフニャになるほど、グッタリしてしまう様子だった。

耳は人の顔でももつとも原始的で醜怪な部分だというけれど、私はこれほど美しいものはないと思っている。美しいし、こんなに深

く棒を突き刺せる部分があるなんて、考えただけでもゾクゾクする。

相手がキレイなとりすました女であるほど、その耳の穴をほじるという、何処か動物的な奇怪な仕草は奇妙な面白さを伴ってくる。文化人と耳そうじ、これはたしかに不思議な対象である。

巨大な耳と、耳の穴がある。

耳そうじ師という私はそこに梯子をかけ小さなノミを持つてのぼってゆく昆虫大の人間である。その存在は微小だが、あたえる陶醉

は大きい。

そして今日も私は鞆ひとつを提げ、間男のように足面をしのばせて団地住宅の階段を上ってゆくのだった。

「世の旦那さんたちよ。これからあなたのおくさんが、どんな秘密の時間を持つとうとしてるか知っていますか。しかし安心して下さい。私は耳そうじ師です。耳そうじ以外は、これっぱかしのこともしませんから……」と心の中でつぶやきながら――。

▼夏の海岸に若い男女の一组が寝そべっている。女は水着にビーチ・ウエア。男はパンツにアロハといった服装。

▼波の音。明かるい太陽のひざし。いきなり女がさけぶ「たまらないノあんた、あたしを愛してノ」男は女の顔の上におおいかぶさってキスする。女はそれをはねのけて「そんなのイヤ。ぶってノ あたしをぶってちょうだいノ それが新しい愛の表現なのよ」

▼男は起きなおり「よし、こうかノ」

女の顔をぶんなぐる。「あッ、痛い、だけどステキ、いい感じノ たまらないわ。グツとくるわノ」と、女は男の胸にしがみつく。男はもつと激しくなぐる。「あッ、いい感じ、すこ

しい感じ、もつとぶってちょうだいノ」女はもう夢中。

▼男も夢中で、こんどは、女の髪をつかんでぶんなぐる。「いい感じ、いい感じ、もつと、もつとノ」と女は砂浜にころがって身悶える。

▼しまいには、そのへんに落ちてい

る薪ざっぽうをひろい、それで女を

叩きのめす。「うーん、ステキ」と女は絶叫する。

▼以上、NTVが8月23日の午後放送したヌーベルバーグ・ドラマ「太陽の残酷物語」のひとつ。

▼と書くと、いかにも凄いシーンのようだが、じつはこの女に扮しているのが由利徹で、男は南利明。

▼つまり脱線コントの一つなのだが残酷ブームはアチャラカにまで浸透したというおハナシ。

(郁)

167 私は耳の穴そうじ師



# 裏窓タウン

## だらりの帯フェチスト

若い女のお尻を五十年間にわた  
り三万数千回もたたいてきた男が  
いる。京都、祇園で「入れ方」と  
いわれる八人の男衆の最古参者、  
通称「勝つあん」村上源三郎さん  
の話である。

「入れ方」というのは祇園の舞妓  
たちの「着つけ役」である。あの  
優雅なダラリの帯をしめる人たち  
だ。

勝つあんは明治二十九年京都に  
生れた。根が芝居好きな勝つあん  
はふとした縁で井上一座の立女形  
と百八十度の大転換を十九歳の年  
にしてしまった。

しかし女形ではさほど目はず  
「芝居に入りましたんやけど、美  
しいべべをつける方にひかれてし  
もうて」

と述懐するほど、着物をつける  
技術は先天的に器用だった。そん  
なことから女形から祇園に移った  
のは勝つあんにとっては本懐だっ  
たろう。

勝つあんがようやく一人前にな  
った大正三年——祇園に万龍とい  
う名妓がいた。勝つあんはこの人  
に恋してしまった。しかし「入れ  
方」が舞妓や芸妓と関係をつくる  
ことは、このシマから追放を意味  
するものである。

「勝つあんが、今もなお独身で、  
今まで浮気の話を書かないのも、  
万龍さんの面影が忘れられないか  
らだ」

こんなふうという女将もいる。

「そんなことアリヤしまへん、女  
はくそうていやや」

と勝つあんは体をくねらせて笑  
うばかり。また一方では、

「勝つあんは男やるか、男のもの  
あるんやろうか」

と、面白そうにからかう女将も  
いる。当の勝つあんにきくと、実  
際、今まで女とは一度も関係した  
ことがないという。立派な男の象  
徴は持っているが、そんな気は全  
然ない。むしろ、若い男の方に気  
を惹かれる。女の中にばかり暮し  
てきた故だろうか。

肌じゅばんから、一番最後のダ  
ラリの帯まで舞妓さんの身につけ  
る紐はなんと十二本。一枚着せて  
紐、そしてまた一枚、紐と、まる  
で荷造りのようだが、その紐の締  
め方も、ゆるくもなく強くもなく  
しかもその紐が表に影響されない  
ような技術が要る。ダラリの帯は  
一丈六尺、それをきゅっと締める  
力は到底女性のそれではつとまら  
ないが、といって大力だけを持つ  
男なら、誰でもできるものではな  
い。

「昔の舞妓は、小用に行くのにも  
ワテラがついて行って、最後のも  
のまでやったもんどす」

着くずれを「入れ方」の「最大  
の恥」と心得た気質からか、ホウ  
カン的な「入れ方」の奉仕からか。

勝つあんはきょうも、お得意の  
置屋に向いて、全裸の舞妓の真  
前に立ち、じゅばんから一枚一枚  
着せていく。

「よっしゃ」ポンとお尻を叩くの  
である。そして「うちおなごはき  
らいや、くそうて」と女のように



# 裏窓タウン

シナを作りながら、とうてい六十  
八歳には見えぬツヤツヤしい顔が  
笑う。

——以上は「週刊アサヒ芸能」  
9月4日特大号」に掲載の「女のお尻をたたく男」という記事を抜  
萃したもの。

女のお尻をたたくといっても、  
本誌の読者なら、この人物がSで  
はないことはすぐわかる。文中に

もあるように、むしろ幫間的なM  
であろう。いくら特殊な社会に住  
んでいるとはいえ、過去に一度も  
女性との関係がない、舞妓が小用  
にいくときもついていく、全裸の  
舞妓の前で着つけをはじめると  
いった事柄は、どうみてもアブノ  
ーマルである。「女に美しいべ  
を着せてやることに心を惹かれ  
る」という言葉からは、多分にフ  
エチシズムが感じられる。だらり  
の帯フェチスト、といったところ  
か。

(重)

## お尻幻想家と女弟子

★——宇治の仙人(稲垣足穂氏・

作家)には現在二人の女弟子がい  
る。それが梁雅子氏と山本浅子氏  
である。

有名な臀部のファンタジア「A  
感覚とV感覚」に出てくるX夫人  
が梁氏、Yさんは山本氏だと言わ  
れている。女弟子ができ、先生の  
趣向が転向したのではないかとい  
う説もあるが、これはどうも俗説  
のようだ。

ほとんど家を出ない稲垣仙人は  
現代風景に対する知識がとな  
い。いくら作品が新鮮でも、出て  
くる小道具が、大正時代のもので  
は、と、二人はときどき自分の見  
たものを書いて送ることにしてい  
るといふ。

「久しぶりで、冷房装置の歌舞伎  
座へまいりました。夏祭浪花鑑。  
団七九郎兵衛。義父を殺めて祭の  
夜のザワメキに紛れ入る花道。く  
りからもんもん。真紅の輝がオシ  
リに喰い入る後姿……過日のお言  
葉を思い出しました」

梁さんがこれだけ知らせると、  
師の空想はかぎりなく発展し、何

百枚かの小説、エッセイとなるの  
である。

「奥さん、お尻とは人体の中でも  
最も愛嬌のある、福々しい、同時  
にいついまでも齢を取らないよ  
うな部分だとは、お思ひになりま  
せんか? 女性にあつてはいっそ  
う、その通りですが、相撲取りの  
おしり、水兵のおしり、ホテルの  
ギャルソンのおしり、角帯を締め  
た船場の丁稚のおしり、マシン油  
にまみれた真黒な服に包まれてい  
るために、その白さと木目の細か  
さがいっそう想像されるような少  
年工のおしり、自転車のサドルの  
上に重みを支えている、久留米紺  
のもんべをはいた女中さんのおし  
り、更に又、ラグビーの選手のお  
しり、六日競争の自転車乗りのお  
しり、大名行列の奴さんのおしり  
祭太鼓を担いでいる若い衆のおし  
り(以下略)」

という具合なのである。

しかし、もう少し、氏のいわゆ  
る「A感覚とV感覚」について理  
解しておかないと、蜃気楼のよう



# 裏窓タウン

な、その臀部愛好地帯の幻には、とてもついていけないようなものを感じてしまう。あからさまに言

えば、Aとは肛門（アナウス）であり、Vとは女陰（ヴァギナ）であり、A感覚とV感覚とは肛門感覚と女陰感覚ということである。このエッセイは珍奇と見えながらもすぐれた文明論であり、三島由紀夫氏によれば「宇宙論」なのである。

「A感覚はセックスの原始形態で単孔類時代のまま取り残されている」

その根源形態であるA感覚がV感覚よりも、あまりにも不当に取り扱われていることを怒り、「V感覚はA感覚から分離したものであり、A感覚はインテリジェンスへの関心があって、学芸のいとなみにまで展開する」

とA感覚の復権を主張する。

A感覚——肛門愛——お尻嗜好男色と直線をひけば「アラ、いやらしい」と言うのが女性一般であろうが、稲垣仙人の女弟子は、そ

れを次のように、理解するのである。

「その男色は、彼の精神主義から出ていることが容易に知られるのではないかと思われる。それは具体的男色であるよりは先に、精神的、同性的友愛の発展であつて、それを支配するものは、セックスに先立つこと遙か手前の心情であり、憬れですらあるからである」（山本浅子・新潮八月号）

だから稲垣仙人は、具体的行為によつて、お尻を狙うよりも、美少年的要素をお尻に見出し、A感覚、つまり男性的美しさを、女にも、男にも見つけた、というのである。つまりV感覚を憎むということよりも、あまりにもA感覚的牧歌性を失った人間の仕打ちを怒っているように思われるのである。——（週刊コウロン・8月30日号）

## 或る殺人？

モーパッサンの短篇に「ボニファスおやじの罪」という作品があ

る。ボニファスは、田舎の郵便配達夫であり、彼の配達区域にはシャパティスという新婚早々の収税官の家がある。

収税官はバリの新聞を購読しており、ボニファスは配達前に歩きながらその新聞をのぞいてみるこ

とがあった。ある朝——例の如くバリの新聞をのぞいてみると、残酷な殺人事件の記事が出ている。

「とんでもねえこった。世の中には悪い奴もいるもんだなあ！」

と呟いたボニファスは、新聞の帯封を元通りにかけ、頭の中を残酷事件の幻で一杯にしなが

ら収税官の家へ着く。ところが、その家の様子が少々おかしい。

いつも早起きなシャパティスが今朝はまだ雨戸もあけていない。

ボニファスが不審に思って、家の回りを歩いてみると——内から人間の唸り声が聞こえる。ギョツとした。



# 裏窓タウン

たしかに誰かが唸っている。苦しそうな長い溜息と、喘ぐような息づかいと、格闘でもしているらしい響きとがはつきり聞こえた。呻き声は次第に強く頻繁になりさらに激しくなつて、ついには叫び声に変わった。

驚いたボニファスは警官を呼びに行く。

駆けつけた二人の警官は、家の様子を調べたが、突然、笑い出した。

「畜生！ ふざけやがって！ とんでもねえ奴だ！ ボニファスおやじの罪として帳面へつけておくぞ！」

配達夫は眼をまるくして、くりかえした。

「たしかに聞こえたんですがね」「ハッハッハ、あれを聞いたんだな。お前の女房だって、お前がぶつちめると、やっぱりあんな声を出すだろう。どうだ、この狸おやじ」

彼は長いこと考えていたが、やがて答えた。

「うちのかかあが……さようできたまにぶつくらわしてやると、ぎやあぎやあ、がなりますが……そりやがなりますが、ただがなるだけであ。じゃあ、シャパティスさんも奥さんをぶつくらわしているんで？」

ボニファスには、まだわからないのである。

そこで、警官が彼にささやき、教えてやると、ボニファスは愕いて、呆然となる。

そして、考えこみながら、つぶやいた。

「いや……あんなふうじゃねえ。……とんでもねえこつてす。……」

うちの奴は何ともいけません。わたしにやとても本当だと思えねえ。よもやあんなことが……まるで責め苦にでも遇ってるみてえじゃねえですか……」

——というオハナシである。まったくの話が、女は何だつてまたあんな「責め苦に遇っているような声」を出すのでしょうか。

男のサド心理を誘発し、育成するものは、やはり女の心身のなかにあるのデス。（大方惣太）

## 飼育人間

メトロ映画「タイム・マシン」は、特殊撮影映画で知られるジョージ・パルの作品。

原作はH・G・ウェルズであり第四次元の世界、未来へ旅する男の話である。

「八十万年後の世界」という副題を持つこの映画は、人類の未来図を、核兵器で文明が破壊された後の奇妙に退化した世界、として描いてみせる。

地上に住む人間「イロイ」は、食って遊んで寝るだけの、無気力怠惰な一群である。

地下に住む「モーロック」は、何やらの工業力を持っている人間だが、顔や体がはなはだグロテスクである。

美男美女もいる「イロイ」は、地底人の「モーロック」に家畜として飼育されている。



# 裏窓タウン

大昔、地球上に戦争があった頃の「空襲警報が出たら地下壕へ退避する」という行動がイロイには習性のように残っていて、モーロックが鳴らすサイレンを聞くと、もう、まるっきり不可抗力的に、フラフラと地底への入口に引き込まれて行く——。

必要なだけのイロイを得ると、サイレンが鳴り止んで「解除」となる。

地下では、モーロックが鞭を振るって「家畜」を追い立てて行く。イロイはモーロックの食料にされるのである。

そこへ、一千八百九十九年のロンドンから、「時間を旅して来た男」が現われ、イロイのため、人類の再建のためにモーロックと闘う。

男はイロイの美女ウィーナを愛しているので、一度は一千八百九十九年に帰ったものの、再び六十万一千八百九十年へと旅立って行くのである——。

感想——モーロックがもう少し強かったら、ボクがなるとしたらモーロックの方がいいな。だって美女を家畜にする側の方がいいにきまつてるもの。ボクだったら喰い殺す前に、何かしてみたいことがあるよ。六十万年後の世界の間だって、きっとそういうキモチはあるに違いないよ。

(マルキ・ド・坊や)

## 恐怖する水着の美女

日本教育テレビ(第十チャンネル)木曜日の夜十時から放送される「挑戦」というアメリカのテレビ映画。

主演はハリウッドの役者で、渋い二枚目として日本でも人気のあるジョージ・ネイダーであり「挑戦」とはピストルでダンダンバリバリやるアクションものの、それではない。ネイダーは万能的な科学者であり、毎週、いろいろと変った実験をやるのである。

たとえば「精神感応」の実験とか、「人間の眼に高速度撮影みた

いな能力を持たせる注射をした警官に、スピード狂を追跡させれば安全であり、逮捕のノーリツも上がる」というお話とか——中には突飛な話もあるが、八月二十五日に放送された「ダイビングの恐怖」などは「科学もの」としてマトモな物語。

オリンピックのダイビング競技に出場する美人の女子選手が、高所恐怖症になって、技術が低下する。原因の解明と復調させるための実験をやるのが、ネイダー先生だ。

この美人はボディの方も美人であって、それが水着で高い所から飛び込むところや、綱渡りみたいなことをするところなどを見せて「眼の保養」をさせてくれる。

美女は、父親の借金が原因で、サーカスのダイビング芸人のパートナーになる。三十三メートルの梯子の上から、地上の丸い水槽の内へ飛び込む芸であり、練習の第一日目にして美女の恐怖症は再発する。



男は、この命がけの芸当を荒々しく無理強いする。以前、コンビの女を一人、この芸で死なせたことのある男だ。

梯子にしがみついておびえる美女を、判事から「停止命令」を貰ったネイダーが助けにくる。梯子の途中での殴り合いなどあった後美女は救われ、オリンピックの出場資格も失わずに済み、再び復調して金メダル有望となり、メデタシメデタシ——という次第。

この美女を演ずるのが、本職の芸人にしては美女でありすぎるし演技も巧いといって女優にしては飛び込むのが巧すぎる——つまり吹き替えを使ったと思わせない。「本当らしさ」があるのである。

ともかく、眼の保養と、少々のサディズムとを満足させ、あわせて科学とは何であるかというモンダイを教えていこうという、教育上タメになる三十分でありました。(東宝・兼雅法師)

## 湯責めと水責め

東宝映画「男対男」で、北あけみが責め場を演じている。谷口千吉監督のアクションドラマであり少し前なら「三船対鶴田」というキャストが当然考えられるところだが、鶴田が東映へ移ってしまったので、今度は、三船と池部である。

沖仲仕の班長(三船)とキャバレーの支配人(池部)は以前は戦友だったが、麻薬密輸団のボス(田崎潤)が企らむ会社乗っ取り事件に関連して対立する。

しかし、悪に徹し切れない池部は三船に協力してボスの一味を倒し、弾丸を身に受けて死ぬ——というお話。

北あけみは殺し屋(平田昭彦)の情婦であり、池部をスパイする女。

池部はあけみをシャワーの下へ連れて行き頭から熱い湯を浴びせて拷問する。

浴びせながら服を引き裂いて、

池部は女の肌を露わにしようとする。女は悲鳴を上げて必死に身をまがくが男の力にはかなわない。「いうから許して!」とついに屈伏する。

この間、北あけみの豊かな乳房が半分ぐらい露わになって揺れ動く——という次第。

他には、平田昭彦が啞の娘を犯すくだりがあり「啞パンのおもしろさがだんだんわかって来たぜ」などといいながら捻じ伏せる。

啞の娘は暴力で挑まれても、悲鳴を上げて救いを求めることができない。

ということとは猿轡を箠めておくのと同じ効果があり、悪漢にとっては好都合なのである。

三船も池部も救出に現われることなく、娘(新人 星由里子)は身を汚されてしまい自殺をする。

新東宝映画「女獣」に小畑絹子の危難場面がある。これは拷問ではなく、殺害を目的とした場面なのだが、方法がいかにも嗜虐的である。



# 裏窓タウン

悪漢二人（江見俊太郎他一名）

は小畑絹子を捕えて、浴室で殺そうとする。

浴槽の蓋の細長い板一枚を磔のような形で女に背負わせ、足も縛ってしまう。

そうして、顔を下に向けて板を浴槽に渡し両端を男二人が踏む。水が次第に満たされてくる頃、御安心あれ、この種の映画では正義は必ず勝つことになっており、婦人警官松浦浪路と麻薬Gメンの菅原文太が救出に現われ、拳銃戦となる。

悪漢二人が応戦のため浴室を出て行った後も、女は起き上がることができず、水はまさに顔を没するばかり——ということになる。

松浦浪路が駆けつけて小畑絹子を引き起す際、小畑は実際に両手を板に縛りつけられ、足も括られているため、演技とは無関係の「実感」が出ていた。

ただし、水がふえてくる場面の「実感」については、この映画は拙劣である。

アメリカ映画「最後の航海」と

いう作品に、爆発事故で体を挟まれてしまった若い人妻が、船が沈む寸前、ギリギリのドタンバで救出される場面がある。

演ずるは、眼や口が大きすぎて日本人の感覚では美女と思えないが、先年アカデミー賞を受けたドロシー・マローンである。

瀬戸内海で解体される老朽船の内で製作されたこの映画は「海難事故もの」としても総体に迫真のできであり、どだい新東宝さんの写真と比較する方が無理だが——

それにしても、水はただみたいなものだから、この場合、製作費の多い少ないは問題とならない。演出者と役者の根性（つまり意欲ですな）の問題であらう。

（東京・食傷氏）

## つねり魔

蜀山人の著作で、文化十三年に出た「うぐひす笛」という小咄の本がある。

その中に「腰元」と題して、こ

んな話が出ている——。

「あしたは奥様神詣りにいらっしゃりますが、どうぞお供がしとう御座ります」

と腰元の願い。

「イヤイヤ、あすは人ごみの場なれば、若いものは、供に連れられぬ。それとも、たって行きたくばここへ来い」

と呼び寄せ、腰元のおいどを二つ三つつねり、

「それで行ったも同じ事じゃ」

——というのである。「おいど」

とは今さら申すまでもなく、おヒップのことであるが、いつの時代にも馬鹿者はいるもので、人ごみに乗じて女の尻をつねる「つねり魔」などというのが、江戸にも存在していたわけである。「尻斬り魔」みたいに兇悪でないとところから、こんな小咄もできたわけだろうが——それにしても、この「奥様」なる女は、いったい、何のために神詣りに行くのであるか。

すなわち、つねられるのが愉し

みで出かけて行く——ということ



# 裏窓タウン

になる。蜀山人の筆が描いた江戸の女のマゾヒズムである。

蜀山人は、このほか「春笑一刻」とか「鯛の味噌津」等と題する小咄の本を書いており、それらの中には、後に落語の材料として使われた話も数多い。(矢奈勘次)

## 入牢芸者の唄

身から出ました錆ゆえに

厭なポリ公にパクられて

手錠かけられ意見され

着いたところが裁判所

レコードになりかかって「待った！」がかかり、話題となった、例の練監ブルースの歌詞である。

これと似たようなことは、昔、

江戸時代にもあった。

松平定信の寛政の改革、水野忠邦の天保の改革などが行なわれた頃、江戸市内でたびたび「芸者狩り」があった。

当時の言葉で「隠し遊女」とよばれ、売春をした芸者を一斉に捕縛したのである。

一度に百人も二百人も狩り立て

ることがあって、伝馬町牢屋敷の女牢が芸者で、一杯になったりした。

最初のうちは、ずいぶんと恐れ入りもしたことだろうが、こういうことが度重なると、芸者たちも次第に凶太くなって、自分達の運命を数え唄にし、牢内で唄ったりした。

数珠つなぎに縛られて曳かれて行く恥ずかしさや、牢名主の恐ろしさ、牢番や非人(牢で働らく乞食)に金品をせびられる迷惑さなどが唄の文句にも表われているが数え唄などというのは「ケ・セラ・セラ精神」の所産であって、本当に怖れおののいているものならば、そんなものは生れない。召捕られた女達は、案外、多寡を括っていたらしいのである。

一つとや、ひとつに捕られて肝潰し いっしょに並んで数珠つなぎ

二つとや、ふた親たちは歎きつつ お百度参りや護摩を焚く

三つとや、南の御番所へ駕で行く 晩には牢屋の提灯で

四つとや、夜ひる牢では相談し御慈悲ねがいや名主さま

五つとや、いくらも芸者のある中で 私らばかりが恥をかく

六つとや、無性に転んだ罰当たり ひやめし草履でバツタバタ

七つとや、なにとぞ御慈悲で済むように 妙見さまへ願かけん

八つとや、やたらに乞食が牢へ来て たびたび無心で困ります

九つとや、これから心を改めて 玉子の守りをかけましょう

十うとや、とうとうしまいは江戸払い 吉原預けで済めばよい

——というのであり、大体は説明不要と思うが、最後の「吉原預け」というのは「奴女郎」といって吉原遊廓の遊女に落とされることである。

刑罰であるから身代金などは一文も貰えなかった。

(安芸礼太)



# 嘘つき者の遺言 II

村岡藤里

★犯罪者の胸には、いつ、どんなにして悪の灯がともったか？

○

いま昭和二十九年十一月から三十五年五月

までのわたしの日誌のなかから、刑務所のう

ちそと問わず、名さしでいえる犯罪者を二一

名だけひき出し、この人たちがなぜ囚人衣

を着こんだものか、その不運の道のりを数字

で分けてみたいのだが、すると人間の運命の

たあいなさ、罪深さがしみじみ恐い水となっ

てからだに流れる感じで今さらうら悲しい気

がしないでもない。

生れた場所と時こそちがえ、この人たちの

命の芯は、みな一様の宿運にはんろうされな

がら、しかも所詮は嘘吐きか犯罪者かに帰着

すべく女の腹から吐き出されてきた勘定にな

るからである。

くどくどいうより、次の数字に眼を通して

くれば判ることなんだが、これは二十二歳

から六十九歳までの犯罪者で、犯数は一犯か

ら十二犯まで、なかに犯数が多く忘れてしま

ったというものが二人いる。

「あなたの親は？」と訊ねたところ、

○大酒呑みだった：七四（このうち母親の

大酒のみ六）

○継親だ：二三（父のちがうもの七、母の

ちがうもの一六）

○片親だけ：一四（父だけ三、母だけ一一）

○不具者で恥ずかしかった：二（いずれも

父がびっこ）

○道楽者だった：四四（競輪、競馬、女に

夢中だったという）

「あなたの親の学歴は？」

○大学卒（中退も含む） 五

○旧制中卒（中退） 三一

○高小卒 一二

○わからない 六三

「あなたの家庭は？」

○貧乏だった 一三八

○すごく貧乏だった 四二

○中流 二八

○上流 三

（うち自称華族出身 二）

こうした家庭の親は、酒を買い、競輪、競

馬に行く金はあっても、わが子の教育にかけ

る金はないのが大半だから、幼少時代すでに

劣等意識がつちかわれてきてるわけで、この

感情のなかに、なにやらの動機で異常な毒気

がふくまれると、ついついまともな世間とソ

リが合わなくなり、犯罪者の世界にまっすぐ

身を入れていくことになるんだが、そこで、

「あなたは、そんな親に対し、いまどう考え

てるか？」と尋ねてみると、



○尊敬している 二  
○うらんでいる 九三  
○にくんでいる 一七  
○わからない 八八

「あなたが犯罪者になったのは？」

○自分が悪い 一九  
○親が悪い 八二  
○社会が悪い 三四  
○わからない 六六

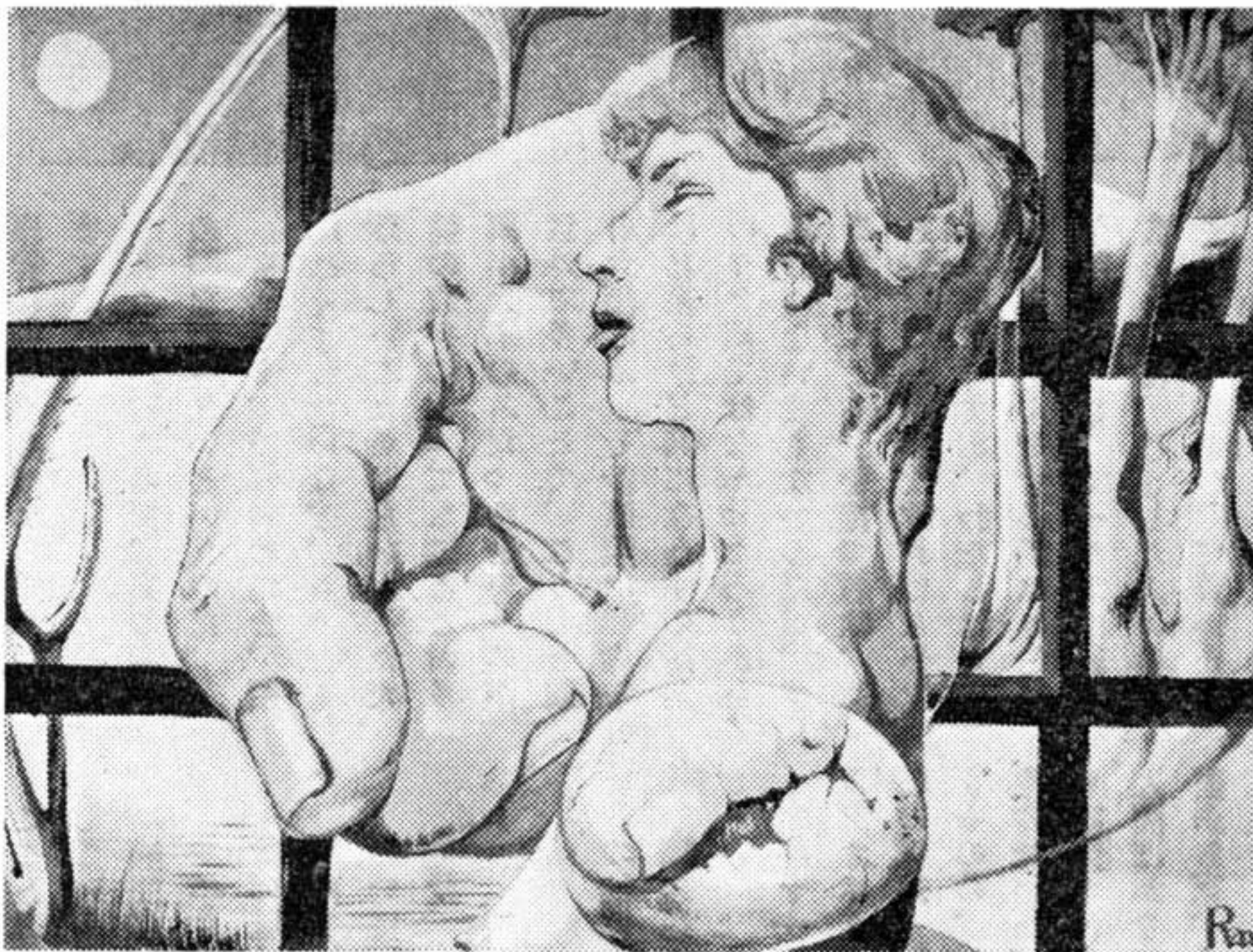
「あなたは出獄して犯罪を繰り返すか？」

○繰り返す 一三九  
○返さない 二五  
○わからない 四七

なぜ、わたしがこうもたどたどしく、数字に弱い頭に鞭打ち、こんなにしてまとめてみたかという、実はある種の因縁、つまり犯罪者の皮膚のうしろに、いつ、どんなふうにして悪の灯がともったものか、そこらあたりの曰く因縁を話してみたかったわけなんだが。

○

ものの本によると、幼児は四歳位から五歳の芽ばえのなかで、すでにおおよその判断がつくといわれているんだが、なるほど殺人、強姦などの兇悪犯罪者を例にとってみると、この一人の男など二十一になったばかりで、キヤバレーの女給を数人強姦した揚句、こんな



年の若さで無期刑になったんだが、まあ、そのやり口がなかなかふるってる。もっとも彼はボーイしながら、閉店後家路はるかな女給たちをそこまで車でとどける、

いわば店付きの運転手も兼ねてたらしいからいつでも周囲は女だらけだったわけで、それだけに女の弱味も充分知ってたから、易々と犯行を重ねてたに違いないが、

「こんなはずじゃなかったんですよ」

と、この成人式をあげたばかりの青年は、小柄なまるまっつい顔立ちを、パサパサとしたいかにも邪気のない悪戯っ子のように、ニヤリと笑い、

「首を絞める真似をすると、みんな眼をつぶって体を投げ出しますよ。車のなかですからね、背中の中のクッションがいいでしょ。」

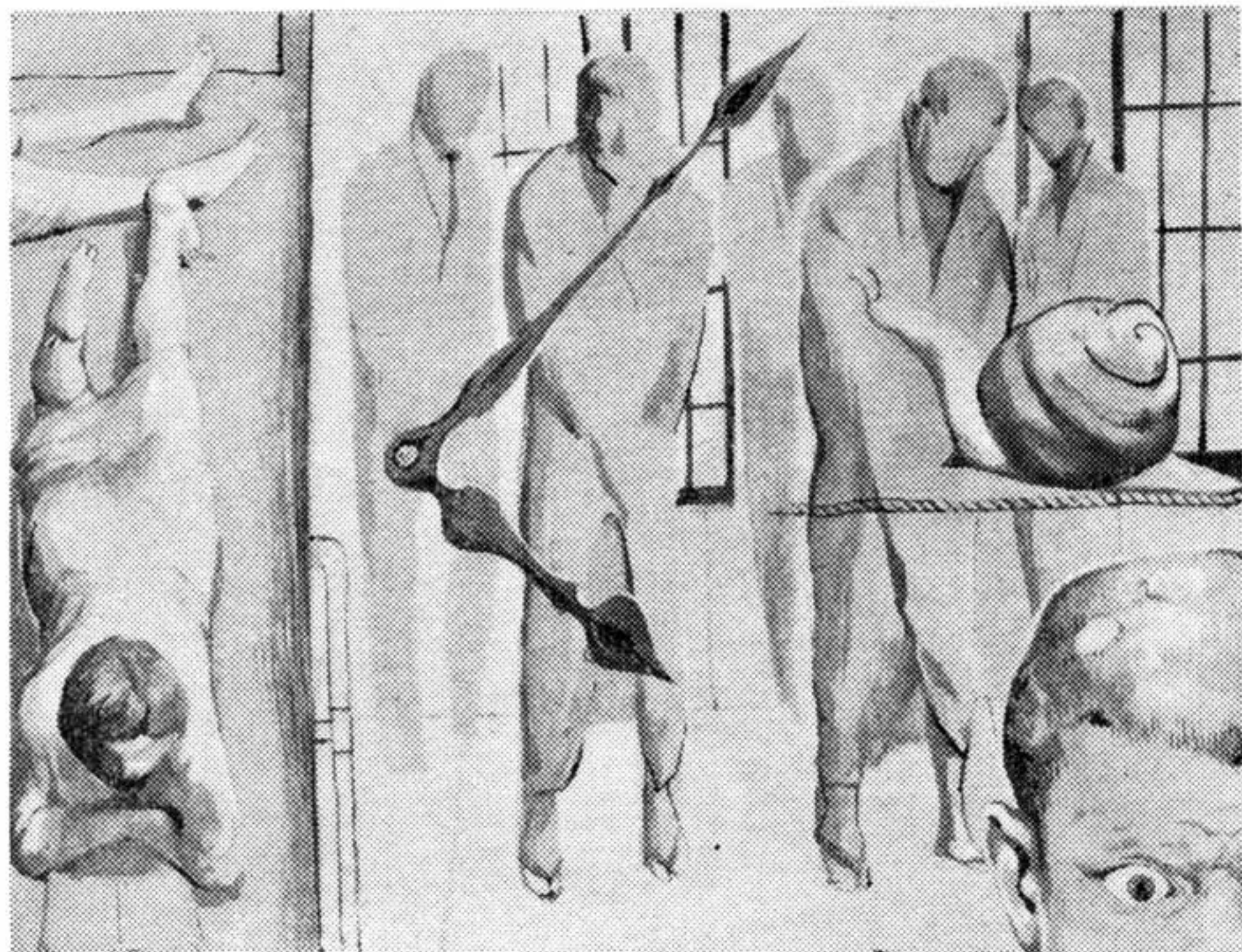
女って奴はうんと揉んでやると酔っちゃうんだな」

失心するほど首絞めないのにああと、いやとかいいながら全身の力抜き、ことが終るとすぐ、ぱっちり眼を開けて、

「お金ちょうだい……」

と、こう開きなおるもの、とんでもない金なんぞあるもんかいと空っ呆けると、それならあなたの腕時計でもいい……とい





った調子の女が大半だったから、彼はすっかり調子にのった。  
「なかには、押さえつけるとションベン垂れる女がいましたが、こんな女は自分から先に

日來雅樹ちゃん殺して悪名馳せた本山茂久も実は片親育ちだったが、こんなあたりにも、彼の犯罪の奥の目を見つけ出すなにやら鍵がありそうな気がするんだが……。

昂奮しちゃうんだから嫌になりますよ」

ところが、この男、実の両親の顔を知らないというのだ。

もっとも、犯罪者の場合、親にめぐまれないなど、ちっとも珍らしいことではないが、ただ前の数字によっても知るとおり

親が大酒のみだったというのが意外に多いことで、こうした親の大酒のみもその原因は、働ら

けど働らけど楽にならずの揚句のヤケ酒ではなかったろうかと思われないでもないんだが、す

るとよくよく子を持つ親は、酒を呑むに注意しなければならなくなる、まあ、わたしは人さ

まに意見なんぞする気はさらさらないし、ここで一つだけ罪を責める前に、こうした人々の星

まわりにも眼をかけて貰いたいと、これをいいたいわけで、先

ここら辺でわたしは、いま熊本刑務所に服役しているある囚人の詩を紹介しときたい。

無期囚のKが肉親たちから絶縁され、

三年余の闘病生活をしていた。

彼の魂は、今朝しずかに昇天した。

再婚した彼の母は近くに住みながら、

ついに引受けなかった。

俺は、

（銀河濃し、世の涯てまでも

生きたしや）

の彼の遺句を、幾度も幾度も、

読み返していた。（原文のまま）

○

昨年十一月二十三日のことだが、北海道の東部オホーツク海に面したこのさい涯の街は朝の気温一度。うっすら薄氷が張ったとはいうものの、知るように勤労感謝の旗の日で、そのせいかどうか、日中ぐんと陽があり、風も空気もとろとろ暖かくなってくれたから、人間ばかりではない。土地の名物鵜の大群も西から東、北から南、日射しが溶けて、眩しく乳色にモヤ立つなかを飛び交いし、啼き交いしして、心ゆくばかり秋の名残りを惜しんだのだが、やがて人の魂は水気を吸われたみたい、とろんとしはじめ、屋根並びのひさしは倍ものびて見せようという、時刻なら一時



に近い十二時四十分の真昼どき、この刑務所の赤練瓦の塀のなかでは、いまでも一人の殺人囚が獄死する一瞬だったというわけで……

医者という医者がみなサジを投げてしまった病人なんだが、意識不明になりながら、それでも八日生き続けていたものの、これが、のど仏のあたりふっくらコブ状のふくらみができ、それからというものの食事など一切咽喉を通らなくなったというのである。

「病名はなんなの？」

ある日訊ねたとき、

「それが全然わからないのさ……」

死ぬなんぞ思ってもないから、顎のたるんだ声で、人ごとのように咽喉をしゃくってみせるんだが、いまにしてみれば、ここらあたり不思議といえは不思議、妙に背裏が重く、つめたくなる……というのも、この殺人囚は服役生活十三年、強盗殺人の罪で無期刑ながら服役成績もよく、改悛の傾向も顕著というので近く仮出所することになった。その矢先に、ひょっこりこんな奇体な病氣、しかも勤労感謝の旗日を祝う紅白の大福餅が、その臨終と時も移さず、いっせいに仲間の囚人の手に配られたんだから、死者にとってはなんとも皮肉なモチとなってしまったが、しかし祝いの餅を手にした囚人の気持もまた複雑で、

わけでも同様に殺人の罪で服役してる者はあらかた浮足だったらしく見えたことだった。己れの邪欲で人さまの命を奪ったんだから、ろくな死目に会えるもんかといえはそれっきりだが、やはりそこは人の子で、せっぱ詰ったぎりぎりでも、なんとか楽しく生きたいと思うのが人情なんだし、そこへこの殺人囚の奇妙な病死の話が伝わると、「呪い」とか、「因縁」とか、昔の話で笑えないどころか、今更のように、獄房で首吊った仲間、毎晩うなされて喚き声をあげる仲間のことなど思い出して、顔見合わせる仕儀と相なったが、ここで考えるのは、因果がめぐるとは、決して線香くさい話ではないということなんで……。

○

米国独立戦争の頃に、コルチン・カリカックとか申す青年士官がいたそうだが、その士官若いときの気ままに、低脳の娘と関係して子を生ませたのは、まず致し方なかったとして、できたその子も低脳、またその子その子と続く六世代四百五十人のうち正常者は僅か四十人だけ。他はことごとく低脳、精神病患者、犯罪者、無頼漢、売春婦などだったそうなの。ところが、その後このコルチン士官、みめよき御婦人と正しい結婚をし、孫は六世代に二百八十人いたということになってるが一人の

低脳も生れず、社会的に栄達した者が多数あったという話で、それにつけてもと、わたしがここへ持ち出したのは、実は犯罪者に手淫ぐせと包茎の多いことで、はなはだしいのになると、ラジオ放送の際女性アナウンサーの声を聞きながらことを行ってるものもいるがこの囚人に聞けば、ぐんと一番頭にくるのは「オヤカマ氏とオイソガ氏」の淡路恵子の声だそう、耳に入れると矢も盾もたまらなく手が下にいくというのだ。

なるほど、今年の二月だったか、網走刑務所で百名の囚人を対照に放送番組のアンケートをとったとき、

「今聞いている番組中の司会者とか声優のなかで、一番好ましい人」

のうち淡路恵子が群を抜いて多かったが……といったわけで、まあ、彼女のグラマー的な声が意外なところで、激情をわきたたせているわけなんだが、その男、わたしにいうのである。

「若えときにね。親父とおふくろのお楽しみを覗いちゃったのさ。……俺のも、これは親父の遺伝だぜ」

自分から地獄へ堕ちるような、あまりにも明らさまな、そのいい方にもおどろいたが、それよりわたしの眼を釘づけにしたのは、人



それぞれの運命は、すでに両親が準備した地響のなかで揺られてるようなもので、例えば包茎にしても父親がそうだったというものが多し、なるほど兇悪犯罪者の場合など、聞いてみれば必ずといってよいくらい父か母が、見栄っぱり、嘔吐き、女ずき、男ずき、喧嘩ずき、賭博ずきなのからも、なおのことわたしの胸にしのびこんで黒い光をつき上げるのは、この遺伝の恐ろしさであった。

東京の小松川で発生した女高生殺しは、犯人が朝鮮人で、同様に高校生だったのと、推理小説を地でいくような、大胆なやり口だったせい、つい昨日のことのように耳新しい記憶があるが、その犯人金は、拘禁されてる東京拘置所の三階独房の窓から、毎日決まって夕方になると、もののあやめがかくれてくる薄紫の空へ向かって、

「おっ母さあん！」

と呼ぶんだが、一日も休んだことがないばかりか、あるときなんぞ、誰が聞いても泣いてるんじゃないかと思われるような声だし、それも腹一杯の大声で、

「おっ母さあん」だから、何日か目には、はたの獄房の窓から、

「止めろ！」

「うるせえ」

と、じゃれつくような、それでどこか圧迫されて押し返すみたい、やたらに嫌味たっぷりの掛声が、金の窓へ向かって放たれた。

すると、しばらく口をつぐむが、それもまた、少しの間で、再び一点めがけるような声が、

「おっ母さあん！」である。

「はじめのうちは可哀想だと思いますがね、ああも毎日じゃこっちがたまらねえや……」

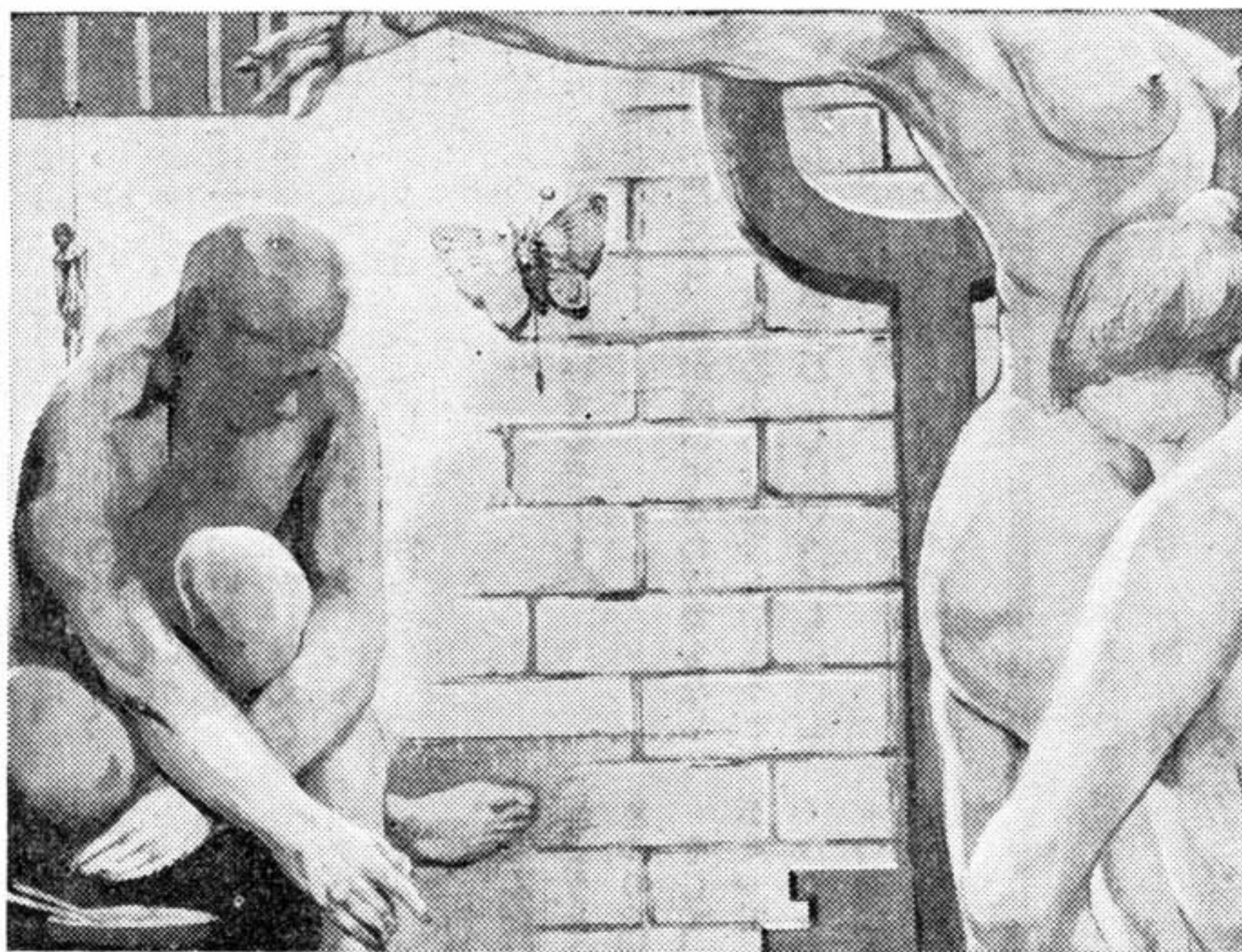
すぐ近くの独房にいたという男から、わたしは網走刑務所の病室で隣ごしに話を聞き、まずにより考えたのは、いつか読んだ新聞の記事、金の父親が大酒呑みだったということだった。

○

わたしも大酒呑みで、入獄した原因の糸をたぐりたぐり考えてみると、この酒がひとつの表情を浮かべたまま、じわりと尻べったにくっついてるような気がするんだが、大体郷里の中学校で教師してたとは言え、この教師たるや箸にも棒にもかからぬ、とんだ不良教師だったというわけで、わたしの郷里で、はじめにも終りにもこれ一回という中学生の抗議ストは、そのころ評判の悪かった校長の退陣要求でもなし、学用品を無料支給せよでもなし、ただこのわたしの仕出かした思わぬ失

敗に対するものだった。というのは、なんせ娯楽機関の少ない農村にとっては春秋二回行われる中学校主催の運動会こそ、町をあげての大リクレーションなので、老いも若きも総出でこの催しに参加することになってるから二日も三日も前から御馳走をつくり、四重五重の重箱に、この日だけは公認のドロクロをひろげて、陽が頭上に高くなるころともなれば、運動会より宴席の調子がいよいよ弾んでくるというわけで、そこで酒の好きなわたしが、なんで黙って眺めてるものか、人の眼にかくれてチビリチビリの盗み酒をきこしめてる間に、やがてプログラムは進行し、指揮者わたしの三年生全身体操の順がまわってきたんだが、深い淵から這いあがるような手つきで号令台に立つと、行進曲に合わせて入場、それから型どおりの徒手体操、終って曲れ右また行進曲に合わせて退場のこの段取りは、誰が指揮者であれ、相手はすっかり調練したサーカスの動物みたいなもの。何も言う必要なんぞこれほどなし、台の下では得たりとばかり振舞ってくれることになってるものを、さてこのわたし、台の上から百人もが一人のように跳ね、反り、振る、この見事な躍動をモウロウとした酔眼で眺めてるうち、この若い生命のほとばしりが、とめどもない美しい





感動となって、涙をこぼさんばかり胸のうちにこみ上げてきたもんだから、そして、このままのただの一回きりで、この若い躍動を終えてしまうことが、いのちの川の流れをとめ

るような、奇妙なくち惜しさをもたらして胸を衝いたもんだから、一瞬、わたしは鎌首をもたげるように、きつと首をのばすと、  
「全員！ 行進曲に合わせて、いまの体操を続けながら行進する！」

生徒たちにとっては、思いもかけぬ、それこそ嵐のような号令だったに違いなく、行進曲に合わせて見事に身をくねらせて退場するものも、いるにはいたが、その大半勝ち手がった風向きに戸惑い、ぎこちない足取りに体をくずして退場するもの、折しもどつとあがった観衆の嘲笑に、やたらどぎまぎしながらただのべつ跳ねあがって前に進むもの……

わたしは、この混乱を前にすると、拍子抜けした阿呆の顔をつくり、白眼をじっと宙に据えながら立ちつくすばかりで、その日誰れにおぶさって帰ってきただものやら。

つまりこれが生徒のストライキを招いたわけだったが、ま、いうならこの失敗の種は酒なの

で、酒のほかにはなんにもないようなものところがこうした時やところの分別つかぬ思いつきは、決して酒のためばかりでないと思付いたのは、実は服役して沢山の囚人と仲間づき合いしたからなんだが。

○

その前に、わたしに四、五年前まで奇妙な癖があった話をしとく方がいい。

うんと悲しかったり、楽しかったり、つまり強い刺激を心に受けると、妙に体を揺すぶ言葉にならない言葉を発するということが「ラレ、レッレ」と叫んだり、「サシ、シッシ」といったり。

これがいつごろからそうだったかというところ前号でいった父の件で、仕方なく母と二人郷里へもどってきたあたりかららしい。

まったくの話、子供のわたしにとって、これはあまりにも惨酷な試練だったし、耐えるにはあまりにも子供だったので、自然の成行が心に殻をかぶせることを覚えさせ、とくに母に対しては、決して本心を打ちあけず、お道化を振舞っては、胸底の暗い影を踏みつけようとするものの、そのくせ、いつでも落としものをしたような不安に駆られているわけ。父と弟をいっぺんに失った狼狽は、わけもなく、わたしを絶望的にするんだし、そん



なときは追われ追われたけどもののように、母にしかとしがみつきたいんだが、だが、その母にありのままを打ちあけられないからわたしは一人相撲をとりながら、いたずらに焦立つ毎日を送るわけで、奇妙な癖を覚えたのはそんなときだったらしいようで、つまりはじめのうちは、鏡に向かい、独言をいうのである。

「父さんの嘘つき！」

「母さんが、毎日泣いてるぞ……！」

「千治を返せ……！」

相手が鏡だし、誰が聞いてるわけでもなしこのときばかりは本心からなんでもいえるという安心で、やがてわたしはいっぱしの役者気取りで、台詞もどきに、

「父さんのやつ、ひとをだましやがって、必

らず仇はとってやるぞ。千治をとり返してやるからな。遠い遠いところにいて、山があったって、海があったって、刀も持ってくし、鉄砲も持ってくんだ。さあ、こい……！」

そこで、口から出まかせ、

「チラ、タッタッタッ」

「キリ、リッリッリッ」

と、わが身を鏡に映して飛んだり跳ねたりするんだが、こんなにして怒りも悲しみも忘れようとする子供心は、大きくなって、ひとつの性癖となって残ったに違いない。

そして、けろりとして、またもとの表情にかえっても、少しも自分の心に矛盾を感じなくなつたが、このときすでに、わたしの嘔吐きの芽ばえがあったようで、この種の芽に水をさしたのが、不平不満でギラギラした劣等

感だったから、もう立派に犯罪者となる資格が備わったことになる。

わたしが囚人仲間を感じたという癖は、実はこうした類のもので、これを十把ひとからげにして、太縄に編んでみれば、犯罪とはニッチもサッチもいかずの揚句、善悪の見わけもつかぬ思いつきで、浮かんでたものである。

その思いつきと犯罪の帳尻を合わせたいなら、犯罪者それぞれの持つ奇妙な癖をじっくり眺めてみると、びったり合う計算である。

これは、わたしが獄中で得た体験と、犯罪のいろいろな型を持ち出して説明すればよいことなんだが、ながくなるから次号にまわしたい。

(未完)

俗に『可愛い子には旅をさせ』という言葉があるが、十月号をもつて思い切った(……)といいたいが、まだ存分踏み切れなかつたところもある)脱皮を敢行し、

その上日本人らしく遠慮控え目がちに、少々上目を使って、英文でS—Mとうたい綴ったサブタイト

ル入りの黒表紙を背負って飛び出た独り旅。

くだいようだが、せっかくの英文に“Remarkable”はいかんせん、力が弱い言葉だ。

ここはすべからくはつきりと、“Eccentric”とPRすべきではな

かろうか。

私は失礼な言い分だが、長い間、本誌を扱うに正面から取組まずるべきか。

毎日忙しい世の中にいちいち活字を追って行くより、挿入の写真なり挿絵を観賞する、したい、御仁に対しては、どのあたりで御満

つまり、一方的に本誌を購入した余勢をかって、読者としての不平不満をぶちまける前に、かりに足願うべきであるか……などとい

われわれが、このような特異な雑誌



な態度で、今日まで読者の末席を汚して来たつもりであるが、ガラリと雑誌の御面相が変わってみると、どうせ日本で最も特殊な雑誌なりと名乗り出た以上、不完全の形で脱皮するより、永久に完全の姿で羽化していただきたいと思う

有名な刑罰画家好みの黒表紙に、妖しく浮彫りされた縄をからませたヌードは、少くとも半年くらいは、このままアイデアを生かして存続すべきであろう。

目次カットに続いての絵物語りは今回は製本の都合上、表と裏とで本文をハサミ打ちした形となったが、この、いわば見てくれ物語りほど、案外馬鹿にならない重要性を持っているものも、少ないであらう。

ことほど左様に将来ともに充分内容を検討し魅力的なものとして力を注いでいただきたい。

さて、新装十月号の本文中に、『裏窓』は実はこれが最初から発表されたかったんだという縛り写真

が勇敢に出たが、まことに残念ながら借り物のような気がしてならない。

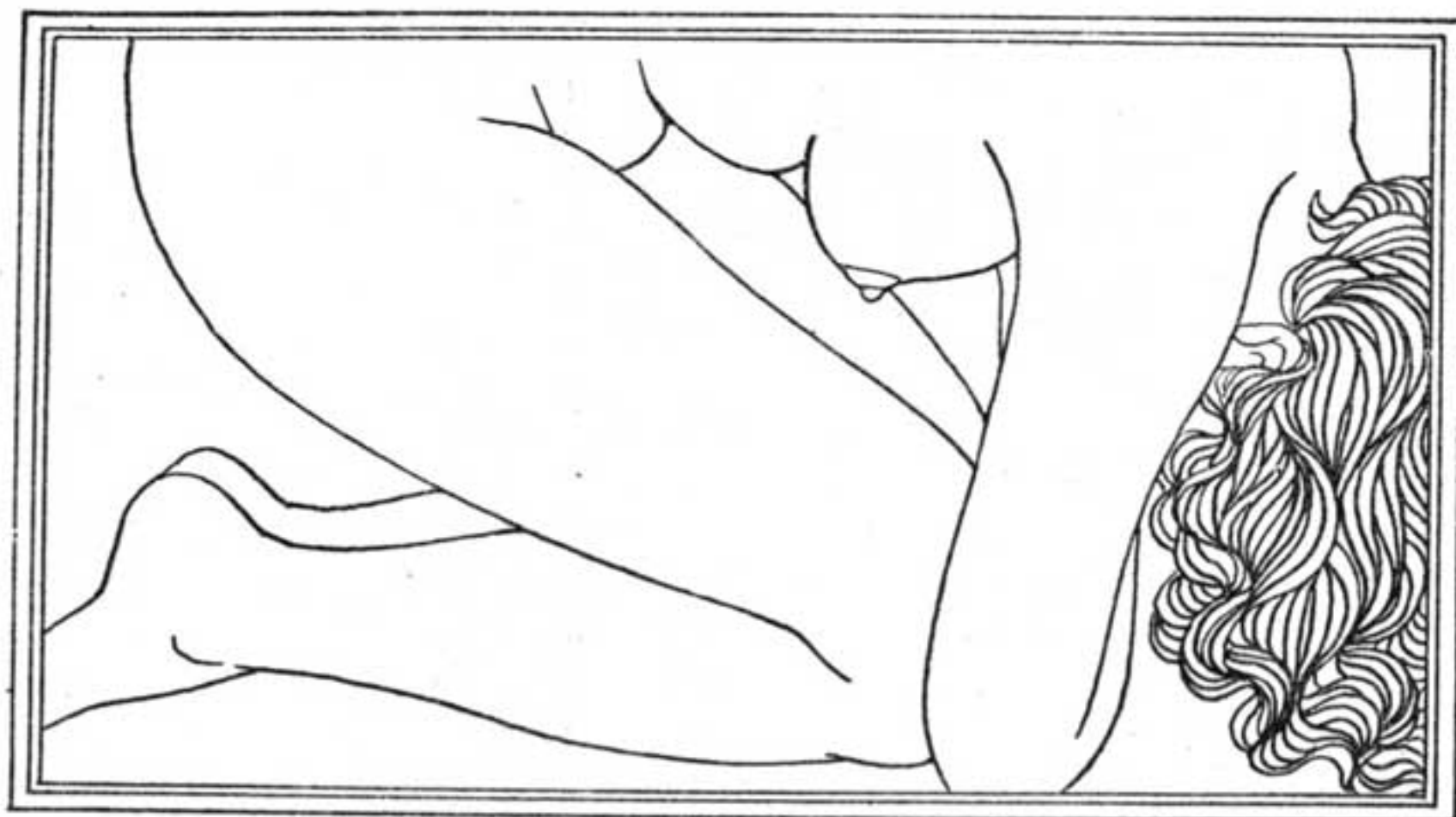
端的に申すならば著作権は文字通り裏窓編集部（または写真部）撮影であって欲しい。

なぜなら、本誌が発行される前に、賢明な読者はどこかで察知したであろうネガが混っているからである。

よしんば借り物でないにせよ、『悦虐ヌードの幻想』は誌面の浪費であり、意図するものが判然としていない。

## 新装裏窓に望む

東京・田 茂 滋



これに反して挿絵の方で白眉ともいうべきものは『女間諜の最期』の豊田みのる氏と鬼乳房伝奇の堂昌一氏の御両人が出色である。

肝心な本文に対する詳細な批評は、限られた制限字数のため割愛せざるを得なかったが、ただ一つ、全般的にいえることは百の偽

説法より一つの真実を核心とする小説が『裏窓』にあってしかるべきであり、永続読者をして、あほらしい感を抱かせぬよう、切に寄稿・投稿者の慎重さを望むものである。



## 誘惑お銀

「あら、ちよいと、ねエ、青葉の旦那じゃありませんか。ねエ、ちよいと……」

鼻にかかったなまめかしい声が、青葉莊之助の肩さきをうしろから叩いた。  
「うむ？」

足をとめ、ふり返った莊之助の眼に、水髪にさした京打簪が、斜陽を撥ねてまぶしく光った。  
莊之助は、その女の頭のとっぺんから、足のさきまでを見おろした。

三つ足の駒下駄の塗革がくいこんだ、抜けるように白い素足。

「ああ、お前さんは、あのときの……」  
莊之助は思いだした。

奥山の軽業小屋、あの放火騒ぎの寸前に、楽屋へ現われて莊之助を誘った奇妙な女だ。

「そう、お銀ですよ。ああ、うれしい。よくあたしを覚えていておくれでしたね。声をかけてよかった……」

にっこりと笑い、莊之助の胸に色っぽく身をすり寄せてくる女、胸を摸おさらばお銀。妖しい花の花粉のように、蘭麝香の匂いをまき散らす。しかし、莊之助の眉は暗かった。焦慮と懊悩にやつれた表情である。

曇り湿っているその顔色を、下からいたずらっぽく、のぞきこむようにしてお銀はいった。

「八卦見じゃないけれど、旦那のご心配ごとを、あたしがひとつ、当ててみましょうかね」

「なに？」

「——美和太夫のゆくえ。オホホホ！」  
ズバリというと、お銀は白い咽喉をころがして笑った。

「そのとおりだ。お銀さんといったなお前太夫の居どころを知っているのか？」  
思わず意気こんで、莊之助はきいた。

連載

時代伝奇

小説

第五回

# 鬼乳房 伝奇

飯田豊吉

堂昌一画





「ええ、まアね……」

言葉を濁らせ、なぶるように笑いながら、お銀の瞳がねっとりとうるんで莊之助をみあげた。

「知っていたら教えてくれ、たのむ」

「オホホホ……そんなこわいお顔をしなくたって、教えてあげますよ。ただし……」

「ただし？」

「あたしの頼みも、きいてくれなくちゃあ」



### 前号まで

延享の昔、東海道路筋を東西にまたいで荒らしまわった日本左衛門という大盗賊がいた。盗み溜めた金がおよそ五十万両。それをいずこかへ隠匿埋蔵したまま、日本左衛門は死罪になってしまった。その五十万両の隠し場所を記した絵図面は、日本左衛門の孫娘にあたる文化七年庚午生まれの十九才の女に受け継がれていた。

本所撞木橋に屋敷を構える殿さま浪人藪飼一馬は、過去数年間その娘を探がし求めてきた。そして娘の右の乳房の上には、鬼面の形をした赤アザがあり、さらに絵図は、娘が肌身につけている南蛮渡りの懷中鏡の中に隠されていることを突きとめた。

女衞商売の小悪党、弥陀六と岩助はふとした通りすがりに誘拐してきた娘の乳房へ鬼面の刺青を植えつけ、この娘を藪飼屋敷へ届け

「きく、きくとも。わしにできることなら、なんでも！」

「ホホホ……旦那に出来ることですよ。いえさ、青葉さんにだけしか、出来ないこと」

たそがれの柳がなびく大川端。

ほの暗い水面に浮遊する数羽の都鳥が風情をそえる。

お銀の白い指が、莊之助の手を熱っぽく握った。猫のようにやわらかく、肩から身体を押しつけてくる。

——そうか……。

莊之助とて木念仁ではない。男である。どちらかといえば、女の

て礼金をせしめようと計る。このいたましい運命にもてあそばされる娘の名はお千恵。

青葉莊之助は、浅草奥山の輕業小屋美和太夫一座の用心棒である。彼は持ち前の義侠心から、危機寸前のお千恵を救ったが、そのために美和太夫までが、このおぞましい事件の中へ捲きこまれてしまった。

五十万両の隠匿金をめぐって、まんじどもえと争いつづける悪党たち。また一方、深川永代の海産物問屋遠州屋浪右衛門は、かねてから美和太夫に邪恋を抱いていた。彼は女掏摸のお銀に命じて美和太夫を誘拐させ、自邸の離れへ監禁した。醜望を遂げて満悦の遠州屋は、美和太夫を縛ったまま風呂に入れた。いやらしい愛撫の手で美和太夫の白いふくやかな胸を洗いはじめると、厚白粉の下からは鬼面の赤アザが現われたのである……。

先にたつて歩きだす。引かれるように莊之助はその後を追うのだ。

## しびれ乳首

「——ちええッ！」柳のかけで大きく舌を打った男がいる。まむしの丹次だった。

莊之助とお銀が、仲良さそうに肩を並べ、連れだって自分の鼻さきから遠去かっていくのだ。

素浪人にひと目惚れ、たあいなく夢中になって、子分の丹次には

匂いには弱いほうだ。

——いつどこで惚れられたのか知らんが妙な風向きになってきたものだ。よし、しかたがない……。

誘拐されたお美和のゆくえを知りたいために、いまは藪一本にもすがりたい。

だが、莊之助にとつていまのお銀は、藪一本どころではなかった。美和太夫のゆくえを確実に知っている。

亀戸水神森で、弥陀六の手から逃げだしたお美和を捕え、遠州屋へかつぎこんだのは、ほかならぬお銀と、その子分の丹次なのだ。

「だけど、ねエ、こんな川つぶちじゃ落ちついて話もできやしない。ちよつとその辺までつき合っておくんないな」

お銀は、腰をくねらせて莊之助を誘い、



一顧も与えず、すたこらと行ってしまう姐御だ。その薄情さ。

「惚れっほいなんていうよりも、ありやもう色きちがいだ！」

ベッベッと唾を吐く。嫉妬がむらむらと湧いてくる。

指さきの技が、自分よりも数段上だから、姐御とたてまつり、子分として走り使われている。と一緒に、お銀の器量にぞっこんまいり、たっぷりと熟して色っほいからだに惹かれて、腰巾着を勤めている丹次だ。

不器用ながらも、一生けんめい勤めているうちに、いつかは姐御もおれの気持ちを……という助平心がひそんでいる。

——それなのに、ちくしょう！

丹次は嫉妬する。くやしがる。腰巾着だって人間だぜ、男じゃねえかよウ。

「待てよ。姐御のやつ、あんなことをいっていたが、まさか美和太夫の居どころを、あの浪人野郎に本当にばらしてしまふ腹じゃねえだろうな？……」

そんなことをしたら、日頃お世話になっている遠州屋の旦那への裏切りだ。

——ほんやり指をくわえて見送っている場合じゃねえぞ。こいつア一番、二人の後をつけさアなるめえ……。

丹次の頬に、卑しい微笑がよぎった。

姐御がどうしてもおれをないがしろにする気なら、こっちにも考えがあるぜ。

三ン下を自認して、うわべはとぼけて、おちゃらけていても、ま

むしという異名の男である。まむしは鎌首をもたげ、索獺な一策を思いつくのだ。

小半刻後——。

両国にならぶ出合い茶屋の一つ、その奥座敷に、お銀と莊之助は膳をはさんで坐っていた。

「お銀さん、早く教えてくれ。太夫はどこにいるのだ」

盃を指にはさんでも、それを唇に運ぶゆとりは、いまの莊之助にない。

「太夫、太夫って、たかが軽業の芸人。あんな娘の、どこがいいんだろうねえ。にくらしいったらありやしない」

紅をふくんだ切れ長の眼で、お銀はねっちりと莊之助をにらむ。もう酔っていた。

次第にじれてきて、莊之助の手をつかみ、膳をまわすと自分の胸にひき寄せる。

「困るな。酒がこぼれる」

成熟しきって、つゆのたれそうな乳房。

莊之助の手を、ぶりぶり弾むそのふくらみに抱き、ウッフンと鼻を鳴らす。帯をゆるめ、襟もひらいている。乳首がしびれ、全身の肉がとろけそうだ。

「お銀さん、せっかくだがな、美和太夫のことが心配で、どうもいかなのだ。すまないが先に教えてくれないか。そうしたら安心してすぐにもその気になれるのだが……」

だらしなく片手をとられたまま、莊之助は前のめりの恰好で、哀

★豊かな黒髪をざんばらに乱しながら、お美和の白い裸身はじりじりと吊りあげられていった！



願のような顔をした。

「ちえッ、どこまでいかれるンだろうね、あんな小娘に……。しかたがない、教えてあげるよ。だけどお前さん、あたしをだますンじやないだろうね」

「だましはしない」

「美和太夫はね。永代河岸の海産物問屋、遠州屋の離れにいるよ。もうおそいよ。ひどい目にあわされている頃だよ」

「なに、永代河岸の遠州屋——」

なぜそんな所にいるのか、という詮索は、この場合あとまわしだった。

「さあ、教えたンだから——ねえ……」

にじり寄って、お銀の膝が割れた。

「お銀さん」

莊之助は、すっと立ちあがった。

「すまない、約束はあとで果たす」



いい捨てる、莊之助の姿は、あッというまにこの四畳半を出て廊下を走っていた。

「あああ、やられた、チクショウー！」

お銀の黄色い罵声が、見栄も羞恥もなく後を追った。

## 魔伏谷日誌

ひどくかびくさい土蔵のなか。

蛙の腹を襟すじに押しつけられたような、不気味な湿っぽさである。

遠州屋の奥庭に、十数棟建ち並んでる土蔵のうち、この一棟には商売に関係のないガラクタが押しこまれてあった。

「——たしか、この古葛籠のなかだと思ったが……」

遠州屋浪右衛門がつぶやいた。顔にはうっすらと汗をかき、先刻からの熱心な探がし物だった。

おびただしい量の埃を払って、遠州屋はその古葛籠の蓋をとった。のぞきこむと、なにやら古めかしい綴本、冊子の類が詰めこまれてある。

遠州屋は、それらの文書類をかたっぱしから調べはじめた。

「ウ、ウ、ウ……」

遠州屋の背後で、苦しげなうめき声が洩れる。

金網行燈のかかっている柱の根もとに、お美和が縛りつけられているのだ。うめきはそのお美和からだった。身に一糸もまとわぬ、素裸である。

両の腕は背後に、荷のように縛りあげられた姿。縄





にくびれ、大きく盛りあがった胸のその右の乳房の上には、鬼面の赤アザがくつきりとしみついていた。

このアザが恥しく、いままでは濃い白粉で塗りつぶしてきたのだが、遠州屋のために湯槽の中で、むりやりに洗い剥がされてしまった。

そして、湯に濡れたままの裸で、この陰気な土蔵のなかへ連れこまれたお美和だった。

「——あった。これだ。たしか、この中に書かれてあったのだ……」

遠州屋が、ふいに声をあげた。片手に虫喰いだらけの小冊子をつかんでいた。

眼を光らせて遠州屋はその黄色いシミだらけの表紙を読んだ。

「魔伏谷日記、焼津鱈六これをしるす」

とある。遠州屋の指が、注意ぶかく、表紙をめくった。

一行一行と本文をたどって読みすすむうちに、ついに目的の箇所を見出した。

——文化七年庚午三月三日、山屋敷にて千代様女兒を生む。嬰兒の右の乳房の上に鬼面の赤痣あり。悪疫避けの守り札として、南蛮渡りの懷中鏡肌身に与え給う。これぞわが首領が貯え置きし隠匿金の埋藏場所を記せし絵図を秘めたる鏡なり。鏡を納めし小袋には金糸で唐獅子の縫取りあり。布地は天竺羅紗にして紅色なり。念の為茲に記す……。

読み終えた遠州屋の眼が、鋭く、お美和にふり返っ



た。乳房に吸いつけられる。

「——鬼面の赤アザだ。まるで彫ったように形ができています。しかも右の乳房の上だ。まちがいない。おい、お美和、お前、年はたしか十九だといったな。符合はぜんぶ、ピッタリと重なっている……」

感心したように、遠州屋はふうッとひとつ息を吐いた。

「知らなかったぞ。いま奥山で評判の娘軽業太夫が、じつは大盗日本左衛門の孫だとはな……」

湯殿で発見したお美和の胸のアザ。遠州屋は、記憶をたぐり寄せ、この土蔵のなかの古葛籠をひらいた。そして、思いもよらぬ莫大な金脈を掘りあてたのだ。

お美和のまるい肩が、おののきふるえて遠州屋をみあげた。お美和にはわからない。自分の体内に、そんな昔の大泥棒の血が流れていることなんか、すこしも知らないのだ。

「とすると、お前とおれとは、妙な因縁につながれた仲ということになる。ははは……そんな脅えた顔をしなくともよい。教えてやろう。——この覚書を書き残した焼津の鱧六という男は、日本左衛門の手下で、七人衆の一人だったのだ。七人衆の中でも読み書き算盤が達者で、とくに首領の信任が厚い男だったらしい……」

「……………」

こんな土蔵のなかに腰を据えて、なにを語りだすのか。お美和は縄目の苦痛を寸時忘れて、遠州屋の口もとをみつめた。

「延享三年、日本左衛門は京都で打ち首になった。稼ぎのいい大泥棒のことだから、たくさんの妾があったらしいが、女房同然に可愛がっていた女は一人。名はお藤という。そのお藤は日本左衛門の子供を産んだ。お千代という娘だ。役人の手がまわったとき、忠実な手下の鱧六は、そのお藤母娘を守って逃げのびた。天下を騒がせた

大泥棒の女房、捕まれば子供もろとも仕置きはまぬがれないからな……」

「……………」

「鱧六はお藤母娘と一緒に、遠州は天龍川ぞいの山中、魔伏谷の部落に身をひそめて、ほとぼりのさめるのを待った。日本左衛門は生前の数年間、その魔伏谷の山屋敷を本拠に隠れ住んでいたことがあったらしい。その由縁を頼っていったのだ。——歳月は移り、この三人もいつか部落民たちの間に混って、平和な暮らしを送るようになった。鱧六というのはしあわせな奴で、九十六歳まで長生きして、豊の上で住生したらしい。やがて、お藤も死ぬ。娘のお千代は成人し、部落の男と夫婦になる。子供を生む。女だった。よい名をつけた、お美和とは——」

「そ、そんな……」

啞然となるお美和だ。

「すべて書いてあるのだ。この鱧六の日記にな……。丹念な男だったよ、おれの祖父は……」

遠州屋は顎を撫でてニヤリとした。

藪飼一馬のほかに、ここにも一人いたのだ、日本左衛門七人衆の血をひく人間が……。

「——さアてと、これからが本題だ。なあ、お美和、お前とおれとは、いま話したとおりの、ふかい因縁の間柄だ。仲良くしよう。日本左衛門が隠した五十万両の金。お前が母親から受け継いだ南蛮懐中鏡とやらの、埋蔵場所の絵図が入っているんだ。見せてもらいたいもんだな。その鏡はどこにあるのだ？」

遠州屋の視線が、お美和の瞳を突き刺すように凝視した。

「知らない、知らない、嘘、そんなこと、でたらめだ！」



お美和は金切り声をあげた。涙声になってわめいた。

——いやだ、知らない、そんなこと！

首を左右にふって身悶えた。幼児がいやいやをするように。

だが、お美和の脳裏に、たしかに記憶はある。七つになるまで暮らした故郷魔伏谷の鬱蒼たる風景を。

母の名はお千代といった。そして、母から渡された形見の鏡は、たしかに南蛮渡りの……。

遠州屋のぶあつい唇が、皮肉な笑いをみせた。

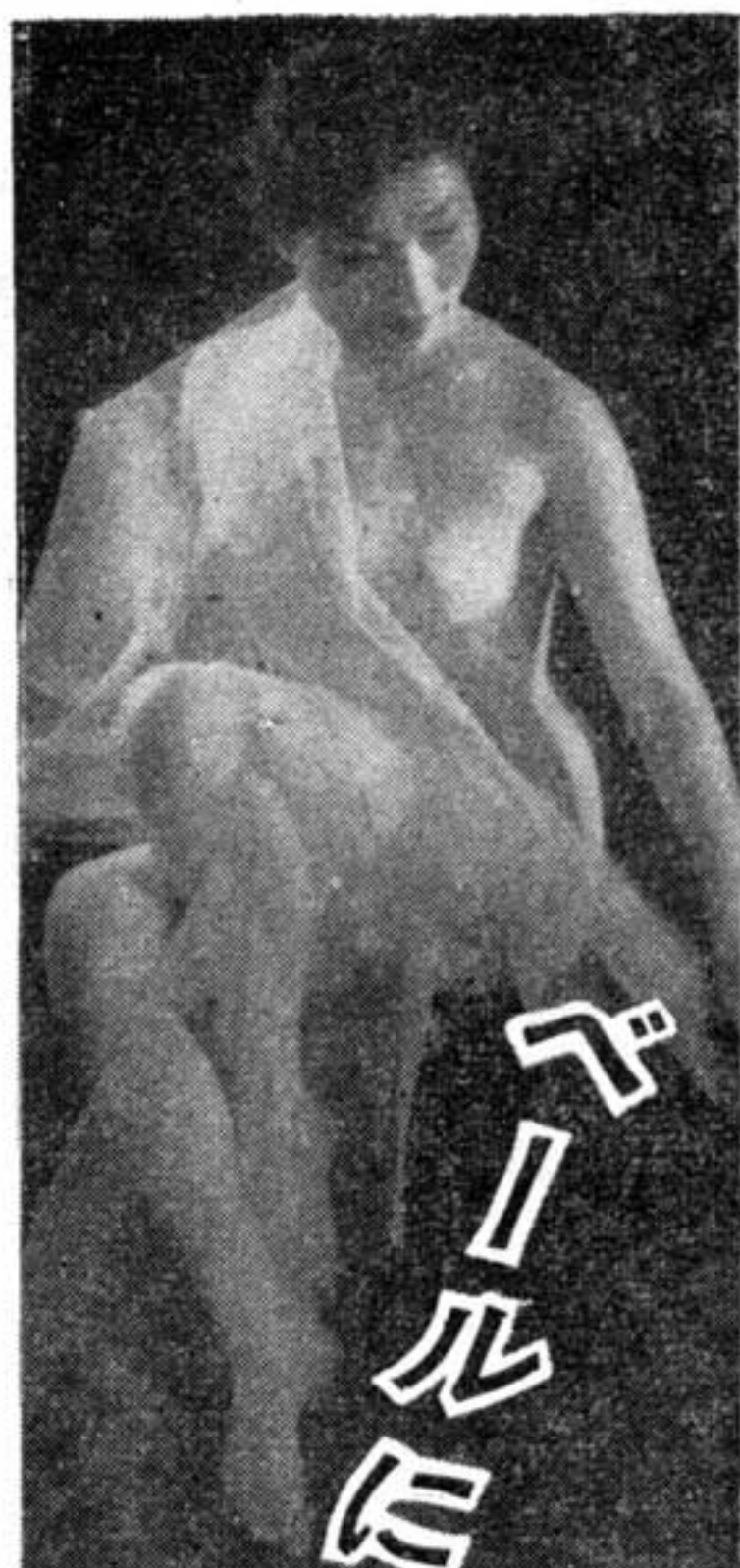
「こうなったら、色気のほうはあとまわしだ。五十万両は大きい。さすがのおれも咽喉が鳴るわ。——さあ、いえ。鏡はどこにある。

肌身につけていなかったな。祖父からの貴重な形見ゆえ、だいじにどこかへしまっているのだな？」

「鏡なんか、もうない。なくしてしまっただけです！」

お美和は吐くようにさけび、唇を噛んだ。

嘘ではない。弥陀六と岩助のために駕籠へのせられ、亀戸天神裏の家へ運ばれたあの日の夕刻、すでに紛失してしまったのだ。どこかへ落としてしまったにちがいない。



発売中!!

# ブルに包まれた女の秘密……

その一枚一枚を医学のメスが大胆に撥いでゆく。刺激のポイント・触れなば落ちん女の心理とは……

B 6 判・224頁  
¥ 270・〒 40

実用セッ  
クス講座 ③

女体のメカニズム 押鐘 篤 著

東京・中野・江古田 1-2302

株式会社 あまとりあ社  
振替・東京10756 (久保書店宛)

——そうだ、あの夜、藪飼とかいう青白い顔の侍も、あたしの持っている鏡のことを、しつっこくきいた。あたしの鼻を指ではじいて責めたりした。わかった。あいつもやっぱり、その日本左衛門の五十万両とかを狙っていたんだ。きっとそうだ……。

お美和にも、やっとわかってきた。自分がいま、醜い争いの渦中にあることを……。

五十万両なんか、けれどお美和は欲しくない。もし、いまあの鏡を持っていたら、この醜悪な黄金亡者どもに、さっさと投げ与えていただろう。

「なんだと、なくした？……ははは、へたなごまかしはよせ。面倒をかけずに、素直にだすんだ。五十万両首尾よく手に入れば、いくらはお前に分けてやらぬでもない。つまり強情を張ると、そのきれいな肌を、もっとしめあげねばならないからな……」



## 吊り責め蔵

「ほ、ほんとうにあの鏡は、なくしてしまっただんです。もし、遠州屋の旦那、嘘じゃありません、ほんとうに！」

お美和の肌に、戦慄の粟が生じる。ぬめ肌が総毛だち、乳首までが色を失って固く上がった。哀願の声もかすれ、首を必死に左右へふった。

「なくすわけではない。親から受け継いだ五十万両の鏡だぞ」

でっぷりと肥え、赤くあぶらぎった遠州屋の顔が、お美和の鼻さきに迫った。

「五十万両だろうが百万両だろうが、そんな汚らしいお金、あたしの知ったこっちゃないんだ！」

「ほほう、立派な口だ。よし、もういうな。からだにきいてやる」

遠州屋の頑丈な四肢に、残忍な緊張がみなぎった。

「ガラクタばかりを詰めこんでおく土蔵だが、みろ、責めるのに都合のいい道具はそろっている。こうなったら、あわてるにも及ばない。ゆっくりと楽しみながら吐かせてやる」

遠州屋は立ちあがった。

お美和の頭上にある金網行燈に手をのぼした。

ひえッとお美和は首をすくめたが、遠州屋は行燈の火をかきたてただけであった。

ジジジ……と炎がゆれて、蔵のなかは前よりも明かなくなった。

柱の根もとに、縛られてうずくまるお美和の裸身が、白い獣のようには照らしだされた。

縄尻は柱にぐるぐると巻いてある。遠州屋はその縄尻を解いて、

お美和のからだを引き起こした。

「重いな」

と、つぶやいて笑い、むっちりと重いその手ごたえを味わう。起こしておいて、背中から床の上に突きとばした。

「あッ！」

前のめりに転倒し、お美和はぶざまな恰好で床に腹這った。胸をしたたかに打ち、気の遠くなるほど痛かった。うしろ手のために、身をささえることができない。

ポロポロと涙がこぼれた。おそろしい。この男は、とことんまであたしを責めなぶるだろう。女をいじめるその急所を、どこもかしこも知りつくした五十男のいやらしさで。

金欲に憑かれた執念で。

ああッ、痛ッ、足首に縄がかかった。荒縄だ。足まで縛るつもりなんだ。両足首をいっしょに。ううッ、ちくしょッ、ザラザラした荒縄、痛い、ぎゅちりと縛り合わされる。もう動けない。手も足ももう棒のようだ。

「ゆ、ゆるしてッ」

お美和はうめく。鉄火な娘芸人の、見栄も向こうッ気もいまはもう駄目だ。

遠州屋は無言になった。お美和の両足首を縄で縛りつけると、それをぐいッとし引きあげた。そしてつぎに、背中に縛りつけてある両手首の縄目に、その縄尻をつないで引きしぼったのだ。

お美和の両膝が、足首を上にして折れまがった。両手首と両足首が、ちょうど腰のくびれのところでつながった。お美和の白い胴身が、魚のようにはけぞった。

「鏡をおれに渡す覚悟さえつけば、この縄はすぐゆるめてやる。せ



「かく祖父が遺してくれた五十万両は惜しいだろうが、命には代えられないぞ。おれはな、お美和、女に惚れる色気はあるが、そのほかには血も涙もない男なのだ」

遠州屋は、いきなり襟をくつろげて、もろ肌ぬぎになった。お美和を責めるには自分の両袖が邪魔になるのか。

赤銅色のみことな筋肉が、お美和の眼の前にむきでた。その背面いっばいに、赤鬼青鬼を左右に従えた閻魔大王の図柄が躍動している。

「遠州屋はな、表むきは堅気の商人だが、ひと皮むけば抜け荷買ひ時には海賊にもなる男だよ。もう一度だけいう。痛い目をみないうちに、あきらめて日本左衛門伝来の鏡を吐きだしてしまえ」

毒々しい刺青をお美和の鼻さきへひけらかして威嚇する。うす暗い土蔵のなかで、閻魔の奇怪な顔が、ゆがんだ笑いをみせた。

「なくしたものは、なくしたんだ。あたしやどこにも持っていないんだ！」

「ふん、いい度胸だ」

遠州屋の手に、べつの縄束が握られた。それをほどこいて、お美和を縛ってある縄尻につなげた。長くのびたその縄尻をつかんで、遠州屋は棚梯子をのぼった。

天井の梁に縄尻を通す。ずるずると引いた。埃が舞い落ちた。

お美和のからだを吊ろうというのだ。両手両足をひとつに折り、背中にくくりつけたままの残酷な形で。

湯殿からこの土蔵へ連れてこられたとき、すでに生きた心地の失せたお美和だったが、猟師に生捕られた獣のように、みじめな恰好で四肢を縛られ、その縄目がぎりぎり肌身に喰いこんできては、唇の色も死人のような紫に変じていた。

ぐったりと床に胸を俯伏して身動きもないお美和。その背中から一本の太縄が垂直に天井へむかつてのびている。縄は渡り、そしてまた垂れ下がって、最後は遠州屋の手に握られていた。

遠州屋の満身に、力がこもった。両足を踏んばる。拳のなかの縄を引きはじめた。

縄がビーンと張って、弓のツルのようにふるえた。梁に縄がこすれる、いやな音がした。梁の上から、塵埃がかすかな音をたてて降ってきた。ねずみの糞の黒い数粒が、お美和の背中に落ちた。

お美和の咽喉がきしんだ。両手両足が、胴体の重みを残して吊りあがった。すさまじい激痛が襲った。

か、か、肩の骨が折れる！……手首がねじれ、足首がもぎれるかと思うばかり。

さらに胴体がずっしりと吊りあがり、弓なりに垂れた白い腹が、床から一寸浮きあがったとき、その苦痛は倍加された。

ぐうッという、声にならないうめきが、喰いしばった歯のあいだからふきでた。

梁と縄は、不気味にきしみつつける。縄を引く労働のために、遠州屋の顔がいつそう赤くなった。

きしみの音とともに、白い裸身はじりじりと吊りあがっていくのだ。

お美和の黒髪はさんばらに乱れて垂れ下がり、裸身は頭から水平に、静かな回転をはじめめる。同時に、縄がよじれていく。駿河問いという拷問の方法に似ていた。

## 密告 拘摸



金網行燈の火が、陰火のように  
ゆらいだ。

土蔵のなかが暗さを増した。そ  
の薄闇の静寂にひびく縄の音。

白い肉のかたまりが、低い悲鳴  
をあげながら、宙に吊りあげられ  
ていく。残酷のなかに生唾をのみ  
こむような、みだらがましさがあ  
った。

お美和みずからの重みは、縄を  
肌 に極度のくいこみ方でしめつけ  
る。縄の巻きついた胸、腕、足の  
肉が、白っぽい紫色でふくれあが  
っていた。

乳房の下にかけられた縄が、こ  
とに強く噛みこむ。うつむいて、  
たつぷりと垂れ下がった乳房のふ  
るえが、お美和の呼吸を示してい  
る。

「よし」

よくもたかだかと吊りあげたも  
のだ。お美和のからだは、いま遠  
州屋の頭上一尺ほどの高さに浮い  
ている。

遠州屋は、縄尻をそばの太柱に  
しっかりとつなぎ留めた。



梁と縄は、きしみをやめた。  
宙に浮いた裸女は、まだにぶい揺れをみせ  
ている。

虫の息ながらも、お美和にはまだ正気があ  
る。負けてはならない、殺されてはならない  
という気力を、必死になって保っている。気  
を失っても負けだ。

——う、う、う！

お美和のくやしき。そして羞恥。  
ふたつの臉を、がっかりと閉じて、この苦  
しさと屈辱を耐えてはいるが、お美和にはわ



かる。自分のからだを見あげ、のぞきこんでいる遠州屋の眼の色を。舌なめずりを。

胸と腹を弓なりにうつむけて吊り下がっているお美和なのだ。肌のすべてを、どこもかしこもさらけだしているのだ。

遠州屋の眼が、どんな色に光って、自分のからだの、いまだこの隅をいやらしくのぞきあげているかがわかる。

「うふ、うふふふ……」

遠州屋が、うわずったような、だらしない笑い方をした。虎のような眼が、糸のように細くなっている。

縄にくびれた白い肉塊の、虫のように哀れなもたえ。この妖しい眺めに見惚れ、寸時お美和を責めている本来の目的を忘れる遠州屋だった。

濡れた海草のように、黒い艶を放って垂れ下がる髪。元結が切れて、二尺も下へなびいている。

遠州屋は手をさしのべ、その髪を握った。遠州屋の大きなてのひらにも余るほどの、ゆたかな髪の量である。あぶらけが残っているので、しっとりとした手ざわり。

つかんだ髪の束を、ぐいとねじった。

お美和の咽喉が、ククク……と泣いた。髪の毛ぜんぶが、頭の地肌から引きぬかれる、と思うばかりの疼痛。

「これでも口を割らんのか。強情だな。このまま殺されたいのか」  
遠州屋の手に、割れ竹があった。こわれた竹箒の柄でもあろう。



手頃な鞭にちがいがなかった。

その割れ竹が、お美和の太腿に、むざんな音で鳴った。

「ううッ！」

痛烈な衝撃に、火のようなうめきがほとばしる。

乳白色の太腿に、みるみる鞭痕がふくれあがった。裸体はゆれ、またにぶい回転をはじめた。

二度、三度、割れ竹は風を切って柔肌を叩いた。肉に弾む音が、四方の壁に陰惨に反響した。

お美和の悲鳴は、ただひいひいという咽喉のかすれに弱まった。唇はねじまがり、その端からこまかい泡がふきだしている。全身の力が衰え、ぐったりともっこり吊りのような恰好になってぶら下がった。

——今夜は、これまでだな……

遠州屋は鞭の手をおろした。殺してしまつたらなんにもならぬ。こうなつたら根くらべである。吐くまでは毎日でも責めつづけるのだ。

——手足を折り、鼻をそいでも吐かしてやる！

遠州屋は決心した。

と、このときである。

土蔵の入口、金網扉の外に、人の気配がした。黒い影がこの蔵のなかをのぞきこんでいる。その影が、

「もし、旦那、遠州屋の旦那……」

低い声で呼びかけた。



「誰だ！」

さすがにギョツとして、遠州屋は扉の外をすかしみた。

「へえ、あつしで。あの、丹次で……」

外の男は、おそろおそろ返事した。

「丹次がなに用あつていまごろ、こんな所へ顔をだすのだ？」

遠州屋は鋭くとがめた。

「不用心ですぜ、旦那。女の悲鳴が、外までヒイヒイ洩れていますよ、えへへ……」

「洩れたところで、蔵の外も、遠州屋の庭だ。よけいな心配をするな」

遠州屋は舌うちした。派手な折檻場を見られたこともまずいが、それよりも日本左衛門の隠匿金の一件を、こんな拘摸の三ン下に聞かれましたら、あとがうるさい。

「じつはね、旦那。急にお知らせしたいことがあって、こんな夜半に参上したわけで」

丹次は改まった。

「お銀はどうした、一緒ではないのか」

「へへへ……それぞれ、そのお銀姐御が、旦那を裏切りやがったンでさ」

「なんだと」

「ねえ、旦那、気をつけなくっちゃいけませんぜ。お銀姐御はね、相手もあろうに、あの浪人野郎に、行方知れずの美和太夫は遠州屋が誘拐して永代河岸の離れに閉じこめてある、とすっかりばらしてしまいましたぜ」

「なに、浪人に？ 浪人とは誰だ？」

「あいつですよ。青葉莊之助。ほら、旦那もご存知の、美和太夫の

用心棒でさあ」

「本当か」

「嘘じゃござんせん。おそろく、あと半刻もたたねえうちにあの色男浪人、ここへ乗りこんできますぜ。あいつはてえした腕ッぶしだ。こいつアちょいと、うるそうござんすよ」

「お銀の子分のお前が、どうしてそんなことを、わしに知らせるのだ」

「へッ、子分だなんてとんでもねえ。あつしはもう、あんな色きちがいの尻軽姐御には盃をけえしちまったンで……」

丹次は、ここに居ないお銀を罵倒した。

「ふうむ。そうか、よく知らせてくれた。丹次、その扉をあけて、手をだせ」

「へい」

頑丈な金網扉を、ぎしぎし鳴らして五、六寸もあけ、いわれたとおり右手をさしのべる丹次。にんまりと卑しい笑みをうかべる。

「駄賃だ」

遠州屋は、丹次のてのひらに夜目にも光る黄金色を二、三枚、チャリンと触れ合わせて置いた。

「へい、おありがとうござい……」

乞食のように卑屈な礼をいって、丹次は馬鹿でいねいに頭をさげる。

「ほかに、用でもあるのか」

「ええ、いいえ、もう……へへへ、お忙しい最中に、とんだお邪魔を……」

皮肉をいいながら、素ッ裸で吊り下がっているお美和を、チラッとみあげる。



「お前の知らせが本当だったら、お銀のやつには、おれがあとでたつぷりと礼をしよう。用がなければ、もう消えろ」  
遠州屋に命じられるまでもなかった。小判を懷中にねじこむと同時に、丹次の姿はもうこの土蔵の前から消え去っていた。

## 血笑浪人

荒れ寺の一室でひらかれている賭場。

裸ろうそくの焰に照らされた盆布団をかこんで、丁半を争っている。女も混っていた。いずれ夜鷹か、そのへんだらう。

無職者、渡り中間、浪人者など、得体の知れない男女ばかりの影法師が、剥げ壁や破れ障子にゆらめいていた。

勝負はすすみ、賭場特有の殺気に似た緊迫の空気がたちこめている。

濡れ髪小僧の紅太郎は、今夜いい目ばかりが奇妙にでた。

——皮肉なもんだ。勝負にこだわらねえ時に限って、壺皿の中がよく見えやがる……。

苦笑して、紅太郎の腰がつと盆布団の前からあがった。

つぎの間でひと休みをきめこむ。博奕を打つのが目的でここへ現われたのではない。行方不明になったお美和の消息を求めて、人の集まる場所へ首を突っこんでいる紅太郎だった。

煙管をぬき、一服吸いこんだとき、紅太郎のそばへ、一人の男がすっと寄ってきて坐った。

うすべったいい口もとに、馴れ馴れしい微笑をうかべて、なおもすり寄る。

「兄哥、めっぼういい調子だね。だいぶ懐が重くなったね」

男は、紅太郎の耳にささやいた。

「まぐれさ」

こたえて、紅太郎は男の顔をみた。

まるつきり知らない顔でもない。見たことがある。暗闇渡世の同業にちがいない。

ああ、そうだ、こいつはたしか、おさらばお銀という女掏摸の尻に、いつもくっついていっている野郎だ、と紅太郎は思いだした。

「兄貴、とてつもおねえ、いい話があるんだ。買ってくれねえかい。十両——」

まむしの丹次は、紅太郎の肩へ顎をのせるようにして、そっと切りだした。

「たけえ話だな、十両とは」

紅太郎は、あきれて丹次の顔をみつめた。こいつ、きちがいじゃなからうか。

「それだけの値打ちもンなんだよ。——日本左衛門の隠し金五十万両、そいつを掘り出そうってえ話なんだ。たしか筋から、いま聞きだしてきたばかりのネタなんだぜ」

「なんだって、五十万両？　べらぼうに大きいな」

「買ってくれよ。十両じゃ安いぜ」

「ふん」

鼻のさきで笑ったが、紅太郎はふと相手になる気になった。懷には、いま勝ったばかりの金が三十両ばかりある。

どうせ話はでたらめだろうが、案外こんな男の口から、美和太夫の行方の手がかりがつかめるかも知れねえ。十両、捨ててみよう、と紅太郎は思ったのだ。

「きかせてくれ。そら、金は前払いだ」



おそろしく気前よく、小判をつかんで丹次の膝の前に投げた。

「てへッ、それでこそ濡れ髪の兄貴だ。なにね。おれに兄貴ほどの腕がありや、このネタを売るまでもねえ。おれがずいッと乗りだして、五十万両ひとり占めすらあ。くやしいことには、おれにそれだけの腕も度胸もねえのさ」

「おれの名を知っていたかい」

ぎくりとしたが、まんざらでもない気になる紅太郎だ。

丹次は、ねずみのようによく動く目で、室内を見わたす。本堂裏の荒れ果てた十畳部屋である。

紅太郎と丹次が肩を寄せて坐っている位置とは反対側の壁際に、うす汚ない一人の浪人者が寝そべっている。眠っているらしい。枕もとには貧乏徳利が横倒しになっていた。

浪人は二人に背をむけ、顔は壁にくっつけるようにして眠っている。大きないびきをかいていた。博奕に負けて、すっからかんのやけ酒のふて寝といった、みじめな姿だった。

「こう、兄貴。もうちいッと、耳を寄せておくンねえ」

丹次はしゃべりだした。

つい小半刻前、遠州屋奥庭の折檻土蔵の扉の外で仕入れたばかりのネタを一切……。

小悪党の地獄耳は、遠州屋がお美和に語りきかせた魔伏谷日誌の秘密を、まんまと盗んでいたのである。

お美和の名がでたとき、紅太郎の顔色が、さッと変った。話が南蛮鏡に及んだとき、紅太郎の全身が緊張した。その興奮を、丹次にけどられぬようにおさえる努力で、紅太郎は冷汗をながした。

やがて——べらべらと語り終えた丹次は、濡れ手で粟の十両を懷中にねじこみ、馬鹿げた愛想笑いを残して立ち去った。

「——南蛮懷中鏡、紅羅紗の袋、表には金糸で唐獅子の縫取り……まぢがいねえ、こいつだ！」

紅太郎は、がまんできなかった。

内懷の一番奥深いところへ両手をつっこんだ。それをひきずりだし、瞳を据えて凝視した。

——こ、こ、この毛唐臭い小袋の中に、五十万両の絵図面が入ってるんだ！……

紅太郎の膝が、ガクガクとふるえた。

壁にむいて眠っていた浪人者が、このとき寝返りをうったのも気がつかなかった。

——と、とにかく、青葉の旦那にこのことを知らせなくちゃ……まず、お美和を救いだすことが先決だ。

紅太郎は足を踏みしめて立ちあがった。いくじなく、腰がふらつく。

賭場を通らずに破れ障子をあけ、縁廊に出た。庭へおりる。夢中で走りだした。

ひどい荒れ庭である。夜露に濡れた雑草に足がもつれ、ころびそうになった。紅太郎はのめりながら馳けた。

丹次が去り、紅太郎がとび出していった後の部屋に、一人残された浪人者が、いびきをやめて身を起こした。

大刀を片手に、すつくと立ちあがった動作は、いままで眠っていたと思えない、敏捷なものであった。

紅太郎が去った庭の闇へ眼をやり、浪人者は不精ひげだらけの顔で、かすかに笑った。梅毒のために、鼻の欠け落ちた醜怪な面貌。

殿さま浪人藪飼一馬の腹心の部下、赤羽猪十郎の眼は、らんらんと光った。



「お前の知らせが本当だったら、お銀のやつには、おれがあとでたつぷりと礼をしよう。用がなければ、もう消えろ」  
遠州屋に命じられるまでもなかった。小判を懷中にねじこむと同時に、丹次の姿はもうこの土蔵の前から消え去っていた。

## 血笑浪人

荒れ寺の一室でひらかれている賭場。

裸ろうそくの焰に照らされた盆布団をかこんで、丁半を争っている。女も混っていた。いずれ夜鷹か、そのへんだらう。

無職者、渡り中間、浪人者など、得体の知れない男女ばかりの影法師が、剥げ壁や破れ障子にゆらめいていた。

勝負はすすみ、賭場特有の殺気に似た緊迫の空気がたちこめている。

濡れ髪小僧の紅太郎は、今夜いい目ばかりが奇妙にでた。

——皮肉なもんだ。勝負にこだわらねえ時に限って、壺皿の中がよく見えやがる……。

苦笑して、紅太郎の腰がつと盆布団の前からあがった。

つぎの間でひと休みをきめこむ。博奕を打つのが目的でここへ現われたのではない。行方不明になったお美和の消息を求めて、人の集まる場所へ首を突っこんでいる紅太郎だった。

煙管をぬき、一服吸いこんだとき、紅太郎のそばへ、一人の男がすっと寄ってきて坐った。

うすべったいい口もとに、馴れ馴れしい微笑をうかべて、なおもすり寄る。

「兄哥、めっぼういい調子だね。だいぶ懐が重くなったね」

男は、紅太郎の耳にささやいた。

「まぐれさ」

こたえて、紅太郎は男の顔をみた。

まるつきり知らない顔でもない。見たことがある。暗闇渡世の同業にちがいない。

ああ、そうだ、こいつはたしか、おさらばお銀という女掏摸の尻に、いつもくっついていっている野郎だ、と紅太郎は思いだした。

「兄貴、とてつもおねえ、いい話があるんだ。買ってくれねえかい。十両——」

まむしの丹次は、紅太郎の肩へ顎をのせるようにして、そっと切りだした。

「たけえ話だな、十両とは」

紅太郎は、あきれて丹次の顔をみつめた。こいつ、きちがいじゃなからうか。

「それだけの値打ちもンなんだよ。——日本左衛門の隠し金五十万両、そいつを掘り出そうってえ話なんだ。たしか筋から、いま聞きだしてきたばかりのネタなんだぜ」

「なんだって、五十万両？　べらぼうに大きいな」

「買ってくれよ。十両じゃ安いぜ」

「ふん」

鼻のさきで笑ったが、紅太郎はふと相手になる気になった。懐には、いま勝ったばかりの金が三十両ばかりある。

どうせ話はでたらめだろうが、案外こんな男の口から、美和太夫の行方の手がかりがつかめるかも知れねえ。十両、捨ててみよう、と紅太郎は思ったのだ。

「きかせてくれ。そら、金は前払いだ」



おそろしく気前よく、小判をつかんで丹次の膝の前に投げた。

「てへッ、それでこそ濡れ髪の兄貴だ。なにね。おれに兄貴ほどの腕がありや、このネタを売るまでもねえ。おれがずいッと乗りだして、五十万両ひとり占めすらあ。くやしいことには、おれにそれだけの腕も度胸もねえのさ」

「おれの名を知っていたかい」

ぎくりとしたが、まんざらでもない気になる紅太郎だ。

丹次は、ねずみのようによく動く目で、室内を見わたす。本堂裏の荒れ果てた十畳部屋である。

紅太郎と丹次が肩を寄せて坐っている位置とは反対側の壁際に、うす汚ない一人の浪人者が寝そべっている。眠っているらしい。枕もとには貧乏徳利が横倒しになっていた。

浪人は二人に背をむけ、顔は壁にくっつけるようにして眠っている。大きないびきをかいていた。博奕に負けて、すっからかんのやけ酒のふて寝といった、みじめな姿だった。

「こう、兄貴。もうちいッと、耳を寄せておくンねえ」

丹次はしゃべりだした。

つい小半刻前、遠州屋奥庭の折檻土蔵の扉の外で仕入れたばかりのネタを一切……。

小悪党の地獄耳は、遠州屋がお美和に語りきかせた魔伏谷日誌の秘密を、まんまと盗んでいたのである。

お美和の名がでたとき、紅太郎の顔色が、さッと変った。話が南蛮鏡に及んだとき、紅太郎の全身が緊張した。その興奮を、丹次にけどられぬようにおさえる努力で、紅太郎は冷汗をながした。

やがて——べらべらと語り終えた丹次は、濡れ手で粟の十両を懷中にねじこみ、馬鹿げた愛想笑いを残して立ち去った。

「——南蛮懷中鏡、紅羅紗の袋、表には金糸で唐獅子の縫取り……まぢがいねえ、こいつだ！」

紅太郎は、がまんできなかつた。

内懷の一番奥深いところへ両手を突っこんだ。それをひきずりだし、瞳を据えて凝視した。

——こ、こ、この毛唐臭い小袋の中に、五十万両の絵図面が入ってるんだ！……

紅太郎の膝が、ガクガクとふるえた。

壁にむいて眠っていた浪人者が、このとき寝返りをうったのも気がつかなくかつた。

——と、とにかく、青葉の旦那にこのことを知らせなくちゃ……まず、お美和を救いだすことが先決だ。

紅太郎は足を踏みしめて立ちあがった。いくじなく、腰がふらつく。

賭場を通らずに破れ障子をあけ、縁廊に出た。庭へおりる。夢中で走りだした。

ひどい荒れ庭である。夜露に濡れた雑草に足がもつれ、ころびそうになった。紅太郎はのめりながら馳けた。

丹次が去り、紅太郎がとび出していった後の部屋に、一人残された浪人者が、いびきをやめて身を起こした。

大刀を片手に、すっくと立ちあがった動作は、いままで眠っていたと思えない、敏捷なものであった。

紅太郎が去った庭の闇へ眼をやり、浪人者は不精ひげだらけの顔で、かすかに笑った。梅毒のために、鼻の欠け落ちた醜怪な面貌。

殿さま浪人藪飼一馬の腹心の部下、赤羽猪十郎の眼は、らんらんと光った。





「——一馬よ。おぬしは運の強い男だぞ」

そうつぶやくと、猪十郎の体は飛鳥のように縁廊をとびおり、疾風の勢いで庭を縦断した。

五呼吸を終えぬうちに、猪十郎は裏塀を越え、朽ち崩れた築土塀の曲がり角に立っていた。

寺門の表から、息せききって馳けてくる紅太郎を待つのだ。

足音が接近した。猪十郎は大刀の鯉口を切った。

ものをも言わせなかった。

塀の曲がり角から、一步を踏みだしさま、猪十郎の一刀は、紅太郎の肩をざっくりと斬り下げた。血しぶきあげて紅太郎はぶっ倒れた。手足をばたつかせてもがいた。

「なむあみだぶつ……」

片手おがみに念仏をとえ、猪十郎はその念仏の手で紅太郎の内懷から南蛮鏡をつかみだした。

「一馬よ。おぬしは運の強い男だなあ。みろ、五十万両はもう、おぬしのものだ」



わずかな月が中天にある。赤羽猪十郎は、その月光に紅羅紗の小袋をかざしてたしかめ、ふたたびつぶやいたのであった。

それから、ふいにクックツと笑いだした。笑いは、とまらなかった。うれしいにはちがいないだろうが、片手を血に濡らした浪人が塀の角に突っ立ったまま、肩をゆすって笑いつづける姿は、鬼気せまるものであった。

## 墓穴掘り

「――岩助、穴を掘れ。そこに鉄がある」

弥陀六が顎をしゃくって命じた。

「あ、あ、穴を掘って、な、な、なにをするんだい、兄貴」

岩助はふるえている。

「きまつてるじゃねえか。仏を埋めるんだ。このままにしておいて誰かに見つかったらコトだぜ」

「な、なるほど。ち、ちげえねえ。掘るよ。掘るともさ」

ふるえながら岩助はうなずいた。

弥陀六の足もとには、二個の死骸がうずくまっている。

酔いどれ刺青師あば辰と、その娘のお若だった。二人とも朱にそまり、凄惨な形相で死んでいた。

ここは亀戸水神森、あば辰小屋の裏手。

岩助は膝をかくくさせながら、地面に穴を掘りはじめた。

「女衞の弥陀六ともあろう者が、なっちゃいねえや」

弥陀六は、せんぶりをのんだようなにがい顔で、岩助の穴掘りを見つめる。

奥山の軽業小屋から、つけ火までしてさらってきた美和太夫。そ

のお美和に、まんまと逃げられてしまった。

裸にして柱に縛りつけておいたのを、お若が縄を切って助け、逃がしたのだ。

それを知った弥陀六が、きちがいようになって怒った。高値に売れる上玉が、フイになったのだ。

「こうなったら、お美和の代りにお若を女郎に叩き売ってやる！」

弥陀六は、お若を捕えてなぐり、縛りあげようとした。

「娘になにをするんだ！」

酒に溺れた癡人でも、あば辰はお若の父親だった。酒毒にふるえる手足で、弥陀六に突つかかっていた。

「しゃらくせえ！」

怒り狂った弥陀六は、七首を抜いて、あば辰の脾腹をえぐった。

その弥陀六の腕に、お若がとりすがった。

「人殺し！」

お若は絶叫した。いくら叫んでも、ここはさびしい水神森。人にきかれる心配はないが、弥陀六はあわて、思わず左手でお若の口をふさいだ。

お若はもがいて、弥陀六の手を噛み、取っ組みあいの争いになった。娘ながらも必死の力はおそろしい。おまけに、弥陀六には赤羽猪十郎から受けた、肩の傷があった。

「ええい、めんどくせえ！」

弥陀六の七首は、むさんにもお若の胸をもえぐったのである。

女を売りとばす悪事には馴れていても、人殺しだけはしたことの無い岩助は、おびたらしい血の量にふるえあがった。

そこで、弥陀六に叱咤されながらの穴掘りだ。

「あ、あ、兄貴。この二人、化けてでるようなことは、ねえだろう



な」

百姓あがりだけに、鍬を使うことには、年期がはいっている岩助だ。穴はもうだいぶ深く黒い口をあけている。

「化けてでねえように、こうして墓を掘って往生させてやろうっていうンじゃねえか」

ゆうゆうと一服つけている弥陀六だ。

山女衾の弥陀六も、これでいっばしの悪党になったぜ——と、とんでもない自己満足に浸っている。

やがて、二個の死体は穴に蹴落とされて、上から黒土がかぶせられた。

思えば、不運なあば辰父娘であった。

金が欲しさに、無垢の娘の乳房に赤アザを彫ったり、悪事の手柄の刺青を、過去に多くのこしてきた因果ともいえようが、哀れな最期にはちがいがなかった。

「ど、どうか迷わずに、成仏してくれよ」

岩助は両手を合わせて拝んでいる。

「誰だ、そこにいるのは誰だ！」

ふいに弥陀六が背後をふり返り、鋭い声でどなった。

「へへへ……えへへへ……」

まのぬけた愛想笑いが、小屋の横手の闇から現われた。

「えへへ……これはお初にお目にかかりやす。あっしは丹次という、ごらんのと通りのケチな三ン下でござんすが……」

ぬけぬけとあいさつする、まむしの丹次である。

「……………」

弥陀六の眼が、殺気に燃えて丹次をにらみつけた。

いまの現場を見られたとしたら、生かしてはおけない。いや、こいつはたしかに、見ていたにちがいない。

「おっと、怪しむのはごもつともですね、あっしは親分に、耳よりな話をもってきたンで……」

丹次は小腰をかがめ、頭をベコベコさせて、できるだけ敵意のないことを示している。

「用があるんなら、早くいえ」

「へい、ありがとうございます。じつはね、美和太夫の逃げた先を、あっしは知っているンでござんすよ。親分があっしに、十両ばかり

発売中!!

アプノルム

人間のその当人でさえ判らない心の奥底に秘む異常性！尿を飲む男・少年を鞭打つ女・毛髪蒐集狂等々豊富な実例をあげて解くアプ・セックス!!

B6判・美麗カバー装・二五三ページ・定価二七〇円・あまとりあ社刊・東京中野江古田一・振替・東京一〇七五六

高橋 鉄 著

誰が正気なのだろうか?

九月上旬発売



恵んでくださるお心がおありなら、お教えしても、よござんすが……」

「お美和の逃げた先を、なぜお前が知ってるんだ。それよりもお美和がこの小屋にいたということを、お前がどうして知っている！」

「えッ、いえ、そ、それは……へへへ、ひょんなめぐり逢わせからたまたまぶつかりましてね、えへへへ、ひひひ……」

あわてた丹次は、馬鹿笑いを連発する。

「怪しいぜ、兄貴。やっちまおうか」

岩助がそばからいった。

「い、いいえ、とんでもねえ。怪しい者じゃございませんよ。そんならもうひとつ、どえらいネタをばらしてしまいまさア。美和太夫は日本左衛門の孫娘で、五十万両の隠し金を秘めた南蛮鏡を持っているという一席の読み切り——。さア、十両ではお安いネタですぜ、どうですか？」

「なにッ！」

弥陀六は愕然として丹次につめよった。

「そ、そんな馬鹿な。あの女の乳房には、赤アザも青アザもなかったぜ。雪のようにまッ白だ。毛一筋の傷もねえ、まッ白な胸だったぜ！」

岩助はわめいた。

「待てよ。そういえば、あの白粉だ。あの厚く塗り重ねた白粉で、アザを隠すという手もある……。だが、まさかあの美和太夫が、あんないい肌をもったお美和が……」

弥陀六は首をひねり、唇を嚙んだ。

「嘘じゃねえ。あっしはこの眼でちゃんと見たんだ。白粉をながしたあとの、右の乳房の上を……」丹次はりきんだ。

「どこで見た？ お美和はいま、どこにいるんだ！」

「えへへ……十両、十両。安い買い物でござんすよ」

丹次はすかさず手をさしのべた。

「話というのをきいてからだ」

「それじゃ前金に半分の五両。へへへ……」

「達者な野郎だ」弥陀六はしかたなく、五両渡した。

「へい、おありがとうござい……」

丹次は五枚の小枚を額に押し頂き、それから、つい先刻、荒れ寺の賭場で紅太郎に語ったとおりの言葉を繰り返した。

「——というわけで。いかがです。どえれえ話でござんしょう。五十万両でござんすよ、五十万両」

「ううむ……」

弥陀六はうなった。丹次の話が、どうも嘘やでたらめとは思われない。辻褄は合っているのだ。

「ありがとうよ。こんな水神森までよくたずねてきてくれた。じゃ、残りの五両を渡すぜ。手をだしな」

「へい、へい」

丹次は、弥陀六の前に両手をだした。

つぎの瞬間、丹次は悲鳴をあげてのけぞっていた。

弥陀六の七首が、丹次の脇腹をふかふかと突き刺したのである。

「おい、岩助。もうひとつ、穴を掘ってくれ」

突き刺した七首を、ぐりぐりとえぐりながら、弥陀六がいった。

(以下次号)

★五十万両は悪の手に渡る？ お美和の非運！



# ヌード傑作選



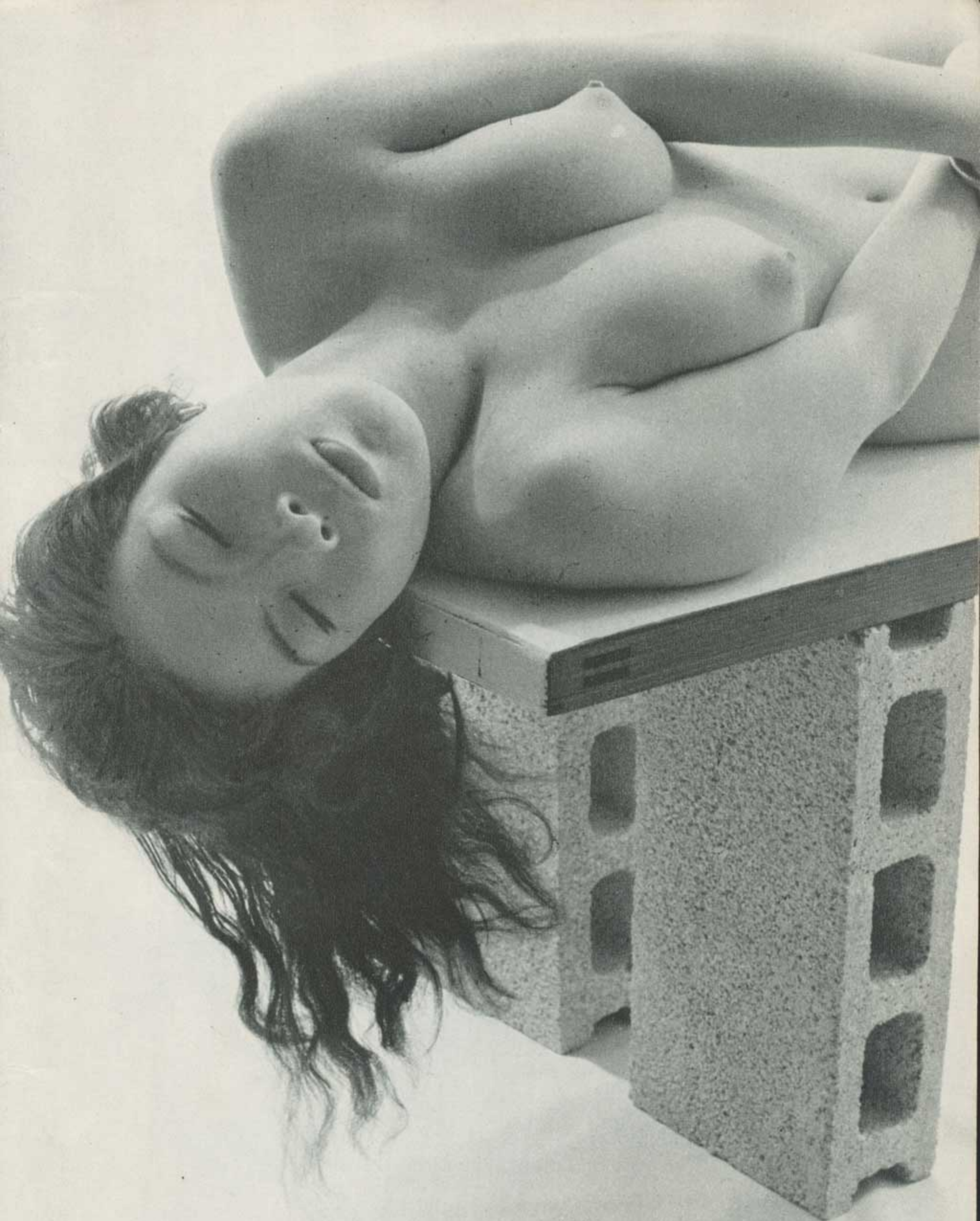














# 報の悪



## 窓絵物語

文と絵

中嶋喜美

① 思い出し笑いと云うやつだ。  
脂切った重兵衛の頬ににやりとうす笑いが  
浮ぶ。

「ふ……悪くねえぜ……」

男好きのするぼっちゃりとした雪江の面立  
ちと伸々とした白絹のような肌、たまらなく  
なつて重兵衛はぐいと膝の上にねじ倒すよう  
に抱き上げると、雪江は羞恥に眼をつむる。  
重兵衛は左手でしっかりと体を抱えながら、  
右手で黒髪をわしづかみにする。

「……………」

あえぐような雪江の呼吸をききながら重兵  
衛はにたりと笑いながら黒髪を握っていた手  
をはなすと、派手な寝まきのしごきをするり  
と解いてしまう。寝まきの前がぱらつと割れ

て一糸もまとっていない女盛りの脂ののった  
肢体が白々と浮ぶ。その肌の上へ重兵衛の手  
がのびる……。あられもない姿になって、息  
も絶え絶えにのたうちまわる雪江の狂わしい  
までの情炎を、重兵衛は想い出していた。

抜け買い仲間の相模屋五兵衛の後添えだつ  
た雪江を五兵衛を消してしまつてからは、ま  
んまと手にいれて秘かに日夜を楽しんでいた  
のだ、その雪江との狂つたような愛慾の男は  
雪江を裸にして縛りあげ、責め苦の苦しみか  
らしびれるような慾情を味っていたが、雪江  
は五兵衛が重兵衛の手で殺されたことを知る  
と、この執拗な愛慾に恥じてか、或る夜自害  
してしまつたのだ。

——この楽しみは雪江に教つたのだ——







② 五兵衛を消したものの重兵衛は相模屋の身内の復讐を恐れて用人捧などを雇って警戒していたのだ。

「尾張屋さん、気をつけなさいよ、こんど雇ったお嬢さま付きのお新と云う娘、誰かに似ていません」

用人捧の広蔵に云われて重兵衛は、お新が雪江に似ているのに気がついた。

「そうだ、お新は相模屋の身内だろう」と感じた重兵衛は、こっそり寮へお新連れ出し、子分に責めさせたのだった。

「どうだ、口を割ったか」  
「旦那、それが強性な女で、うんともすうとも云わんで……」

「よし、俺がやってやる」

重兵衛は折弓を持つと奥座敷へ入った。

着物の上から後手に縛られて横倒しにされているお新、そのお新の着物を剥ぎとると長繻絆一枚にして床柱に縛りつけた。

「ふふ……雪江のように楽しませてやるぜ」  
お新は口惜しそうに重兵衛を見上げた。重兵衛の眼がお新の胸元に……。







③「旦那大變だ……喜助がお嬢さんを連れて有金を持ってずらかりましたぜ」  
「何、喜助が……畜生ッ」  
重兵衛は急いで店へ戻った。番頭の喜助が娘の美津と逐電した、なぜ娘を……ひよっとすると喜助の奴は相模屋の……と思った時、「こいつはどうやら喜助は相模屋の身内でお

新と同腹だ、尾張屋さん、お新を叩くのだ」  
用人捧の広蔵に云われて寮へ引帰してくると、すでに猿轡をかまされ顔も解らぬ位に乱れ髪のお新の半裸体に責められた姿が……。  
「お新、喜助は何処だ、美津はどこへやった、相模屋の身内に違いあるまい」  
重兵衛は一人娘の美津が、相模屋の一族に弄ばれていると思うと腹が煮返えるようだ。  
相模屋を殺し、後妻を弄び自害させ、仲間を裏切り悪の権化のような男、尾張屋重兵衛も娘のことになると別だった。  
いきなりお新の体から長繻絆を剥ぎとって身動きも出来ないように縛りあげた。  
ほの暗い絹行燈の下に、湯文字一枚にされたお新の美しい裸身が屈辱と羞恥でのたうちまわっていた。  
雪江と違って男を知らない生娘の素肌が、重兵衛の劣情を誘うに充分だった。形のいい乳房が、しごきに締めあげられ盛り上って桜貝のような乳首と一緒に大きく喘いでいる。  
重兵衛は折弓を手にとると美しい肩の肌をピシッと打った。お新は猿轡の奥からうめき声をあげて身もだえた。湯文字が割れて真白な腿が露わに重兵衛の眼を刺激した。  
重兵衛の眼がギラ／＼と異様に光って、お新の全身をなめまわした。





④ 今は隠すべき何もものもない真白なお新の裸身が呻き声を洩らして折弓の下で……。

重兵衛の眼は好色にほそめられて、お新の胸を、腹を、腰へ、腿へと追う……。

「ふ………いい肌をしている。雪江の肌と同じだ、まぶしいような肌だ、その肌がいまに火のように燃えるのだ」

喜助のことも、美津のことも忘れたようにお新の肌をなめるように見惚れていた。

折弓がすてられて、ぶ厚い手がおのれの脂

ぎった顔をつるつるとなせる。

「くう………」

猿轡の奥で泣いているような呻き声をあげるとお新の体は狂わしげに暴れだした。羞恥を忘れたかのように……。

重兵衛は雪江とのしびれるような情痴の夢が、再現された喜びにふけっていた。とその時、いきなり背後の襖があいた。

「だ……だれだ、おっ、

お前は……」

ぎよっとした重兵衛は思わずその場に釘付けにされた、無理もない。

お新と用心捧の広蔵が立っていたのだ。

「こ、この女は誰だ」

重兵衛は倒れている娘の猿轡を解いた。



⑤ 「あっ、お美津……」

恐怖と屈辱と羞恥で死んだようになって一人娘の美津の姿だった。

「尾張屋、悪の報いさ、俺は相模屋の弟でお新は雪江の妹だ。貴様を店へ呼び出して、すり代えたのさ、喜助は倉の中に入れてある。相模屋とは関係のねえ男さ、それから店の方は今頃お役人が出張なさっているはずだ。

これで相模屋はお終いだ、じゃあ、あばよ」  
だが安心して重兵衛は裸身の娘を抱いて、空虚な笑いを浮べているだけだった。 終



★おぞましい地獄党の処女刺青肌  
展示！ 美女の群れはからくり責  
めの唐人船へ運ばれて飽くことな  
き悪魔の手に翻弄されるのだ！

囃子地蔵 綾姫危難 絶対絶命  
岡ッ引に女掏摸 主従再会 緋牡丹くずれ  
鬼念流魔剣 海老責め侍女 隠れ網小屋  
狂異地獄党 肌絵展示 姫肌吟味  
刺青師反逆 嗜虐の執念 あやつり責め  
地獄のむき玉子 魔物船 裏切千両箱  
探索失敗 死の抵抗 血風地獄船  
必死の縄ぬけ 深夜の脱出 月下の歓声  
泣く乳房 恐怖の責め台

飯田豊吉 著

喜多玲子 装幀  
中島喜美 挿絵

裏窓叢書  
第一集

狂異地獄肌

定価三五〇円・送料四〇円

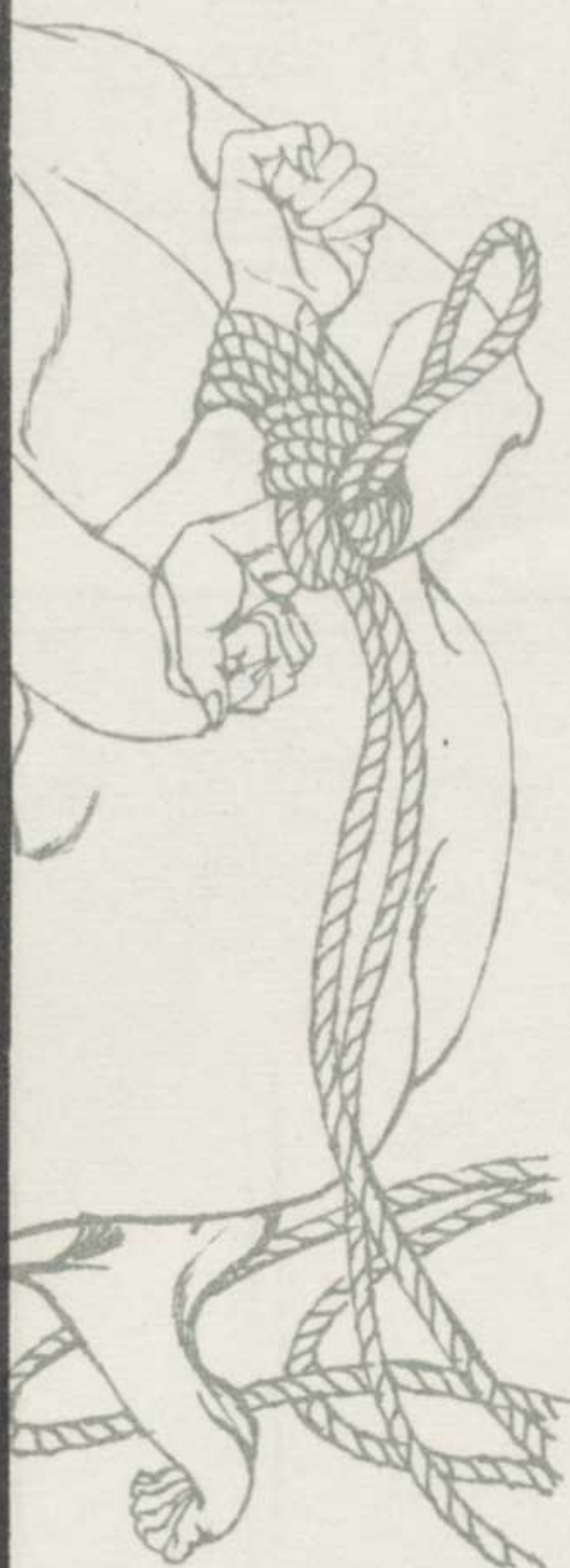




裏窓叢書  
第二集

# 黒蛇呪縛

定価三五〇円・二四〇円



★蛇責め、犬責め、乳房責め、捕われの美女は転変する運命に操られる。海賊の秘宝をめぐってひしめく触手、蛇身は妖しくうごめく。

◎姪両の巻 地獄の迎火 長襦袢乳房

傘浪人 情鬼 盥女

蛇女 犬の檻 ◎囚人の巻

男の声 闇の中の男 濡れ肌地獄

囀娘 ◎魔水の巻 汐姫

乳房の手 手首の綱 膝鞭

◎妖檻の巻 犬の舌 姫責め

裸形の膝 縛り櫛 死女

黒木忍 著

喜多玲子 装幀  
山田彬弘 挿絵



★暗黒街の覇権を争う凄愴な闘いのかげに、鉄鎖は柔肌に喰い込み逃れる術なき悲鳴は地底に響くのみ！檻の中の女体に迫る危機！

◎誘拐命令

魔女の接吻

恐怖の寝台

港へきた男

欲望の謀議

◎深夜の乱闘

夜匂う女

鉄鎖と皮鞭

断崖の逆襲

暗黒街の男

◎桃色の拷問室

殺し屋の眼

責め肌椅子

反逆の埠頭

復讐の鬼

◎地底の牢獄

電流手錠

縄目の痕跡

悪魔の爪

消えた婚約者

藤見

郁

著

喜多玲子

装幀

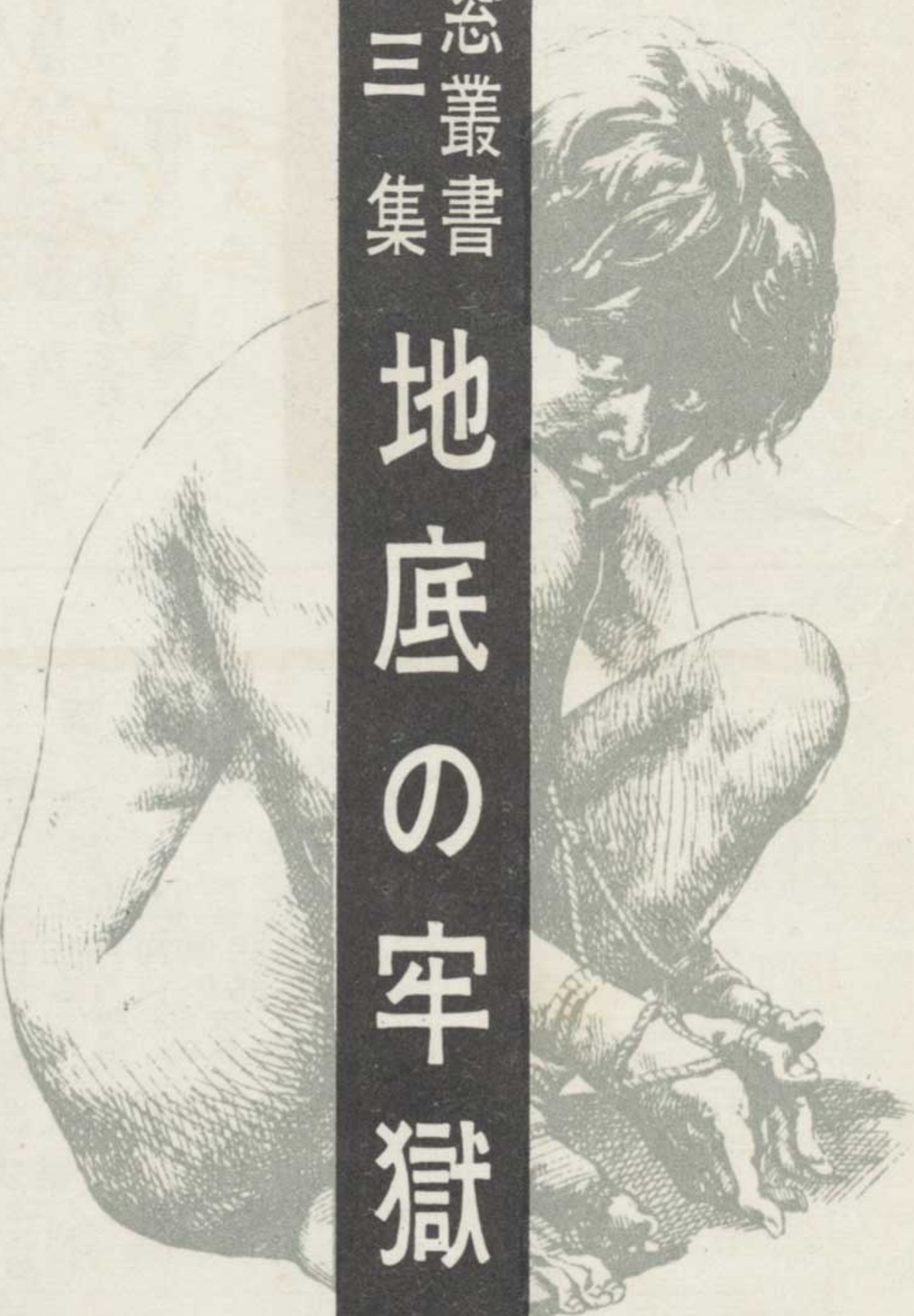
秋吉

挿絵

裏窓叢書  
第三集

地底の牢獄

定価三五〇円・二四〇円







★新装号を店頭におくり出した直後から、今までになかったほどに多くの手紙を頂きました。激励や希望や、それから御教示や種々の御支援の文字が机上に山積して、それが、そのまま私たちを励まし勇気づけるのです。

★御希望にこたえて、本号からグラビア頁を三倍にしてみました。

★姉妹誌「マンハント」と同じく、「裏窓」用のファイル（秘蔵合本用カバー）を作って、御希望の方にお頒ちする用意もしております。

★台風が過ぎればいよいよ読書の秋。本誌が皆様の座右にあつて、いつの場合でもこよなく愛されることを願ひながら、私は二十貫の体重をスリへらしております。

(S)

## 編集後記

- 本誌の記事および挿絵・写真を、無断で転載、上演、上映、放送することはお断りします。
- お買上げの本誌に、落丁乱丁等がありました。お買ひになった書店でおとり替え、下さるか、または本社宛にお送り下されば、スグおとり替え致します。
- 直接購読御希望の方は、三ヵ月分（四百五十円）または、六ヵ月分（九百円）を本誌営業部宛にお払い込み下さいますと、店頭発売前に直接お送り致します。
- 外国からの直接購読は送料を一冊につき二十円御負担下さい。

## 裏窓・十月新装号

(第五巻・第十号)

定価 150円・送料 12円

|    |             |
|----|-------------|
| 印刷 | 昭和35年10月25日 |
| 発行 | 昭和35年11月1日  |
| 集人 | 須磨利雄        |
| 編人 | 山田忠雄        |
| 発所 | 向光印刷株式会社    |
| 行所 | 伸光印刷株式会社    |
| 行所 | 株式会社久保書店    |

東京都中野区江古田1の2302  
(振替東京・10756) 電話(381)1388  
6980